

奇譚クラブ

1956年 8月号

〔告白と体験と手記〕 光りある中を 近東規矩也
女の随筆『私の蒐集帖—緋草紙より』 緒台あふみ



8月号

奇譚クラブ

昭和三十一年八月号

8

昭和三十一年七月三十日印刷 (第十卷第八十七号) (毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十一年七月三十日印刷 (第十卷第五号) (毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

本社に対する御送金は換込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下されば、確實で早く大変便利です。振替用紙御入用の方はお申込次第お送りいたします。

〔奇譚クラブ最近号総目次〕

奇譚クラブ最近号総目次
昭和三十年

○十月号 (復刊第一号)

【定価二百円 (十十六円)】

口絵	美しいドアー	四馬	孝久
緊縛	水中の女	都築	降子
黒のシムミーズ	オムパレード	川辺	砂登子
どういふポーズを	秋	千恵子	
ボリウム	加賀利	江子	
朝日を浴びて	須川	令子	
うつつ	加賀利	江子	
旅の縛られ女	藤田	仙治	
きものシリーズ	白	紅次	
悪軍	白	紅次	
ボクの責め方	宝塚	三太郎	
女性の下着について	水谷	英太郎	
鼻のじめめ写真	北谷	和雄	
奈落の欲情	沢井	和雄	
洗腸器と共に	久須	和雄	
お嬢の型と種類	近藤	淑人	
自殺娘の死体損壊	花村	恵美子	
二個のイチシク洗腸	宝塚	三太郎	
女性緊縛寸考	坂田	信治	
完全なる隷屬	村岡	浩	
サディズムの快感	沼	正三	
再度の鞭を期待しつゝ	南	洋一郎	
女工哀史以前	藤山	秀緒	
乗馬スポンの女腹切	津島	比呂史	
女性緊縛の愛用	岡村	文雄	
少年刑務所体験記	岡村	文雄	
男性自虐の方法	岡村	文雄	

○十一月号 (復刊第二号)

【定価二百円 (十十六円)】

口絵	みもの運動会	四馬	孝久
小な運動会	都築	降子	
賭場の獲物	滝	純子	
小人島の捕われ人	杉原	虹児	
女教師の捕われ人	依田	精二	
掃除日の出来事	宮崎	裕平	
告白	古川	増夫	
変態小説論	佐東	一郎	
幽囚十ヶ月	春田	三太郎	
ボクの責め方	宝塚	三太郎	
切腹通信	藤山	秀緒	
レスボスと洗腸	羽村	京助	
命がけの遊び	二	津子	
あるマゾヒストの手帳から	沼	正三	
拷問に笑う女	辻村	隆	
敵前上陸	三	根	
賭けられた娘	永	治	
お灸と腰巻	永	治	

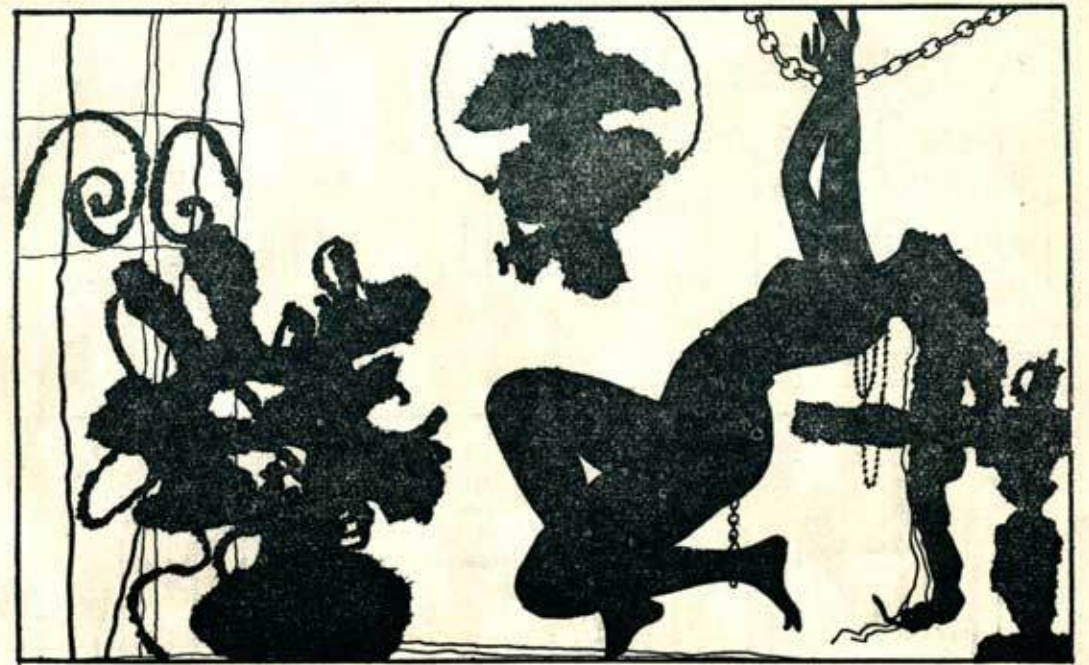
昭和三十一年

○四月号 (復刊第三号)

【定価二百円 (十十六円)】

口絵	第二次会の披露宴	四馬	孝久
苦痛の夢	宮崎	昭平	

戦国夜盗	戦国夜盗	戦国夜盗	戦国夜盗
ナイロスのレインコート	奈	千恵子	
「こんなポーズで？」	佐賀	美智子	
「お首が痛いから早く」	加賀利	江子	
おしめ放浪記	吾妻	当磨	
明治年間の新聞覚え書	黒岩	孫之介	
フアンタジック・ストーリー	嵯峨	美也子	
黒人少女の飼育	嵯峨	美也子	
楽しい正月映画の縛られ	嵯峨	美也子	
女優達	嵯峨	美也子	
幽囚十ヶ月	嵯峨	美也子	
山口式ボディビルの御紹介	嵯峨	美也子	
キヤルマタの美	嵯峨	美也子	
魔の味	嵯峨	美也子	
ドストエフスキの嗜虐性	嵯峨	美也子	
女性乗馬考	嵯峨	美也子	
サジスチンの独白	嵯峨	美也子	
ボクの責め方	嵯峨	美也子	
女剣士の切腹について	嵯峨	美也子	
ラブレター	嵯峨	美也子	
春日ルミ様へ	嵯峨	美也子	
少年矯正院体験記(みせしめ)	嵯峨	美也子	
仇討プレイ	嵯峨	美也子	
私は訴えるアブ・放譚	嵯峨	美也子	
腰巻用許可願	嵯峨	美也子	
完全なる隷屬	嵯峨	美也子	
私のイメージ	嵯峨	美也子	
鼻のアレリユード	嵯峨	美也子	
映画の緊縛断片	嵯峨	美也子	
マニア誕生	嵯峨	美也子	
体験告白記	嵯峨	美也子	
残虐なる女性達	嵯峨	美也子	
切腹願望と洗腸	嵯峨	美也子	
その後の緊縛女優列伝	嵯峨	美也子	
縛られた女優達	嵯峨	美也子	
映画(近松物語)より	嵯峨	美也子	
あゝこの恍惚境	嵯峨	美也子	



奇譚クラブ

復刊第七号
八月月号

目次

美しい床の間	四馬 孝・画
すべりだい	(萩千恵子嬢)
華々しき私刑	嵯峨紀世・文
米誌にみた緊縛画	北原純子・画
欧米式新スタイル二態	

大衆文学に現れた責めの描写	藤見 郁 18
無惨絵マニア	京 洛 生 25
マゾヒストとしての二等兵時代の思い出	才 昭 吾 26
被縛症(二)	高村民子 30
【通信】縛り絵マニアの回想	渡辺乃介 35
光りある中を	近東規矩也 36
おきなの一ひとごと	浪花老人 45
編集者へ、一読者としての公開状	畑中敏夫 46
「忠臣蔵」秘話 元祿女腹切り	川野京輔 49
「太陽の季節」を斬る	鬼山絢策 52
歴史に現れた三人の美少年	西村向南 54
「鼻」として「変型しぼり」と	真鍋四十七 60
幽囚十ヶ月	春田一郎 62
新聞雑誌通信 自決する従軍看護婦たち	東 一 郎 70
奈子のA感覚について	門田奈子 73



賭けられた浣腸

矢崎龍一 80

【映画・雑誌】通信

最近の縛り映画から

嵯峨美也子 85

連載小説 赤い花は泣いている(最終回)

松井頼子 86

奇譚クラブに寄せて

真木不二夫 97

文献紹介私のコレクションより

角間莊吉 98

続「少年 禪 記」

山口幸一 106

KK誌編集方針に就いて一言

佐藤 鼎 111

幻想小説「潰滅の前夜」

土路草一 112

緊縛映画速報欄

千葉栄市 125

女優緊縛映画速報版 最近の映画から

白石 稔 126

春日ルミ様まいる

簀中友三郎 128

女の随筆 私の蒐集帖II 緋草紙より

緒台あふみ 130

玉稿落穂集

編 集 部 135

新聞紙上に出た切腹実話

藤森一夫 139

探偵小説新考

東 一 郎 140

灸痕を吸う

脇坂豊助 147

蜂 洞 完 成

蜷間洋子 150

新聞・雑誌通信

青山三枝吉 151

倒錯の英雄、織田信長

笠置俊郎・作 152

とりこの白人娘

藤木仙治 163

天星社代理部特選写真集

アブファオト集 164

読者通信

編 集 部 166

女体切腹構成案図譜

(広告) 162

〔奇譚クラブ最近号総目次〕

賣めのアイデア	永井昇次郎
洗腸雑記	狩井麗作
洋面に於ける緊縛場面	佐巻跋策
懸賞入選作品佳作第一席	
接客婦	加治信一
蜂の胸四十五センチに	鷗間洋子
こたえて	笠置俊郎
倒錯の英雄織田信長	川瀬一美
Xの尻	緒台あふみ
「女」の隠筆	辻村隆
「女」のお腹談義	
アブノーマル雑談	
「話の屑籠」	
王穂落穂集	編集部
赤い花は泣いている	松井秀人
失恋の告白	
読者通信(並に読者交歓室)	
代理部特選写真集	
○五月号(復刊第四号)	
定価二百円(〒8円)	
口絵	孝・画
素晴しいシヨ	四馬
モデル嬢の表情(緊縛写真集)	
佐賀美智子	須川令子
加賀利江子	萩千恵子
アメリカ雑誌「ビザ」より	
淑やかな令嬢、メイドの拘束服	
スチユアーデスの晒し	宮崎昭平
赤い花は泣いている	松井
幽囚十ヶ月	春田
魔の味	坂田
完全なる隷属	高木
戦慄談屋敷	岸本
体臭日記	岸本
祭王やしき(異常体験記)	相沢
おそい目覚め	足立
(ある洗腸マニアの日記から)	
灰色のノート	矢崎
箱	多山

女サデイストより奴隷に	森山美歌
与える手紙	北川操
撫子の花散りぬ	森山美歌
奇妙な種	太一
賣めとフェチシズム	加野
魔の白鳥	加野
お膳の研究(二)	須藤敏一
生理の願望	長岡俊一
紅魔殿	佐々木
姉とその弟	春木
陰花への憧憬	青井
去日の美女	吉井
女散華	仲野
悲風磨上原	環
王穂落穂集	編集部
アブノーマル・モノローグ	竹谷十三
(あるアクロバット・ダンサーの記録)	
拷問に笑う女	辻村隆
読者通信、読者交歓室、	
代理部特選写真分譲広告	
今月の新版特写真集、編集後記	
○六月号(復刊第五号)	
定価二百円(〒8円)	
口絵	孝・画
美貌の屈辱	四馬
孤島の捕われ人	アメリカ雑誌
佐賀美智子ポーズ集	曼陀羅華の萌芽
深夜のホールのプレイ	須川令子
修道院の神室	宮崎昭平
大衆文学に現れた賣の描写	藤見
赤い花は泣いている(第三回)	松井
明治と昭和の絵くらべ談義	緒台あふみ
幽囚十ヶ月	春田
世相断片、ローカル・レポート	門田
奈子の自己愛について	青山三枝
洗腸問答	門田
鞍馬の孕み女	青山三枝
私のイメージ	緑比古
「代理部便り」の夢	並原新一

女散華	瀬川
女サデイストより	森山
奴隷に与える手紙	太一
私のアイデアと回想	菅原
サデイズム小説	菅原
いそいで湯	泉
コレット魔法	林
変つた切腹の掟	山中
私のマゾ・スクラ	春木
ツア帳より	沢
甘美なる被虐の幻想	伊藤
脱腸に對する私見	竹谷
小説マゾヒズム芸術時評	原
現代マゾヒズム芸術時評	松井
お仕置遊戯	松井
フェチシズムの文学ノート	S・T
マゾヒズム体験談	生
猪狩り	泉
緊縛女体考	泉
「禪」先生	泉
最近の縛り時代劇映画から	泉
お膳の研究	須藤
結髪の種類々	伊藤
王穂落穂集	編集部
映画に現れたムツキ	赤井
虐げられる娘	藤
ナチスの暴行	仙
私の空想天国	仙
娘の告白	東
或る告白	由
サデイズム小説な漫画	藤
十萬円懸賞原稿募集	仙
限定版各種特集号発行予告	
読者通信	
一切腹画帖(発行中止について)	
○七月号(復刊第六号)	
定価二百円(〒8円)	
口絵	孝・画
拘束服の装着	四馬
道化者の集まり(アメリカ雑誌より)	

ネルソン提督	二丁拳銃の姐御
女士官	木製の兵士
新人モデル嬢紹介	花坂
パイプの馬	北原
凝視	佐賀
馬を御す令嬢	北原
現代大衆文学に現れた賣の描写	藤見
私のイメージ	小竹
若衆歌舞伎復興	門田
奈子の自己愛について(二)	春田
幽囚十ヶ月	松井
お膳を据えた女の魅力	松井
赤い花は泣いている(第四回)	松井
ボデイビルマシンに依る少	松井
私のコレクシヨンより	松井
「賣め」の芝居考	松井
私と君の恋	松井
奇妙な倒錯の恋	松井
女体考	松井
玉稿落穂集	松井
被縛の切腹幻想	松井
或る下着マニアの告白	松井
或る軍婦人の死	松井
マゾヒズム断片	松井
H氏の奇妙な告白	松井
サデイズム小説	松井
私はおしめマニア	松井
スーダン	松井
乙女の腹切抄	松井
限定版各種特集号、発行予告	
最新版女体緊縛フォト	
奇譚クラブ日号主要目次	
天星社代理部特選写真集	
編集後記	
編集だより、今月の新版	

美しい床の間

四馬 孝・画

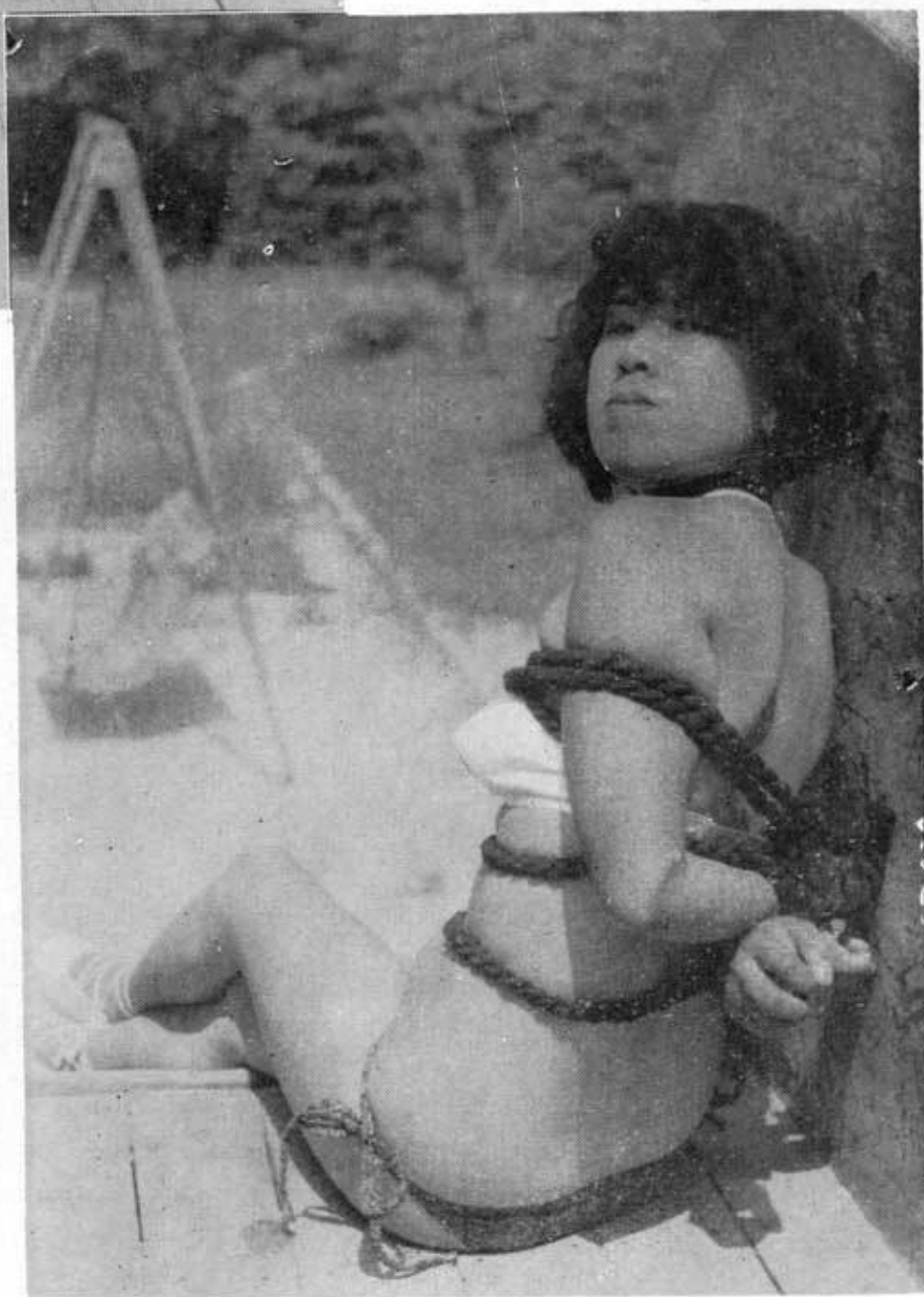
純日本的な感じの落ち着いた床の間です。あと十年もすれば、こういった新感覚の床の間が流行することでしょうが、現在では少しばかり時期尚早というところでしょうか。



すべりだい

淡輪遊園地に於て

梅雨の晴れ間を見て訪れた遊園地はシーズン・オフで人影もまばらであった。すべり台の上に上って後手に縛られた萩千恵子嬢は、こちらの注文に応じてポーズをとってくれたが、



カメラを据える場所がなく、梯子の上に背のびして、やっとシャッターを切った仕末であった。こゝに掲げたのは数枚撮った中で最も平凡で無難なもの二枚である。

—本誌・写真部撮影—

モデル 萩 千恵子嬢

刑私きし々華物語 絵

文・世紀峨嵋
画・純子原北

里子と益子は女子高校の同級生で成績は常に一、二を争っているばかりでなく、その容貌の美しさも、いずれが勝っているかと級友たちに騒がれている二人であった。そんな二人であったが、性質は里子が勝気なお転婆娘であるに反して、益子の方は内気で淑やかな娘であった。

里子には夏夫というボーイフレンドがあったが、彼が大人しい益子の方に好意を持って親しくしだしたので、胸の中は煮えるような嫉妬の炎が燃え上った。或る日、訪ねてきた益子に睡眠薬の入ったコーヒを出してもてなした里子は、こんこんと眠りつゞける益子を後手に紐で縛り上げ、猿ぐつわまではめてしまった。夏夫を奪った競争相手だと思ふと、勝気な里子は口惜しくて口惜しくてたまらなかつた。

なんとかして、思い知らしてやりたいという女の浅はかさが今日の里子の行動となつてあらわれたのであった。

睡眠薬は僅かばかりしか入っていないので益子はすぐ目がさめた。眼がさめた彼女は、自分が知らぬ間に紐でしっかりと後手に縛り上げられているのを見て、激しい驚きと共に起き上ろうとしてもがいた。



側には里子が、そんな哀れた益子の姿を冷ややかな眼で見下していた。益子はなんとかして起き上ろうとして懸命に身体をもがくのであった。その時、途端に半ば浮かした弱腰を、したたかに蹴り上げられて益子は、お尻を突き出すような恰好で倒れた。

「どうだい、益子さん、貴女は何のために、こんなヒドい目にあってるのか、分るかい？」里子のそんな声が聞えてきた。益子に



は寝耳に水でなんのことかさっぱりわからなかった。

「ふん、私の言葉に返事出来ないと言うんだネそれじゃ一つ身体にきいてやろう」

そういうと里子は、手にした革バンドを振り上げ、突き出したような恰好に盛り上った益子のお尻めがけて、はっしと一撃をくらわした。うなりを生じて柔軟なムチは益子の肌に音立ててまといつく。

ウムムムムム苦痛にゆがんだ顔を持ち上げた益子に更に里子の毒舌はつづく。

「貴女が、夏夫さんと仲良くしないと約束するのなら、今からでもすぐ止める

つもりよ。さあ、どうなの？ これほど云っても、矢張り夏夫さんが忘れられないとみえるネ。」

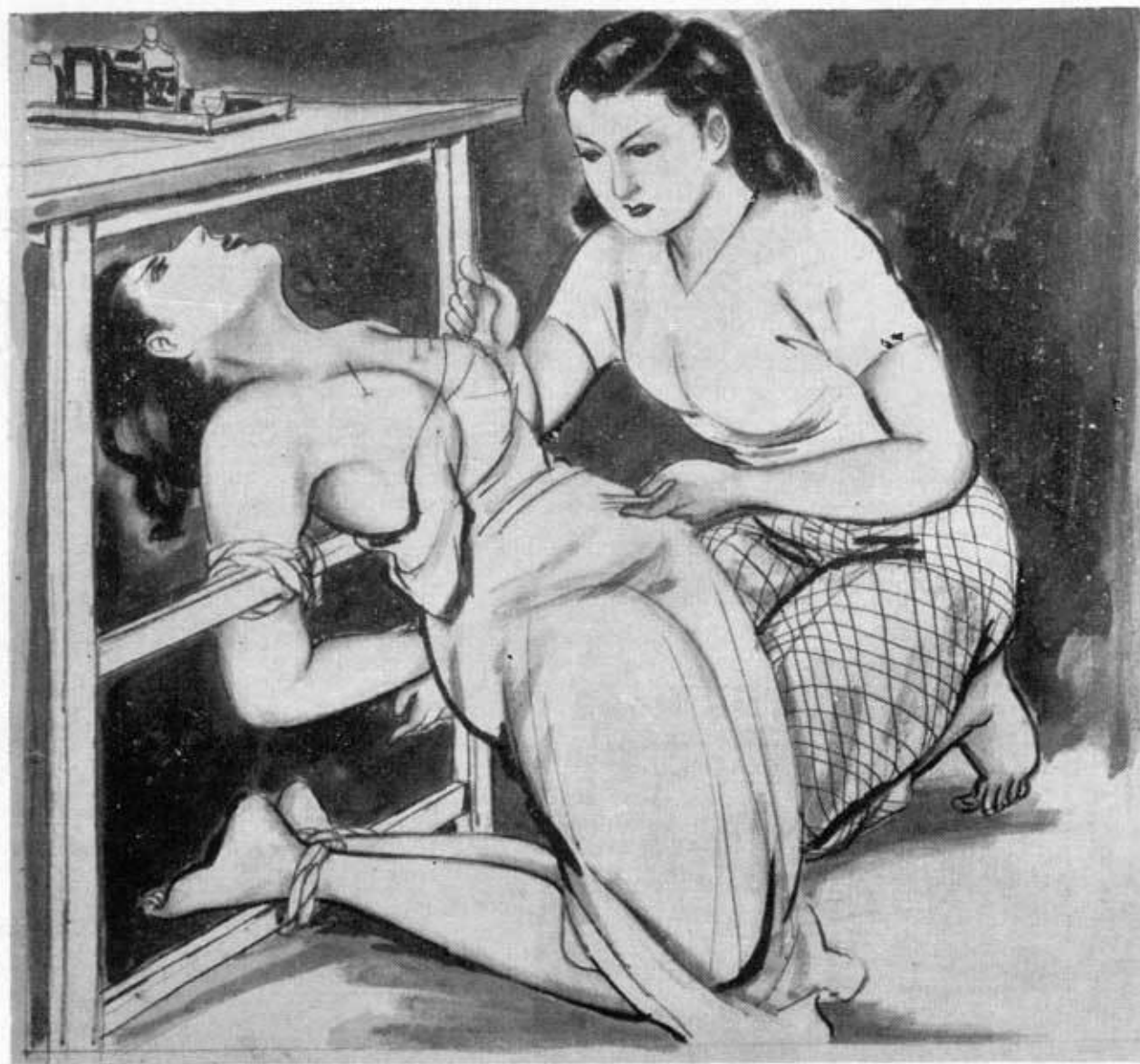
里子の手にした鞭は、再びうなりを生じてふり下ろされる。



益々怒りを増した里子は、益子を胸の突き出た反りかえったようなポーズに身動き出来ないように縛り直した。おとなしい益子は、只おどおどと里子の云うなりになっているばかりであった。

豊かな胸は盛り上って息づいている。憎らしさを増した里子は、縫針をとり出して益子の胸の皮下へ一本、又一本と突き立ててゆくのであった。

益子は再び紐を解かれて背中をむき出しにされると、大きな艾が里子の指で丸められて、六つものせられたのであった。線香の火が点じられ



ると、ジリジリと益子の雪の肌を焦しはじめた。

「あッウ、熱ッアッ！」熱さにもたえる益子、それをうっとり眺めながら線香の火を点じる里子。艾の燃える匂いが室中に立ちこめている。



後手に縛られ正坐させられた益子は、脛と太股の間へソロバンを差込まれ、膝の上には重石を無理に載せられた。ソロバン玉が肌に喰い込んで、その痛さは辛抱出来ない位だったが、暫くすると、足の方が痺れてきて、今までの痛さが嘘のように消えさってゆくのであった。益子が一向に平気な顔つきなので、一層、怒りが燃え上ってきた。一体どうしたら、益子に音を上げさせることが出来るだろうか。里子の考えは進展して、勉強机の椅子を背負ったような恰好で益子を括り上げると、ペーパーナイフを右手で擬し、益子の顎を左手で持ち上げると、この従順な親友をどうしてリンチしてやろうかと考え



た。最も彼女が恥しがるようなことはないだろうか？ ステンレスのペーパーナイフは、里子の右手が動いたびに、きらりきらりと白い光を放っている。

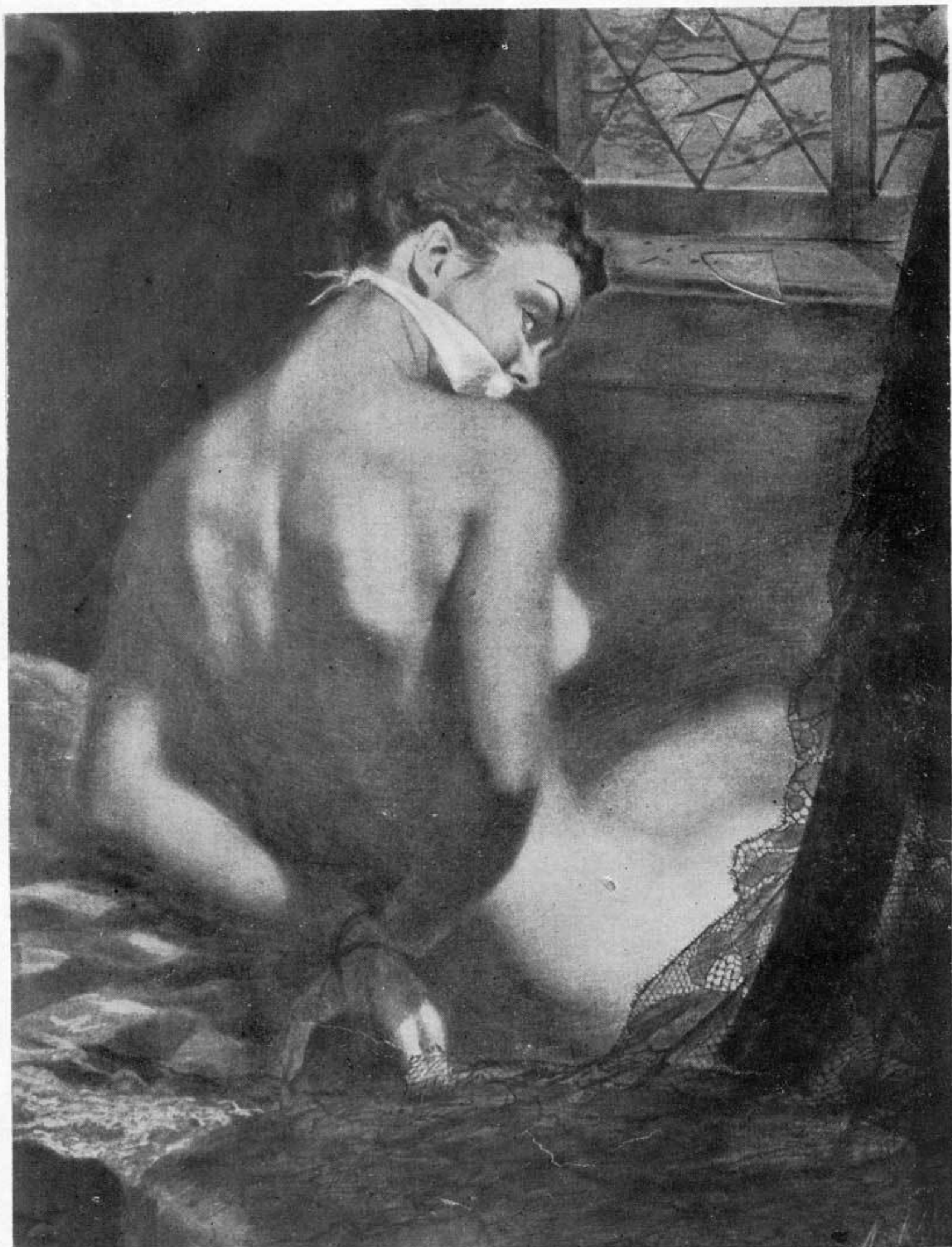


(おわり)

米誌にみた緊縛画

“The Brass monkey” by W.M.Francis.

<Esquire (Sep.1949.) ヨリ>

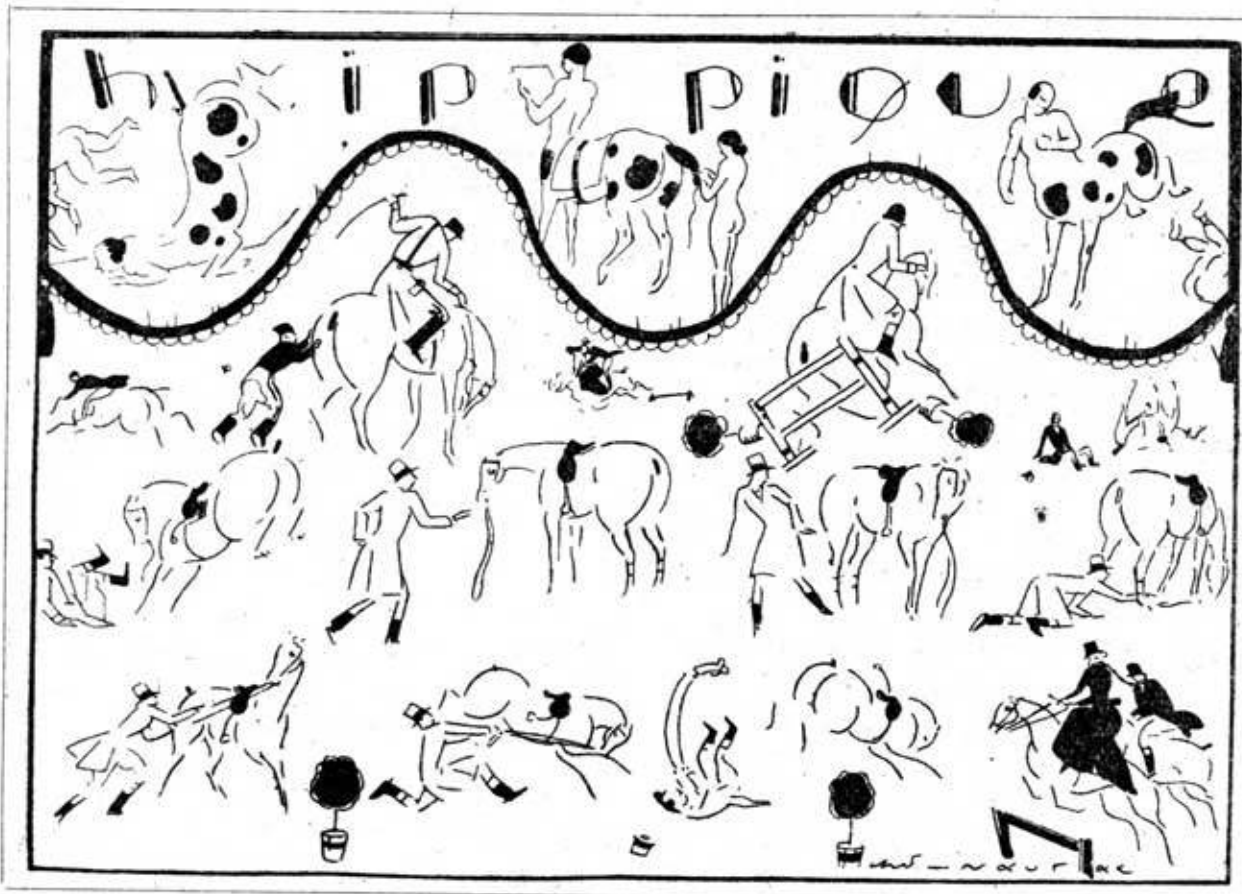


新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1956年 8月号

(第十巻 第五号 通刊第八十七号)



フランス雑誌 La Vie Parisienneより



大衆文学に現れた

責めの描写

藤 見 郁

この「文学に現われた責め」も、本稿で第三回になる。書きはじめてからわかったことだが、このような文章は種々の点で創作よりかえって骨が折れる。たいへんな事を始めたと思ったが、一、二回でやめてしまつては価値がない。乗りかかった船で、出来るだけ続けてみようと思う。単に緊縛だけの責めでなく、心理的なものを取りあげて広範囲なものにしたいということは第一回目述べたが、今回は先ず現代小説から採録してみよう。

雑誌「明星」(昭和三十一年六月号、東京、神田、集英社発行)所載の短篇小説「

青春のジャングル」中村八朗氏から。

この小説は、芥川賞受賞からいろいろ問題を投げている石原慎太郎氏の「太陽の季節」をあてこんだ作品で、「恐るべき十代の暴力街の姿」とサブタイトルがついている。不良少年少女の生態を中村八朗氏は確かな腕で簡潔に描いている。筆者の記憶に誤ちが無ければ中村氏は直木賞の候補か、又は受賞作家だったと思う。

「……同じ頃、表階段を上って、かつみは五人の男達の仲間にささえられて地下の喫茶店から舗道に出た。

「ちえっ、恥をかかせやがって」

マンボの遠藤が吐き捨てるように云った。街でタクシーを拾うと、皆は旭町の方へ走らせた。

そこはうすぎたない宿屋の一室であつた。パンパン相手の安宿なのであろう。荒木かつみはさるぐつわをかまされて、五人の仲間達からおさえつけられていた。

「掟を破った奴は罰を受けるんだ。俺達の顔をつぶしやがって。おとなしく俺達と楽しむ気になればよかったんだ」

引導を渡すように遠藤がつぶやいた。男達はにやにやしながら、かつみからワンピースをはぎとった。かつみがもうこうとし

ても、手も足もしっかり固くおさえつけられているのだ。ペンベルグのスリッパもはがれた。ブラジャーとパンティだけにされて、さすがにかつみは抵抗しようともがいた。が、そのもがきは、男達に最後のものをはぎとるスリルをより以上に楽しませる結果になったに過ぎない。いまやかつみは仲間の共有物としての祭壇へ供されようとしているのだった。皮をはぎとられた白兎のような、生々しい肌の裸形がうねっているのを眺めると、にきび面の不良少年達は一瞬しんと息を飲んでいった。……」

単なる凌辱のシーンをサディスティックにしているのは、猿ぐつわを噛まされておさえつけられているという描写である。現代物は時代小説と違って、イメージが我々の日常とすぐ結びつくので、この描写はなまなましい。このかつみという少女の危機を「皮をはぎとられた白兎のような、生々しい肌」とかいているのは、とりわけすぐれた形容ではないが、大衆小説らしく或る程度の感じはでている。これは余談だが、私は各作家の女の肌の描写を書きぬいて並べ研究してみたらおもしろい結果が現われるのではないかと思っている。決して無意味なことではないと思うので、そのうち奇クの誌面を頂いて発表してみたい。

次に、並木行夫氏の時代小説「助ッ人忠治」。掲載誌は東京、新宿の双葉社発行「大衆小説」昭和三十年七月号。並木氏は大衆作家の中堅として、映画化された作品も二三にとどまらないのだが、この「助ッ人忠治」は調子が低い。もっとも、この作品は矢島健三氏のペン画が主となっているので仕方のないことではあるが。

責めの描写はありきたりだが、娘が裸にされて、宙吊りになるシーンがあるので、一応とりあげてみよう。

『……縁先にどつかと大胡坐を掻いた大戸の鎌七が憎々しげに呟鳴った。

「畜生ッ、何て強情な阿魔だ、構アこたアねえ、泥を吐くまで、思いきり責めてやれ」

それに応じて乾分の一人が握り太の青竹をささらにした奴に存分水を嘔ませると、高々と振り上げて、

「さア云えッ、政吉をどこへやった。云わねえと息の根のとまるまで撲ちのめすから覚悟しやがれッ」

罵りざま、青竹が宙におどった。プューッと空を切る音につづいて、お君の唇から血を吐くばかりの悲鳴が上る……。

「あッ痛ううッ……」
何という虐らしさだろう、お君は湯文字

一枚を残すのみ、衣類はすっかり剥ぎとられ、しかも手首足首を雁字搦めに縛られた上、庭先の大木の枝に宙吊りにされていたのだ。すでにそれだけでも耐え得られぬ苦痛なのに、なおその上、手桶の水を十分吸わせたささら竹で、情け容赦もあらばこそ処きらわず打ち据えるのだ。白絹のような恍惚肌はいつか裂け傷ついて血潮が吹き出している。

もう暫らくこの責め折檻がつづいたら、お君の命は長くはつづかないだろう。それでも、屹と結んだ唇を開こうとはしなかった。

それに業を煮やした鎌七が、どうでも泥を吐かせようと思いついたのが、このささら責めの拷問――

「貴様が知らねえ訳はねえ、おとなしく白状しねえと本当に息の根を止めてしまうぞッ」

だが――いくら責められても、お君は白状できる訳がなかった。それを図太いと思っただか、いよいよ鎌七は焦立って、

「もう我慢ならねえ、野郎ども、思いきり撲ちのめしてやれッ」

と、喚き散らす……」

ささらに水をふくませたのが、この作者の責めの小道具らしい。安芝居の責め場を

見ているようである。

ところでこの場面の挿絵だが、他のやぐざ連中の姿はよく描けているのに、肝心の責められる女お君の姿が、首から上だけ、つまり顔だけしか描かれていない。首から上だけの責め絵なんて、およそこれ位興のないものはあるまい。「湯文字一枚で、手首足首を雁字がらめに、宙吊りにされた女の姿」を、矢島健三氏はめんどろくさいとみて逃げてしまったのだ。一般の読者にとっても、迫力はこれで大分うすくなったことと思う。

次に、山手樹一郎氏の「黒髪地獄」（小説の泉誌所載）から。この小説は山手氏が七、八年前に書いたもので、今のような大流行作家となる前だから、文章も人物もマシネリズムでなく、筆致が嶄新である。

「浅草蔵前通天王橋のそばに、質両替商をいとなむ俵屋は、数代つづいた老舗で、資産百万両といわれ、当主銀太郎はまだ三十前だが剛腹な事業家として知られていた」この銀太郎には、美江という美しい妻が居り、或る夜、この夫妻の寝室に、不思議な賊が侵入する。

『……………その間に、一人がつかつかと寝ている美江の方へ進みよって、すっぽりと顔までかぶっている夜着をいきなり剥ぎと

った。

「あれッ」

おびえて、緋の長襦袢の寝みだれた姿がはっと起きあがるところを、覆面はかまわず手を逆にとって捻じ伏せるように押えつけた。

「女に、なにをなされるのだ」

銀太郎がさすがにさっと顔色をかえる。

妻をいたずらされるようでは、男として許せない。

「いや、決して乱暴するのではない、こっ

ちの仕事が片づくま

で、気の毒だが、一

応縛って行くだけ

だ」

美青年はおだやかに制した。覆面はなれた手つきで、美江の細紐をひろい、人形でもあつかうように、さっさと後手に縛りあげ、あまった紐を両足にかけ、手拭で猿ぐつわまで噛まして床の上へころがした。はっと、くの字なりに身をすく

め守った美江は、がっくりと丸髷の根が落ちて、着くづれた衣紋、みだれた裾前から白々とした肌が匂いこぼれ、無残というより、閨房のなまめかしさが色こまやかに銀太郎は初めて、土足で寝間を踏み荒された怒



りを、激しく感じた。……」

このあたりは、女が縛られる描写としてもっとも典型であろう。「くの字なりに身をすくめ」「がつくりと鬚の根がおちて」「着くずれた衣紋」「みだれた裾前がなまめかしく」「白々とした肌が匂いこぼれ」などの形容は、まったく定石であろう。

さて銀太郎は金蔵へ賊を案内し、五千両を奪われる。蔵の中で両手両足を縛られた銀太郎が、寢室に残した無抵抗の妻を、あれこれ心配して思い迷う描写が、なかなかすぐれている。

『……銀太郎の想像は、美江一人残っている閨房へ、狂おしく走って行く。』

今夜の美江の無惨にも着くずれた長襦袢姿は、見なれた自分の目にさえ、妙になまめかしく残っている。美江は箱入娘として十八のとき嫁に来て、初々しくはあったが容易に閨房を理解せず、人形のように、女といううるおいに乏しいきらいがあった。だから、派手な長襦袢を着せて、寝化粧をさせ、閨房のなまめかしさをそえさせてきたのだが、三年たったこの頃になって、どうやら女らしさが加わり、白々と熟れてきた肌の光沢にも、しっとり目をそむける表情にも、ようやくこまやかな愛情をよこす風情が見え、どうかすると、思わずみな

ぎり昂まる感情を、恥じらい慎しもうとするまでになった。それは色街の女のどんな技巧にもかえがたい、いわば、良人のみが味わいゆるされる、妻という花の甘美な蜜なのである。

あの男は、その花の濃厚な香に心ひかれて、ひそかに蜜を奪いに行ったのではあるまいか、妻は手足を縛られて、声さえ立てられない。悪魔はそのみだれこぼれた肌の香をむさぼりながら、暴風雨の底で、誰にさまたげられる心配もなく、悠々と思いをとげる。さいなみ辱かしめられて、身もがきしている妻のむせるような肉体が、屈辱に人心地もない苦悩の顔が、まざまざと目に焼きつくようで、いや、女だから、結局肉体は男に負けてしまうだろう。くそッ、と銀太郎は思わずうめき、身もだえした。

……」

『……うぬッ、と銀太郎は体中の血がたぎり、力まかせにのたうちまわった。今なら間に合うだろう。悪魔め、体中の血がたぎり、力まかせにのたうちまわった。今なら間にあうだろう。悪魔め、体の自由さえきけば、そうだ、灯がある。縄を焼き切れ。だが、灯が消えないように注意して、後手の皮膚をじりじりと焼きながら、やっと縄を焼き切るまでには、相当の辛抱が必要だ

った。肉体の痛みより、刻々にすぎて行く時間がたまらなく呪わしく、銀太郎は血走った目をすえて、鬼のようにうめきつづけた。

「無事でいてくれ、おれの思い違いであつてくれ」

が、いまわしい妄想は消えない。

やっと縄を焼き切った銀太郎は、ふらふらと立上った。もう遅いと思う。美江が無事だったか、無事でなかったかは、寢間の障子をあけた時の妻の恰好できまる。そうも思った銀太郎は、我にもなく足音をしのばせていた……」

妻の貞操の危機を妄想し焦る夫の心が、迫力ある筆致で描かれ、読者に、果して妻は如何に、との期待を抱かせて、このあたり巧みである。

『……さつと障子をあけるなり、銀太郎の眼は美江に焼きついた。がつくりくずれた鬚をこっちに立て、妻はさっきのまま、くの字なりに投げ出されている。』

「美江——」

一瞬、助かった、と思い、ほっとして後をしめ、枕元へ坐りながら、目はまだ妻の体中を激しくさぐっている。ぎよっとした。甘い百合の精の匂いが、なんとなく鼻へ漂うのだ。それは、あると思えばないよ

うに淡く、ないのかと思えばはつきりと人をひきつけ、酔わせるようなふしぎな香気なのである。銀太郎はむさぼるように、妻のゆたかな胸へ顔を伏せ、たしかにそこに残る香気を感じて、狂気のごとく襟を押しはだけた。白々とした双の乳房が妖しい光沢をたたえて、香気はそこからも体温にもかもしだされてくるようだ。

「美江、お前、お前は——」

銀太郎は上から両肩を押えつけるようにして、じっと妻の目をのぞきこんだ。必死に見かえしている妻の目は、なんとなく弱々しい。絶望と同時に、激しい怒りが火のように燃え狂ってきた。……」

この、胸を押しひろげるところも、妻が手足を縛られ、口も縛られ、まったくの無抵抗なのが痛々しく、サディスティックである。

「……銀太郎は嚇として、邪慳に猿ぐつわを外し、両手を解いて、美江をそこへ引きすえた。

「正直にいつてくれ、美江。おれは怒りはない。できたことは仕様がなないんだ」

「いいえ、お疑いになつては、私、うらみまず」

美江は体中をかたくして、こんな固意地が、こんなおとなしい内気な女のどこにあ

るのだろう、とふしぎな気がするくらい、今夜は白々しく、うなだれてしまうのだ。「どうしてもお前、白を切る気なんだね」「でも、そんな無理な、私、なんにも存じませんのに」

「よし、お前が強情を張るんなら、私も男だ、きつと体にきいてみる」

殺してもあきたらない気がして、銀太郎はいきなり妻のしごきに手をかけ解きすて、長襦袢をむしり取った。美江は、はつと両手で顔をおおって恥じながら、しかしおとなしく良人のなすにまかせ、全裸にされて行くのである……」

残念ながらこの項はここで終りである。

奇クの小説ならば、これから先が綿密描写になるところだ。然し、ここまでもこの小説には、かなりサディズムを感じる。六月号でも述べたが、山手氏にはやはりこの傾向が多分にあるようだ。

次に、ごく変ったところを一つ紹介したい。大衆文学とはいえぬが、小島政二郎氏の力作「颯風の目のような」(東京、新宿新潮社発行、小説新潮、昭和二十九年十一月号所載)である。広告のうたい文句によれば、「大正期に幾多の佳品を残した鈴木三枝吉を描いて自己を取巻く総てを破壊する自尊の風貌を剔抉した力作」である。

勿論実在の人で長篇「一枚の瓦」「櫛」など佳作があり、童話誌「赤い鳥」の発行は有名である。小島政二郎氏は作家として発足した当時から、しばらくの間、鈴木三枝吉を師として仰いだ関係から、その頃の三枝吉の公私の生活にくわしく、この「颯風の目のような」は、知り合ってから、その死までの行状を、丹念に、あばくように描いている。「不思議に相手の運命をメチャメチャに狂わしてしまう颯風の目のような人間」鈴木三枝吉が、そのサディズムによって、女一人の運命をもてあそび、一生を踏みにじつてしまう経過がよく描かれているので、ここに採録しようとする次第である。

三枝吉にいじめられる女性は、名を楽子といった。「フックラとした丸ポチャの美人で、始めて成った実のように初々しく、全身で新鮮な香をたてていた。目が印象的だった。日向のように明るく、悪を知らないような見張り方をしていた。笑うと、可愛いえくぼが入った」

妻がチフスで死んだあと、三枝吉はこの楽子を妻に迎える。

「……そんな佻しい家の中に、楽子が椿の花が咲いているような明るさで女の赤ん坊を抱いていた。……楽子は丸髻に結って、



女ツぷりを上げていたが、私達を見て、ポ
ーッと顔を赤らめて、目のやり場に困って
いた』（私というのは小島氏自身）
このように可憐で楽しい楽子を、文学的
生活的に落ち目になった三枝吉は、手ひと

例えば、お藤さんとか、楽子のあとできた
細君とか（筆者註、お藤さんというのは楽
子の前の妻、楽子のあとにも妻が変わったと
いうことは、三枝吉はかなり妻、女を変え
たらしい）どう三枝吉が神経で苛っても、

い苛め方をする。小島氏
の筆はこの三枝吉の加虐
心理をくわしく追究す
る。

『……彼は愛する者を幸
福に出来ず、あべこべに
不幸のドン底へ突き落す
異常な性格を持ってい
た。その第何番目かの犠
牲者が楽子だった……』

『……三枝吉は愛し出し
たとなると、留まるとこ
ろを知らない位相手に求
めて止まなかった。しか
し、彼が慾求するだけの
ものの与えられる男でも
女でもいるものではな
い。

彼にもニガ手はあって
彼よりも上手に出る人間
には存外弱かった。もう
一つは、不感性の相手。

テンデ受け附けない女。健康な神経を持っ
た常識人。世間並の女。これにはさすがの
三枝吉も歯が立たず、第一、いちめてもい
ぢらしい哀れが添わなかった。そうなる
興味索然とするらしかった……』

終りの傍点は筆者。このあたり誰にでも
通じる加虐の心理であろう。

『……楽子が美し過ぎたからだ。三枝吉と
楽子とは年が十六違っていた。楽子がはた
ちの時、三枝吉は三十六だった。それから
三年たつうちに、楽子は女盛りを迎えたが
三枝吉は三十九とは思えない位い衰えてい
た。酒の祟りだった。顔は酒飲み特有のむ
くんで艶を失い、昼間見るとカサカサに荒
れて、生気がなく、「酒飲みや五月の午後
の目の濁り」誰やらの句のように、しじゆ
う目の中が濁っていた。酒を飲んでいる最
中にも、だらしなく酒をこぼすようになって
た。何かしても、すぐ息が切れた……』

このように体力の衰えた三枝吉が、健康
な楽子の姿に嫉妬をして、嫉妬が加虐を生
み次第に暴力となっていくのである。

『……彼の好みは、相当頹廢的であった。
と云って、頹廢的な女から、頹廢的な媚態
を味うことなんか、何んの興味もなかつ
た。楽子のような新鮮な女から、種彦の「
××帳」にあるような媚態を彼は求めて

いたのだ。云い替えれば、処女に年増の取り乱した面白味を求めていたのだ。若しそう云うことが可能なら、これ程面白いことはなかったらう。

それには、三枝吉に天才を必要とした。楽子が年だけの音しか出さなかったのは、彼女の罪ではなかった。三重吉はじれて、酒を注ぎ込んだりまでした。……」

この「音」というのは、いうまでもなく……（二行半、編集部にて削除）……

正常な性愛ではない。まさにアブノオマルであらう。

三枝吉は楽子の言動に一々難くせをつけはじめた。掃除が下手だといって、何遍もお辞儀をさせる。

「……楽子が両手を突いてお辞儀をすると「なんだ、その謝り方は？、真心が籠っていない」

そう云って、三枝吉は何遍もお辞儀をさせ直した。楽子は、夕方の御飯の仕度を控えて、それどころではなかった。それでも機嫌を直して貰いたい一心で、彼女は一生懸命形を正してお辞儀をした。

どうしても三枝吉の気に入らず、前後五十遍以上も楽子は丁寧に両手を突いてはお辞儀をし直した。仕舞には、肩が凝って、頭がボーッとなって丸髻の根が弛んで来

た。鼻の肉が落ちて、目と目の間が青くなってきた。かうして楽子が取り乱して来るのを三枝吉は満足して眺めてゐた。……」

「始めは、難癖を付けて楽子を締め上げるまでに時間が掛かったが、だんだんいちめるのには時間を掛けず、取り乱して来るのを楽しむ方に時間を取るやうになった。……」

「……三枝吉の目の奥に例の火がチラチラ炎を上げ出したのを見て、楽子は「しまった」と思ったが遅かった。いきなり髻を掴まれたかと思うと、横倒しに引き据えられて、メチャクチャに丸髻をこはされた。

「髻をこはした位では、まだ諫言する資格はないんだぞ。今、資格のあるようにして見せてやるから——」

三枝吉は西洋鋏で楽子の髪を切ることを思ひ附いたらしく、髪を手に巻き附けると立ち上った。楽子は痛さに悲鳴を上げた。

……」

「……三枝吉が酒を飲んでゐる最中男の子がむづかるので、添ひ乳をして寝かしつけてゐる間に、トロトロと楽子も一緒に寝込んでしまった。それを怒って、いきなり大きな声が聞えたと思つたとたんに、楽子は脾腹を蹴られて目が醒めた。何か分らず、恐い一心で、

「はい」

と返事をしたのは覚えてゐるが、腸捻転でも起こしたのではないかと思はれる程の痛さに、お腹をかかへて丸まってしまった。きり、暫くは起き直れなかった。

一度などは、長羅宇のキセルの詰まってるのを直してない云って、一尺五寸もあるキセルを振り上げられた。殴られまいとして、楽子は身を開いた。

それが悪いと三重吉は云ふのだ。一つ殴れば自分の癪癪は納まるのだ。なぜ殴られてゐないかと云ふのだ。しかし、二十二や三の女にそんなことを要求するのは無理だ。どうしたって、本能的に殴られまいとして身をよけるのが人情だ。

とたんに三枝吉の手が伸びて、キセルの雁首が楽子の襟元に絡んだと思うと、グイと前へ引かれた。キセルにそんな偽きがあるうとは彼女は夢にも知らなかった。あつと云ふ間に、三枝吉の膝の前に捻じ伏せられて、指先の折檻に楽子は身悶えしなればならなかった。……」

「……彼女が廊下へ掛かった時、もう一度三重吉の声が出た。そこで始めて楽子は返事することが出来た。が、三枝吉の声が癪癪を起こしてゐることは彼女にはすぐ感じられた。

『……樂子は煩悶した。どう考へても、三

くあらんと思わせる種の凄艶さである。やがて一人の女は乳を抉ぐられ泉水の水を紅に染めて息たえた。勝った女も泉水より上りかゝるところを相手方の二十五六位の年増に肩を雉刀で割られ、悲鳴と共に泉水へ水しぶきを上げて落ちしばし水中でもがいていたが、やがてこと切れて動かなくなつた。



マゾヒストとしての

二等兵時代の思い出

才

昭

吾

軍隊生活を経験した事のある者なら、誰でもが、ビンタという言葉を知っているだろうし、又現実には経験もしているだろう。然し、日本軍閥が壊滅し去って、嘗て威張り散らしていた職業軍人たちが、世の中の表面から姿を消してしまった現在に於ても、さて、口に出して日本軍隊の私的制裁について語っているのを聞いたこともない。

本来マゾヒストとして自覚している私ではあるが、入隊当時のあの灰色の生活の思い出が、今も尚、赤い烙印となって胸底深く残っている。その怨みの残火はいつ消えるともなくいや、むしろ永遠に消えることなく、私の生きる限り、消え去ることはないであろうことを私は知っている。

元来、私は徴兵検査の時からして、軍隊生活は嫌いであつた。何事もその理由の如何を問わない服従、人間のあらゆる意志を踏みにじり、あらゆる心身の自由を束縛するシステム、この巨大な魔物のために、私たち初年兵は如何に精神的に肉体的に日夜苦しめられたことだろうか。

軍隊というところは全く恐ろしいところだといふことを徹底的に植えつけられた私だつた。実際に監獄の囚人よりも惨じめな生活であるといふことを体得もし、この目で見てもきた。しかし、当時の新聞や雑誌には当然のことながら、戦後のそれらにも、余り取扱っていないのはどうしたことだろう。

戦後、戦争映画などで、兵営内のビンタの

場面が出てくるのも時折あるが、一瞬の間にスクリーンから消えてしまうので、物足りない。真空地帯という映画は、軍隊生活のリンチの場面を主として扱っていたということだが、私は残念ながら見ていないのでどれだけ真実味があつたかどうか、こゝに云うことを出来ない。

近頃の書店の店頭で見る雑誌の内容は、あまりにも小説的であり、ロマンチックで、真実と本能の叫びに乏しいので、うんざりしてしまふ。何故、真実を書かないのだろうか。私は時々疑問に思う。真実を書くことによつて赤裸々な人間性を知ることが出来るのではないかと私は思っている。

私は日支事変も、ようやく泥沼のような長

期戦に突入してあがきのとれなくなった昭和十四年四月下旬、万才と旗の波に送られて故郷の駅を出発していた。それから数時間後、善通寺駅に到着、二人の姉と共に金比羅宮に詣でると、その夜は町役場から指定されて旅館に落着いた。当時の日記を繙いてみると、

四月二十九日 木曜日

四、五日前の応召も、はや来てしまった。

〇〇駅頭は（駅名は記入してあったが筆者の指示により伏字とした）自分と他に二人の応召者で見送る人も多く、汽車がプラットフォームを出る時の感想は筆では書き現せない。応召者のみが味う思いだろう。旗の波と万才の轟、征く者も見送る者も只感慨無量、汽車の中で浮かんだ一句、

征く春や、生命還らぬこの戦

自分は再び郷里の土を踏まぬ思いがした。男と生れたうれしさをしみみ味った。自分の命を捨てるところは大陸である。又、今や生命を大君に捧げる時機であると思った。

こんな純真な気持で私は入隊したのだ。だっ広い営庭の真中で、軍服を古兵から支給されると、私服とか靴、その他制限せられた私物品以外のものは、風呂敷包にして姉に持ち帰って貰った。

いよいよ、今日から陸軍二等兵としての生

活が始まるのだ。肩に黄色い星一つ、重い軍靴が支給された。私達はそれぞれの中隊に配属になり、香川、徳島、高知、愛媛と各県毎に四名ずつの初年兵が内務班に割り当てられた。上等兵が四名に一等兵が五、六名、それに私達初年兵十六名を加えて三十名前後で一内務班を構成していた。

入隊初夜は、なんだか殺風景で、室内は軍隊特有の革と脂のすえたような香が鼻をついて落着かなかった。銃架に掛けられた三八式歩兵銃の銃口が無気味に光っている。古兵達は、私達初年兵の顔をじろじろ見ながら、「お前らは入隊一週間か十日はお客さんだがそれがすむと一寸仕込まれるのじや、お前らは歓呼の声に送られて来たと思って、気をよくしてるだろうが、歓呼の声にさまされて来たんじや、わしが多分お前たちを教育することになるじやろう——」

身体は小さいが、その割に声の大きい一等兵が目細うしてこんなことを云った。

その夜は消燈ラッパと共にベッドにもぐり込んで、故郷のこと、これから送る軍隊生活の好奇心と恐怖心からいながら、あじきない眠りについた。それから、明けても暮れても、敬礼と五ヶ条の軍人勅諭の暗誦とで娑婆がなつかしくて仕方がなかった。

応召当時、あんなに感激し憧れていた軍隊生活とは、そもそもこんな処だったのかと、

手の掌を返えしたように失望した。

点呼がすむと、意地の悪い上等兵が狐のような目付きでアラを探していたが、

「お前たちは動作が太い、わしが気合を入れてやる、一列に並んで目鏡をはずせ」

「ハイ」

「歯をくいしばれ」

上等兵は上服の胸のボタンをはずすと、足を横に開いた。

ピシリ、ピシリ、上等兵の拳が、一列横隊に並んだ初年兵の頬を打ってゆく。

「おい森本、貴様、入墨をしとるナ」

「ハイ」

「入墨は軍隊では通らんぞ」

「ハイ」

「どうだ、ピンタは痛いか？」

「痛くありません」

「なに、痛くない？貴様、痛くないんか、よし、こっちへ来いッ」

「ハイ」

上等兵は一步前へ進んだ森本二等兵の右と左の頬を交互に往復ピンタを喰らわした。

「どうだ、ちつとは、こたえるか」

「ハイ、こたえます」

「なに、こたえる？。貴様はまだ軍人精神がはまっとらん」

上等兵は今度は前より猛烈に森本の頬をぶった。森本というの、土方をしていたとかで

腕に入墨をしていた為、特に打たれ方が他の初年兵よりも激しかった。

当時、初年兵は五円以上の金は持っていないことになっていて、余った金は貯金するか古兵達に預けることになっていた。中には悪い上等兵がいて、そんな金を巻き上げる奴がいた。九州から来た大塚という上等兵は初年兵から預った金を、遊興費に費消してしまつた。こんな時でも初年兵は何一つ文句は云えなかつた。彼等の制裁がどれだけ恐ろしいかを知っていたからである。

森本が外出したまゝ逃亡して帰営しなかつたのは、入隊一カ月後の或る日曜日だった。

中隊長は隊員全部の者を営庭にコの字型に整列させた。逃亡兵を出すということは中隊長の不名誉ばかりではなく、直接中隊長の責任であるといふ、人事係のMという準尉は森本逃亡の事について、何かの手がかりになることはないか、捜査上必要な端緒を得ようと、森本が外出当時の模様を聞き出すため、その日、森本と同行した初年兵二名を、中隊長の真中に呼び出したのである。

彼等二人は森本と一緒に琴平に遊びに行ったのであったが、彼等は森本と同行していたことを中隊長に報告しなかつたことが判つたためである。勿論そんな報告をすれば、ひどい制裁を受けることがわかつていたから、その恐怖のため黙っていたものだった。

二人は準尉の前に不動の姿勢をとつた。「貴様達はなぜ、森本と一緒に遊びに行ったことを早く云わなかつたのだ」

「ハイ」

「はいではわからぬ」

「……………」

営庭は水を打つたように静かだった。一同はかたずをのんで準尉の行動に目を注いだ。私は自分が詰問されてでもいるかのように、全身の意識が凍結したようになって硬直させていた。突然、カアン、カアン、という音と共に「貴様たちッ」という準尉の怒声が響いた。私はその音によって、準尉が指揮刀の鞘のまゝ二人の頭を殴つたということを知つた。

無気味な、カアン、カアン、という音は、静かな営庭の隅々まで響いた。沈黙がしばらく続いた。やがて、どしん、という音がして準尉の長靴が、土の上に倒れた二人の横腹を踏みにじつていた。

私は軍隊という処は、なんと恐ろしいところだろうと思つた。地獄というのは地下にあるのではなく、現実にこの地上にあるのだというつくづく味つた。

× ×

「お前たちの身体は、二銭五厘さえあれば、いくらでも代りがある。」

この言葉は大塚山へ土工演習へ行く途中初

年兵係から度々聞かされた。私は工兵なので対戦車壕をよく掘らされた。私は体重十二貫余の小柄な身体なので、スコップで穴を掘る土方仕事は全くの重労働で、上半身の裸体に滝のような汗を流しながら、強烈な太陽の下で喘いだものである。戦友の背中の汗が乾いて白い粉がザラ／＼と地上に落ちた。

もう欲も得もなく、目もくらむ思いで、スコップを杖に一息ついた時である。

「こら、とろ／＼するな、貴様たるんだるなスコップで赤土一杯すくってこい、入れ方が少い。もっと山盛り入れるんだ。」

若い初年兵係の怒声が飛んできた。この一等兵、怒声の割にニヤ／＼笑いながら

「スコップの土は一粒もこぼしてはいけなぞ、こぼしたらこれだ」

彼の手には、竹藪の根っこを掘つたときに出てきた、瘤が節々にむく／＼ふくれはつた竹の根の鞭が固く握りしめられていた。

「スコップを肩にするんだ、よいか、土をこぼさないように、向うの松の木を一周してこい。」

私は臉が熱くなつて涙がにじみ出てきた。これが万才で送られて入隊してきた軍隊というものであるか、妻や子供には絶対に見せたくない恰好だった。自分だけは、どんな侮辱も屈辱も我慢しよう、しかし、子供だけは子供だけには、再びこんな侮辱を受けさせた

くない。軍隊には来させたくないと思った。監獄だって、このように殴ったり蹴ったり、侮辱されはしないだろう。

「早く行かんか、走り方がにぶい」

私は精神がぼうつとなつたまゝ、只怒声恐ろしさに坂道が無茶苦茶に突つ走つた。担いだスコップの土が首筋や柄を掘っている手にふりかゝってくることも、後からの彼等の笑い声の方が一層私の心を耐え難い屈辱の淵へ叩き込んだ。

土工演習から帰るやいなや、直ぐ全員営庭に集合の命令が下つた。全員整列を終ると、やがてM準尉の姿が現れた。

「只今より皆の者に見せるものがある。それは中隊内に梅毒をもらったものがある。今医務室で彼は苦悶しているから、それを皆の者に参考として見せて廻る。一班から順次医務室へ行くように。おわり」

私達が仕方なしに医務室へ行くと、ベッドをめぐつた兵隊たちが、好奇と侮蔑のこもつた眸で、泣きわめきベッドにのたうつ患者をみつめていた。その患者は同じ六班にいる、伊予の出身で元大工をしていたという米田二等兵であつた。私は以前、この米田という男の為に、あらぬ嫌疑をかけられて一等兵や上等兵に寄つてたかつて袋叩きにされたことがあつた。

然しそれから数日終つた夜、私の枕元を訪

ねてきた米田は、「自分の為に君に大変迷惑をかけて済まなかつた、どうか許してくれ」と詫びに来た。「いゝんだよ、そんなこと云わなくとも」一度は彼を怨んでいた私ではあつたが、詫びられてみると、相身互いの詫びしい二等兵同志、彼にも人間の愛情が通つてゐるのかと、柄にもなく涙がにじんできた。それからお互い、蔭になり日向になり、かばい合つてきたのだが、今、目の前に患者としての米田の惨じめな姿を見るのは、他の誰よりも辛かつた。

私の寝台の隣りにHという、小ぶりの衛生兵がいた。Hは二等兵だが私よりは少し古かつた。軍隊では、これを戦友という。初年兵の私は、この戦友の洗濯物から総ての世話をする事になつてゐる。これをしなければ上等兵からひどい叱咤を覚悟しなければならぬ。然しHは、いつもやさしい言葉で「わしの洗濯はしなくてもよい、もし、上等兵が洗濯をしているかと尋ねたら、していると云うんだよ、そう云わなかつたら、仕込まれるからの」

Hは性格も体格も全く女性的だつた。

Hのふつくらと肥つた白い肥体を見ると、誰もが女性の肉体を想像せずにはいられなかつた。まして、長い間、男ばかりの殺風景な兵営生活を続けてきている荒くれた上等兵たちには、Hの存在は、こよなき慰安の的であ

つたらしい。

点呼が終つて寝台につくと、上等兵たちはHの寝台の廻りに集つて、キヤツと悪ふざけをして、私たちの睡眠を妨げた。しかし私たちには、これに抗議することは勿論、眸を向けることすら出来ず、只、かたずをのんで狸寝入りをするより仕方がなかつた。

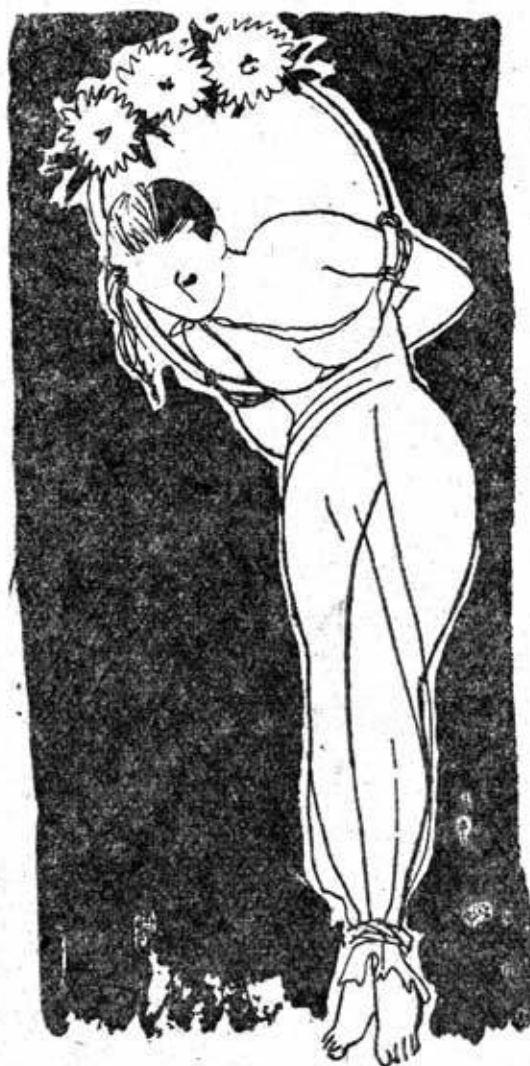
私の脳裡にはHの白い肉体がうかび、あの鬼のような上等兵たちにも、こうした一時のやわらかい気持のあることを、ほくそ笑みたくなつた。しかし、何時間か後には起床ラッパの鳴ることを思えば、再びめ入るような暗い気持に襲われるのだった。そして、軍隊とは地獄だ、二度と来るところじゃない、と悲しいあきらめに落ち着くのが常だつた。

そして、故郷でさびしく、ひたすら私の帰りを待ち侘びているであろう妻子の面影が涙のにじんだ瞳にうかぶのだった。

第一期の検閲を受けて一カ月後、私は除隊になることが出来た。それから四年後、昭和十八年二月、再び応召となり、第一回の入隊当時にも増した恐怖の数々を体得した。

マゾヒストとして自覚している私の見た日本の軍隊というものが、生地獄であつたことを、私は自分の身体で体験して、はつきりと公言することが出来るのを、嘗ての日本軍隊の為に悲むものである。

(おわり)

被 縛 症
(二)

高 村 民 子

其の朝は十一時近く迄寝過してしまい目覚めてから大慌てで着換えをし、顔を洗ってお店に下りてゆきますと、食器棚を片付けていたマダムに

「お早う、よく寝たわね、お目々が溶けるわよ」と冷やかされて

「済みません」と照れて、エプロンをつけ、早速床を掃いたり、テーブルを拭いたりしな

がらも高村の下宿に午前中に行かねばならないと気が気ではありませんが、朝寝の手前、お店の掃除を途中で止めるわけにゆかず、せつせと坊く内にやっと片付いた時には、時計の針は十二時を少し廻っていました。

待っていてくれるであろう高村のことを思うと気もそぐろで、マダムと簡単な昼飯を済ませた時、「おーす」と大きな声がして高村が、グレイのセーターにハンチングと云うハイキング姿で、肩から大きな写真器具用の革

カバンを下げて入口に立っていました。嬉しさと狼狽が錯綜して顔を真赤にしてどぎまぎしていますと、マダムが如才なく、

「いらっしやいませ、どちらにお出掛け？」

まあお茶でも」と云って奥にお湯を取りに行きましたので、私は「待って」と目で高村に合図をして二階に駆け上り、昨夜書いておいたあの手紙をポケットに入れて滑るように階段を下り、彼の手にそっと握らせました。

「お返事は電話で」とさゝやいて、急いでスタンドに戻り、昼ごはんの片付けを続けました。高村は、

「出られないの」と声をかけましたが、私はお湯を下げて戻って来るマダムの足音をききながら、かぶりを振って「駄目」と目で答えました。彼は一向に私の態度が解せないらしく一寸苦笑いしてやおらタバコに火をつけ、出て来たマダムと、

「六甲のロックガーデンに写真を撮りに行くんだ、社内のコンクールに出すやつを」と話しかけ、約十分ばかり写真談義をした挙句、「じゃあ行って来ます」とマダムと私に敬礼の真似をして出てゆきました。

私はマダムの手前、彼が出て行く時もさり気なく振舞い、唄を口ずさみながら野菜やソーセイジなどでお酒のつまみ物を用意しながらも、心では、今頃電車か自動車の中であの手紙を開封しているであろう高村の事を思っ

て期待と後悔と不安が入り乱れました。

「賽はすでに投ぜられたり」男ならかのシーザーの如くさつとルビコンに駒を入れて自分の運命を切り開く事も出来ましようが、誰一人頼る者の無い女の身では自分が一たん選んだ男の意志で「女の一生」が左右されると思うと、未だ交際も浅くお互いの身の上話一つした事もない高村に、あんな大それたプロポーズをしてしまった自分の無謀さと軽卒さが空怖ろしく、マダムが買物で外出したあとでガラランとしたお店でソファアに身をうずめて泣きました。其の内、昨夜の寝不足の疲れでウト／＼と宙に身が浮く様な心地でまどろんでしまいました。

どの位たちましたか、ジーン／＼と鳴る電話の音にハッと目覚めて、よろけながら受話器をとり上げ、

「ハイ／＼モナミでございます」と云いますと、一寸間をおいてから、

「タミちゃんだね」と高村の声、思わず息をのんで耳を澄ませますと、

「今、山から下りて来たところだ。君の手紙読んだよ。心配かね」と話を切つてじらすので、私はただ夢中で受話器を握りしめ、おし黙って次の言葉を待ちました。やゝあって「君のプロポーズは良く解った、全面的にOKだ。」

張りつめた気持が一時に緩む様な安堵とわ

く／＼する様な怖しい期待で私は舌が硬ばった様に返事も出来ませんでした。彼は続いて「君は実行を急ぐかね、急ぐなら今晚どう？返事が無いなら承知したものと看做すよ、いゝね、じゃあ今晚八時元町駅前で待合せしよ、時間励行、服装はなるべく和服がいゝ、手ぶらで来なさい、いゝね、じゃあ切るよ」私はやっと「はい」と答えました。

見上げますと、時計は午後四時を指していました。間もなくマダムも帰り、女給さん達も一人二人と出勤して来ましたので、私は感傷にふける間もなくお店番を代ってもらい、大急ぎですぐ近くの銭湯へ行きました。

まだ早いので空いている湯舟の白い湯気の中で肩からお湯をかけながら今夜の空怖ろしい様なアバンチュールの事を想い、若しかしたら今夜限りになるかも知れない処女の肌に石鹸の泡を立てゝいる内に未だ嘗って味わった事のない甘酸っぱいものがうづく様に胸の中を走るのを覚えました。

お風呂から帰って二階に上り、一寸ためらいながら思い切つて下着を全部脱ぎ湯文字と肌襦袢をつけ、長襦袢にお召を着て鏡の前で立ったりすわったり、体をねじったりして悪戦苦闘してやっと帯を締めました。澄ました顔で下におりて行きますと、マダムや女給さん達が口々に「まあ珍しい、お着物ね」とひやかすのがたまらなく、くすぐったく思い

ました。

肥り過ぎの私は着物は苦手で今までドレスばかり着て居りましたので、皆が珍らしがるのも無理はありません。其の夜は日曜日のため、勤め帰りのサラリーマンが来ないので、お客様は五、六人でしたが私は精一ぱい付き、お付合いのビールではほんのり体が温まった頃、折をみてマダムに

「一寸出て来てもらいますか？遅くなるかも知れないけど」と甘える様に頼んでみますと、メツと睨む様にして、

「ランデブー？」とウインクしますので、「とんでもない、とにかくお願い」と、大袈裟に手を合えますと、

「いゝわ、今日は良くやってもらったからゆつくりして来なさい」と云つて呉れましたのでホッとして、早速お燗のついたお酒をマダムから受取つて客席に運び、八時十分前迄お客様のお相手をして、一寸席を立った振りをしてサツと表に出ました。

冷え／＼とした秋風が襟元をかすめてホロ酔いの顔を冷し、又もや、ためらい勝ちになる心を励ます様に、小走りに元町駅に急ぎました。

二

元町駅の入口に駆け込む様に入つて、あなたを見廻しましたが、高村らしい人影もない

ので、ホッと気が抜けた様に一息ついて気を静めていますと、駅の時計が八時を少し廻り始めた時、後からそっと近づく靴音に急いで振り返りますと、

「やあ来たね」と高村が写真カバンを右肩から下げてすぐ前に来ていました。一寸どぎまぎして言葉も出ずにいる私に、

「さあ、どうしようか」と笑いかけましたので、一寸あたりを見廻して、すぐうつ向いてしまいました。暫く沈黙が続いて、

「何処か行くあてはあるの？」と聞きますので、うつ向いた儘がぶりを振りますと、

「では私に一任するかね」と駄目を押しますので、私は黙って頷きました。

「じゃあ兎に角西の方へ行こう」と云って、通りかかったタクシーに手を上げ、私を先に乗せてから『新開地』と落付いた声で運転手に命じました。車の中では、彼は私の手を膝の上にとって握りしめたまゝ一言も口をききませんでした。

私は急転直下、未知の冒険につき進んで行く吾身の運命が怖ろしく、たゞ身を堅くして彼に寄りそいました。新開地の賑やかな通りで車を下り、福原とは反対の西の方に歩きながら人通りの少なくなった処で、

「僕は温泉マークは嫌いなんだが、今さし当って適当な所が無い、何処かいゝ家を見つければ、大きく新しいやつを」と云う彼の言葉

に、私も顔を上げて見廻しますと、赤や青のネオンで所謂「逆くらげ」の温泉マークがびっくりする程、彼処にも此処にも毒々しい程に輝やいて居りました。十五分程歩き廻って一旦通り過ぎた或る旅館を振り返って、

「あれにしよう」と私の顔をのぞき込む様にして、肩に手をかけました。私は黙って、承諾の意思表示に向きを変え、彼のあとにしたがいました。玄関での番頭や女中の好奇の目や廊下のまばゆい螢光灯の明るさに身がすぐむ思いで無我夢中で彼の後にくっついて行きました。案内された部屋の前で戸を開いた女中に、高村は、

「二時間程休むから。いくら？」とぶっきら棒に云い、

「八百円でございます」と答えた女中に金を渡して、

「お釣りはいゝよ」と云って、さっさと部屋へ入りました。女中は、入口に立ち止ったまゝでいる私を一瞥してから、高村の方を向き「どうも有難うございました。どうぞごゆっくり」と切口上を述べてさっさと出て行きました。

「入れよ」と云われて、怖るゝ部屋に足を踏み入れ無雑作に彼が置いて呉れた座蒲団に坐り、テーブル越しに向い合いました。彼は一寸腕時計をみて、「八時半か」と独り言を云って「プフ」と含み笑いをして、

「やっぱり僕もこんな所は初めてで一寸てれるね、まあてれかくしに一杯やろう」と云ってカバンからウイスキーを取り出し、グラス二つに注いで、

「さあ、吾々のアバンチュールの為に」と乾杯の真似をして一気にグツと飲み干しました。私も半分程頂いて放心した様にテーブルの一点を見詰めて居りました。

心の中では「お前は何と云う向う見ずだ。お前は空想や妄想を現実に移して身を破滅させたいのか。見ろ、こんな明るい電灯の下で裸にされ、転がされ、異性の前にお前の全身を無防備にさらけ出して無事に済むと思っているのか、何という恥知らず、何という氣狂いだ」という声がします。私は、「お願いです、このまゝ帰して下さい」と口から出かゝるのを押さえる様に、ウイスキーを口に運びました。

彼も黙々として、タバコをふかしながらグラスを空けていました。そして彼が五杯位、私が二杯位でウイスキーのビンが空になると彼は又時計を見て、

「ジャスト九時、そろゝ始めようか、いかゞいたしましょうか」と、なぶる様に訊ねます。私は依然黙ってテーブルの角を見詰めて右手で座蒲団をいじって居りました。彼は上衣を脱ぎながら、

「特に御注文がなければ僕のプログラムを進

めるよ、いゝね」と念を押す様に云いますので、領きますと、彼はゆっくりと立上って上から私を睨みつける様にして

「では先ず着物を脱ぎ給え」

とう／＼来た、私は頭がカーツとして何も解らなくなつて、わけもなく、がた／＼と顫え始めました。「さあ」と語氣荒く促す彼の声に、細々と「電灯を」と云いますと「よし」と云つてパチンとスイッチを切りましたので、フラ／＼と立上り、帯止めに手を掛けました。



したので、私はよろめいて畳に両手をつきました。そしてズル／＼と着物を剥ぎ取られ、湯文字一つにされ、恥かじさと薄ら寒さに思わず畳にうつ伏してしまいました。

彼は「サア」と云つて私の左手首を掴んで背中に廻しながら今解いたばかりの腰紐を巻きつけ、次いで右手首をとって高手にグツと押上げて首縄をかけてゆっくり菱縄に縛り続けた。自縛では味わえぬ緊縛感と首縄の息苦しいさ。そして畳に圧しつけられた頬と肩先の痛み、私は肩で息をする様にあえぎま

廊下からもれて

した。

来る薄明りの中で、彼は手伝う様に私の帯をとらせ、ゆっくり畳んで部屋隅に置いて、其のまゝ膝をついて顫える指先で腰紐の結び目をいじっていた私の手をはらい除ける様にして腰紐をキユーと抜取り、着物の襟首を掴んで後にグツと引き、

双肌を脱がせてから私の肩を押しましたので、私はよろめいて畳に両手をつきました。そしてズル／＼と着物を剥ぎ取られ、湯文字一つにされ、恥かじさと薄ら寒さに思わず畳にうつ伏してしまいました。

彼は「サア」と云つて私の左手首を掴んで背中に廻しながら今解いたばかりの腰紐を巻きつけ、次いで右手首をとって高手にグツと押上げて首縄をかけてゆっくり菱縄に縛り続けた。自縛では味わえぬ緊縛感と首縄の息苦しいさ。そして畳に圧しつけられた頬と肩先の痛み、私は肩で息をする様にあえぎま

「さあ、これであと四枚残っているからな」

彼はそう云うと、カバンから更に別の紐を取り出して、股間縛りにしたり、胡坐をかいたり、足の裏が顔につく程のエビ責めにされたりしました。

私は起こされたり、転されたりする度に後手の手首と二の腕に巻いた紐が痛くて、消え入りたいばかりの気持で「あゝ」とか、「もう」とか「だめ」「お願い」「止して」「そ

んな」とか、まとまりのない言葉を口走っていました。特に逆エビにされて、のけぞるように、そむけた顔の髪を掴んでカメラに向けられ、シャッターの落ちるのを待つ間、息もつまりそうになって、「止めて、止めて」と上ずった言葉を吐いていました。彼は私の呻き声や泣き声、哀願には一向お構いなく、自分の思ったままの縛りのポーズをとらずと黙々とカメラに収めてゆきました。十二枚のロールフィルムを撮り終りますと、

「よし、終った」

と、初めて大きく笑って、縛ったままの私を「よいしょ」と掛声で抱き上げて、隣室の三帖の間に運び、足で掛蒲団をはねのけて、シーツの上に、どしんと乱暴に投げ出しました。私は後手が背中当って「うッ」という程、強い衝撃を受けて邪慳な彼をにらみつけましたが、彼はそんなことに頓着せず、掛蒲団をすっぽりと私にかぶせて襖を閉めて出て行ってしまいました。

私はカビ臭いような湿っぽい蒲団の中で、身動きも出来ず、肌に喰い込む紐の目の痛さが次第に痺れるような快さに変っているのを自分でも不思議に思っていました。

長い様でしたが、実際は短い時間だったのです。いきなりパッと掛蒲団がはねのけられましたので、びっくりして、後手に縛られた身体をくの字に曲げて顔を上げますと

目の前に、すっかり写真道具を片づけて帰り支度を整えた高村が立っています。

「さあ、帰るよ。」

と彼は、可笑しさをこらえるようにして云うのです。呆然として黙っている私に

「君はまだ物足りない様子だから、そのまゝにしておいてあげる。あとで女中さんにも解いて貰うんだな」と事もなげに云って、襖を閉めかけますので、私は飛び上る程驚いて

「そ、そんな、ねエ解いて！」

と、起き上ろうとしますが、身体の調子がとれないので、徒らに足が宙を蹴るばかりです。身体を芋虫のように屈めて、膝と、額とを床につけて起きようと懸命にもがきましたが横になったまゝで、どうしてもうつぶせになれません。そんな恰好を冷ややかに眺め下ろしていた彼は、

「女中には、君が何処の誰だか分る筈はないし、恥のカキ捨てで、スリルを味う

には絶好の機会だぜ、たゞ、女中には、私はこんなにされるのが好きなのです。」とはつきり云わないと、とんでもない勘違いをして、女中が人呼んで警察沙汰にもなりかねないからね。その点はうまくやってくれよ、では



さようなら、ごゆっくり」

と云ったかと思うと、すた／＼と戸口の方へ歩いて行って、ガチャ／＼と錠をはずしかけたので、私は、もう夢中になって、

「高村さん、待ってエ」と悲痛な声をふりしほって、フトンから転

り出し、肘や膝が畳ですりむけるのも構わず
ゴロ／＼と横転りに彼のあとを追いました。
隣りの部屋の中程まで、来たときは、心臓が
割れるようにドキ／＼と脈うって、口はから
／＼に乾ききっています。

ドアを半開きにして願っていた高村は、そ

【通信】 縛り絵マニアの回想

渡 辺 乃 介

（丁度一年近くも古くなった『読者通信』
でどうかと思いましたが、どうか辛抱して編
集部の皆様お読み下さい。）
編集部註、この読者通信は昨年四月頃頂
いたものでしたが、折柄の混雑で紛失、最
近再び書いて頂いたものです。
室との境のドアが半開きになっていた。寝
不自由な後ろ手で開けた相違ない。俯伏せ
る。場に逃げ込む哀れな姿が眼に浮ぶのであ
る。
灰暗い洞窟のベッドの上に、登枝は両脚
をちぢめて横たわっていた。その足をつな
ぐ紐が垂れているのが印象的だった。彼が
入ってくるのを見ると起ち直ろうとして彼
女はもがいた。するとその紐はたちまちみ
じめな直線を描いた。
健次郎は扶け起すかわりに、じぶんもベ
ッドの上に上って、しずかに身を横たえた
「いとしい登枝！」
者からだを引き寄せると、両腕のない不具
えぬ顔を胸にうずめてすすり哭いた。その

んな私を暫く見詰めていましたが、急にこら
えかねる笑いを噛み殺すようにして、再びド
アに錠を下して、ブーッと吸き出して、
「なんて、怖しい顔をして睨むんだ、お芝居
だよ、誰が君を残して行くもんか」
と、あとは腹をよじるようにして笑いこけ

切ない動きと鳴咽には無限の絶望と慨きが
こもっていた。
「心配するんじゃないよ。奴等は僕を野蛮
人だと思つて、君に同情したただだから」
顎をおしあげ、つめたい涙に濡れた頬に
じぶんの頬を重ねながら、彼はささやいた
すると、はげしい怒りが彼を掴んだ。全世
界とじぶんたち二人が対立するのを感じた
「どんなことが起きたって、僕は君をまも
つてやる。断して屈服するものか。負けて
たまるか」
狂気のようになり、健次郎は眼に
見えぬ敵にむかって叫んだ。
昨年三月特大号の『夜光島』吾妻新先生の
作品の一番節である。当時、奇巧に對するあ
の大せん風の起る。ほんの少し前であつた
愈々最高潮になり、波瀾万丈というべきと
ころであつた。私は吾妻新先生の作には何
かしら、引き付けられ強い魅力にうたれる
ものがある。
度々編集長にもお願いしたのだが、サデ
イズムの風物に最も描写の巧みな吾妻先生
に、フランス王朝の革命時代を扱った、王
朝はなやかなりし頃から、革命に至る迄の
正史に表れていない革命裏面史とでもいう
べきものを誌上に発表されんことを切望し
ます。

ました。私は一時に張りつめた気がゆるんで
失神したようにぐったりとして、ヨダレが頬
を濡らすのも構わず、畳に顔を押しつけて泣
き続けました。

旅館を出て、高村に寄り添いながら歩く私
の目には、往き交う人も自動車も、街を彩る
ネオンの光も入りません。魂の抜けた人のよ
うに、よるめき乍ら足を運びました。

道は新開地の表通りに出ようという暗がり
に來かゝりました。

「真直ぐ送って行こうか、なんなら、君の店
で一杯飲んでいってもいいが」

彼はそう云いましたが、マダムに出がけに
あゝ云つて來たのに、今更、高村と一緒にの
め／＼帰れた義理でもありません。それに、
今の私には、マダムや朋輩たちに顔を見せる
のが何んとなく恥しかったのです。

「今晚は、私遅くなつてもいいの、貴方の行
かれるところへ一緒に連れて行って。」

私は只、わけもなくこみあげてくる鳴咽に
高村の胸に顔を押し当てゝいました。私の背
中に廻した彼の両腕に次第に力の入るのを感じ
ながら。何人かの人々が、直ぐ横を通る足音
を耳にしましたが、私達はじつとそのまゝ動
かないで寄り添っていました。

△註▽

掲載の写真二葉は筆者より原稿と
同封で送って來られたものです。

（おわり）



【告白と体験と手記】

光りある中を

「我が自殺行の記」

近 東 規 矩 也

バザアロフ

「人間は常に光りある中を歩ま

なければならぬ」

—ツルゲネエフの『父と子』
より。

「書かでもがなの事」

鶏鳴曉の静けさを縫う。明くれば今朝は昭和三十年の元旦ではある。深い夢路を破られて私は眼を醒した。病棟はまだ眠りにつゝまれている。隣りベットの療友も安らかな寝息の裡にあつて、この聖

なる朝明けの一瞬を識らない。それは、生きとし生けるものゝよるこびと、のぞみをこめた年の始めの曙ではあったが、私には未だ醒めやらぬ夢の中の続きを辿っているような錯覚すら起し兼ねる、これはあまりに生々しく、うずくような興奮と懼ろしい程の恐怖の人生行路であった。生と死の境をさまよい歩るいた云うならば、いのちを削られる精神と肉体のたたかいでもあった。——そして長い悪夢からさめた、うつそ身の今にして想う、私の脳裏を走馬燈の如く去来するものは、きまって哀しい性のひとりの漢の姿でしかない。その私、云うならく、親に去られ、妻に去られ、友に亦去られ、寄る辺とてなき孤独の身一つの辿った数奇な運命の豎琴に奏でられた葬送行進曲の一駒を今、熱き涙と共に回想譜として綴り残し、懺悔と甦生の糧ともしたいと、ひそかに翼って私は熄まない。

|| 第一 章 ||

昭和二十七年の一月末、私は丸の内の東京鉄道管理局の要職を辞して業界紙に飛び込んだ。年来の希望であったジャアナリストの夢が漸やく実現したと思った。しかし私は、現実の新聞社の生息が学窓の知識ではとうてい想像つかぬ、きびしいシステムとビジネスの明け暮れにあることを知るにそう何日間も要しなかった。こゝのあわただしい生活に比べて何と官公庁の至極のんびりした職席の一日であったことか。私は呵然として、その暫くは手馴れた筈の編集のレイアウトも思うように鉛筆が走らなかつたものである。茲の世界では哲学も倫理も凡そ必要な直接的な要素は毛頭もない。ただ在るものは現実の生々しい記事と報道と、その迅速さでしかない。学理や研鑽は新聞業務を司さざるデスクからは既に拭い去られてある。私は全く眩めく思いで二、三ヶ月を過ごしたものだ。無風帯の学巢から官庁のお役人さまとして育ち、いきなり風当りの烈しい現実の社会に、しかもプレスコードの厳しい文字通り文化的怒濤の真つ只中に佇ち尽くした私は、手もなく、もう生活のたたかいに疲れ果ててしまっていた。

ニウヨオクから航空便で到達するレポートの翻訳、支局からのロオカル・ニュースの採択、通産省や各関係庁社めぐり、その余暇を盗んでのサイドワアクにもなる広告取り、大日本製糖や六鹿証券をインタビュして重役や専務のプロファイルを書く、ついでに人物月旦もメモして、うめ草の資料にしておくことを忘れない。最後に取引所をのぞいて後場の終値を市況に載せて大組を校正する為に工場に飛び込む。インクの飛沫を浴び乍ら輪転機から刷り出されたタブロイドを裁断で整えて発送に落す。正直、昼食をとる暇もないと云うのが小企業会社に働く者の常かも知れない。

雑然とした、そしてあわただしい、一日の務めが終り、アパート

に帰るさ、索寞とした、やるせなさ、云い識れぬ哀しさが足もとから刺し上って来て、憧れていた筈のジャアナリストの事態は斯くも凡そ私の想念から余りに隔離されている現状を識るに及んで、もう何の感興も希望も少しも湧いて来ようとはしなかった。そして引きづられる儘、味気ない勤務の毎日を送るなかで世の中はもう春から夏の衣更にせわしく宵宮の縁日では露店の風鈴が涼風をさそっていた。

私の勤めている新聞社は泥の臭いのはげしい運河を一つへだて、箱崎と向い合った水天宮を一寸這入った処、カキガラ町と云う古風な下町の一角にあった。夏祭りが近づいてこの界限は急に活気づいてみえた。社でも夏期特集号を冊子にして販売する企画が発表され、残業が宵の口まで続くことが多くなった。そんな折であった、私が胸のやまいを患っていることを知覚したしたのは。

私は或る一日、ここから歩いて、ものゝ十五分と要しない呉服橋の庁社まで加代を迎えに出向いた。かねて手筈であった江の島鎌倉行きを実現させる為であった。燃えつきそうな炎天は抜ける程高く澄み返っていた。

私は離婚して以来、半歳ぶりである加代の若々しいワンピース姿の肢態に憑かれるものを感じて、赤羽に姉と間借り生活をしているこの女に軽い嫉妬すら抱いてみるのだった。目的地までに私も加代も汗まみれになっていた。砂浜は雑沓をきわめていた。私達は半時間程、水に浸ったばかりで、すぐ上ってしまった。駅前旅館の二階に部屋をとると、すぐひと風呂浴びて塩水を落した。私は何故か無性に疲れていたようであった。鍵を下して二人とも横になった。冷えきったサイダアが快く咽喉をうるおす。私はシユミイズひとつで臥っている加代の抜けるばかりに白い素肌に不思議な程、はげしい郷愁を感じたが私の背筋は不快なうずきをくり返し、肉体はもうかすかなおののきを見せているのだ。嫌な予感、懼ろしい憶測が

脳裏を去来する。結核、おぞましい、呻きに肖た切ない声が私の喉をついて出る。それは自嘲と悲嘆の交々に極まったものであったろう。私は鉄錠を下された思いで不安気な瞳の加代に言葉尠くこう云ったものである。

「僕達の交際も愈々これまでにになったようだね。君は早くいゝ人をみつめて再婚することだ。健康と若さを誇っている裡に——」
痛い程な絶望感から私には心境に大きな変化がおこりつつあった。

この年の秋おそく、加代は肺結核症で常盤線の水手に近い石岡の療養所に移って行つた。おそらくは私から感染したものと見ていい、私はもう言葉もなかった。もとより一切の責任は私にある。療養所を訪ねた或る日——「でも仕方がないわ、私達は本当にお互いに運がなかったのよ、だから生活に負けてしまったの。もう誰も恨まない、なるようにしかならないんですもの。これからは、私達お互いに諦めめの生活の中でも美しく生きてゆくことを誓い合ひましょうネ。そして折角生きることにのぞみの総べてをかけて、たたかうことを約束しましょう」

——顔を泣き腫らして、これだけ云うと、加代は咳き込んでその儘臥ってしまった。

しかし私にとれば、この一言だけでも、甲斐性のない、はらわたの腐った男をなじるばかりに耳朶に響いてたまらなく痛い。「済まない。きっと私から離れていった友だちにも嗤われぬよう努



力の限りを尽くしてみせるよ——君のためだけにでも」と、銘じる心で云いきった。

孤影悄然、うそ寒い松籟にオウバアの襟をうずめながら小さな私鉄の閑駅に急ぐ私の脳裏には先日観たばかりの黒沢明の「生きる」

と云う映画の一駒がかなしく湿って来て容易に忘却することが出来なかった。それは——しとどな露の宵であつた。

× × ×
テレビオン、パス、と抗菌剤を枕頭にならべてさみしい正月を迎えた。

今年は屠蘇の香も松飾りもない。
せめて病床のまわりだけでもと、暮のうちに洗い立てゝおいた清潔な敷布と襟カバア、枕とおいをつけて、その上に小さく坐つてみる。佗しいばかりで、ひとり居のアパートの部屋は冷めたく寂しかった。

今年はそれに賀状も少ない。その中で
頌春——

早く癒つて出て来い規矩ちゃん

デスクが泣いて待ってるゾ

そんな社の編集の寄せ書きもあつた。

父からのハガキに

「目出度さも中位なりおらが春——」

と言う訳で、まア兎に角療養に精進されよ。

——と、誰やらの句である。私は何故か自嘲を禁じ得ない。けれど何よりも心待ちにしていた加代からは松の内が過ぎても何の音信さえなかった。

日記抄——

ひとり居の 火鉢にかざす

病める白い掌のあえかなゆびのかた細り——

夜の寂しさに そつと

浅草の雑踏にまぎれ込んだが

あの踊り子の小さな耳たぽが忘れられない

百八ツの煩悩の鐘でもきいて寝よう——

昭和二十七年
師走三十一日——

③
ノヴァリイリスの「青い花」クライスト「こわれガメ」と独文学を二冊読んでみる。読書だけでも甚だしく疲れる。盗汗も烈しい。この二、三日、なにをすることも気懈く、もの憂い。咳きも苦痛を伴うようだ。発熱は三十九度を下らないし、しばしの血痰に驚ろかされる始末である。加代は胸廓成形術を施すと云っていたが、どうしたことだろうか。気にかかることばかりで心が休まらない。結核の三原則は、大気、安静、栄養にあるそうだが、どれひとつとて今の私にはかなわぬところだ。
一月ついたち——

○
社を辞める。寞とした空虚なところで藪入りの街を当てもなく散策する。ひどく熱つっぽさを意識するだけで無性にむしばめる肉体がうら哀しく、矢鱈に涙ぐんできたりする。

扱て、これで一体、いいのだろうか。

誰かに思いきり問わず語りにうち明けたい——この心と肉の悶えを。呵々。

あたたかき春の宵なり——

○
死——と云うことを不図、真剣に思索してみる。一日、二日、五日、——やがて一週間にもなろうとしているのにどうしても究明出来ない。人間は考える葦だというが、凡そこれは形而学的には割り切れない観念である。もう路はあるまい。私はただ「死」という主體的な真実性をそこに現せばよいのだ。それで私と云う悲劇のタレントは、その総べてを終る。生の終焉さ。どうだネ、素晴らしいアイデアじゃないか。あははは、本日は四月馬鹿なり。
一日——

結婚以来五年越しに綴った生活日記の筆を擱こうと念う。
わが胸の底のころには悲しいニヒルと徒らな自虐があるのみ。
デカダンスと、おぞましいばかりなレジスタンス——それも意味も
なく、ただ幸福に酔いしれている人々に対する。あゝいやらしい巳
れの心に唾してやりたい。

四月九日——

上野山の桜が咲き揃った。花見遊山の人出が新聞をにぎわす。そ
して世の中は愉しげに浮かれて踊りぬいているようだ。しかしその
春にそむいて、私の心は暗く侘しい限りではある。退職金も、もう
大かた費え果ててしまった。薬餌代にもそろ／＼事缺ける。療養所
の加代からの月々の仕送りも既に詰ってきいていた。

一陣の風に万朶の花散りぬ 紫苑

寂しい句だった。

花の雨患者しきりと咳きす

馳てその花の春も逝き、白い積乱雲のよく湧きあがる夏が、また
ぞろ巡って来た。日大病院の友人を訪ねてレントゲン写真を撮って
貰う。完全な肺結核症である。両肺に空洞が判然と顕れてある。ス
トマイの注射をすすめられたので知り合いの薬局で打って貰うこと
にした。暑い最中に白いマスクをかけた私に人々の眼が振り返っ
た。私は「生ける屍」なのだ。いくたびとなく心にささやいてみる
のだが、もう自虐の念が鎌首をもたげ、云い識れぬ憤どおりの思い
さえ眠っている魂をゆさぶりおこしてやまないのだ。私は自分を制
すること一杯になる。ノウマルな思考力さえおぼつかないのだ。
洋タンスも三面鏡も既に道具屋に渡っていた。背広もこの夏のも
のと冬着を残して売り尽くしているし、結婚記念のビクタR55
型の電蓄もLP盤と共に他人に渡ってしまった。現在残ってい
る蔵書が、あと二、三万になるか、どうか。

清瀬村の療養所を望んでいるのに、いつかなベッドは明きそうに
ない。生活苦と、生と死とのたたかいはいいよ深刻に私をおびや
かしてくる。そうして私は再びゴンドラの唄を想い出す。

いのち短かし 恋せよ乙女
熱き唇 さめぬ間に——

野分がはげしく吹きつる今日この頃、薬局に止血剤を求めに走
る私の背にも秋は深かった。

脈膊は一分間に百二十を数え、しかも乱れがちだ。食事も四六時
中とらぬことすらまれではない。ただ無性に気瀬く気鬱なのだ。

——こんな或る日、アパートの管理人から、公社からの退去通知を
を伝えられた。云い忘れたが私は丸の内の東京鉄道管理局を退いて
以来、居宅の見当らぬことを理由にその儘、一年以上も居据ってい
たものである。私はどうしてよいものやら策もなかった。唯、眼の
前が真つ暗に閉された儘だった。そして更に一週間を経た折に、局
の官舎係員が執行を迫って強引に私から同意書の捺印をとっていっ
た。——だからどうしても一月中にはこの部屋を出なければならな
い。私は

(もうどうともなるがいい——)

そんな捨て鉢なころで、ふてくされ在再日を送っていた。

もう、まなかいの庭のまがきの黄菊も、うら枯れて宵の露霜にも
たえられまいと思われる風情である。果ては私の身にあまりによく
肖た境遇に、ひと識れず臉を熱くしてしまう。

寒菊やあばらあはれにかき抱く

霜厳し今朝病涯の身を踟め

昭和二十九年一月三十一日は運命の日であつた。私は残さず家具
を売り払った、がらんとした部屋にその人を待っていた。

烈しい自責の念が胸をうつ。しかしもう総べてはおそい。賽はすでに投げられたのだ。

私はこの旬日来、思いわずらっていた。或る事実を今にして踐んでゆくしかない。どうせ不治と云う名の宿痼にとりつかれた私だ。生々流転のゆく末を、自からの手で断ち切りたい。それが、この春秋、愉しむ折とてなかった私の最後の死に花かもしれない。相当額の札束を握むようにして懷ろにすると私はその足で東京を發つてしまった。

二重詐欺――

部屋の権利金と称して二組の入室希望者から金を奪ったのである。真底――

(済まない)
と思ひ

(御詫びしたい)

とも考える。だが、かたくなな性はそれすらもはねのけて、私に惡の華を咲かせて散れとそゝのかして熄まない。

――もう、なるようにしか、ならないのだ。人間の一生なんて。まして私は肺病人だ。廢人だ。生きている人形じやないか。いつそ、これも面白からう、と、ふてくされて私は湯の街にとんだ。

そして、湯河原、伊東と湘南の泉に湯浴みし、鬼怒川の溪谷に糸を垂れ、塩原に遊び呆うけて、伊香保の湖に三十一才の恨みの春を捨て、再び生れ故郷の東京に戻つた。死ぬ場処は私の育った埼玉の大宮の町がいゝだろう。

暗れなずむ車窓から灯に濡れた古い宿場町を眺め乍ら、とめどもなく涙を流した。

そして

その夜、私は服毒自殺をはかった。

×

×

×

氷川神社の参道に沿った松林の間に、その温泉旅館の紅葉荘はあった。

如月のこのか。

松の樹肌の匂う宵で、風も暖かい。

風呂に入る。みがきのかゝった湯槽は、妙に官能を刺戟する。私はたんねんに身体の隅々まで洗い浄めた。頭髮には特にヤナギ屋の油を選んでおいた。半袖シャツとパンツは肌を通さないものに替えた。

オウバアと背広をたゝみ重ねて風呂敷に包んだ。その上に父と弟、嫁いでいる妹、それから加代宛の遺書を揃え、それにこの宿の主人にあてゝ別に一通、詫び状ともつかず、書き添えておいた。

新聞に眼を通す。社会世相はこゝにも生活苦に喘ぐ一家五人心中や、十代の自殺を訴えて暗い。

湯の里で購い溜めておいた羊羹を女中達に頒けてやる。

鉄瓶が沸き騰ぎっていた。

静かに茶を汲んでみる。茶などゝいうものは、この年月凡そ、久しく味わつたこともない。実に美味い。口のなかでその味を噛みしめるようにして暫く舌の味覚を楽しんでみる。不思議に死と云う切述した観念の底にあつても私は白々しいばかりに静謐でさえ、あり得た。もとより私には禪脱した境地もなければ、悟りの道も識らぬ。唯、このひとゝせの死というものに対する自分の思考が、はつきりと私なりに安心の哲学を生みつけてしまっていたからでもあつたらうか。

十一時を廻つた。私は厠に立った。腹中の汚物を思いきり吐き出してしまいたい。

手洗い所の櫛子越しに暗い虚空が臨まれる。星がひとつ、長く流れた。

私は夭折したやさしい母を、しきりと想い出す。母さえ生きてい

て呉れたなら——と、そんな感傷が胸に湿って来る。

私は求めておいたアタリン三十錠、プロバリン六十錠を白湯で呑み下ろした。そして、もう一度身の廻りを確かめてみる。十一時二十分過ぎ。そっと夜具に横たわってみる。

私は絹行燈のやわらかな明りを消して眼を閉じた。これでいゝ。

——土曜の晩のせい、部屋はおゝかたふさがっていた。間もなく廊下を隔てた向いの座敷にも客が転げ込むようにして入って来た。

ひどく酔っているものらしい。

はばかりぬ大声で暫くしきりと何かわめき合々と、すぐにひそとってしまった。

聴くともなく耳にしたところでは、一人は駅前通りの料理屋の女らしい。連れの男は其処の客であろう。

私は服薬の際に多量の水を飲んだせいか、しきりと尿意が催おされて、なか／＼眠りに就けない。

やむなく廊下に出る。

どうしたとか、前の部屋の唐紙が二寸程あいている。

(人間はこゝでも生きている)

私は苦笑を廊下に残して眠りについた——。

再び醒めることのない遽い／＼冥境の彼岸に。

あわれむべし、こうして私は、そのいのちの初夜に、みにくい病涯の果てをさらしてしまったのである。

蒼い水底が透いて臨まれる。寂として静かだ
幽冥境を異にするというのであろうか。

するとこゝは何処なのだろう。とつ、おいつ



そんなことをぼんやり思考していると、にわかに頭の上が騒がしくなって遠くでしきりと、誰かが私の名を呼んでいる。

——おゝうい。

返事をした心算だが、声にならない。

(——うむゝ……)

と呻いて、はっとして意識の底に眼覚めて吃驚した。

厳しいばかりな父の顔。

不安げな瞳を集めた異母弟たちの顔も小さく揃っている。

表情を崩した弟の顔もある。

——そして継母の冷めたい顔も視野の隅に入る。

私を呼んでいたのは弟の時彦だった。沈湎とした骨肉の顔と貌が

私に注がれている。病身で会社を

休みがちな父は、もう六十路にと

ゞく齡だ。月に数えるしか入浴も

出来ない暮しのこの四、五年のあ

けくれだった。子供達の掌は凍傷

に痛々しいばかり。

親も子もこゝの一家は生活に疲

れぬいていた。配給の米を売って

鶏の餌に交ざる麦を喰べて生きて

いる人達だった。二升炊きの釜の

味噌汁が副食のすべてであった。

今朝はおそい日曜の朝めしが始

まったばかりだったという。旅館

の女中が私の事件を報じてくれた

のである。そのひる下り、遅まし

い弟の背に負わされて私は昏睡か

ら、まだ醒めぬ儘、父に引きとら

れて来たのであった。

交々に語る父と弟の話による
と――

その朝、くわしく云うと二月十日である。部屋の掃除に入つて来た女中によって私の仮死状態が発見されたのだそうである。医師が招かれ、服用した薬物が吐瀉された。消化しきれない白い固まりが洗面器に、その儘の形で出てきた。プツ／＼と七、八本の皮下や静脈注射が施された。旅館の主人のあたたかい思い遣りで、昨夜使用した布団類が譲って貰えた。弟が私の背広を売り払い、三千円余の医薬料を支払ったのである。

「苦しい生活だが、それも仕方がないだろう、当分こゝで寝ていてみるさ」

慰め顔の父の声だった。

「なんとか福祉事務所に頼んで生活保護の手続きをとってみるよ」
弟の時彦も熱心に私を励まして呉れた。

ともすれば沈みがちな家庭の空気は、私という厄介者が加わることによって、さらぬだに陰鬱な父と継母のいがみ合いが耳について堪えられなかった。父と弟が二階の物置き場に窓を截り込んで畳を入れた。壁紙を貼りつけて、兎に角、二帖の部屋が私の病室として造られた。



父の俸給の一万円で親子七人が生きていた。私の肺病が隣り近所に知れ渡ると、もう人々は朝の挨拶すら避けてしまふ。口と鼻を掩つて家の前を通る。幼い弟達は、学校へ通うのも、いじめられるから――と云つて駄々をこねて、いづかな動きそうにない。継母はこれらもみんなお前の為だよと白い眼で私を見る。冷めたい味噌汁で朝と夜の二度の食事――それも米が買えぬからとあつて粥食である。一円の花金だにも持ち合わせのない私の斗病生活は浅間しいものであった。

オウバアが売られ、靴も手離した。民生委員も今すぐ入院は不可能だと云いにくそうに語つて行つた。

「この儘ではやっぱり死ぬのを待つばかりです。同じ死ぬのなら、私はもう一度この手で自分の生命を絶ちたい。私をここから出してほしい」

愚かな話だが思い切つて加代に総べてを打ち明けてみよう。案外私を救う道が、そんなところから拓けるのじやないだろうか。私はそんな甘い考えで父に相談してみた。父は継母に告げず、三百円の旅費を何処からか整えてくれた。

雪の降りしきる朝、私は二度と戻ることはあるまいと心に誓いつつ冷めたい町を濡れそぼつて出ていった。

石岡の療養所へ。――
離れた加代を頼って。――

朔風、一入、はげしい。

私は根雪を踏んで療養所の駅に降り立った。空は暗く雨雲がひくく垂れ込めて、この山里は森閑としてあった。冷めたい雪を含んだ風が音をたてて虚空に鳴る。寒さが足下から痛い程に射し上って来るのだ。

面会人も無いままに療養所の門は堅く閉されていた。病棟は雪をかむってあくまで静かだった。守衛は胡散氣に私の刺をそれでも奥に通じてくれた。

程なく病棟主任だと称う看護婦が現れて

「会いたくないそうですから、どうぞこの儘で引きとってほしい」とにべもない応えだった。

私は、そんな筈はない、是非にも――と再度依頼を切にする。暫らくすると、今度は主治医が顔を出した。

「本人の病状が思わしくないので、医師として面会は拒否します。悪しからず」

冷やかな宣告である。

馬鹿なことを――加代が私に会わぬなんて、考えることも出来ない。そんなことがあるものか、そんなことが。――

――でも。でも或いはそうなのかも知れない。試みに離れた女の立場にもなってみる。妻でもない身で、いかに男が生活に喘いでいるからと云って、入院している女が、それをみつがなければならぬなどと云う、いわれがあるのだろうか。烏滸な限りではないか。女ごころは悲しいものなのだ。

荒れ出した吹雪の路を帰るさ、私は傷心の重い足をひきずるようにして疲労とたたかっていた。ひどい熱だ。ひとおもいに吐き出し

てしまいたい程、肺がくるしい。しかしそれにも増して心のかなしみは私を身も世もあらぬばかりに輾転させてしまう。

凍て付いた駅の木柵も朽ち傾むいて寂寞とした雪景色だった。尾灯が舞い狂う粉雪の中に遠く消えて行った。私は冷めたい待合室のベンチに声を限りに慟哭した。もう涙は涸れきっていた。

夜と共に、雪はみぞれを交じえて降りしきった。

死の道は、どこ迄も暗く仄白んでみえた。私は構内を抜けて二本の軌条に沿って歩いた。もう意識はなかった。手足の感覚もまるでない。ただ熱っぽい固まりがあるだけだった。そして動かない生き物は、村外れの涯際で遠い警笛を快ろよい死の誘いの耳にきいていた。冷めたく光る鉄路に横たわりながら。――

天も地も、冥く、すべては無であった。

私の死は、この時、始めて真空であり得た。

心を許し合った友と云うものを知らない私であったが、ひとりだけ私を解して呉れる漢があつた。

「いつときの生命を惜しんでくれよ」

彼はそう云って参千円の金を握らせてくれた。私は石岡警察署の門をくぐると、その足で群馬の藪塚と云う温泉場に向つた。

(三度目の正直と云うことがある。今度こそ死ぬるだろう)

吐はきまっていた。友は

「気鬱症なのだ。少しは何も考えずに寝ていることだ」

と、いたわってくれた。そして

「死にたくなったら警察などに頼まず自分で電報を打つことさ。僕に出来る範囲は努力しよう。世の中なんて、そう苦痛の連続ばかりでもないのさ」

と磊落に笑って云う。
だが――

私はもう完全な精神錯乱にかかっている。

無性に死ぬことだけが今の私の総べてなのであるから。ただ死ぬことよってのみ私は生きられるのだ。そんなロジックが頭の隅を離れない。死に憑れた夢遊病者だった。そんな私が藪塚温泉を殊更に選んだのには、僅かばかりないわれがある。茲には前にも気軽に訪ねた二、三日があつたからであつた。それこそ何の変哲もない鄙びた村里でしかない。だが純朴なこの地方の人達の心やりが温かく私の印象にある。それに——旅館の造りも時代がかって面白い。長い橋廊下を渡って客室から浴場まで凡そ、かなりな距離を持っているのだ。中庭の亭も古風で詩情があるし、根を据えた松の樹を、その儘柱に切り組んだ茶室のたたずまいなぞ、遠い昔の武家屋敷なんどのように興深いものがあつた。何か私の古めかしい思想に共通したものが感じられてならない。

(ここでなら往生できそうだ)

そんな安心に近いものが、私にこゝを選ばせなかったのかも知れなかった。

旅館の女主人は、まだ私の顔を覚えていてくれた。そして私の眉色の憂いに、女らしい敏感さから、早くも貌を曇らせて

(病氣でもなさって——)

と案じてくれる。何か氣になるが、と云つた眸であつた。そのせいか夜の膳は素晴らしい御馳走づくめであつた。

私は湯に浸りながらひとり哭きぬいていた。その胸の底から。——ここの人達のやさしいもてなしが、冷えきつた私の心にあたたく伝わってくる。それはあながち、素肌をめぐる、湯水のあたたかさばかりではなかった。

私の生理は、もう思念では押さえきれない。しかし加代との、ひたむきな愛情を交わした薔薇の記憶は再び甦っては来なかった。

(未完)

おきなひとりごと

浪 花 老 人

○ フェミニスト、というんですかね、大体女をそんな甘つちよろい考えで、見ていたんじゃないや、縛るの、叩くの、といったってお話になりやせんや、女というもののはですね、そんな高尚なものじゃありませんよ、それ、小人と女人は養い難しつていうじやありませんか。甘やかせばつけ上る、殴れば泣き喚く、殺せば化けて出る。とネ、相場がきまつてまきあネエ。

○ 封建的、というんですかね、それ、映画なんかでも、縛りの出てくるのは時代劇に多いのは先刻御承知でがしようネ、民主主義だの男女同権だのと云つていたんじゃないや、土台、女体緊縛というような至極結構な品物は望まれませんや。

○ だからあんたは甘いものだ、

と云いたくなりますよ、女を縛るのに、そんな遠慮なんかしていた日にや、幾年たつたって埒のあきつこはありませんや、得てして素人の娘というヤツは、年頃になると、みんなあゝいう塩梅に乙にすましているもんださア、当つてくだける、といふますが、あれで案外、雑作なく承知するから妙ですよ。

○ えッ？ そんな女の心理がげせないって、ですか。まあ云つてみりや女というものは、水みないなもんでがんすヨ。四角い器には四角に、丸い器には丸くとネ。だから、どんなに叩いたつて縛つたつて、それで結構辛抱する動物つていうわけですがネそのかわり、野放図にゼンマイをもどした日にや、ヒドイもてあましもんにならんとも限りませんや、実際のところ。

編集者へ

一読者としての公開状

畑 中 敏 夫



貴誌の復刊を心からお喜び申し上げます。私は創刊号からずっと愛読させて頂いて居りますが、昨秋、休刊になった時に色々感じ又思い付いた事がありますので、それを腹藏なく述べさせて頂きたいと思ひまして筆をとりました次第です。

貴誌の休刊になった原因を見ますと、一番大きなものは、悪書追放運動であります。世のカストリ雑誌と同じ様に取扱われたのは誠に心外であります、何故にその取締りの対象になったと云いますと、それは大きな資本力を持った出版社が、その売上げを増すべく

群小出版社に圧力を加える為に正義人道を口にして悪書追放運動を起したのであります。

大出版社は群小出版社を取除かねば、自社の売上げを増すことが出来なかつたのであります。自分自身の内容の空っぽなことを棚に上げ、他を圧することによって自己の利益を増

そうと考へ、婦人会へと、その資本力に物を云わせて偽きかけたのであります。誠に卑劣な考へであります、金がもの云う何とやら

致し方もなく資本力の小さなものは総てその犠牲になったのであります。しかし貴社はよくその圧力に耐え、一步後退二歩前進、よく復刊せられたと誠に喜ぶべきことでありますけれども大出版社は今も尚出るクイを打たんとしていることは火を見るより明らかであります。そこで私は左記の様にしてこれに対処するのが良いのではないかと思います。

先ず内容であります、サド、マゾの如何を問はず、これを一つのペールで包んでしまふのです。例えば鞭打ちに致しましても、只カスの口絵をのせ、これの練習法を紹介するという方法をとるのです。現在の日本ということにせよ、昭和の初期の物語ということにすればよいでしょう。事実、昭和五、六年頃には晶子ちゃん事件というのがあり、二、三才頃に行方不明になった娘が、十年後にサーカスにいたところを発見され、新聞でさわがれたことがあります。当時の新聞は、その晶子ちゃんやんのサーカスでの生活を随分、サディスティックな表現で紹介して居りました。

又、先月の中頃の毎日新聞には、十年前に拐われた少女が角兵衛獅子を仕込まれて旅廻りをして居る中に、あまりの責苦に耐えかねて警察へ訴え出た記事が出て居りました。そ

の記事には、親方からろくろく食物を十分与えられないで芸を仕込まれたことや、処女を奪われその男の子供迄生ませられたことを相当詳しく書いてありましたが、この様なことを新聞にあらわれたサディズム記事として紹介するという様な方法で誌上に掲載すればよいでしょう。吾々は一般の人が何とも思わず読み流してしまう様なことでも、そこから限りなきサディズムやマゾヒズムを感じる事が出来るものです。それ故、字句の使い方に少し工夫を加えるだけで、立派にアブノオマルな内容を盛り上げることが出来ると思います。

私は戦後ずっと、小さなバーのバーテンをやっており、色々の客とも附合があります。が、案外自分自身でアブとは自覚してはいないが、その実アブであると思われる人が随分多いのに驚きました。一時カストリ雑誌が数多く出版された時に、客の注文でそれらを買って置いてあげた事があります。一人で十冊以上も買って呉れと金を置いて行かれた事が何度もあります。それらの人の注文はなるべく裸の写真の多いというのでしたが、只の裸体ではなく、アクロバットの載っているものと云われる人が多くありました。私は時々その理由を聞いてみましたが、大部分の人の答えは面白いからとのことでしたが、私はその底に流れるアブの精神をはっきりと感じるこ

とが出来ました。その際、私もその頼まれて買ってきた本に目を通して見ましたが、アクロの記事、写真にはサディズムを表現したものが数多くあるのを発見しました。又一般の公刊誌或は商業新聞にすら、それを発見することが出来ました。貴誌の編集或は投稿者の方の参考になればと思い、貴誌の旧刊の読者通信に、一部雑誌の名前が出て居りましたものを採し廻り手に入れることが出来ましたものの中から紹介してみよう。

アサヒ芸能新聞のアクロの記事は、廿八年の分に載っていた「妙技」と題するもので、ドイツの少女、グレイス・チャンの写真でした。(現在駐留軍慰問に廻っていて人気のある)その説明には、「こゝに紹介した少女はドイツ人と中国人の間に生れた人で、その父は有名な曲芸師グレイト・チャンである。」「このアクロバットなるものは、殿方のサディズムをちよびり刺げきするのが要領である。」と書かれてあり、サディズムとアクロバットを結びつけてありました。又、廿四年二月号の「探訪」という雑誌のカメラルポには有名な汐見五人姉妹のアツクルの写真と記事が出ておりました。題名は、「国宝的体技」とあり、その練習ぶりが紹介されておりました。その一節を投書してみます。

「この様に十四・五才の少女とは思えぬ様な大胆なポーズに驚きの目を瞠らないものはないであろう。しかし、これは一朝一夕にして出来るものではなく、毎日、朝、昼、夕、三時間宛、厳格な訓練が嚴重に施される」とあり、その次には、その練習場所における記者の感想が書かれてあります。「一月のこの寒さに記者はオーバーを着ていてもふるえて居るのに、この五人の少女はブラジャーと小さなパンティの全裸に近い恰好で稽古場に入ってきた。色々の柔軟体操を終った頃には、彼女たちの膚には、ジツトリと汗が浮き出ている。やがて体をエビの様にそらしたかと思うと股の間から首がこちらに向ってニョッキリ出される。その度に背骨がポキポキと気味悪い音を立て、掛声とも呻き声ともつかぬものが彼女達の唇から洩れる。見ている記者は背骨が痛くなり腋の下に甘酢い汗が出てきた。」これ等は公刊誌である為、サラリと書き流されてあるものではありませんが、吾々はこれらの字句からでも十分にサディスチックな気持を汲み取ることが出来るのであります。又公刊紙の代表たる新聞にもこの例はあるものです。大阪のキヤバレーに出演中のアクロバチックダンサーの姉妹をインタビュした大阪新聞の記事にもこの様なのがありました。それは、「可能性の肉体」という見出しで、大体一頁を費して舞台写真三葉の外にそれに関連した記事が出ていました。その中、客席に於ける客とダンサーの表情を次の様に書いて

てあります。「客の中からは感嘆の溜息が聞かれ、ダンサーたちは、嫌悪、感嘆、軽蔑、羨望の色を顔に見せながら眼は舞台と客の両方をチラチラと交互に眺めている」これは客席のサディスティックな雰囲気をよく表現したものだと思えます。舞台の描写は、「逆エビにそり返った彼女等のお腹はペコンと凹み、デルタ地帯（胸骨の端からヘソの両脇を結ぶ三角形）は切なげに喘いて見る人の心を打つのでした。」とありました。この、見る人の心とは何を意味するかは、誰にもハッキリとお分りのことと思えます。この様に字句の使用を研究することにより、大資本力による悪書追放の風当りを避け、一般公刊誌として発売出来る様になるのではないのでしょうか。五月号の竹谷十三氏の「責めの表現」に書かれてある新しい表現方法の研究と結びつくものと思えます。

コルセットについても同じことが云えると思えます。例えば、今年の水着のニールックとして、エラスチックと呼ばれる生地で作られたものの発表会があったことを新聞は報じておりますが、早速これを応用しては如何でしょう。ゴテゴテとコルセットを付けた写真を載せれば、一般の人達は、グロテスクだとか何だとか文句をつけて、発禁の口実にするでしょう。しかし、ニールック紹介としてこのエラスチックの水着を載せれば口実のつ

け様がありません。しかし、これには種があるので仕掛があるので。先ず水着をつけるモデルですが、これは貴誌のモデルで一番ウエストの細い人を選び、これに十八吋位のコルセットをつけて貰うのです。写真撮影の少しの間です。少々辛くとも辛抱出来るでしょう。この場合不恰好にならぬ程度が一番大きな乳パットをすれば胴のくびれを強調できます。そうして、この上からエラスチックの伸縮自在な水着をつければ、立派に公刊誌に発表しても恥しくないものが出来ます。これに小さい、何時のコルセット着用と説明を加えれば、愛読者の方を十分満足させ得るものではないでしょうか。又、写真入りか、或は挿絵をつけたアクロバットダンスの自家練習法を載せては如何でしょうか？ 題名は、「美容体操」とすればよいでしょう。写真入なれば、サドもマゾも又フェチ（但しブリーフ形パンティ愛好者）も満足するでしょう。それから切腹ものですが、これは案外愛好者が少ないのではないのでしょうか、読者通信に投書される方は、外のサド、マゾの方に比べて多いかもしれませんが、これは切腹という思いきったことが好きな方は、大体外攻性の方が多く、マゾ、フェチ等のマニアは内攻性の方が多く、投書数にも、これが現れるのかも知れません。読者のマニア比率を調べれば、切腹マニアは極く少数でしょう。この現

れが、今度の切腹画帳申込数が二十数名という数字になって現れたと見るべきではないでしょうか。発行部数が従前と差異があり、そういう人々の眼に触れないのが原因してかと、その理由に書かれてありますが、正にその通りです。貴誌が「原因してか」と書かれてあり「原因して」と書かれていないのは、偽りを極度に嫌われる貴誌の誠意の表れであります。貴誌が「原因してか」と疑問詞を用いられているのも、このマニアの比率に対して疑問を持って居られるからだと思います。成程、アブ愛好者の目にふれないという理由は少しはあるかもしれませんが、しかし、吾々アブノーマルな者は、特有の鋭いカンと優れた臭覚とをもって、これらの出版物を見つけて出すことが出来るので、如何に目を掩われていても必ず見つけ出すものです。それにも拘らず切腹画帖の申込が少いということは、やっぱり愛好者がホンの限られた少数の人達であるからだと思います。

発禁の口実になる様なグロテスクな味を幾分でも少くし、又一般の人が興味と健全なエロチシズムを感じて、思わず手を出さずには居られなくなる様なものを出版することが、今後、公刊誌として発展する為には必要であると思えます。思いついたままを書き並べてみましたが、どうか、私の意のあるところをお汲みとり下さいませ様、お願い致します。

「忠臣蔵」秘話

元 祿 女 腹 切 り

川 野 京 輔

(一)

つゞみは、今朝の夫の態度を審かしく思った。

あれ程、彼女が、水茶屋に出るのを反対し続けた夫なのに、今朝に限って、寧ろ励める様にしてつゞみを送り出したからである。

夫は、小島喜兵衛と云う赤穂の浪人であつた。

主君浅野長矩が、殿中の刃傷を理由に、誅せられた後、彼等夫妻は、国を出て、撰の福島に隠住し、主讐を報ぜんものと、ひたすらに機会を待ちわびていたのであつた。

喜兵衛は城明渡しの時から、終始一貫して

大石蔵之助に従い、蔵之助が、山科に引込むと同時に彼も亦、赤穂を去って撰に來たものである。

だが、蔵之助は、仲々、腰を上げない。乏しい小島夫妻の蓄えも、既に底をつき、最近では長短二刀を除いた外、家財道具は全部、跡形もなく消えていた。

二人は、煩悶した。

つゞみは、見兼ねて、自ら、水茶屋に出ると言った。

夫妻の貧困に同情した近所の婆さんが、美しいつゞみの容姿に目を附けて、しきりに勧めたせいである。

喜兵衛は、無論、拒絶した。

「乃公も武士のはしくれ。食えないからと言って、家内に、そんな恥しい事はさせぬ」
 そう言う口の下から、日に日に貧窮は、容謝なく迫ってきて、最早、收拾のつかない状態になってしまった。

元禄十四年。世は太平を謳ってはいたが、この年の瀬を越す術もなかった。

つゞみは、再三、水茶屋に出る事を夫に頼んだ。

「こんな貧困を続けていたら、御一党の蜂起にも参加出来ぬ故、ぜひ、私の願を聞き入れて下さいます様に」

今朝もこう言つて見た。

どなられるのがオチだとは知っていたが、師走も既に暮に近い此頃であつて見れば、つゞみは気が気でないのである。処が意外にも、夫は、真剣な顔で言つた。

「お前にも苦勞をかけるのう。済まぬが出てもらおうか。」

つゞみはハツとした。

「ウフフフ、。乃公達も、見限られたわい。」

喜兵衛は、笑つた。

それは虚ろな寂しい笑声であつた。

(二)

朝から変に底冷えのする日であつたが、午後になると、ちら／＼と白いものが降つて來



た。

つゞみは、茶屋の隅で、一人ぼつんと腰掛けていた。

こんな日に来る客とてなく、店の女達は、寒さに背中を丸めて、とりとめのない話に興じていた。

誰もつゞみに、かまう者もなかった。それどころか、新らしく入って来た彼女の美しさと、武士の妻としての格式に、近寄り難いものを感じて、敬遠している様子だった。

つゞみは、音もなく降る大きな雪を、ぼんやりと見ていた。

かつて祇園で会った大石蔵之助の事を考えていた。

この秋であった。

夫には内緒で、蔵之助を尋ねたのである。主君の讐を報ぜんものと、毎日、蔵之助の東行を待っている夫喜兵衛が、日増に加わる貧乏の故に、万一の時、ろくな身仕度が出来なくてはと、つゞみはそれを心配して、秘かに、蔵之助に決行の時期を聞こうと思っただからである。

そして、それ迄は、仮令自分の身は、どうなっても頑張る積りであった。

蔵之助は、家に居なかった。

祇園に入り浸って、何時、帰るのかもわからないと云う事である。

つゞみは、仕方なく紅燈の町で、目指す蔵之助に会った。

その時、部屋では、蔵之助を囲んで、あられもない芸妓達の遊戯が繰りひろげられていたところであった

目隠をした蔵之助が、捕まえた娘を、みんな、寄ってたかり、素裸にするのである。

次には、裸にされた娘が鬼になって、みんなを追いかける。

蔵之助は、目後（めじり）を下げて、でれんと、そんな騒ぎに興じていた。

つゞみが入って行くと、一瞬、蔵之助は、身仕舞を直した。

「大夫、仲々隅におけませんな。こんな別嬪の訪問を、祇園にまで来て受けるとは。男名利につきると云うもの。」

幫間が、坊主頭をぺこりと下げて、部屋に入ってきた。

途端に、蔵之助の顔が、くしゃくしゃと歪んだ。

「いや、まったく。良い男に生まれたせいで女には、ほと／＼困らされるわい。」

そう言うのと、つゞみの手を握って、ぐいと体を引寄せた。

「よく尋ねて来てくれたな。それほど、この乃公が、愛しいか。うん。そうか／＼。」

まわりの女達が、ワーツと囁し立てた。つゞみは訳の分らぬまゝに、きよんとし

ていた。

「さあ、鬼ごっこをするぞ。乃公が鬼じゃ。つゞみ、そちも一緒にせぬか。そちを捕えて見たいわ。いゝ体をしてやった筈。」

「御家老様、何をなさいます。」

蔵之助の手が、柔らかな、つゞみの胸の内
にぐいとさし込まれたからである。

「乃公は、そちを赤穂にいる時より好きだっ
た。融通のきかぬ、喜兵衛の如きには、もっ
たいない女じやった。」

蔵之助は、脂ぎった顔を、じわ／＼と近づ
けてきた。

蔵之助が好色なのは、兼ねて噂で聞いてい
た。だが、これ程とは思わなかった。

つゞみは、憤りに身を振わせた。

「御家老様、何と云う醜態です。お殿様の仇
をお忘れになったのですか。」

一瞬あたりが白けて、しゅーんとなった。

「何を馬鹿な。仇討などは、もうとんと忘れ
てしまったわ。それより、そちは喜兵衛と別
れて、乃公の妾にならんか。」

つゞみは、蔵之助の体をつき飛ばすと、部
屋を飛び出した。

後で、蔵之助は不恰好に畳の上に転がった
まゝ「つゞみ／＼」と、歌う様にどなってい
た。

(三)

以来、つゞみは、蔵之助を信用しなくなっ
た。

江戸の堀部安兵衛等の急進派が、蔵之助に
決行をせまった時、蔵之助は、何んだかんだ
と言って、返事を渋ったと言われる。

「御家老には深い計画がおりなのだ。」

喜兵衛は、そう言うが、つゞみには、あの
好色で優柔不断な蔵之助に主君の仇討と云う
ような難事が成しとげられるとは思えなかつ
た。

つゞみは時折、尋ねてくる同志に、直接江
戸の連中から蜂起の時期を知らせてくれる様
に頼んだ。

彼女は、江戸の若手の急進派の者達が、や
がて蔵之助を見限って独自の行動を起すもの
と信じていた。

だが、その後、何の便りもなかった。

喜兵衛も京に蔵之助を尋ねる費用がないの
で、この処、早る心を押えて、悶々たる日々
を送っているだけである。

つゞみは寒いと思った。

ぼんやり縁台に腰掛けていた彼女の足もと
に、雪が積っていた。

「大雪になるかも知れまへんな。」

一人の女が、ぼそっと呟いた。

つゞみは黙ってうなづいた。

遠くで鈴の音が聞こえた。

「瓦版よ。」

一人が飛んで行って買って来た。

「まあ、赤穂様の浪人衆が、討入りなさった
そうや。」

つゞみは、我が耳を疑った。

そんな筈はない。

夫の処には、未だ何の便りもないではない
か。

彼女は、むさぼる様にその薄い紙片を読ん
だ。

まぎれもなく大石蔵之助に率いられた同志
達が華々しく討入り、見事、吉良上野の首級
を挙げたと出ていた。

彼女は、今朝の夫の態度が思い出された。

昨日、遅く訪ねて来た旅人、どこかで見た事
のある顔だと思っていたが、そうだ、且つて
蔵之助が使っていた下男ではないか。

夫は、昨夜既に同志の蜂起を知っていたの
だ。ハッと彼女の脳裡にひらめくものがあっ
た。

つゞみは、そのまゝ一目散に我が家へと急
いだ。

(四)

家へ入ると、血の臭いがぷーんとたゞよっ
ていた。

見ると、夫は白装束に身を固めて、腹を一
文字に切って前にのめっていた。

未だ死に切れず、はみ出した腸が、畳の上
で生き物の様にうねっていた。

抱き起すと、喜兵衛は、苦痛に歪んだ顔で
つゞみを見た。

何か言いたげに、口が動いたが言葉になら
ない。

目でゆび指した処に、書状が二つ並べてあった。

一つは、蔵之助からであった。

それに依ると、同志の中に、つゞみが、大野九郎兵衛の姪である処から、喜兵衛の参加に難色を示す者があるので、喜兵衛の忠誠は百も承知だが、やむなく蜂起の通知をしなかつたと言ふのであつた。

そして最後に、先般、つゞみに対して不愉快な思いをさせたが、あの時の幫間が上杉家の間者であつたので、やむを得なかつた、重々許してほしいとあつた。

つゞみの手が、わな／＼と震えた。今、一つの書状は、喜兵衛の遺書であつた。

妻が大野の縁者である処から討入りに参加させてもらえなかつたのは残念だが、決してお前を怨んではいけない。仮令、参加しなくても、主讐が報ぜられた喜びは同志とかわりない。彼等は、宿望を達した暁には、天下を騒がした罪を切腹して謝すと言っている。乃公

は、遙か撰の地から、彼等と死を共にしたいお前は、女だ。赤穂に帰り叔父の下に行くがよい。

「貴方。私は、そんな女じゃありません。大野に縁があるからと言って、忠義の心は、どなたにも負けません。私は残念です。」

つゞみは、夫の体にとりすがつて、くやし涙に目をうるませていた。

「貴方。安心して死んで下さい。私も後に続きます。」

瀕死の喜兵衛は、首を横に振つた。

「いゝえ。私も小島喜兵衛の妻です。」

美しい顔で、ニコリ笑うと、つゞみは、夫の手にした小刀を取り、雪の様に白い腹部を、ぐつと払げた。

喜兵衛は、止め様と必死にもがいた。同時に、亦もやぐわつと腹が裂けて、一塊の血が内臓と一緒に流れ出た。

これが最後であつた。

つゞみは、夫の死体を整然たる形に改める

と、静かに目をつぶつた。死に際して、心静かなのが我ながら嬉しかった。

再び目をあけると、小刀を、左の腹に、ぐいと刺し込んだ。

力を入れた積りだったが、思う様に入らない。

苦痛をこらえて、更に力を入れると、息もつかずに右へぐい／＼と引いていく。

はじけた腹から、腸が勢よく、とび出る。

「やった。」

恐ろしく引きつったつゞみの顔に、安堵にも似た喜びの表情が走った。

「貴方。」

無意識に叫ぶと、更に、喉元深く刃を刺し貫いた。

喜兵衛の死体の上に折り重なって倒れた、つゞみの顔から、醜い苦痛を消して、今は、唯、幸福な笑顔だけが残っていた。

外では未だ雪が降っていた。

(完)

背徳小説

「太陽の季節」が、各方面で問題になつてゐる。当然である。

私はあれを一読して腐ったソーセイジを食わされたような、言いようのない不快を感じ

た。私があれを読んだ理由は「芥川賞」を得たと言ふこと、それから人人が騒ぎ出したので好奇的な気持で読んだまでのことである。

私に言わせれば、あれは真正銘の背徳小説である。私もつねづね背徳小説は書いてみたいとは思っていた。だが私が書く気持と石

原君の書く気持とは根底から相違している。

私は、西部劇の主人公の不死身さ、極悪不頼のギヤング、日本の悪漢毒婦伝、探偵小説の殺人等、すべてこれ等は現実の社会常識から見れば、「空想」の世界に入るべき材料と解釈している。实在の可能性はあつても、常

識的には「空想」を基盤としたものだと思う。だからそれ等の材料の中で、いかに悪徳が行われ、讃美されたとしても、読者をして実在感と分離させるならば、社会的に害毒は流さないと思う。

然るにあればあまりにもまなましくリアリティックに書いている。読者をして現実と分離することは、(殊に十代二十代の青少年の読者には)不可能である。それだけに非常に危険な作品だと思う。あれを当選させた選者の意図が分らない。(勿論選者の中には強硬に反対した作家もあつたようだが。)

本誌と比較して

次にあれと本誌と比較してみると、私は非常に不満を感じる。あの作品の中に、障子の外から「英子さん」と呼びかけて、『勃起した陰茎を外から障子に突き立てた。』(八文春三月号)云々の場面がある。

(編集者よ、ここは伏字にしくなくても大丈夫! 文芸春秋誌に堂堂と掲載済みだから)あの文章をそのまま本誌に掲載したらどうだろう。私は絶対発禁になると思う。それが「文芸春秋」と言う高級な? 雑誌であれば堂堂とパスするのである。

「太陽の季節」を斬る

鬼 山 絢 策

第一本誌の編集者だったら当然伏字にするか、カットするかだろう。話は横に外れるが野間宏氏の「真空地帯」の中にも四文字のひらかなで女性性器を最も露骨な名称で書かれたものが、(流石にいくらその四文字が同書でパスしても、再びここに書き現わす気はしない)通過している。あれもまことに不思議な現象だと思っている。

映画化に就いて

あれの映画化を映画業者が狙ったことは責めない。兎に角当ることは間違いない商品だから、商品としてみるならば金儲けのためなら仕方があるまい。だが上映中の映画館が揃いも揃って、障子を大看板にし、中には障子の紙を破ってそこにスチルを貼りつけるなどの趣向はイヤハヤ恐れ入った商業政策だと感心した。読売新聞の同映画評では、コッピド

クやつつけているのを見て当然だと思った。勿論あんな映画は見ると気はしない、同映画の観覧を忌避した教育団体も相当あつたが、これも当然だと思う。「暴力教室」とは全然比較にならない。「暴力教室」の中には、多分に「空想」を見出せるものがあり、そして正義感とかヒューマニズムが教師を通じて一貫しているが、あの小説

には取柄のない人間ばかり出てくる。要するに私の言わんとするところは、第一にあんな小説が(ここで言うあんなとはあんな子供の書いた子供っぽいエゴイズムを選者が採りあげたこと、それでいて子供の書いたものだけに同年期の子供に共感を与える危険性を多分にもつと云うことが、其の他数え立てればきりが無いが)一流作家の選にのぼったと言うこと、これは作者に罪はなく、選者の良識を疑うものである。

第二は其の筋の取締り当局が、一流誌、一流作家のものなら、どんなあくどいことを書いても知らぬ顔をし、本誌の如きが少し筆が通るとすぐ眼を光らせるのは、不公平だと思う。

(以上)



歴史に現れた

三人の美少年

西村 向南

日本の歴史、特に正史に現れた少年三人を挙げる。平維盛の子六代、参議平経盛の末子敦盛、及び戦国時代、織田信長の部将、森三左衛門長可の長子蘭丸が即ちそれである。

以上の三名は其美貌に於て、最期の華々しい悲劇的な経過に於て同様であった。前二人は平家物語、源平盛衰記、其他に於て生涯が説き尽くされている。蘭丸は真書太閤記、信長記、其他に於て仔細に描かれている。之を見ても三人は歴史的に永遠に生きていけるといふことができる。

六代

平家が屋島の壇の浦に覆滅して以後、其の遺族の検索に頼朝は全力を尽くした。平家の

正統維盛の子、六代が其網羅に免がれる筈はない。果然六代は竟に拿捕の運命に見舞われた。時に十二才の少年である。

北条時政は京都の守護職として在住し、頼朝の命にあつて、六代母子の寓する洛北葛蒲谷の住居に輿を向けて六代を迎え取り、追つて斬首する予定であつたが、何としても六代の稀代の美貌に、さすがの時政も刃を下すに忍びずして、一日延ばしに延ばし続けている際であつた。我が愛児の生命且夕に迫ると嘆いた母のあやめは、大覚寺の文覚上人に哀訴して、助命の援けを乞うた。仏門に入つてはいたが昔取った杵柄の文覚は、いとは可憐と感じ、時政の邸に到つて捕われの六代を見るに、二重織の直衣に黒木の珠数をば白い手に

ぬき入れ、緑の髪の長き、たおやかな姿のあでに、世にも稀なる美しさに、かてて加えて平家の正嫡の藹たけて見ゆるに、上人におもてを合せ、いかがおぼしけん、涙ぐみ給えば、上人もまたそろに墨染めの袖をぞ濡らされける。末の世はともかく、現世ではいかでか失い奉るべき、と（平家物語）

文覚の切なる乞いによつて二十日間の助命を時政に誓わせたは文覚の力であつた。それより文覚は、馬に鞭打ち、鎌倉を指して東下した後は、待ちわびる日数積つて二十日間を過ぎて、何のおとずれもなく、斯くては鎌倉の承諾は見込みなしと断念した時政は、六代を輿に乗せ、近江路か美濃街道あたりで文覚に逢わずば、とても望みなしとして斬る覚悟

で進むほどに、やがて参河の千本松原に輿を止め、引き出して首の座に据え、若君も今は最期と覚悟して、黒髪の眉にかゝりけるを、美しい白い手もて、前へかき寄せらるゝを見る守護の武士ども、

「あな。いとおし未だ御心のましますぞや」

とて皆々鎧の袖をぬらしける。若君は西に向つて手を合せ、念仏を唱えつゝお頸を延べて、刃の下るを待たるゝ折から、斬り手に選ばれた工藤三郎近俊、抜いたる太刀を振りあげつ、若君の後に廻りて、既に斬り下ろさんとしたが、雪なす頸にと、目もくれ、心も消え果てゝ、前後不覚になつて、

「あわれ斬手の役、他人に仰せつけられい」とて、太刀を引いてぞ退きにける。さらば、

あれ斬れ、否、され斬れとて、斬手を選ぶ所へ、月毛の馬に鞭打つて馳せつけたるは文覚上人であつた。急ぎ馬より下りて、

「鎌倉殿の御教書これにあり」と呼ばわつて差し出すを、時政披いて見るに、

『小松の三位中将維盛の子息六代、高惟の文覚坊の乞いによつて、北条四郎時政に預けらるべし、頼朝』としたゝめ御判あり、北条くりかえし二三遍読んで、「神妙々々」と安心の体、いずれも鎌倉殿の宥免に嬉し涙を流しける（平家物語）

文覚は斯くて六代を連れて昼夜の旅行を続け、明くる正月の五日に大覚寺に辿りつきた

るが、母のあやめは無事に帰りし若君を喜び迎える。嬉し泣き、之は夢かうつゝかと、はやく髪を切つて出家したまへと、口説けど文覚はいつかかな出家をすゝめず、直ちに高雄の奥の幽かなる所に母上をはごくみけるとぞ聞へし（平家物語）

さる程に六代御前は、今は文覚上人と同棲となり、師の坊と仰いで仕うる少年の純なる誠に愛は惹かれる。何事もなく安らかに暮すうち、年十五六にもなり給えば、未開の花は開き初める少年美、母の血を受けし雪の肌、父の俤を写した目鼻立ちの麗わしさ、心ばえさえ優にやさしく、経文誦誦で仏に仕える傍歌を作り、史を読み、筆管の巧みまで、すべて師の坊の教えはひとえに恩愛の極みぞと、思えば一身をさゝげて仕えまつる『お師匠さま』『お上人さま』と敬いかしづく美少年の美しい心ばえに、文覚の寵愛はいよゝ濃やかとなる。今は誰憚るものもない此の草庵の二人暮し、六代の美しさを我が掌に握つた文覚の喜悅はこゝに頂天に達したのであつた。同輩つて想うに文覚は失恋の武人であつた。同僚渡辺渡の妻の袈裟に横恋慕して、口説き伏せて意に随わせたと思つたのがそもゝ大きな過ちで、袈裟と云い合せ本夫の渡辺を斬つたと思つたはいすかの嘴で、血の滴たる刀下に転んだのは懸想した袈裟の首級であつた。此の大きな失敗に懲り果て、身心を新に、清

らかにすべく、那智の瀑布に水を被ぶりなどして修行したが、身体の剛健に伴う慾望の旺盛は止むべくもなく、叡山、高野山の別天地南色の天国を見て世俗の好尚を知り、鬱勃として湧く少年愛好の望みを、六代によって遺憾なく遂げるに至つたのである。

高雄の奥に住む母親あやめ御前は、時折り文覚の草庵を訪づれ、つくづくと見るに我が子六代は既に文覚の妻となつたらしい氣持に、それとなく女としての心得方、髪、化粧衣裳から閨の仕ぐさまで打開け、女として男にさゝぐる道しるべを、詳しく六代に教え、くれぐれも恩師に飽かれぬよう、愛と美をさゝげよと篤く諭すのであつた。

かの大山師文覚坊主は、早くも化けの皮をあらわし、主筋に当る平家の嫡男六代を閨の友、否妻とした、と噂を立てるに至つた。それがちよいゝ文覚の耳に入るが、平然と頓着せず、吾れの行かんとするは色に非ずして他にありと、吾を励まして立つ所に文覚の強さがあつた。が、測らずも禍は蕭牆の裡に起つた。

京都の守護職は、北条時政の次に甥の北条時輔が職を襲ぎ、主計、主税も司を代え、鎌倉から来任した主計の担当は梶原頼母で無妻の青年、時の風俗男色には深い趣味を持つ變りもの、美人の多い都だから定めて美少年も多かろうと、干からびた色氣のない、沙漠の

ような関東、鎌倉あたりから来て見ると、成るほど居るわ、女という女は凡て美人に見え、十代の少年は、皆が梅若のように目に映る。ましてや音に聞こえた平家随一の美少年、歳十六の花の盛りの六代を高雄の文覚草庵にかいま見た時は、はッと胸を轟かした。下僚の誰彼五六人に来歴を聴き、窃かにあらぬ野心を抱くに至ったのである。

其後、或る時文覚の草庵に騎馬の吏員が文書を携え、守護職代からの指令として、少し取調べたきことあり、文覚上人には六代を伴うて、明日役所へ出頭せらるべし、とのことであつた。物に驚かぬ文覚は畏りぬと返答して返えしたが、何怖るゝことはない、叛逆など夢にも知らず、身に暗い所はない、出頭したら此の弁舌で、と吾を励まし、六代は朝から沐浴、髪、化粧いつもよりも華やかに、紅いもの勝ちの衣裳着けた姿は、若君ならで姫君のあで姿であつた。

到着は午後の末の刻よりとあるので、輿を雇うて六代を乗せ、側に文覚は金剛杖を携え伴に立ち、やがて六波羅役所に到ると、裏門から内に入れ、長い廊下を伝い、庭園を隔てた離れの一廊の玄関に輿を下ろさせた。奥から現れた役人が文覚をねぎらい、御苦労であつた、何、要件は大したことでないから安心さつしやい、本人は今夜は此所に泊めるから貴僧はお帰りください、という挨拶、文覚は

いとも心がかりながら、重ねて問うべき由もなく、手を空しうして庵に帰ったが、心がかかりからまんじりと眠れぬまゝに夜を過ごしたのであつた。

玄関から誘わるまゝ内に入った部屋には五人の荒々しい坂東武者が、大きな盤台の上に酒肴を並べ、給仕として侍べる町の白拍子三人がじろくろと六代を見るも恥かしく、どうされるかと、小さい胸を悩ます六代の柔らかな手をぐつと握ってそこへ坐らせたは、主馬の頭、北条時広、私でござると挨拶する。続いて拙者は下役の何某とそれく挨拶しつゝ、すぐにさし出す盃、

「はい、有難う、私はお酒は頂きませぬ」

「はて、さて、では之を召しあがれ」

と白拍子が挟んでさし出す小皿も見たばかり、おどろと弱い胸とどろかす怖ろしさ、鬼の窟屋に捕えられた姫心地。それには聊かも頓着なく、白拍子の奏でる三味線、胡弓、太鼓の三曲に和して謡う流行歌、

『わたしはお宮の石灯籠よ、今夜はおぬしにとぼされて、あすの夜誰かとぼすやう、とぼしておくれ、いつまでも、』

わつとばかりに一同は手を拍ってはやし立てる。笑いさざめく下卑な遊び、興に乗って又もや白拍子の一人が声はりあげ、

『わたしや色づく蜜柑の生まれ、裸に剥かれて毛をむしられて、生き血吸わるゝ此の身体、』

酒氣に乗って騒ぐものから、男どもは汗びつしより、えゝ暑い、とばかりにもろ肌ぬぐもの、それも暫くすると帯解き捨てゝ、まわし一つの丸裸体、色浅黒く胸から足へかけて熊毛もやゝと、我こそは関東の武者何某の男一匹などと力みかえる生酔どれの滑稽さに白拍子連は、わつと声あげ、手を拍いて面白がる。生酔いの一人が、あきれている六代の柔らかな手をぐつと握り、

「され若さま、あなたも一つ京生れの男らしい肌を、この女どもに見せておやりなされ」

と云いつゝも帯に手をかけるを払いのけ、あれよと叫んで遁げんとするを、先に廻つた他の酔どれが、又もや左の手をしかと握る。右と左と、手首をつかんだ荒くれ二人の暴力に敵すべくもない、かよい身の「あれえ、あれえ、おゆるし」と必死の悲鳴も甲斐なやむごたらしくも帯するゝと解きほどき、襟首つかんで、衣裳も襦袢もぱつと剥ぎとった半裸体、燃ゆるがやうの緋の腰巻の前を押えて、

「あれ、どうぞ、こればかりは身に着けさしてくださいます、お情け、お慈悲、皆さま」

と白い手を合せて拝むいじらしさ、白拍子どもは予ねて斯くあるべしと申し合せを聞いてはいたが、実演となつては好奇の心むらくと興に入つて見るうちに、むごたらしや六代は恥を包む最後の幕まで剃ぎとられた丸裸体、一同の食膳に代えた長さ六尺、幅四尺の盤台の上の食品全部を取除いて、六代の生き身を料理する俎代りに、見る／＼年十六の雪の肌、風にも耐えぬ柔肌の四肢は暴力で展開されたのであった。

翌くる曉、文覚が草庵の戸を開けんとする朝、六代は悄然と帰り来たつたが、血色勝れず、憂を帯びた顔色、

「若、どうしたか、顔色が悪いでないか」と尋ねられ、胸一杯の悲しさがこみあげて、わつと声あげて泣き沈む、さてこそと文覚は大方を悟つたが、気の鎮まるを待つて言葉も切れ／＼に自白する昨夜の遭難、此の世からなる生き恥さらした身の、せきあげて来る悲しさに、又も新しい涙にくれるのであった。

それに引きかえ梶原の一行五人は、かの豪もの文覚を首尾よく欺き、大切の珠といつくしむ六代を奪いとり、あらゆる恥を与えた後、銘々が渴望していた美味玩賞に得た満点の勝利感は何に譬えんものもない、殊に況んや平家正統の嫡男、六代御前の肉体を自由に辱かしめることは、恰も平家の一門全体を足下に蹂躪するに異ならず、源平争衡の今

の世では、源氏にとって奇倖の快事と、誇らしげに吹聴する生意気な武士もあつた。

それが噂に上つて文覚の耳にも入り、面伏せの思いに悩まざるゝこともあり、此の際はいつそ諸国行脚で気分を新たにすること善けれと、六代と共に金剛杖に旅脚絆で、菅笠を頂いて出発したのは、紅葉散り布く仲秋の朝であつた。

旅行の目的は諸国の平氏残党に呼びかける為めと、平家物語に書いているが疑わしい。文覚ほどの世故に通じたものが、敢て螳螂の斧を揮うの愚を演ずるものでもあるまい。

其後十二年、六代二十八才の時に文覚も六代も捕われて斬に処せらるゝとあるも、事実であつたか否、大きな疑問に属する。いずれにせよ、文覚は当時の先覚者であり、六代との契交は彼が偏愛の性癖に因るものであるは疑うの余地はない。

平 敦 盛

『むくつけな、気の堅い、熊谷次郎直実の、さゝらのような腮鬢を、真綿と白い柔かい頬にすりつけたばかりの契りでさえ、敦盛さま敦盛さまと袖口たばしる涙の珠』と、『和国小姓気質』に書いている一の谷組み討ちの一条は、直に源平幾戦場の芳醇な佳話である。波打ち際で組み敷いたとあるが、雌波、雄波の寄せては返す水際に闘うほどの余裕のない

熊谷でもあるまい、場所は確かに明石街道の海岸通り、道路から数十歩隔てた砂地であつたと想われる。

「取つて押さえて首をかゝんとて、兜をおし仰けて見れば、薄化粧してかね黒なり、我子の小次郎の齢ほどに十六七ばかりなるが、容貌まことに美麗なり」

源平盛衰記には、嬋妍たる花の粧い云々と美文を列ねているが、此の条は平語の方が淡々として良い。そこで、「吾は武蔵の国の住人、熊谷次郎直実に候ぞ、抑も如何なる方に候ぞ、名乗らせ給え、と尋ねると、さては汝が為めには良き敵ぞ、名乗らずとも首打つて人に問え、見知ろうと宣いける」とあるが、此の描写は全然不可である。何となれば、組み敷かれ、自由を奪われた弱い身の、上に跨がつて組み敷いた強い方が明らかに姓名を告げ、然る後に礼儀を正して姓名を問われる武士の作法を無視し、名乗らずとも首打つて人に問え、とは何たる無礼の言葉であるか、殊に妙齡十六の少年敦盛として、かような応答は決してしないことを信ずる。

想うに熊谷直実は、源平戦の門出に東国を出発して既に五六ヶ月、戦場から戦場へと、生死の間に奮闘する日なく、噂に聞く京女郎の顔さえも見ぬ殺風景、血みどろの惨状のみ眺め暮した此頃、計らずも組み敷いた敵は其かよわさ、始めは女かと思つたほど、抱きしめ

た肉体の感触は真綿のように柔らかい、兜を取り除けて上から見ると児鬚に薄化粧の美少年の切なる喘ぎ、苦しい声で参議経盛の末子無官の太夫敦盛で御座います。ど、どうぞ早く首打って下さいませ、と敗者の切なる心からの叫びであった。聞く熊谷の心は悩乱、此の君一人助けしとて、勝ちたる源軍の敗けはすまじ、如かず助けて逃がさんにはと、起ち上って手を取って引き起こし、いざ、何処とも隠くれられよ、敵の来ないうちに、と勤める折から、憎くや平山の武者所が軍勢引きつれどつと寄せ来る鯨波の声、逃がるゝ余地は寸毫も見られぬ必死の戦場、今は詮なし、云い残すことあらば伝え参らせんと問うに、否云い残す何物もない、御身のような情けある武士に首打たるは死後の面目此上もない、早々首を打たれよと地に坐し首さし延べる覚悟のいさぎよさに、熊谷の腸は断つ哀惜の念い、順縁逆縁、未来は必ず一蓮托生と心に念仏、振り上ぐる秋水一揮の下に哀れ首は落ち流血どつと砂礫を染めたのであった。

当時、戦場の習いとして首打ちたる方は、敗者の鎧、甲はもとより携帯其他一切と、鎧下の直衣袴もろとも一切を剥ぎ、真に白裸として戦場に遺棄するが常法であった。そこで熊谷は首なき屍体の、鎧の帯に挟んだ笛を探りあげ、想うに今朝ほど須磨御殿の楼上で、優にやさしい笛の音は此の人であったかと、

そぞろに哀れを催しつゝ上帯とて鎧を脱がせ小手、臍あてもまた解き去り見れば、紅梅を散らした絹の直衣に薄紅の少年らしい袴、それも悉く剥いで、あらわとなった裸体の、まだ血の通うかと疑う体温のある玉の腕、首すじ、胸、腹、太腿の肉つきふくよかな、肌理濃やかな雪の肌はさすが剛気多情の熊谷の腸を抉ぐるがような痛烈な刺戟に我を忘れてぼつと血は頭に上って胸は躍る。あゝと絶望の太息一瞬、再び衣裳を纏わせ、四辺にありあう小石を拾って袂に包ませ、上帯でしかと束ね、波ぎわに立って押し寄せる浪のただ中目指し力を極めて投げ入れると、引く潮につれて波間に影を失ったのであった。

森 蘭 丸

天正五年に竣成した安土城、七層高樓の最下の広大な面積は、座敷が幾つにも分けられ就中評定の間は、諸大名評議の間で、お小姓の控え室が付属している。信長公のお小姓八名の中で、森蘭丸は筆頭第一、次は力丸、次は小弁、次は珠千代、其他いづれも十六七の花盛り、蘭丸は最年長の十八才であった。

いかに急遽の場合でも、主公が「誰かある」と声に応じて「蘭丸候う」と答える機転と、言語応接の明晰で物柔らかな言葉が蘭丸に愛好を寄せるのである。諸大名は柴田、丹羽、滝川の元老から新進の羽柴、明智、中川、細

川、池田等をはじめとして人それらの氣風がある。其氣風を呑みこんで、氣に合うようにもてなし、茶をすゝめ、お酒の給仕にまめしく立伫く蘭丸の頭にすき間はない。

諸大名の中でも羽柴秀吉は特に蘭丸と親しい、というのは主公の寵童として、政治、軍機の万事を取り次ぎする蘭丸は陰然たる一勢力であった。そこで万事に抜け目のない秀吉は、安土城に参勤の度ごとに、先ず以て城下にある蘭丸の住宅に其母親を訪い、諸国の珍しい産物や、金銀さえも贈るのである。そうなるに蘭丸母子は秀吉に第一の好意を寄せるとは当然で、随って主公の意向を知り、其信用を高める方策に有力な後援となるは勿論である。他の諸侯も茲に気付くもの多いが、明智光秀は一向に見向きもしない。そこに秀吉と光秀の性格が読まるのである。

或る日、大広間に隣る茶屋で秀吉は打ちくつろいで蘭丸のすゝめる茶を啜る、秀吉は突然、親指を示して見せると、早くものみこむ蘭丸。

「えゝ、上様はただ今御寝でございますよ」「そうか、お蘭どのはなぜお伽しないの」「は——、あれ、羽柴さま、まだ昼過ぎでございますよ」

「でも、おん大はお蘭どのにかけては、昼も夜もないと聞いたが」

「あれ、まあひどい羽柴さま、わたくしなど

近頃さっぱり御意を得ませんものを」

「などとうまいことをいうぜ、それ、それ、この頬のえくぼがこぼれる」

指先きで、ちよいと白い頬をつく、ぽっと頬赤らめる蘭丸は、

「ほんとにお上手な羽柴さま、いくさのお上手も思われます」

「だがお蘭どの、近頃の明智はどうしたか」

「はい、明智さまはほんとにお気の毒でございますよ、上様の御機嫌が思わしくないので」

「そうだろうて、明智のあたまは凝り固まって、融通がつかないからの」

「そうでございますよ、上様の御機嫌のわるい時でもお構いなく、ぐんぐん仰言いますものを」

「其通りだ、で、そなたは明智が好きか」

「あら困りますよ、どうお答えしてよいか」

「であろうて、諸大名多くの中であれは困りもの、そなたが嫌うも無理はない。おれも実は好かないおやじとっている」

気性のさらりとした秀吉が本音を吐くは、

隔てのない蘭丸ぐらいのものであった。

天正十年五月二十五日、降りつゞくさみだれの夜、安土城の大奥、金銀を縷ばめた襖の引手、金欄の几帳の裡に絹の羽根坐蒲団の上に坐したは、今や四海を睨む英雄信長、側に侍るは蘭丸であった。信長は白綾の寝衣に絹の丸帯、蘭丸は白地千羽鶴を紅で染めぬいた

絹の浴衣に、緋の扱帯を帯びた夏姿、髪は前髪の子児髷、白い頬に薄化粧、口紅鮮やかな美少年の艶色、これがそも少年なるか、と思わるゝ女らしき、天目に汲んだ薄茶をぐっと一口に飲んだ信長は、蘭丸の白い手をとって引寄せる。引かれて寄り添う姫薦の、松の幹にまつわる風情も悩ましく、主公の膝にもたれかゝって顔を伏せ、しくしくと幽かな泣き声、背を撫でさする信長の掌は柔らかな肌ばかりに快よい。

「おゝ、泣くか、泣くか、聞かせよなぜか」

「ハ、ハイ、上様、ど、どうぞ二三日ほど私にお暇を下さいまし」

「な、なにをいう、二三日暇をくれと、仔細はどうだ」

云われて蘭丸耐えかね、よゝと泣きすゝつていたが、

「では申します、由なきさかしらと思しめさずにお聞きなされて下さいませ。実は此の頃からの光秀どのの様子は怪しゅうございます今日のお昼の御飯の時、何か知ら考えごとに心を奪われ手に持った箸をぽとりと落して気がつきませんでした。それ程に執心な物思いはてつきり謀叛と感づきました。二三日が程彼が身を狙って油断を見すまし、一刀の下に斬って捨て、君の患いを除く私の心を、どうぞお察し遊ばしませ」

涙と共にかき口説く、血を吐くばかりの忠

義の熱血、燃ゆる思いの涙の珠、はらはらと信長の膝に落つる。

「さてはそうであったか、だが蘭丸、心配するなよ、光秀は決して謀反するものでない、裸一貫から近江、丹波五十五万石の大名に仕上げた余の恩をよも忘れるものではあるまい、それに中国に毛利を攻める秀吉の加勢として二三日中に中国へ発向させる彼光秀、心配せんでもいいよ」

云いつゝ泣きくずおれる蘭丸の背を撫でていたが、首筋の白さ、脇明から見ゆる柔肌に「お蘭よ、来い」

と、蘭丸の白い手をとって深いとぼりの奥へ、二人は影を消すのであった。

越えて六月二日の朝まだき、中国征討の総司令として信長公は京都の本能寺へ仮りの御泊りが運命の尽くる時、桔梗の旗は一万五千の軍勢を押し立て、本能寺を四方八方から十重、二十重に取り巻いたのであった。突如ばらばらと本堂へ打ちこむ銃丸、それが合図となってどつと挙げたる鯨波の声、驚く近習小姓、信長公も光秀攻むると聞いて既に覚悟は定まった。あゝ昇天の蛟竜も徒らに螻蟻に苦しめらる。今の場合、基因は全く油断であった。寺庭に攻め入る敵を目ざして弓勢強い信長の防戦、鶴の丸を染めぬいた浴衣に白綾のたすき、裾を高くかゝげて、雪の太腿あらわる蘭丸は、十字の槍を揮って君前に決死の

勇戦目ざましく、力丸坊丸其の他侍臣、悉く信長の左右の楯となつて防戦する。折しも敵から仕かけた焼き討ちの猛火は今や客殿から棟木を伝うて、本殿は血と烟との惨景の中に決戦するお小姓等の姿は哀れにも麗わしく、中にも蘭丸は焦ら立つ声を励まして

「上様、早く内へお入り遊ばしませ、早く、早く」

血を吐く絶叫、信長はもうこれまでと内に

入り、短刀にぐさと横腹刺すを合図に、矢代勝助が介錯して首級は即時猛火の中へ、続いて蘭丸以下侍臣の凡ては腹かき切つて殉死する時、火炎は既に本殿全部を包んで、赤い光焰は唸りを立て、本能寺は廻廊、庫裡、経蔵一切を挙げ、猛火に包まる、火の海の中にあわれ一代の英傑信長の覇業はこゝに終焉を告げ、美少年蘭丸は美事な殉死を遂げたのであった。

本能寺、蘭丸がいつち惜しまるゝ

(未摘花)

近古史談には蘭丸を評して、慧敏にして謹慎と書いている、蓋し適評であらう。彼は十六才にして尾張国、犬山城に封を受け、五万石の領主となった。信長の殊寵知るべきである。

(終)



「鼻」とそして

「変型しぱり」と

真鍋 四十七

其の後、雑事に追い廻されていて、中々よい経験や写真を御披露することが出来ませんでした。何よりも良いモデルを見つ

るのが苦勞で、前に発表したモデルがいなくなつてから(彼女は劇団に入ってしまった)真実に寂しい思いをして来ました。尤

も新しいモデルを得た時の喜びは、これまで得難いものです。

不充分とは思ひながら、こゝ半年程前の作品三種を投稿御披露してみましよう。一部の写真は、三十年三月特大号のグラビヤに載せて頂きましたが、こゝで少しく説明

を加えておきましょう。

A及びBは、三月号の写真と同じモデルで同じ時にうつしたものです。この人は或るキヤバレーの接待係ですが、少し齢をとっているものゝ、素晴らしい容貌の持主でした。鼻先が少し長すぎるぐらいで、その高さといふ、鼻の穴の形と申し、全く私好みのピタリした美貌、特に鼻を持ち合せていたものです。

ところが困ったことには、カンジンの「鼻マゾヒスト」では全くない、ということとで、長時間何回もの説得と、それから不当に多額の謝礼によつて、ようやくこの写真をとらせて貰ったことを、いさゝか憤懣のあまり、敢てしたゝめておきます。

撮影は或る写真屋で助手一名を使い、備

え付けのライトを使用して行いました。裸体にしたかったのですが、当のモデルが肯じなかったもので、やむなくこの程度に止めるを得なかったのです。とは云え、助手をして指でモデルの鼻をつまみ上げさせ、或は用意のハリガネ細工（クリップではない）でつりあげさせ、ライトを当て、フアインダーをのぞいた時の気分は、全くアブフォトニストでないと思われない素晴らしいものでした。

そして又、モデル自身がさして感情を動かさず、淡々としているのには、寧ろ逆にもっと／＼上むけてやれ、つりあげてやれと云う慾望の起るのを如何ともなし得ず、かえって快味を増したことでした。このモデルの鼻はむしろ下方に長く、カギ型をしており、普通のまゝとは全然異った容貌になってしまったのは又愉快なことでした。それでもないと到底発表は許されないことです。

一つ、つけ加えておきますと、あまり強くハリガネをひきあげたために、この撮影の直後に、鼻の穴の上部が切れて血が出たことです。大変な憤慨で、多額の弁償（ではない賠償）金を払ってやっと納得してくれたのですが、それだけの値うちは十分あったと満足しています。唇があきそうにな

るのをムリに口をつまませた訳ですが、この方がよかったと思っています。

C——G迄の五枚は、同一モデルを二回に亘って写したものです。このモデルは容易に御推察のように、プロステイテュートであります。年が若い（十九歳といっていた）為か乳房が甚だ小さいのが難点でしたが、殆どこちらの云うがまゝになってくれたことゝ、そして、可成りマゾヒスティックな傾向を持っていたことは、ありがたいことでした。

C、D、Eの三枚は、金網を用いてみました。このモデルの鼻は、前のモデルとは逆に、少しく上向きの仲々理想的な鼻をしていました。金網は被縛の感じをあらわし中々よきものでしたが、光線が不十分でよい写真にならなかったのが残念です。Dの下部は思いきり脚を左右にのばしているのですが、残念ながら割愛しました。たゞ、下を向いているモデルの表情が、そのさまを若干物語っているものと御推察下さい。

F、Gは別の機会にうつしました。竹の棒（あまり長いのは持ち運べないので）は一寸した思いつきでしたが、固定するのに苦労しました。然し下手なマスクよりは、ずっと感じが出ているでしょう。縄はいずれも随分強くしぼったつもりですが、それ

でもそうは見えないのが残念です。さしえのような感じを出すには余程強くしなければなりません。

Gは口に縄をかけ、鼻の穴にタバコをさしこんだものです。これは中々苦しいらしく、肩の部分の筋肉の盛り上がり、これを示しています。ほんの二、三分も我慢出来ないようで、小説にあるさるぐつわは事実上困難ではないかと、私は考えざるを得ませんでした。このことは、吊りについても同様で、実際に一人の人間を縛って吊ることは困難です。少くとも二、三人の男を必要としましょう。又縛られた方は、到底小説のように長時間我慢出来るものではないそうです。（おわり）

△編集部註▽

真鍋氏よりお送り下さった写真七葉は編集部にて保存してありますが、ザラ紙ではうまく印刷されなと思いますので「サディズム特集号」若くは他の適当な機会に御紹介しましょう。

此の写真の中で、特に卓絶していると思ったのは、Eの全裸後手縛りに顔面だけを金網で掩ったものと、Gの口の間に噛ました猿ぐつわと、鼻孔に挟んだ二本の煙草の二葉でした。趣向も奇抜であるし、モデルの身体も大変魅力的に撮れていました。

幽 囚 十 ケ 月 (最終回)

昭和二十九年十一月号特大号より連載を開始した本稿は、こゝに十三回を数え本月号を以て完結することになりました。真面目にして偽りのないこの記録が高い文献的価値を持つていることを誇りとすると共に、赤裸々な生活記録を提供下さった筆者に敬意を表したいと思います。

春 田 一 郎

脱 獄

クリスマスも過ぎた二十六日の夕方には刑務に大事件が突発した。それは図書夫の首席であり、二級の受刑者であるTの脱獄事件であった。その日の夕方、何日もの通り仕事を済ませて房に帰って来ると、一舎全体が何だか、ざわざわして、廊下には看守の往来が激しい。私達が訝っていると、古い受刑者である大林君が

「もしかしたらうさぎじゃないか」と云っていた。「うさぎ」とは飛はねると云うことから生じた「脱走」の符牒である。

暫くすると衛生夫の川辺さんが私達の房の扉をあけて

「図書のTがうさぎらしい。内緒々々」と云って、足早に立去ってしまった。之に

私は驚いた。Tは二十五、六才のよく肥った青年で、私と同じ時に二級に進級し、畑中君がザリ精事件で図書係を去った後、その首席として働いていたのである。その日の午すぎに私は医務課の事務所から隔離病舎へ行く通路で彼に出会ったのである。彼は数冊の図書を抱えて、隔離病舎から出て来た所であった。私とすれ違う時、彼はいつもの様にニコリと会釈をして

「寒いですね」と挨拶した。私は予て、Tに「ライフ誌」の特別閲覧を依頼してあったので、その催促をしたら

「えー、忘れていた訳じゃないのだが、忙し

くてね。まあ一兩日待って下さいね」と答えた。その時のTには何等平常と変った所は見受けられなかった。その時から数時間して、Tは脱獄を決定した訳であるが、心の動揺一つ見受けられなかったのである。之は後に聞いた話であるが、Tは午後遅く営繕外役に書物を届けに行ったのであった。営繕外役とは塀の外へ出て営繕の仕事をしている受刑者である。図書夫で而もその首席であるTが何時もの習慣で看守にも伴われず塀の外へ出て、外役の溜りへ行っても誰も怪しむ者はなかった。経理夫に対してはそれだけ信用が篤いのである。Tが外役へ出て行った迄は誰もがその姿を認めているが、その後の彼の行動が全く分らなかったのである。彼は外役での仕事

を済ませると、内部へ入る様な振をして、附近にあった土管へもぐり込み、日の暮れるのを待って逃亡したと云うことである。囚衣には上衣の背中やズボンの上部に大きな刑務所の印が捺されているのであるが、二級の囚衣は濃紺であるため、陽にでもすかして見ない限り、この捺印は分らず、服も三級以下は一見して囚衣と分る恰好であるが二級以上は詰襟の上下であるため、一寸見ただけでは普通人と区別が付き難く、この点もTの逃亡行を助けたものであろう。

凡そ、囚人が脱獄して逃げ終えることに成功することは先ず不可能である。刑務所及び警察は勿論、消防団、青年団すべてに追いかけられ、一般の社会人も脱獄囚と云えばおそけを振って敵視し、かくて世の中全部を敵とするに至るからである。そして捕った場合は刑務所へ連れ戻され、嚴重な懲罰を蒙るのは素より、逃走罪として最低一年は刑を加重され、勿論、仮釈放などは不可能で先ず満期迄つとめなければならないのである。然も逃走する場合は無一物なのであるから、生きて行くためにはどうしても窃盗又は強盗の罪を併せて犯す結果になるのである。だから仮に刑期一年の者が逃走して窃盗でも働いたとなると、二年や三年は刑が加重される。若しこの者が真面目に服役して居れば、六ヶ月乃至八ヶ月で仮釈放の恩典に浴せるものが、刑期が

三年以上に延びて、然も満期迄服役しなければならぬのであるから、事実上、服役期間には五、六倍になる勘定である。だから多少でも常識があれば逃走など出来る筈はないのであるが、この様な打算も何も彼も忘却する程の悩みがあつて、一時的の精神錯乱状態となり、逃走の挙に出るものであらうと思う。Tの場合は原因は女だったそうである。刑務所にある受刑者が最も懊悩するのは妻又は愛人のことである。若し妻や愛人が自分の留守中他の男へ走りはしないかと云う悩み程、深刻なものはない。真実か否かは兎もあれ、留守を守る妻が或は愛人が他の男に心を向けたと云う噂を耳にした時の受刑者の煩悶、忿怒は到底筆舌に尽し難いものがある。Tの場合は恋人が獄中のTに絶縁状を送つて来たのだそうである。Tはそのため打算も思慮も忘れ、一途に思いつめた心から脱獄したものであるうと思う。

受刑者が脱走すると、四十八時間以内は刑務所が逮捕の主体となる。受刑者の作業は全部停止され、刑務所は全力を挙げて脱獄囚の逮捕に努力するのである。受刑者は全部、檻房に閉じ込められ食事時間は不規則となる。之は逮捕に向う看守の弁当を作るために炊場が全能力をあげるからである。

Tの脱獄は受刑者達に勿論ショックを与えた。脱獄の翌日などは、慌しい看守の往來の

外は、刑務所全体がしーんとして、息をのんでいる様な静けさであつた。受刑者達がTの脱獄に快哉を叫び、その成功を願つたか、或は又刑務所の掟を破る者としてTの挙を憎んだか、それは受刑者の表情からは分らない。併し、受刑者達の受けたショックは永続性のあるものではなく、直に無関心な冷淡さに返りこの事件の成行を他の大きなニュースと同じ位の興味を以て傍観しているに過ぎなかつた。唯、受刑者達がTを憎んだ点が一つだけあつた。それはTの脱獄のために目前に迫つたお正月の御馳走が減ると云うことであつた。

「Tの奴、こんな暮にうさぎなんかしやがるものやから、今度のお正月はまるいかれや」
之がTの脱獄に対して、受刑者の多くが持った唯一の関心であらう。

二十八日も二十九日もTが逮捕されたと云うニュースは入らなかつた。三十日は半日作業で午後は煤払いして迎春の準備をする。Tの脱走と云う大事件のさなかにあつても、正月の用意は進められた。門松、注連縄が飾られ、炊場では絶えず餅を搗いていた。八角には大きな籠に鶏が一羽入れて置かれた。

医務課では若森先生と小林先生が正月休みで帰省され、ひっそりとしていた。岡本医官は予て小林先生が煙つたのであるが、留守中はのんびりと薬剤室へ入つて来て

「稀塩酸一にツッカーを濃くした水薬を作つて下さい」等と注文が出たりして、のんびりとした空気であった。私は又、特別の凍傷膏を作つて、部内の人々と共に使用していたので、薬瓶洗いなどで盛に水を使つても手が荒れる様なことがなかった。工場回診に用いる凍傷膏は豚脂一〇にカンフル一の割合で作るのであるが、特別凍傷膏、即ちメンソレータムはカンフル末を薄荷脳とすり合せ、之に硼酸末を入れ、サリチル酸メチール・エステルを数滴落して飴状とし、之を白色及び黄色ワセリンに溶かして作るのである。

三十一日、愈々今年も最後の日である。夕食の時にみそかそばが出た。夜八時頃、私達の房が開かれて、私を呼びに来た。所長が急に腹痛を起したので調剤をしてほしいのとこのことである。しーんと静まり返つた医務課に行つて、所長のためにロートX〇・〇六、健胃散一・〇の調剤をした。その時、夜勤部長と看守とが話をしているのを聞くと、Tは脱獄後、郷里へと徒歩で向つたのであるが、三十一日遂にその途中で捕り、八時頃刑務所へ連れ戻されるそうであった。逃走僅か六日、生命迄も賭して脱獄を敢行した目的である女への復讐は恐らく果し得なかつたであらう。脱獄に依り刑務所に迷惑を掛け、社会を騒がせたTの行動は素より許すべからざるものであるが、私をして言わしむれば、一層憎むべき

はTをしてこの無暴を敢てせしめた女の裏切りである。難詰の言葉一つ掛け得ずして捕つたTの心中は如何に無念なことであつたであらう。

Tは刑務所へ連れ戻されると、嚴重な警戒の下に三舎に厳正独居となり、後手錠をはめられた。うしろ手錠と云うのは腰に皮製の太いバンドをしめ、そのバンドの背後に当る所に手をバンドに固定せしめるのである。之をやると両手が使えなくなり、布団を自分で掛けることも出来ず、便所も垂れ流しとなり、食物は犬猫の様に腹這いになつて、口で直接食べる以外に方法はない。一応取調が済む迄はこの状態が続くのである。

お正月

調剤を済ませて房に帰り再び床に入つた。普通の人には考えることも出来ぬ経験をしたこの年もあと数時間である。去る四月に入所して以来、九ヶ月の刑務所生活、更にそれ以前のことと次々と脳裡に去来して感慨無量である。藤村操でないが、人生は誠に不可解である。人並みの教育を受け、人並みの経歴を持ち乍ら、今、圜圀の月を見る。草葉の蔭で両親は今の私を何と思召すだろう。掛布団にあごを埋めて、じっと目をつぶると、過去のことが次から次へとリトロスペクテイヴリに展開して行く。この年の正月、前年の正

月と懐旧の映像はフィルムを逆に廻す様に幼年時代迄遡って行く。受刑者はすべて懐古的である。現在に較べたら、少くとも過去のいづれの思出も現在よりは幸福だったからである。大晦日の夜は沈々と更けて行き、除夜の鐘が一つ二つと響く頃、私はいつしか華胥の國に入つていた。

「起床」の声に目をさますと、新しい年の元旦はほの／＼と明け始めていた。生れて始めて迎える刑務所の正月、そして二度と迎えてはならない刑務所の正月、私は仮釈放が遅れたため図らずも刑務所の正月を経験することになったのであった。昨年は新聞で刑務所の正月が豪勢なものであることを知つたのであるが、それだけに実際はどんなものであらうかと期待する所も大きかつた。

刑務所の正月は食物と娯楽の正月である。酒、煙草、女を除いては受刑者の夢が正月には叶えられるのである。餅、みかん、羊かん、キヤラメル、煎餅、ごまめ、数の子、昆布巻、ハム、ソーセイヂ、汁粉、あべ川等々が三ヶ日の間、殆ど間断なく配られる。三度の食事はこの外に、平常とかけ離れた御馳走で、三食共白米の飯である。

元旦の朝は柔い餅が三片と豚のさつまいも汁であつた。雑煮と云う訳である。食後すぐになます、ごまめ、数の子が配られ、そのあとはみかんが三ヶであつた。みかんを食べ終つた

頃には羊かんが一本宛配られた。それからすぐ中食である。お菜はソーセージと八寸許りの尾頭付の焼魚であった。この様なことが三ケ日の間続くのである。とても私などは全部を食べ切れるものではない。

元旦は全員が講堂に集り、新年の祝賀式が行われた。教育課長及び所長の訓辞があり、それが済むと私達は房に帰り、静かに元旦の一日を送るのであった。

二日には受刑者の演芸大会が催された。講堂の舞台の飾り付け、照明、引幕等すべて本式の立派なものであった。木を切抜いて、大きく『ハッピー・ニュー・イヤー』と文字を表した背景は特に素晴らしかった。司会者は看病夫の大森君で、昨年の正月もやったこととて堂に入ったものであった。服装は領置されてある背広を下げて貰って、之を着し、ガーズをマッキュロで薄桃色に染めてハンカチ代りに胸に差し、帽子はガーズで作ったキャップ風のをかぶった。演芸会のプログラムは盛沢山で、浪曲声帯模写、劇、歌謡曲、舞踊等がその主なものであった。中には本職はだしの上手さのものもあり、特にKと云う受刑者の『湯の町エレジー』などは『のど自慢』に出れば鐘が三つ鳴ることは請合いと思われる程の巧みさであった。劇や舞踊で女に扮するには、何処から借りて来たか女物の着物に帯をしめ、坊主頭に手ぬぐいを姉さんか

ぶりにして、顔には白粉と紅とをぬるのであったが、之で結構女に見えたのであった。看病夫は「無言劇」を出した。無言劇の題目は「愉快な看病夫」と云い、その筋は、部長看守がいかにめい制服をつけて一人新聞を読んでいる。そこへ掃除にやって来た看病夫が部長の読んでいる新聞に好奇心を持って、自引き袖引きしてのぞき込む。部長はうるさくなくて新聞を半分に切って看病夫に投げ与える。看病夫達は貰った新聞はしまい込んで、又部長の新聞をのぞき込む。部長はうるさくなくて、その半分を破って与える。こんなことを数回繰返している中に、新聞は小さくなってしまふ。とうとう部長はかんしやくを立て、残りの新聞の小片を丸め床に投げつけて去ろうとする。その時、看病夫の一人はポケットから部長の読んでいた新聞と同じ新聞で完全なもの、やおら取出して読み始める。立去ろうとした部長が不図振返って、この様子をながめて「ダー」となって倒れかゝる。之で幕である。この種の無言劇を合計三幕出したのであった。私は舞台裏で演奏会を見物していたが、正月だからと云って、私や内山君はまるきり休む訳には行かなかった。演芸会の途中でも急患のために二人だけは中座して医務課に行ったのであった。

翌三日も演芸会が朝から開催された。今度は玄人の演芸会であった。千鶴美代子一行の

軽音楽と歌謡曲、それに万才が二つであった。司会者は、大辻司郎の弟子の染井四郎であった。染井と云うのは器用な人で、漫談はもとより、声帯模写、振付の歌謡曲も歌った。千鶴美代子は振袖に高島田姿で、全く美しかった。舞台に姿を現した瞬間、見物の間に異様などよめきが起った。七つ八つの歌謡曲を歌い最後に「ソーラン節」を歌ったが、「ドッコイシヨ／＼」と云う掛け声を皆でかけてくれと云う彼女の注文に、受刑者達は彼女の手の合図に従って、全部が声を揃えて「ドッコイシヨ／＼」と酔った様に声をはり上げた。

斯くの如くにして、刑務所に於ける正月の二日間は愉快に瞬く間に過ぎてしまった。昨年の正月、刑務所の正月の献立が新聞に報道せられた時、

「刑務所の囚人と云えば臭い麦飯と沢庵ぐらいしか食べさせて貰っていないのだと思ったのに、こんな御馳走とは全く驚いた」と驚く人や、

「悪いことをして刑務所に入れられた囚人に普通の家庭でも仲々食べられない御馳走を出すとは怪しからぬ」と憤慨する人も沢山あった。

この人達の驚嘆や憤慨は誠に尤もであると思うし、正月の刑務所の御馳走が囚人の分に過ぎたものであることは囚人達もよく心得且つ感謝している。併し世の人々をお願いした

いのである。食物について云えば囚人は自由には何一つ食べられないのである。あゝあれを食べたらどんなに甘かろう。あれを一つたべてみたいと云う口腹の慾は不自由な世界だけに、一寸普通の人々が考えられない位、深刻なものである。この平素の夢を幾分でも実現さしてくれるのが正月なのである。悪いことをした人々を収容する刑務所であり、且つ囚人の衣食住はすべて国民の血と汗の結晶である税金で賄われていることも囚人達はよく認識しているのであって、それだけに正月の御馳走に対する感謝は大きいのであるから、性慾を完全に断たれた囚人達にせめて正月の三日間だけは食慾を満足せしめることを許容するだけの寛大さを持ってほしいのである。

仮 釈 放

四日からは普通の状態に返った。患者に授与する定期投薬の薬は暮に正月の十日迄の分を作って置いたので、問題はないが、小村先生が正月の十日過まで帰省しているので、その間の臨時の調剤は、すべて私の仕事であった。暮から大林君が私の後任として調剤室へ来ているので、仕事は多少楽になっていたが、調剤方面は矢張私が全部やらねばならなかった。

佐藤部長は何事にも熱心な人で、英語についても、ラジオの英語講座で一生懸命に勉強

していた。川崎君が仮釈放で出る迄は同君がラジオテキストに訳を付けたり、発音を付けたりしていたのだが、同君が出所してからは之がずっと中断されていた。正月に入ってから、之を続けることを私が頼まれた。テキストの文章をノートに写し取って、之に発音、単語の訳及び全体の訳を付けるのであるが、私は誠意を込めてこの仕事をした。今から思えばこの余計な仕事を依頼されたのは佐藤部長の深い思い遣りであつたに違いない。当時私は仮釈放が延びて、かなり焦燥していた。そんな時にひまな時間を持つと、そのことばかり考えて、余計な苦しみをするものである。佐藤部長は私のこの苦しみを軽くするため、私にひまな時間を与えぬ様、配慮せられたものに違いない。

一月十八日、ひる過ぎ科学分類課長が突然調剤室へ入って来た。私が呼ばれ、明十九日司法保護委員の面接が行われるとのこと、色々のことを聞かれたり、注意を受けたりした。あゝ、とうとう、待ちに待った面接の日はやつて来たのだ。刑期の三分の一が経過してから二ヶ月、私の関心はこの面接一つにかゝっていたのである。その夜は流石に興奮して眠れなかった。面接があれば、遅くとも二十日位の間には出られる。すっかり刑務所にも慣れ、看病夫の古参となり毎日心持よく働いている現在ではあるが、それでも社会に復

帰する喜びに勝る喜びはなかった。社会に復帰すれば再び激しい生活の荒波が待つて居り而も今度は前科者と云う無慈悲なハンディキヤップが付きまゝとて、苦しさは二倍にも三倍にもなるだろう、と云うことは理屈ではよく分っているのであるが、そんなことは乗り越えて、唯もう刑務所から出ると云うことが、自由の身になると云うことが無条件に嬉しかったのであつた。

愈々一月十九日はやつて来た。私達は午後九時の部で、一時頃、教育課の看守に連れられて本館二階の待合室へ行つた。思えばこの呼出しを去年の十一月以来、幾度無駄に待ったことであろう。私達は示された順序に従い、椅子に腰を下した。先頭の者から一人ずつ呼ばれて筋向いの部屋に入って行く。或者は二、三分、或者は十分程かゝつて面接が済むと、ほつと安堵を浮べて待合室の前を廊下の彼方へ消えて行く。流石に仮釈放になる者は殆どが一、二級で、その中に三級がちらほら混っている。

愈々私の番がやつて来た。名前を呼ばれて立上り、指示に従い面接室のドアを排して中に入る。大きな部屋の中央にテーブルが一つ置かれ、その向う側に司法保護委員が一人坐っている。示された椅子に腰を下し、委員と向い合せになると、その委員は黙って書類を読んでゐる。何を問われるのかと、私は固

唾をのんだ。

「ふん、何だね、今後は氣をつけて二度と再びこんな所に来ない様にするのだね」

「はい、誠に申訳のないことでございました。幸に仮釈放の恩典を頂くことが出来ましたら、全力をふるって更生いたす所存でございます」

「ほんとにそうしてくれ給え、最高学府を出た君に対して別に云う所はないが、呉々も注意する様にね」

「はい、誠に有難うございます」

「ではこれでよろしい、仮釈放の可否は委員会にかけて決めるからね」

之が問答の全部であった。私は肩の重荷を降したような軽い氣持で部屋を出て、看守に医務課へ連れて帰って貰った。

翌日からは愈々後任者へ引継の準備として従来、私が主体になって偽き、大林君は之を扶けていたものが、今度は大林君が主になって偽き、私が介添をするとう風にした。いつ仮釈放になっても間誤付かないように、帳簿を整理し、倉庫の検品を行い、調剤室の仕事の細い点を色々大林君に引継いだ。私が森田さんの後任として来た半年前がつい昨日の様な氣がする。注射薬の名前一つ分らず、探すのに間誤々々したことを思うと全く夢の様であった。

樋中君が佐藤部長から聞いたと云う情報に

依れば二十六、七、八の三日間に相当数の仮釈放があり、三十日には残りを出すと云うことであった。真偽の程は分らないが、一応、私は月末迄には出られると予想した。

一日千秋の思いで待った二十六日が来たが何の音沙汰もなかった。二十七日も、二十八日も空しく過ぎた。誰が出た彼が出たと云うニュースがまち／＼に入ってくる。勿論仕事は手につかない。大林君は同情して、自分がすべてやるから何もしないでいてくれと云ってくれる。頼みの綱は三十日一日であった。不安で耐えられなくなり、佐藤部長に聞くと、仮釈放はその直前でないと刑務所へは通知が来ないが、通知が来次第、分類課で調べてやるから落付いている様にとのことであった。今迄の見聞に依ると、仮釈放になる直前ほとんど人でも御飯がのどに通らない程、氣持が上ずってしまうのであって、私は食慾こそあったが、氣持の上ずっていたことは人々と何等変る所がなかった。

デッドライン・デートと予想される三十日が来た。仮釈放呼び出しの看守は大抵十時頃に来るのだから、私は期待と不安とに戦き乍ら一分刻みに十時を待った。十時になった。呼び出し看守は現れない。五分過ぎ、十分過ぎ、十時三十分、十一時となっても、現れない。とうとうひる休みになってしまった。期待が切実であっただけに、其の反動である落

胆は深刻であった。この間面接した者が三十日で全部出てしまうのに、私は何としたことだろう。仮釈放が万一にも不許可になる原因は考えられない。それなのに現実には三十日の仮釈放から除外されている。若し仮釈放が不許可になったらどうしよう。と考えると、世の中が真暗になる様な氣がした。中食に帰る途中の廊下でもとすれば目頭がジーンとなりそうであった。房に帰ると全身の精氣が抜けってしまった様で胸がチク／＼と痛んだ。面接が遅れたために嘗めたあの苦しさ、之を再び、現実の仮釈放を目の前に望んでいるがために一層の切実さを以て繰返すのであった。

それでも、二、三日経つと、少々氣持が落付いて少しは元氣が出て来た。丁度其折、三十日で全部仮釈放になったと云うのは全然のデマで、事實は仮釈放を予定せられた者の三分の一も出所して居らず、各職場で仮釈放を待っている人々は私の仮釈放に注目していて春田の仮釈放が、まだだからあせる必要はないと、私の仮釈放をめどにしていると云う確実なニュースが耳に入った。私の心は絶望の谷から一度に希望の峯に飛び上った。まだまだ仮釈放の可能性があるのだ。私の焦燥、真暗などん底の絶望感はあるに光に照された。忘れもしない二月八日、夕方仕事を終っていつもの通り佐藤部長に引率されて一舎へ引上げた。一舎の廊下に整列して人員を調べ、

さて房に入ろうとした時、

「春田、一寸」と佐藤部長に呼ばれた。あわてゝ引返すと、一舎を出外れた八角の一隅で立止って、佐藤部長は囁いた。

「実は春田。今科学分類課長に呼ばれたので行つて見ると、お前の仮釈放は極く近い内らしい。こんなことは事前に洩れたら大変だがお前も心配していたらうから、之だけ教えてやるが、部屋の者は勿論、職員に対しても一言も喋ってはならんぞ、もう二三日のことだから自重しろよ」

私の頬は微笑がひとりでに浮んだ。佐藤部長に礼を述べて房へ帰ったが、まるで大空へ飛び立った様な、筋肉と云う筋肉のしこりが一時に全部ほぐれた様な気持であつた。房へ帰ると、私を待って夕食の箸をまだ取上げていなかった同房の人々は、何事だったと好奇心で聞きたがつたが、私は話をせず、誤間化してしまつたが、大林君などはよく感付いてゐる様子であつた。

翌九日の夜は刑務所最後の夜であつた。四月十日、入所した時、貸与されたこの敷布団この掛布団、三百日の間、毎夜世話になつたなつかしい布団である。既に私の心境は嬉しさも興奮もなく、唯静かに明くる日待つ澄み切った心であつた。廊下をコツコツと歩く看守の足音、鉄棒を通して見る明るい夜空、すべては一生の思出の最後の一夜である。八

角の大時計が九時を打って、ラジオのラウドスピーカーが沈黙した。明日からは別々の世界に別れる同房の人達は既に寝入つたのか、かすかにいびきを立てゝいる者もある。そつと目をとじる。四月十日入所以来の出来事が走馬灯の様に目に浮ぶ。桜の真盛りを浮世の外に見て受刑の世界に入つた二舎の新入時代、身体にかびのはえる程、単調な二舎時代、ころの焰に驚喜した訓練時代、短かつた二工時代、そして医務課へ入りたての新入時代様々なことを思出してかみしめて味わう。更にこれから十年もつとめねばならぬ玉君のことが心に浮ぶ。枕を並べて寝ている同僚の人々は私の明日の仮釈放のことはまだ知らないのだが、私は皆に

「長い間色々とお世話になりました。左様なら。服役中は間違いを起さない様に自重して一日も早く仮釈放を貰つて下さい。娑婆と云い獄舎と云い、全然別の世界のように言いますが、ほんとうは同じ世界なのです。人間らしい誠実さが結局勝つのです。皆さん、自重して下さい。左様なら」

と心の中で秘かに挨拶した。十日の朝は冬には珍らしく、よく晴れた空であつた。正しく仮釈日である。いつもは私の布団を一番下に積むのであるが、その朝は私の布団を一番上に置く様に頼んだ。之は出所する時は布団を被服交換係へ返さねばな

らないが、その時、下積にして置くと、折角奇麗に積んだふとんを乱すからである。私が私のふとんを一番上に置く様にと云つたことで、今日の仮釈が皆にすぐ分つた。皆は口々に「おめでとう」と祝つてくれた。

やがて朝食である。刑務所で食べる最後の食事である。「三」と等級を表した型飯、思えば長い間、数字のついた飯で命をつないで来たものである。四月十日の夕食以来、この朝の食事まで、正に三百七日、九百十七本の飯の御厄介になつた勘定である。「起床、点検、シヤリ三本、明けりや満期が近くなる」毎日三本宛の飯が積み積つて今日を迎えたのである。私は一生に二度と食べる機会はあるまい。そしてあつてはならぬ三等飯を味噌汁と共に味つて、味つて食べたのであつた。

いつもの通り八時に出役して、しばらくすると、計算係の看守が私の作業票を取りに来た。之は私の賞与金を計算するためである。之を集めに来ると、仮釈放は絶対間違いないので、私は隔離病舎に行つて、紀中看守、下田君、久美さん、そして各房の患者に挨拶して廻つた。刑務所の中で更に隔離されている気の毒な患者さん達、さようなら。充分療養して早くよくなつて下さい。気の狂つた平田さんには私が分らなかつた。レプラのS君はくずれかけた頬を微笑ませた。常闇の人生を前途の希望なく辿るこの二人に特に幸あれと

祈る。

十時前、呼び出しの看守が愈々やって来た。一寸待つて貰つて職員の人達に大急ぎで挨拶をする。看病夫の皆さん、左様なら、どうか誠実を以てつとめて、一日も早く出所されることを祈ります。左様なら。

大林君は医務課の外れまで送ってくれた。面会所へ入る扉のも一つ先の扉を外に出るのであるが、そこで振り返ると、大林君は大きく手を振っていた。その白い上着が暗い廊下に印象的に浮き上っていた。

先ず一舎へ帰つて房から布団其他を持ち出した。玉君が手伝ってくれた。玉君が無事に十二年の刑期をつとめ果します様に。布団やタオルを二舎階上の被服交換に返し、名札を係の部長に返して、一先ず応接室に私物を置き、本館の階下に集合した。やがて引率されて二階の所長室に行く。総務部長、管理部長を始め各課長列座の中で、所長の前へ一人ずつ呼ばれて、本籍を述べ、所長の手から「仮釈放証書」が手渡される。之で完全に仮釈放となり、社会人に復帰した訳であつて、並居る幹部の人々からおめでとうとお祝いの言葉を頂く。もうこの瞬間から戒護の意味の看守はつかず、単に案内して呉れると云うことになるのである。「仮釈放証書」の授与式が済むと科学分類課へ行って色々の書類の手続をする。「仮釈証書」に本人が宣誓して、課長

が保証をする。分類課の手続が済むと、教育課へ行き課長の訓辞を受ける。

「皆さんは本日をして仮釈放に相成り、誠に御目出度い極みであります。仮釈放と申すのは、錠前あり格子ある監獄から、之等のない刑務所に収容することでありませぬ。諸君の服役期間はまだ終つていない、文字通りの仮釈放でありますから、その期間は矢張り刑務所に居ると同じく、常に反省と修養とを積み、自重の上にも自重して、無事この期間を経過する様努力して頂かねばなりません」と云う教育課長の訓辞は心の奥まで浸み透った。こゝで出迎えの家族が持参した衣類を受取り、前に私物を置いた応接室で着換えをする。この間に持ち出す私物はすっかり検査され、領置品も帰つて来ているのであつた。囚衣を一枚ずつ脱ぐ時は流石に感慨無量である。十ヶ月振で着る背広の暖かさはほのぼのと心の底まで温る思いであつた。

領置金や賞与金を受取るのは計算の都合上午後になるので、この間に検察庁の構内にある成人保護観察所へ赴く。「仮釈放証書」に認証を受けるためである。

十ヶ月振で歩む自由な道、刑務所から検察庁までの四、五丁の道はピクニックの様な軽々とした気持ちで歩いて行つた。自由の世界へ復帰して、先ず一番に充足した慾望は煙草であつた。めまいを恐れ乍らこわごわ「光」を

すつてみる。うまい。実にうまい。煙草をこれ程うまく吸うのは空前であり、且つ恐らく絶後であらう。

午後一時過ぎ、再び刑務所に引返して教育課で領置金と賞与金を受取る。領置金が五百円に賞与金が四百円余りである。この四百円余りの金こそ、入所早々の一ヶ月八十銭から出発した、十ヶ月間の真の汗の結晶である。世の中に之程、多量の内容を持つ四百円はないであらう。

金を受取ると之で仮釈放に関する手続はすべて完了した訳で、完全な社会人となり、今度は逆に八角の鉄扉から中へ入ることは許されず、今朝迄の同僚とは完全に別の世界の人となつてしまったのである。私は教育課の人々に挨拶をして、ザクザクと前庭の砂利を踏みしめ正門の方へ歩いて行つた。刑務所の中でも事務所のある本館は娑婆であるが、一つ一つ嚴重に施錠をされた幽囚の世界はもう既に見るよしもない。一千四百の受刑者諸君よさようなら、さようなら。

正門を出て、河畔を橋に向う。橋の中央で立止まり、てすりにもたれて西を見る。コンクリートの高い長い塀、煙をはいている大煙突、四舎の二階の窓。私は十ヶ月以前、この橋を渡つて刑務所へ向つた。十ヶ月後の今は逆に橋を渡つて刑務所から遠去かりつつある。高い塀も、高い煙突もこの十ヶ月間に何

の変化もしていない。十ヶ月間が瞬時に過ぎてしまったと同じ外観を持っている。十ヶ月前にも高い塀は冷くそびえていた。十ヶ月前にも煙突は矢張り煙をはいていた。十ヶ月の時の経過を示す何物もない。併し、私にとっては今迄長らく書きしるした十ヶ月間の生活がその中に抱擁されているのである。夢、夢

——夢と見るには余りにも生々しい記憶である。現実——現実としては余りにも惨ましい人生の一つの中断であった。夢にして現実、現実にして夢の十ヶ月であったのだ。それも今終った。

「起床、点検、シヤリ三本、明けりや満期が近くなる」

私は口の中で、あの灰色の生活を噛みしめ灰色にたたずむ刑務所に向って、左様なら、と手を振った。二月にしては暖い陽を浴び乍ら、私は吸っていた煙草を川面に投げて、ゆつくりと橋のらんかんから、そして刑務所から離れて行ったのであった。

(幽囚十ヶ月)

(終り)



〔新聞・雑誌〕通信

自決する從軍看護婦たち

——「サイパン玉碎記」——

東 一郎 提供

元陸軍大尉田中徳祐記

雑誌『今日の話題』

三十一年五月号

日本に帰りたい

最後の突撃は終わった。あくれば七月八日。この日も、敵は白昼の攻撃を中止し、夜になって砲撃し出した。恐らくサイパン島攻略戦が一段落し、新たに掃蕩戦の段階に入る準備を進めているのであろうと想像された。夜の攻撃は、生き残るわれ／＼の夜襲を牽制す

るためのものなのであろう。敵は、花火でも打上げるかのように、ひっきりなしに迫撃砲弾を送って来た。だが、私たちのいるバナナ林へは一発も来ない。周囲を包囲する射弾ばかりだった。もはやこの辺りには隠れる場所もなく、林の中に日本兵が集まっていることを知っている敵は、一人でも多く林の中に集結させて、一

挙殲滅を企てていることは察知されたが、反撃する術もなく、徒らに夜空を見上げるばかりであった。かくして、なすこともなく夜は更けて行った。真夜中と思われる頃、忍び寄る足音がし誰かが何かを呼んでいる。

きき耳を立てると女の声だった。「兵隊さん、将校殿はおられませんか。從軍

看護婦です。どなたか……」

「何だ。そんな大きな声を出すな。敵はすぐ上の台地にいるんだぞ」

近寄った女の声を、兵がたしなめた。

「そんなことをいわず教えて下さい。私たちは今、全員自決するのです」

「何？ 全員自決？」

むっくり起き上った者がある。

「ふん、自決なんて早まるな。…俺はもう一度日本に帰りたい」

そういった兵があつた。彼は、立上って、

大空を見つめていたが、

「帰りたい、帰りたい……」

呟くように云いながら、丘陵に向つてのろのろと歩き出した。まるで夢遊病者のような足どりだった。

「あッ、そっちは敵！」

看護婦が叫び、止めようと引つ張った。つかんだ服は簡単に破れ、兵は真直に歩き出した。口の中で何かを云いながら……。

提軍医との邂逅

林看護婦の話によれば、今朝方（八日）糧秣廠にいた二三名の将官が、工兵隊の兵数名と筏を組み、マツピー岬から脱出しようとしたが、リーフを離れたところで敵の魚雷艇に発見され、撃破されたという。

また、彼女等がいまいる場所から、少し下

った道路上の洞窟内で、南雲中将、辻村少将など海軍の指揮官が、昨夜、夜襲攻撃の直後自決したとのことだった。

そして彼女たちも亦、生きる道を失い、全員自決することに意見が一致し、それには誰か將校に見届けて欲しく、そのため連絡に来たのだということだった。

私はそれまで、黙って彼女の言動を見つめていたが、

「御苦労さん、自分は河村部隊の將校だが、今更、自決の確認は不必要だと思ふが……」

そう声をかけた。

「あッ、將校殿ですか」

彼女は不動の姿勢をとり、私の方を振り向いた。

「でも、万一のことを考えまして、是非」

そこまで云われると、それ以上、彼女たちの気持を無視するわけにかなかった。

「夜が明けると敵が襲撃してきます。早くお願いします」

彼女に促され、傍にいた吉田軍曹と立ち上った。

二三百米ほど進んだとき、夥しい死体が散乱している場所へ来た。踏まないように足許に気をつけながら歩いていると、切株の根元からニユツと頭を上げ、這って来る者がある。私たちの足音を聞きつけたものらしい。

「誰だ……」

その人影と、五米ほどに近づいた時、吉田軍曹が誰何した。

「軍医だ、河村部隊の提軍医だ。君たちはどの部隊だ」

私は、ぐいっと、こみ上げてくる懐しさに思わず走り寄った。

「お、田中じゃないか」

二人は抱き合うようにして手を握った。

提軍医は、ドンニーから押されて、八日夜ここまで来たのだという。

私は、看護婦たちの自決立会いには適任者だと思い、かいつまんで経緯を話し、林看護婦を招いて紹介すると、提軍医は、私の外に連れがあることを初めて知り、

「これだから夜の行動がいやなんだ」

とこぼす。彼は、強い近視だった。林看護婦をせき立て、三人がその後に従った。

丘を越え、下りになると、またしても屍体の群である。サイパン最後の野戦病院だということであつた。看護婦たちが集まっているのは、その先の林の中だという。

自決の注射

「気をつけ！」

婦長は、号令をかけ、自分の場所に行き、全員に正座させた。

「只今、林連絡婦の案内で、私たちのため二名の將校が来て下さいました。その中に、皆

さんも御存知の堤軍医殿もおられます。一同衷心より感謝の意を表しますとともに、皇軍將兵の方々の御奮闘をお祈りします。一同敬礼！」

十二三人の従軍看護婦たちは、新調の制服に身を整えている。晴れの凱旋の日に備えていただろう服装が、いま死出の晴着になるう

としてゐる。四十才前後と思われる婦長を除けば、二十才前後の乙女たちである。バナナの葉を敷き各自五十糎ぐらいの深さの横穴を前にして正座している。彼女たちは、嗚咽にむせんでさえる。

中央に立った堤軍医は、暫らく無言のままである。恐らく彼も亦、感慨無量の涙を押し殺しているであろう。私は、齒をくいしばって溢れようとするものをこらえた。

「今に至って小官より君たちに話す言葉も、亦話す資格も無い。だが、自決を決意された君たちの胸中を察するとき、万感交々いたりただく胸をかきむしられる思いである。かくいう我々も、間もなく君たちの後を追う運命にある。思えば、従軍以来各地に転戦し、うら若き青春を砲煙彈雨下に送り、ひたすら祖国のために尽して来られた君達の心事は、誠に残念であり、無念であろう。しかし、かくなる上は、清く美しく、護国の神として永遠に生きられんことを祈る。長い間、御苦勞

さまでした」

軍医の言葉が終ると、たまりかねたようにむせび泣きの声が上がった。

「ありがとうございます。ではお願いいたします。」

婦長は、私たちに挨拶し、故郷遙拝を終えた後、

「では用意！」

と命じた。各自は救急箱を開け、注射品を取り出し、死の液体を吸い上げる。

まくり上げた左腕が、雪のように白い。

「皆さん、長い間御苦勞さまでした。至らぬ私の下で、誠心仿いて下され、今また皆様の尊い生命を頂く私をお恨み下さい。では皆さん、時を失しないように行きますよ。皆さんさようなら」

婦長の左腕に注射針がささった。

全員これにならった。

私は、くらくらつと、目まいがするのを感じ、軍刀を杖に踏んばっていた。

砲筒の響遠ざかる

後には虫も声たてず

吹き立つ風は生ぐさく

紅い染めし草の色

婦長に和して歌う全員の声も次第に消え

二人三人……うつ伏して行く。

数分後には、全員動かなくなった。

私たち三人は、こと切れた彼女たちを、そ

っと前の壕に入れ、その上をバナナの葉で覆った。

(註) 此の自決記は実際の記録である。が切腹マニアの方には注射自決のため物足りないかも知れないが、何かとひし／＼と胸にうったえるものがあり、彼女等の自決が尊いものに見えた。何よりも実話であることが、真実感を与えるのであろう。切腹マニアの方々には此の場面で形どってイメージされると好いのではないかと思ひ記録した次第である。

ローカル・レポート

日本観光新聞 六、一五

二千円で殴つてくれ

上野松坂屋周辺のパン助たちの話題に今のぼっている男性がいる、この男、四十年輩格ぶくのいい重役タイプのセントルマン、彼氏ものすごいマゾヒストで、パン助たちと、マージンに行き、いざ遊ぶだんになると突然一糸まとわぬ素ツ裸となり「頼むから僕の両腕を縛ってバンドで思い切り殴つてくれ、二千円あげるから」という、このマ氏、渋谷方面の某商社会社の専務だが「奇譚クラブ」を読んでいるうちに生れつきのマゾヒズムがだんだん高じてかくはパン助相手の仕儀とは相成った次第、パン助仲間果して彼氏を殴つたらよいものかどうかこのところ夜の女仲間物議中

(東一郎投)

奈子のA感覚について

門 田 奈 子

一、センチメンタルな独白

真赤な、ぶあついカーテンの垂れ下っている小さな四角いお部屋、鏡台と、新しい電気ストーブの置いてある自分だけのお部屋で、深夜、たゞひとり机に向いながら、奈子は何となく淋しい感傷的な気持ちになってしまいました。

あれから、もうすでに十年に近い月日、いつの間にか流れ去ろうとしております。「いやいや、大人になるのはいやなこと——」という一葉の詩の様な美しい文章に憧れながら奈子は、この十年の間に、もうすっかり大人になってしまったのです。

今から考えますれば、不思議なことですけど、奈子は少女のころ、自分の身体に起りつつある女としての微妙な変化に、全然気がつきませんでした。ある日、それはたしか、奈子が女学校二年生になった年の秋のことだったと思います。何の気なしに、自分の身体

を鏡にうつして見たとき、今までの奈子には見られなかったものを突然発見したときの驚き、奈子は、そのときのことを今でもはつきりと覚えております。そして、間もなく何の前ふれもなく訪れて来た女の生理、更に、あの悩しかった夏の夜の、恐怖にも似たひととき——。

それからの奈子は、まるでドロ／＼とした灼熱の溶岩をふきだしている活火山の様に、身体の内部分からつきあがってくる自己愛への激しい衝動に責めつけられてまいりました。

奈子が、今日まで歩きつづけてきた、自己愛の孤独な遍歴のあとをふりかえって見ますと、ずいぶん、いろ／＼な出来ごとが、あったような気がいたします。それは、細くけわしい山道であった様にも思われ、又時には奈子だけがたどりつくことの出来た森の奥がプリーガンであった様にも思われるのです。そして、今ではもう、この身体はどこにも、そのころの子供っぽいあの青い固さは、すこし

も見あたらなくなっていました。

あの時と同じように、立ち上って鏡に全身をうつして見ますと、あの頃とは比較にならないくらい丁度、十年の間、そこから奈子の生きた血の通った生身の辿ってきたあとが、はつきりと知ることができます。そして、ピチ／＼と張りきった、どの部分の曲線をとって見ても、そこには十分、一人前になった娘の——、やわらかなふくらみが盛り上っているようです。奈子はもうすっかり大人になった。その肉体的な成長は、いまやほとんど、最高潮に達しているのでしょう。

適令期という言葉が、これを最も端的に表現してくれます。ああ、でも、自分だけを愛することしか出来ない奈子にとって、それはたゞ、冷いカミソリの様に残酷な言葉でしかありません。社会という、奈子を取りまく環境のすべては、適令期を迎えた奈子の一挙一動を、ある種の好意と、それとは別なある種の興味とをもってじっと見つめているので

す。その微笑をたたえて奈子に注がれている
 たくさんの人々の視線の恐ろしさ、狂おしい
 ばかりの、自分自身に対する絶対的な愛情と
 それを容赦なく引きはなそうとする無情な時
 の流れとの悲惨な争いが、夜ごと夜ごとに、
 奈子の胸の中で、絶え間なくくりかえされて
 いるのです。

しかも、奈子のそうした苦しみとは全く反
 対に、自分を愛するために求める不可思議な
 愛情は、ますます深く、底しれぬ闇の中へと
 沈んでゆく様な気がします。このことに対す
 る奈子の不可解な期待と恐怖は、恐らく、誰
 にも理解していただくことは出来ずまい。



今は亡き——“その方”のために、奈子は
 こう呼ばせていただきます——。古川裕子様
 が奇譚クラブの誌上に告白なさいましたお言
 葉を、奈子は時々ゾツとするほどの戦慄と一
 緒に想い出すことがあります。

『でも裕子はもう一度つぶやかざるを得ない

「異常性欲者とは、何と孤独な寂しいものな
 のだろう」と。このことは、吾妻様に対する
 羽村京子様のお手紙にもよく読みとれます。
 羽村様は、私の思いちがいでなければ、身悶
 えして自らの性感と他の人とのちがいを歯が
 ゆがり嘆いていらっしやる。「異常性欲者は
 永遠に孤独なもの」私はこの確信を深めない
 ではいられないのです」(昭和三十年四
 月号一三六頁)

奈子も本当にその通りだと思っています。

それは、異常性欲者だけに限らず、人間
 である以上誰でもが一度は感じなければ
 ならない宿命の業なのではないでしょう
 か。奈子には、奈子だけの感覚があり理
 性がある。それは、永久に知られること
 のない奈子の世界なのかもしれません。

羽村京子様、奈子は、今日まで貴女のお
 書きになった文章から、強い影響をう
 けてまいりました。貴女は、貴女のすぐ
 うしろからピツタリと寄りそうようにし
 て歩いていた見知らぬ女があったことを
 御想像もなさらなかったことでしょうか
 れど——。でも、そこから受けることの
 出来た感覚は、恐らく、羽村さんがお感
 じになっているであろうそれとは、やは
 り全く違った別のものであったよう
 です。

「A感覚の秘密」という言葉は、羽村京

子さんが奇譚クラブの誌上で初めてお使いになった言葉だと思えますけれど、奈子はまったく闇の中を、羽村さんの足音をたよりにしながら、一生懸命に歩きつづけ、ある日ふと気がついて、ポツカリと口を開けている穴の底から高い空を見上げたとき、羽村さんとは驚くほどはなればなれになっている別の道にふみ迷ってしまったことに気がついたのです。

羽村さんのA感覚、奈子にとって、どうしてもうかがい知ることの出来ない羽村京子さんの世界、それは、理想、といいかえても構わないと思います。でも奈子にはやはり、奈子だけが持っているA感覚の秘密があるので、羽村さん御自身が仰言います様に、（昭和二十九年十月号一〇二頁）奈子も、それを今更くど／＼と御説明することが、如何に益のないことであるか、自分が一番よく知っているつもりです。でも、奈子はどうしても書かすにはいられない。たとえそれが徒労に終りましょうとも、こうして皆様の前にさらけ出さずにはいられないのです。

奈子は、もう一度だけ、古川裕子様のお言葉引用させていただきます。

『ともあれ私は私自身の幻想によつてのみ自分の性欲を充足させましょう。それ以上は何を望み、そして何が出来ましょうか。異常性欲とは本質的に孤独なものです！ それは異

常性欲者の宿命であり、異常性欲者の永遠の悲しみなのです。変態性欲は、自分自身にも対社会的にも、暗いさびしい一筋の道なのです。どことも横にそれてゆきようもない荒野の果て、遠い暗い地平線に没するまでつづいている一筋の道なのです』と――。

二、ロマンチックな追憶

奈子がナルチシストとしての自分を自覚して以来、高等学校を卒業するころから裏面の生活が急にみだらで陰惨の度を加えていったような気がいたします。奈子が、大人になったからなのでしょうが、それとも、その肉体的な感覚が、奈子の体内で徐々に成長してきたためなのでしょう。それまでは、どちらかといえば、自己愛を通じて夢見る様に美しい自分自身にあこがれる乙女のプラトニックな、いわば平凡な日々がつづいていたのですけれど、そのころから奈子は、普通人と変わった性癖の持主としての自分を、はっきりと自覚しなければならなくなりました。その後の奈子は手あたり次第に考えられる限りの方法を用いて唇や胸や、腹部や下肢など、身体の中でも特に女らしい部分に対してあくことをしらない責めをつづけてまいりました。そして、奈子の浣腸も、自分自身に対する自虐の手段として、それが実行されていたのです。だから、奈子は幼いころふとした機会に浣

腸されたことが、その方の特殊なA感覚を眼覚めさせる原因となったというような、劇的な経験はもっておりません。奈子の場合、それがいきなりナルチシズム的な気持から出発しているためなのです。

でも、やはり奇譚クラブの存在を知り、羽村京子さんの強い影響をうけるようになった後の奈子とくらべてみると、このころの奈子が実行していた方法は、かなり違った幼稚なものであったようです。もっと直接的で、単純なことしか考えていなかったように思われます。

例えば、奈子は薬液を注入して内容物を排泄させる浣腸という医療法のあることは勿論知っていましたけれど、それが、奈子の自己愛を満足させるために利用出来るなどとは、思っただけのことでもありませんでした。

その後、更にいろ／＼な小道具を用いて、ここに書くにたえないような、ずいぶんひどい秘密の遊戯にふけてまいりましたが、いづれ何かしらものたりない気持になって、第一の奈子の感覚が、第二の奈子の幻想におきざりにされてしまうのがおちでした。

奈子は、奈子のお料理の幻想によつて代表されますように、自分自身の無垢な肉体の内部、特に腹部の臓器に対して、強い愛着をもっておりまう。それはあとでお話いたしますように、奈子の外面的な美しさとは対照的な

その内部にかくされている「きたないもの」を暴き出すことによって得られる被虐感の変型したものではないかと思っているのですけれど、この内臓への自虐を現実に果すことの出来る唯一の方法として、A感覚に関連したところの加虐を思いつくことは、奈子にとっては極めて自然ななりゆきであったように思われます。

しかし、そのころの奈子は、どうしてもそこから先には一步も進むことが出来ませんでした。いら／＼した気持でとまどいしている奈子の胸の中は呪文を忘れた洞窟の中のアラビア人の様に真剣になればなるほどきつと滑稽なものであったにちがいありません。

これは今から考えて見ますと、奈子のお料理への願望を、こうした幼稚な方法によって満足させようと焦っていたことが、すでに間違っていたからなのだと思っております。奈子のお料理熱は、やはり腹部加虐によって満たされるべきで、この部分からは、やはり奈子の自己愛のための独特な感覚、つまり奈子のA感覚がうまれなければならなかったのです。

こうして奈子は、A感覚への深い関心と欲望とを抱きながら、自分自身、その秘密を理解することが出来ないままに、それから長い間、何となくものたりない毎を送らなければなりません。奈子は、今題名の通

りに主として奈子のA感覚についてお話ししているのですけれど、このほかにも、奈子には自分の肉体的な感覚についての矛盾や、不可解な点などがいくらかもあったのです。それはまだ幼い戦後派の、しかも何を反省して見る余猶もなくなつた一人で自己愛という異常な道を夢中になつて歩きつづけてきた奈子にとっては、本当に無理からぬことだったのではないでしょうか。この奈子の悩みや、数多くの疑問をある程度開眼させて下さったのが奇譚クラブであつたのです。

奈子が、はじめて奇譚クラブという特殊な雑誌の存在を知つたのは、昭和二十九年二月のすえのことでした。奇クの名ムバーで言えば、奈子は第八巻第四号よりの愛読者であつたわけです。その日、奈子は驚異の眼を見張り、その頁のすみからすみまで一字もあまるところなくたんねんに読みつくしてしまいました。その中で奈子が最も深い感銘をうけましたのは、沼正三先生の玉稿「スカトロジー」という語について（巻末）でございました。このことについては奈子のA感覚に大変大きな意味をもっているように思われますので追ってお話いたします。

それはそれとして、奈子は次の五月号が発売されるまでに、この得がたい奈子の教科書をすでに五回以上読みかえしていたのです。そして五月号の誌上に羽村さんの「京子のう

きぶくろ」を発見したとき、奈子ははじめてA感覚というものの実態を、おぼろげながら理解することが出来たような気持がいたしました。奈子は有頂天になつて、すぐにも羽村さんにお便りを出して見ようかなどと思ひながら、自分自身の未熟さに気おくれして、ついそのままにすごしているうちに、誌上には次々と流腸を愛好する方々の手記やおたよりがのせられるようになりましたので、結局奈子は再び自分だけの殻に固く閉じこもるようになってしまいました。

更にもうひとつの理由は、羽村さんから吾妻先生への公開状（十月号）に対する先生からの回答（十一月号）「裏返し」のA感覚「A感覚」という言葉が奇クの誌上に用いられたのはこれが最初だと思ひます」と、更にそれに対して羽村さんがお寄せになつた「A感覚の秘密」（三十年一月号）なのです。本当に、古川裕子様が仰言いました通り、お互いに限らない好意を持っていながらも、どうしても歩みよることの出来ない絶対的な感覚の世界をまぎ／＼と見せつけられて、奈子はかりそめにも羽村さんを理解しているなどと思ひこんでいたのが、恥しいやら怖いやらで、いっそのこと大声をあげて叫び出したいような衝動にかられる自分を、どうすることも出来ませんでした。

でも「京子のうきぶくろ」をはじめ、当時

奇クの誌上にあらわれた一連の浣腸に関する手記が、それまでの奈子の自己加虐に対する考え方を、根本的に変えてしまう結果となつたことは事実なのです。丁度キツツキが堅い木の肌をあきもせず突つき無駄な努力を重ねていたような状態からその部分で踏み迷つていたA感覚への衝動は、戸口からはじめて奈子の体内に、歓声をあげてとびこんでいったのです。

自分自身の意志によって、直接自分の内臓を——それは、常識的には外部から手をふれることは絶対に不可能なのです——支配することの出来るよろこび、奈子が長い間求めていたA感覚の秘密は、こうして奈子の肉体にめざめました。他の方々のお話から受ける印象とくらべて、奈子の場合は、極めて不自然なかなちではありましたが、これもまたある意味では自己愛という奇妙な性癖をもつた女の、成長の記録の一部分として見ていただけではないでしょうか。

三、フアンタジックな実験

よく考えてみると、奈子のA感覚は、腹部の、もつとずつと奥の方にまで、入りこんでいるようです。試みに、奈子のお部屋にある鏡の前になつて、洋服を、上の半分だけ脱ぎすて、ぼつてりと皮下脂肪にふくらんだ腹部を眺めて見ましょう。奈子のお腹は、ピン

と張切つて極めてなだらかなスロープを描いております。このまっしろい肌に覆われた脂肪層の下には、美しいとか、魅力的なとかいった言葉とはおよそ正反対の、ドロドロとした内臓が一杯につめこまれているのです。いろいろなかたちをしたグネグネと長い腸管やいわゆる五臓六腑、そして子宮や膀胱など——。奈子の自己愛も所詮それが『異常』であると目される以上この内臓に対する関心も、自然排泄器官（奈子は主観的にそう呼ぶことにします）に向けられています。一口に「はらわた」といっても、それは主として、大腸、小腸、膀胱、及び子宮とそれに附属している一切のものをさしている



のだと考えていただいてさしつかえありません。

奈子が、このような自分自身の「はらわた」に、狂熱的な愛着を感じるのは「自己被虐」の変型したものであるらしいことは前にもお話いたしました。背徳的な言い方かもしれませんが、奈子は、人間の屍体、それもグチャッとつぶれて内容物を地面にたたきつけられているような情景を残念ながら、まだ一度も見たことがありません。畔亭先生の「轢殺」(昭和二十九年四月号グラビア)のような現場に出合うことが出来たら、どんなにすばらしいだろうなどという空おそろしい妄想を描くことさえあるのです。奈子の肉体が、ほとんどその原形も止めぬまでに押しつぶされ、路上にのたうっているところを、好奇の眼を光らせてむらがつてくる群衆の間から、もう一人の奈子が、じっとその不気味な屍体を見つめている。そんな夢を見ているうちに、いつの間にか奈子は、その屍臭を放つ肉の塊りにむしやぶりつき、両手に一杯抱きしめて喰べてしまいたいほどの愛着を感じるようになったのではないのでしょうか。

奈子は自分の身体の中にある、みにくいはらわたを確認したい。奈子の子宮は毎月一回必ずその存在を自から主張してくれます。しかしそれは、あくまでも天の摂理であって、おろかしい自分自身の意志では、ど

うすることも出来ない神秘的な女の現実なのです。奈子に、その内臓を自由にすることの出来る部分があるとすれば、やはり腸管——それにともなうて起るA感覚——以外にはないのでしよう。こうした欲望が、無意識のうちに奈子の自己被虐の期待となつてあらわれていたのだと思います。だから、以前の奈子がこれにどうしても満足することが出来なかったのは、実は当然のことだったのかもしれない。「京子のうきぶくろ」以来、奈子がア—ヌスを直接の対象としてでなく、単なるA感覚への入口として考えるようになった事は、大きな進歩？ だったと言えるのではないのでしょうか。

奈子の浣腸の実験は、こうして羽村京子さんの後を追って、まるでものにとりつかれた様にはじめられたのです。

奈子は、早速三〇CCの浣腸器を用いて、自分のお腹の中に、大量の空気を送りこんでみました。羽村さんは、これを大腸充満という言葉で呼んでいらつしやいますけれど(昭和二十九年十月号一〇四頁)奈子の場合、むしろその結果としての自己変形に願望の実体がおかれていたようです。生れながらの浣腸マニアではない奈子にとっては空気や薬液を注入する瞬間に起る情感というものは、ずっと後になっておぼろげながら感得される様になった程度でした。あの、なだらかなスロ

ープを描いているお腹が、ごくわずかづづくらんでゆき、時々、せきあがるように腸管がねじ切れそうな鈍痛が、息づまる圧迫感をともなうて起つてきたとき、奈子は苦しさを耐えてそつとたち上り——こうなつてから身体を動かすということは相当な努力を必要とします——鏡の中をのぞいて見ました。ポツテリとした下ぶくれの腹部が静かに息づいて上下にゆるく動いているのを眺めながら、掌でその部分を撫でまわして見ますと、右側にグリグリと固く張ったうねりがはつきりと感じられます。このゆがんだ腹部、今こそ、奈子の大腸は、全く別の生物としての活動を奈子の体内で開始したのです。

ぐる／＼、ぐる／＼、腸のうめき声が聞えてくる。それはもう一人の奈子の、断末魔の苦悶の声かもしれない、鏡の前に、顔をしかめふくらんだお腹をかかえて立っているこの女は、美しい仮面の奥にひそんでいたみにくい現実をおどろにさらけ出しているあわれな自己愛のいけにえなのです。

自分自身に対する激しい羞恥と、恍惚とした陶酔感とが同居しているこの奇妙な肉体、眼だけが異様な輝きをたゞえて、このナルチシズムの使徒の悲愴な殉教の姿にみとれております。やがて、全身から何か重いものが落ちてゆくように、ニヒル感を伴って大量の空気の排出、そのたびに、眼に見えて常態に戻

ってゆく自分の腹部を感じながら、奈子は、グッタリと虚脱したような疲労に、思わず夜具の上に身を投げ出して、しばらくの間、半ば気絶したように手足を動かすことさえけだるいほどの倦怠を味ったのです。

これが奈子にとっては最初の「A感覚の発見」なのでありました。今迄お話してまいりましたことは、すべてその感覚に到達するまでの精神的な、或は肉体的な成長の記録なのです。

何分か、何十分か後、ふと我にかえって、何の変ったこともない、いつもながらの奈子の存在を確認したとき、奈子の胸の中には、この感覚が少女の指先にもえる一本のマッチに描き出された一瞬のまぼろしであったかのようなせつないばかりの郷愁と一緒に静かによみがえってまいりました。それは丁度、あの夏の夜、初めて知ったしびれるような激情の後に訪れた、何とも言いようのない空漠としたあの孤独感に似ていました。

その後、奈子のA感覚への思慕は、ますます昂められ、その追求も、倦むことを知らぬように続けられてまいりましたが、それらのほとんどすべては羽村京子さん、花村恵美子さんはじめ、数多くの方々によって、すでに書きつくされている様です。奈子が今更こと改めて告白の筆をとったところで、それはただいたずらに重複の愚をくりかえすばかりに

すぎません。

それに、奈子の思念は必ずしもA感覚のみに独占されているわけではないのです。奈子はただナルチシスト門田奈子のA感覚について皆様方にすこしでも理解していただきたいと願っているだけなのです。

奈子はこの稿で、自分自身の浅学非才を補うために、羽村さんをはじめ、たくさんの方々のお名前や例文を引用させていただきました。失礼の点があったことと存じますが、ここからお詫びさせていただきます。

そして、A感覚の秘密について更に御教示をいただけたら、奈子にとって本当にこの上の幸福はございません。

最後に、浣腸とは直接の関係はないように思われますけれど、奈子にとってどうしても忘れることの出来ないある経験について、お話しておきたいと思ひます。

奈子は、最近ある機会に、お友達の出産に立合ったことがあります。赤ちゃんが生れるときには周囲があわただしかったせいもあって、別に驚きもしませんでしたけれど、その後三十分位たってから後産が排出されたときには、自分でも顔からすうっと血が引いてゆくのがよくわかりました。

今まで幼い一個の生命をはぐくんできた赤紫色の血の塊、その粘膜に幾筋も稲妻のように走っている血管を見たとき、奈子は決して

不気味とも恐ろしいとも思いませんでした。ただ激情としか形容出来ないような全身がガク／＼とふるえたほどのショックを感じたのです。この地方の風習に従って、奈子は新聞紙に幾重にも包まれた胎盤を裏庭に埋めに行ったとき、もう一度それを開いてみました。むうっとするような、なまなましい臭いを吸いこみながら指先でそっと触れてみますと、ネトリリとして体脂がついてきます。

そのお友達は、まだやっと十九才になったばかりのお針子さん（洋裁見習生）でしたが奈子は、その胎盤の上から静かに土をふりかけながら、人の運命というものの数奇なさだめと、生れ出た新しい生命の奇蹟とに深く深く感動しないではいられませんでした。

（おわり）

〔伝言板〕

○本誌の休刊前の寄稿家、投書家の方で、編集部と連絡のとれていない方々は、復刊号をごらんになられたら御一報下さるようお願いいたします。○原桐咲代様、切腹画、切腹フォト多数お送り下さって有難うございました。厚く御礼申し上げます。いずれも、よい出来ばえでした。○山田正実氏、沼正三氏、羽村京子氏、宝塚二三夫氏、御連絡願います。○山村由美子様、御申越の件承知しました。詳細御便り下さい。

賭けられた浣腸

—ソドムの青春—



矢 崎 竜 一

コノ一編ガ某ニタムロスルアルぐるー
ぶノタレカに読マレ、作者ガワタクシデ
アルコトガ明ラカニサレタシテモ、ワ
タシハコレハアクマデモ虚構デアルト断
言スル。

ネオンの輝きが一段と光をまして夜空を美
しく彩ってきた銀座のメン・ストリートの、
裏通りからもう一つの大きな通りへとぬける

狭い露路の、なか程にある酒場「ドム」の辺
りは九時をすこし廻ったばかりというのに、
もうひっそりと静まりかえっていた。時々び
しゃっ／＼と水たまりを踏んでゆく人形がと
おり過ぎる。「ドム」の広告燈の下にはのら
犬らしい仔犬が初夏の雨にぬれていた。

洋酒棚を背にしたカウンターの上には深い
笠をつけた電気スタンドが一つ。その傍には
店の名に縁のあるイタリア産の黒いドムの瓶
が一つ飾ってある。スタンドの灯を除けばほ
かはたゞ奥まった部屋の、壁のやゝ中ほどに
取りつけられた不粋な洋燈型の、暗い室内灯
があるだけで、これがせまい店の客席全体を
うすぼんやりと照らしていた。ビロードの壁
に反射した灯の周囲だけが妙にどぎつい血の
ような真紅色を浮き出していたが……。

「ドム」の奥まったこの部屋では、店のボー
イを仲間に入れて、一時間も前からボーカー
を続けている若い男のグループがいた。ボー
イの膝の上に乗っている派手な背広の青年、
隣りの少年の肩に手を廻して頬をすりよせた
まゝカードを握った青年など、思い／＼のポ
ーズをしている大学生たちは、お互に敵のカ
ードを読み取ろうとする真剣そうな顔付をし
ていた。カードが廻る。数多くのウイंकが
勝負のさ中に、テーブル越しにかわされる。

勝負に熱中している目は同時に執拗なソドムの目でもあった。これらの目差は互に求める者と求められるものとの間を敏速に、しかも複雑な意味を持って交錯する愛の協定への、妥協と反撥とを含んでいた。

そして獲得された愛人同志の間ではお互の目付はやさしく、そうでない相手にむかつてはいやに冷やかに光った。

「ストップ！」

真二が声をかけた。

この春、高校二年になった田代が頭をかきながら音をあげた。

「又ストップか、いやになっちやうなあ。俺散々だよ」

「真ちゃん、今夜はスゴクついてるじゃあねえか、最高だぜ」

「田代も洋ちゃんが早く来ねえことには救われねえな、真ちゃん」

佐々木は真二の顔を見ながらそう云つてにや／＼した。真二はいやな顔をした、彼の眉がぴくつと動いた。

「くよ／＼するなつてことよ」彼はハイボールのグラスを一息に飲み干すと、「おっとこれで三十二点か、さあ、みなさんのお賭けになったネマを頂きましょう」

彼は右から、左からと、彼等の賭けた金を取りあげた。二、三度軽く、集まった千円札

を、両手でつかんで卓子の面に打ちつけるようにして端をそろえろと、彼は一枚、二枚と手早く数えはじめた。」「田島の奴ばかりおそいな」独言をいって札束を内ポケットに納めてしまった真二は、まだあきらめ切れぬ表情で彼の斜めむかいの田代に、媚るような笑顔で誘いかけた。

「最低の条件は先刻みなさんも御承知だがね……どうだい、今夜は仲良く俺と組んでもう一勝負をみんなとやるか？」

二

「いらっしやいませ、皆さん、奥においで」

パーテンの声に彼等の目が一齊に入口の扉にそ／＼がれた。

洋ちゃんだ、よう洋ちゃん今晚は、彼等は田島に声をかけた。ずぶぬれのウエザーコートのを立てゝ入って来た洋の髪の毛からは、線になって雨水が頬を伝って流れていた。

「やあ、どうも、おそくなつて」

パーテンから蒸しタオルをもらつて顔をふき終えた田島はいつもの快活な表情にもどつていた。眉の濃い、ソドマイトたちを魅惑する浅黒い、ひきしまった顔立の洋が例の白い美しい歯を見せて笑う。

「今夜はだれがついてんの？」

「真ちゃんだ」

「そりや結構だ。今夜は真ちゃんにたんまりおごつてもらおうぜ、なあ、みんな！」

彼等は賛成々々とはやしたてた。真二はすました顔をして返事もしない。洋はウキスキのストリートを注文すると、煙草に火をつけた。

「ところで、最低は？」

「田代らしいよ」

誰か答える。勝負をしている六人の男性たちにじろ／＼眺められる田代は、真赤になつて顔を伏せてしまった。洋は目を細めて田代の初々しい項にじいっと見とれていたが、

「条件は？」

と切り出した。

上目づかいに田島の顔をちらつと見た真二は、彼の意図するものを直感した、瞬間、憎悪をこめた目で田代をぐいとにらみつけると今度は洋にむかつて、きっぱりと云つた。

「浣腸するんだ」

「なに、浣腸だつて？ 真ちゃんあんまりきたねえことをするなよ」

「駄目だ、条件は条件だ」

まるで子供たちにいじめられている亀の子が恐る／＼甲の中から首を出すように頭をもたげた田代は洋と目があうと照れたように頬笑んだ。そして、悲しげな事で、

「みんなの前で僕だけがされるんだって……僕、とっても恥かしいんだ。お願い、洋ちゃん救けてよ」

田代の云いぐさに皆がどっと笑い出した。洋の顔がこわばった。

「よし。じゃあ友愛精神といこう。俺が勝ったら賭けのネマは勿論のこと、おめえたちから治療代をいっておめえらの好きなだけたっぷり流腸をお見舞いしてやろう。その時はおめえたち泣きべそをかくなよ！ だが、田代だけは別だ。真ちゃん、それでいゝだろう！」

「負けたらどうする？」

「その時はその時だ。俺と田代とはおめえたちの好きなようにどうにでもしてもらおうじやあねえか」

……

「よし、きめた！ みんなそれでいゝか」

「オッケー」、「オッケー」

再びカードがくばられる……

三

真二たちと洋との間に「流腸」が賭けられた、賭けは金よりも最低の条件にウエイトが置かれたのである——こう云うと、なにか不自然に設定されたフィクションを読者に押しつけているように想われるかも知れない。だが事実、賭けはなされているのだ。「そうだ」

パスカル氏がかつて言ったあの言葉通りに。「僕は手を縛られ、口を嚙まされている。賭をすることを強いられていて、自由の身ではない。僕は放しても貰えず、しかも信ずることもできないようにされている。一体君は僕にどうしろというのだ」(冥想録)。

真二と洋は同級生である。二人はU大のボート部に席をおいているが、互にコックスの地位を競っていた。その洋が近頃では部員の信望をあつめてぐんぐんのして来た。真二は洋にはげしい嫉妬を感じはじめた。真二にとって彼が目に見えて邪魔になった。しかし、洋との夜はいつもごく堪能させて呉れるので、彼の愛情を失いたくはなかった。彼の強い腕にしっかりと抱かれた真二は、彼からのあつい接吻を受ける、するとなにかものかが真二の身内をくすぐるように力強く突いてくるのだ。それは浜荻の葉蔭に水波女を襲った牧神の荒々しい抱擁のように。ジュネのある書物の一節をもじって表現すれば、*Que d'être Sodomitée Par Hiroshi, elle (=il) Senta- it le foutre (=Sperme) du faune Couler en elle, tandis qu'une verge, comme un mât, ……* の歓喜と弛懈のなかに真二は息も絶えぬにさせられるのであった……。だが昨年のトダ橋競艇は真二のコックスでU大はV大

にみごと惨敗した。洋はやすくと真二の地位をうばい取った……。丁度その頃、真二は新宿の喫茶店RのボーイAを愛していた。この美少年は真二の愛撫を受けながらかけでは洋に身をまかせた。ソドマイトの俊敏さで真二はそれを感じていたが。

Aがある事実でついに少年院送りになった日、洋はAについて書かれたアイロニーを含んだ囲み記事の載った数日前の新聞を持って、真二のアパートを尋ねた。そして皮肉な調子で、

「だらしがねえぞ真二。おまえのAはサツで流腸されてらあ。あのおカマ野郎にはもってこいの薬だ。これ置いてくぜ」

驚いてポカンとしている真二の前にその新聞を投げつけて彼はさっさと帰って行った。

△：A署で、三回にわたり逗子の郊外にあらわれては帰校途中の中学生たちをだまし山林に連れ込み、六人の少年たちにしたずらを続けていたもと新宿・喫茶店Rのボーイ(一七)は、犯行について全くだんまり戦術をとって、珍無類の「自供なき聴取調書」をつくらせたが、こんどはハンスと用便中止の拳に出た
▽：七日地検から拘留状が発せられたが口を割らぬうえに三日からこの

奇手を打たれて取調べはまったくノレンの腕おし、おまけに八日からは衰弱の兆候さえ見え出した

▽：あわてたA署ではブドウ糖とビタミン注射をおこらされたが、別口の「フンスト」に対してはこる合をはかり流腸で行くことにハラを決めている、たゞし、これで取調べの通じがつくかどうかは疑問

その記事のあとに赤鉛筆で「御愁傷様。貴様らフンツマリやろうどもには流腸がお似合だH」と。

洋から飲まされたこの二度の敗北は真二を不愉快にした。その上、彼の存在が絶えず彼をおびやかす悪魔のような恐怖をあたえた。洋が真二に与えた流腸の記事とエゲツない註は真二を無しように腹立たせたのだ。よし、彼奴を流腸で責めたてゝやるぞ！ 真二は機会を待った……。

五度目のカードが配られた時には彼等の間には酒も大部廻っていた。スタンドの燈の下に彼の支払い伝票のエンピツの線が、バーテンによってぐんぐんと増されていった……。真二にかわって洋がたちまち勝越して行っ

た。金もとられ、田代も取られ、おまけに今夜は洋と田代の見世物になるのかと想うと、真二はますますいらだてて来た。彼のモトはった。真二は蒼白になった唇をかんだ。だがそれでもカードが切られて六度目の勝負が始まる。三回ほどカードが彼等の間をまわると、真二はストップを合図した。各自のカードが卓上に棄てられた。

「フオア・カード。これで八点だ。田島、おまえの五百円をよこせ」

真二が引釣ったような笑顔を見せた。

「おや／＼今度は真二につきはじめたのか」

四

真二が新しくカードを切って七度目の勝負にかゝる。真二の手が卓子の下にかくれた。

「さて、その札はなんだ」

洋が目ざとく彼のズボンの両膝で押えていたカードに目をつけた、そして彼の右手をぐいっとつかんだ。膝の間のカードがぱら／＼と床に落ちた。

「野郎！ 不正を働こうというのか」

敵意にみちた二人の目が、かっと燃え立った。洋が真二の横つらを力一ぱい張った。

「何しやがるんだ！」

真二は洋に右腕をつかまれたまゝよろ／＼と立ち上ると、空いている左手で背広の内ポケットから出した短刀の鞘を卓子の角ではら

って、ぐさ／＼と洋の横腹をついた。

「あっ」と皆が立ち上る。

「野郎、よくもやりやがったな」

酔っている洋は素手で真二の拔身をつかんだ、ぼた／＼と洋の掌から血がたれた。

「あぶない、やめろ」

だが、怒りに狂った真二の持つ血にぬれた短刀が危く彼等は近寄ることが出来ない。右のわき腹をおさえた洋を真二は外刈りで倒した。洋の肉体は卓子と一緒にもろにぶつ倒れた。あん外脆いな、真二はそう思った。洋を倒すはずみに卓子に打った真二の額からは血が流れていた。

仰向けに卓子の脚の間にはまった洋は苦しうにうなっている。

真二は彼に言った。

「此奴と田代を裸にして裏の物置へはこびこめ、ぐず／＼するな」

彼等は真二の言うまゝに二人の服をぬがせた。洋の下腹は真赤に染っていたが、傷は割に浅かった。真二は洋のきずついた右手を自分の手拭で繃帯をしてやると、両腕を後ろにまわし、彼のはめていた細いバンドで後手に縛って彼のウエザー・コートの上に横にした。田代も泣きながら彼等の手で後手にされていた。

「それはこび込め」
階段の傍の酒場の倉庫になっている半地下の物置の扉が開けられる。真二は洋のポケットからぬき取った札束の中から千円札を二枚ボーイに渡すと、一〇〇CCの浣腸器とグリセリンを二瓶買って来ることを命じた。

五

真二は田代と洋の手をくくりつけて背中合せにした。彼等の期待するような眼が二つの姿態をなめまわした。裸電球の下でふるえている田代は膝を立てようとした。

「ふざけるな」

真二は田代の皮帯で彼の太腿をぴしと打った。ソドムの愛が憎しみに変わったのだ。田代は悲鳴をあげて不自由な体をねじつてもだえた。

佐々木にグリセリンにぬれている浣腸器を渡す。

「田代からやれよ」

真二は更に少年に命じて田代の両脚をおさえさせようとした。

「嫌だ、浣腸なんて嫌だよ」

「この子はやに暴れるわね」

少年はそう云って笑った。

「面倒くさい、真ちゃんたゝんじまおうか」

「よせ、好きだけ暴れさせて置け」

佐々木の手にして浣腸器の嘴管から溢れた

グリセリンのどろっとした液体がコンクリートの床の上へ流れた。

「畜生！ 酔っていると手元が狂いやがる」
酒の酔と奇妙な興奮とが彼等の行動を支配していった……。

好奇の眼がギラ／＼と輝いているその前に晒された二つの肉体が演じている羞恥と苦悶にもだえる無様な姿が彼等を喜ばせた。

これが最低の姿だ、真三は二本目の煙草に火をつけると満足そうに微笑した。

「どうだ田島、いゝ気分だろう。おまえのAだってこいつを味わったんだ。それから田代、貴様もあんまり聞いたまねをするんじゃないぞ」

田代は歯を喰いしばっていたが、三本目の浣腸の途中で堪えかねたらしく嘔上げた。

佐々木が慌てゝペンキの大きな空罐を彼等の横へ置いた。

「たかゝ浣腸じゃあねえか、さっさと処置しちまおうよ」

真二たちは単純な繰返しにすぎないこの遊びに興味を失って来た。口をあけたり閉じたりしていた洋も喘ぎ出した……。

「今夜はこれで失礼しよう。じゃあ御兩人、あとは御ゆっくり——」

「真ちゃん、やつらをこのまゝにして置くの

か」

「あゝ、臭いものには蓋をしろだ。佐々木、かえろ。さあみんなも引き上げようぜ」

賭けには負けた、だが条件には勝ったのだ。それは俺の実力さ。真二は浣腸器をつかむと、思い切り強く、コンクリートの床に投げつけた……。

雨が上った銀座の歩道を月が照らしている。四丁目の角の時計塔の時計は十二時七分を示している。今夜の仲間もいつの間にか二人連れの組になって、思い／＼の方向にわかれて行った。

真二は佐々木をさそおうかと思ったが何か心が落ち着かなかった。洋との勝負には俺は完全に敗れた。だが奴の賭けの条件には勝ったのだ。およそ賭けの論理を離れすぎたこの矛盾については彼は全くの不感だった。彼は自分を卑怯とも考えなかった。却って、すべてを解決する「腕と金」の自信を強めさせた。愛も同じさ、と彼は思った。だが、ついに洋の愛を失ってしまったようなさびしい気が彼に空虚さを感じさせていた——。

彼は手をあげて暗い通りを疾走して来る流しの車を止めた。

「渋谷まで」

ネオンの燈が赤く、そして又青く、車窓から真二の顔を照らしていた——。

最近の日本物の時代劇、現代劇の映画から「縛り映画」の面白いシーンをピックアップしてみよう。まず松竹では、高田浩吉主演の「伝七捕物帳・女狐駕籠」がある。この捕物映画では、伝七の恋女房お俊は必ず悪者に縛られる。縛られねば、伝七が謎を解決できないらしい。初代の月丘夢路から草笛光子になっても必ず縛られる。それも三人の悪者に襲われるのが定石らしい。今度も近衛十四郎らの悪者側三人が伝七宅を襲い、草笛に手拭の猿ぐつわをはめ、手取り足取りでかつぎ出そうとする所へ、高田浩吉の人気女形中村滝之丞が老婆姿で現われ、悪者は追払うが、「あなたは滝之丞」というお俊の声に「知られたからは辛抱してもらわねば……」とカットが交われば、奈落の一室で縛られている。奈落らしく紅白の

〔映画・雑誌〕通信

最近の縛り映画から

嵯峨美也子

続活劇物の「マリア観音」では小山明子の雪姫に、乳母の夏川静江が縛られ鞭打たれるが中村賀津雄の吊し上げは賀津雄ファンにとつては、「まあ可哀そうに……」というシーンだろう。大木から中空から本当に吊さげられている。「黒姫秘帳」でも楽しみなシーンはありそうである。

大映では「喧嘩鴛鴦」で今回宝塚から大映入社した春風すみれで第一回作品で縛られている。仇討道中の獅子舞い姉弟の姉嬢で京の姫君と間違えられて縛られる。「強情なアマだ。責め上げてやる」というセリフで楽しんでいると次のシーンで助け出され縄だけ残っている。ニューフェイスだけに演技が固いのが残念です。これにつぐ矢張り市川雷蔵主演の「花の兄弟」で三田登喜子が艶な芸妓姿で猿ぐつわをはめられ縛られる。三田の芸妓美津次は雷蔵の鳥越半九郎を慕っているが、小倉屋の長二郎と女房お徳に誘かいされ、伊勢屋の妾になれと責められる。三田は芸妓姿で

白い布で鼻まで猿ぐつわをはめられ、しごきで縛られ裾を乱している。一寸なまめかしい。浜世津子がヴァンプ役でキセルで責めている一幕の絵は色っぽい。東宝の「恋姿狐御殿」では美空ひばりが姫姿で柱に立縛りで、荒縄で縛り上げられ山茶花究の山賊に責められる。もっと責めてくれるといいと思っていると扇雀が救いにくる。これで映画になるのだろう。東映作品に近頃「縛りシーン」の多いのが残念である。「江戸三国志」にも出てくるかと思うて見ていると三部の解決篇まで出てこない。日活の現代劇に素晴らしいのがあった。「殺人計画完了」という題名からして一寸縛りを連想さす作品だが、案の定、日高澄子と新人多摩桂子の二人が充分に縛り姿をタンノウさせてくれる。日高澄子はその豊満な姿で仲間を売ろうとする大阪志郎の情婦だが、そのために地下室に連れてこられ、縛り上げられる。黒のイーヴニングドレスの右肩をすり下げ、荒縄で三重四重に縄う小椅子に腰掛けされている。まさに後手縛りだ。左幸子も同じギヤングの親方に捕えられ、猿ぐつわをはめられ、白い布で後手縛りでだきかかえられ、銃口にさらされる。一寸見ごたえのあるシーンだった。

連載小説

赤い花は泣いている



(最終回)

松井 籟子
北原 純子・画

しめ切った部屋に、女二人の香料と汗の匂いがムーンと漂っていた。

舞踊にはよく棒を使う。
汐汲の肩にかついでくる華奢な、竿のような棒も、稽古の時はおう少し太い。その棒が奴の毛やりになったり、舟をこぐ櫂になったりもする。

だから、稽古場には、何本かの棒がいつも用意されているのだ。しかし、今日の様な使い方をされたことはないだろう。

照子は縄と棒をまとわされているとでもいえないのか、体の方々を棒で責められていた。まるで体中から角が出たように……云いかえれば、美しい長繻袴の赤さは花の芯でそこから、およそ花の芯とは似つかない棒の花びらが四方にのびているのだ。

「苦しい？」

と、問われても、答えられない。ただハーハーと、せわしい息をついていた。

脚の脛と腿との間に通された棒は肉にくいこむように脚を圧迫する。後手に縛られた手首と両脇の下を一文字に通された棒……。それへ斜めに渡された棒。

そして、艶子は今、もう一本の棒を照子の咽喉にあてがって、その棒の両はしを、斜に渡った背の棒と結び合わしている。

手が少し下っても、咽喉の棒が咽喉をしめつけることになる。そして、その後手は無理に体から浮かされているから、二の腕も肩もメリメリと音をたてて崩れそうに痛い。痛いというよりは苦しい。

「どう？ 少しはこたえる？」

艶子は平然と、笑いながら照子の苦しみを見ているのだ。

照子は何にも云わない。観念したように目をしてじっていた。

「目をあけなさい。フフ、。怒っているの。今日は貴女にあの女の人のことを聞こうと思って呼んだのよ。とんだ浦里になってしまったわね。こんなにうまくいくと思わなかったわ。さあ、仰云いよ。それとも、貴女もおかしい？ うかうかと私のわなにかかってしまつて……。おかしかったら笑いなさい。ほら、こうすると笑え

てよ」

艶子は照子の口のはたを両方の指で上へおしあげた。

何をされても、艶子にはどうすることも出来ない。

「フフ、。面白い顔……。ついでにお面をかぶせてあげようか」

艶子は戸棚から、『三つ面子守』に使うお面をとり出して来た。

「どれがいいかな」

艶子はおかめの面を照子の顔にあてがった。そして

「フフ、。」

と、ふき出すように笑った。

「よく似合うわ。もっと似合うようにしてあげよう」

艶子是这样いとうと照子の脇の下をくすぐった。

「あっ！」

照子は身をよじる。けれど、棒でさえぎられて、身動きすることもあるようにいかない。

「ほら、おかめの面にふさわしいでしょう。どう？ くすぐったい？」

艶子のやわらかい指が、脇の下から、のど、腰と、方々へとぶ。

「あっ！ ああっ！」

声はお面にすいとられてしまう。

おかめが身悶えする姿は滑稽でしかない。そこにひとりの女の苦痛がかくされているとは思えない。

縛られて、苛められて、嗤われることのつらさは、照子にとっては不思議な陶醉だった。体が燃えてくる……。

すると、思いは夏雄に向う。夏雄を美沙子にとられたくないと思う。艶子に美沙子のことを告げることは、夏雄をとられることにな

りはしないか……。

「あんたも強情ね。いいかげんに白状したらどう？」

艶子は云う。

「あんたもあの女を好いているわけではないんでしょう？ 何か云えない事情があるなら、よく二人で話合えばいいじゃないの。あんたの不利になるようなことはしないわよ。ねえ仰云いよ。それとも、もっと責められたいの？ 責められたいなら、いくらでも痛くしてあげてよ」

艶子は照子の太腿を足でギュツとふんだ。

そしてグリグリと足の裏でふみつけられると腿と脛の間に通された棒が、そろばん責めの様に脚にくいこむ。

「ううっ！」

と思わず照子は悲鳴をあげた。

「云わないの、どうしても云わないの」

艶子は足に力を入れる。

「云うわね、云うでしよう？」

照子は艶子の言葉に、ガクンと頭をたれた。

一一

照子と艶子の間に、どんな話がつけられたのか、その翌日のことだった。

「美沙子さん、お客様ですよ」

伯母に云われ、美沙子が玄関へ出て行くと、

照子が立っていた。

「あっ！」

と、美沙子はとたんに踵をかえそうとした。しかし

「突然あがってごめんなさい。どうしてもお耳に入れたいことがあったので……」

と照子に云われ



(夏雄さんがどうかしたのだろうか?)

真先にそう思った。玄関から追い返えすわけにはいかない。

「どうぞ、おあがりになって……」

そういうよりなかった。

照子は物おじもせず応接間へ通ると、無遠慮に部屋を見廻した。

「どうぞ、おかけ下さい」

美沙子がいうのに、持って来た花の包みをさし出して

「御存知でしょう、このバラ……。少しとって来てあげたのよ」

親しみ深そうに云った。

「バラ……」

美沙子は胸へこみあげてくるものがあつた。夏雄の家のつるバラと、すぐにわかつた。

(では、やっぱり、何か夏雄さんのことを……)

告げに来てくれたのかと思うと、それが、いい知らせなのか、悪い知らせなのか、聞く前から胸がどきどきする。受取った赤いバラを、抱くように持って、照子に礼を云うのも忘れて、その赤い色をじつと見つめた。

「お水の中へつけて来て下さいな、しおれるといけないわ」

照子に云われ、ハッとしたように

「有難うございました。じゃ、一寸、失礼します」

美沙子は台所へ走った。

湯殿の洗面器へ入れておこうと思ったが、バラは夏雄の瞳のような気がして、この間、みじめな姿にされた湯殿を、さける気持が自然にわいた。

けれど台所へ行ってみてたが、バラをつけておくような適当ないれ

ものもなかったし、第一人目にふれるのが厭だった。家の人達にそ

のバラを見られたくなかつた。夏雄の家の垣根に咲くバラ……。そ

れを照子が切つて来てくれたのは、照子の意志なのか、夏雄の云い

付けなのか解らなかつたが、ついそ一度も便りをくれたことのない

夏雄の、それは、無言の便りの様にも思えたのだ。

美沙子は照子をひとりで待たしていることが気になったが、自分の部屋の花瓶にさしてから、応接間へ戻った。

「大変お待たせして、失礼しました」

そう云いながら応接間へ入って行った美沙子は、思わず

「あら？」

と、声をあげた。

照子の姿が見えなかつた。

急いで玄関へ出てみると、靴がない。いつの間にか帰ってしまつたらしい。

照子はある合わせた下駄をつっかけると、門まで駈けて行った。通りの向うに後姿を見せて、照子が小走りに駅の方へ去って行くのが見えたが、追いかけるには距離が離れすぎていた。

(何しに来たんだろう?)

美沙子は思った。

(便りに書けない夏雄さんの思いを伝えに来てくれたのだろうか?)

いいえ、そんな筈はない。夏雄さんが私を愛してしてくれる……。

わざわざ照子さんを使いによこして……。そんな筈はない。美沙子うぬぼれるんじゃないよ)

彼女は自問自答した。

けれど、部屋にさしたバラの花を思うと、嫁いで来てはじめて、

美沙子の心にポツと灯がともったように、嬉しさが波のように打ちよせて、明るく顔までが輝いてくるような気がした。

「お客様はもう帰ったの？」

伯母に云われ

「はい」

と答えると

「何だかばかに嬉しそうだね、お友達ならゆっくりしてもらえばよかったのに……」

伯母は云ったが

「まあ、どんなに仲のいい人か知らないが、ああいう人は家へは来てもらわない方がいいね、まともなおつとめの人じゃないだろう？女給さんかい？ 美沙子さんにも、あんなお友達があるんだね、ホホ、」

とってつけたように笑った。

二

その夜、夫が帰えってくるまで、美沙子は照子が何の為にわざわざたずねて来てくれたのか、思い惑っていた。

ともすれば夏雄を思って、期待をかけてしまう。そして、又それを打ち消す。自問自答しながら、夜になった。

正樹が帰えって来て、応接間においてあった革の目覚時計がないと云い出した時、美沙子はハッとして、照子のことが一番さきに頭に来た。

(ひとを疑っては悪い……)

そうは思うが、他に、応接間へ通った客はなかった。

「お客さんがあったそうだね」

正樹は云った。

「はい」

とは云ったものの、美沙子は照子のことをどう云っていいのか困った。

「あの時計は金で買えない時計なのだ。もっと注意してくれなければ困るじゃないか」

目覚時計といっても、革のケースに入った折畳の出来る精巧なもので、正樹が友人から贈られたドイツ土産だった。

美沙子は初手から照子を疑ってかかっている正樹の言葉にムツとしたが、しかし、美沙子にしても、他に考えようがなかった。

しかし、照子の姓さえ知らない。まして住所も知らない。

「どういう友達なの？」

正樹はしつこく聞く。

「あの……学校時代の……」

「たずねてくるなんて、随分親しかったんだらう？」

「いゝえ、同窓会名簿でも見たのじゃないかしら？」

「伯母に聞いたら、花を持っていたというけれど、その花どうした？」

「あの……私の部屋へ」

「客をひとりで放っておいて、花をいけに自分の部屋へ行ったのかい？ 何故バケツにでも何にでも、手近なものへ入れておかなかったんだ、そんなに大切な花なのか？」

「いいえ……」

「持って来なさい」

「え？」

「その花を持って来てごらん」

「はい」

美沙子は自分の部屋へ入ると、思わずバラの赤さが目にしみたように涙が出て来た。(何故……？ 何故……？)

照子が赤いバラを持って来たのがどうしてもわからない。自分の心の弱味へつけこまれたような気がする。そして、それよりも、そのバラに夏雄の心を思い、一瞬の夢をえがいていた自分が悲しい。うぬぼれるな、うぬぼれるなと自分をいましめながら、夏雄の愛情を、そのバラの一輪一輪に夢見ていた幸福な思いが、滅茶くにくずれてしまったのが悲しい。

(夏雄さん、あなたは……)

半日の心のぬくもりは、自分でこしらえた砂の上の城だったのだろうか。

美沙子は照子を憎むよりも、自分が恨めしい。

「どうしたんだ？」

正樹が入って来た。

美沙子は急いで涙をぬぐった。

「僕に嘘をつくのでもいいかげんにしてくれ！」

怒ったように正樹が云った。

「いったい何があるんだ。お前のこの胸の中には、いったいどんな秘密があるんだ！」

正樹は美沙子の衿をギュッとつかんだ。

「ゆるして……」

美沙子は涙にぬれた顔で夫を見上げた。

夫はつかんだ衿をしほるようにねじ上げて、激しくゆすった。息がつまった。

「苦しい……」

美沙子はせきこんだ。しかし、正樹は手をゆるめなかった。美沙子の目からポロポロと涙がこぼれた。

四

「出来心ってことはあるかもしれませんが、私、友達に会って聞いて来ます」

美沙子は夫をなだめて言った。言いながら、そうだ、夏雄さんをたずねる口実が出来たと思った。照子が本当に時計を盗んだかどうかは知らない。しかし、少くとも、彼をたずねることに不自然さがなくなったわけだ。

(夏雄さんに会える……)

今までの涙が一ぺんに引いてしまう思いがした。

しかし、正樹は冷たく云った。

「では、僕がついて行ってやろう」

「あなたが……？」

「迷惑かい？」

美沙子はだまって唇をかんだ。

自分の夫を夏雄に会わせる……そんなことがどうして出来るだろう。いや、それよりも、自分の心の中から消えない面影を、どうして夫の目の前にさらすことが出来るだろう。「でも、私、今日来た人の家はよく知らないんです。他の友達に聞いてから、行ってみようと思いますので……」

「どこでもいいよ。一緒に行って、そこから又一緒に探せばいいじゃないか」

「ええ、でも……」

「美沙子！」

正樹の額に、青い筋が走った。

「僕と一緒にいくことが、そんなに厭なのか？　どういうわけがあるんだ？　どうしてそうお前の態度は曖昧なのだ」

正樹の手がぐつとこのびて、美沙子の手をつかんだ。

「云え、君の秘密を云え！」

「秘密なんて、私……」

「ないというのか、女は月に二度もメンスがくるものなのか？　結婚式の日にもメンスだと云って俺に恥をかかせ、その月のうちにもう一度メンスがあったじゃないか。そして、この間の女といい、今日のことといい、何かお前はかくしている。どこかにお前の情夫がいるのか？」

「情夫なんて……」

「お前は処女じゃなかった。誰に処女を捧げたんだ。云え！　云わないか！」

「うそです。私は、私は男を知りません、私はあなたに……」

美沙子の言葉をさえぎって、正樹の片手が、彼女の頬にとんでいった。

「あっ！」

「俺をバカ扱いするのか」

正樹は彼女を握っている手をぐつと引いた。美沙子が前のめりに彼の方へ倒れかゝるのを、膝の下へ引きすえると、美沙子の首すじ

をつかんで畳へぎゆうぎゆうこすりつけた。「時計だってその女が盗んだのかどうかわかりやしない。お前が盗んだんだろう。そしてその女にお前の情夫の所へ届けるようにことづけたんだろう？　だから、俺にはつきりしたことがいえないんだ。こんなバラをもらいやがって……」

正樹は花びんからバラの花をぬくと

「そんなに大切な花なら、頬ずりしてやるといい」

冷たく笑いながら、バラを彼女の頬に押しつけた。バラの刺が頬にささった。

「ほら、胸にもだいてやれ」

美沙子の胸を押しひろげ、バラの花を押しこむと

「しっかりできるようにしてやろう」

美沙子の腰紐をぬきとって、バラをおしこんだ胸の上から、縛った。

赤い花は彼女の胸で押しつぶされ、莖のするどい刺が針のように乳房をさした。

「あっ！」

思わず美沙子が手をのぼして、胸へまわす紐をはらおうとすると正樹は、その手を逆にとって、後手にねじ上げた。

美沙子は、彼女の白い胸で崩れたバラの赤い花と同じように、着物の前を乱して、後手に縛られてしまった。

五

赤いバラがつぶされたまま美沙子の胸で雨に濡れている。

肌着も着物も濡れそぼれて美沙子は庭の木蓮にくぐられていた。

後手のまま、黒い土の上にじかに坐らされて……。裾も脚も泥にまみれている。木の根元へつきとばされて、後手の不自由さに、顔まで土につけたのか、色白の頬にも泥がついている。その上を雨で涙と一緒に、筋をえがいていた。いつまでこのまゝでおかれるのか。



正樹は彼女を木につなぐと

「俺が悪い、自分が悪い、よく考えてみる」と云い残して、家の中へ入ってしまったきり出て来ない。

雨蛙がピヨンととんで、彼女の顔を見ていたが、膝から、胸、肩へととびあがってきた。乱れた衿元から、片方の肩が丸く露わになっていた。蛙は無気味に冷たかった。

美沙子は、体をよじってはらうとしたが、汚点のように動かない。

(何もかも、夫に云ってしまおうか) 美沙子は思う。

けれど、夫に打ちあけたら、そのまゝ許してくれるとは思わない。もっと手荒な仕置きが待っているような気がして恐いのだ。

夫はとうとう自分を罪人のように縛ってしまった。雨の中を泥にまみれ、つながれている自分のみじめな姿は、結局は美沙子自身の罪のように思われるのだ。

(いったい私はどうなるのだろう) そう思うと、舌でもかみ切ってしまう程心がうつろだった。このまゝ何日も何日も、縛られ

たまゝで、花が朽ちるように朽ちはてるのだろうか。死ぬということとは苦しいことだろうか……。

美沙子は死の苦しさがどんなにひどくても、じり／＼と生殺しになっているよりいゝと思った。しかし死ぬなら、どうせ死ぬなら義理も何もふりすてゝ、一と目夏雄に会ってから死にたいと思った。

庭さきに足音がした。

伯母が傘をさして近付いてくる。

美沙子はうなだれた。縛られた姿を、人に見られるのは恥しかった。

伯母は片手におむすびを持っていた。

「おなかゝすいたろう。おあがり」

と、目の前へ出されても、手の自由をうばわれていて、どうして食べられよう。

「あんたの旦那さまのしたことを、私かとにかくいうことは出来ないから、縄はといてあげられないんだよ。まあ、ひもじいだろうか、これくらいおあがり」

伯母はいう。

美沙子はだまっていた。ものをいうのも恥しかったからだ。

「折角作って来てあげたんだから、おあがりよ」

目の前へつきつけられても、犬のように人の手の平から、おむすびを食べることは出来なかった。

「食べないのかい。手が縛られていると食べることも不自由なのかね、どう、食べさせてあげよう」

伯母は美沙子の口へ無理やりおむすびを押しつけた。

美沙子は唇を閉ざしてじっとしていた。

「おあがりというのに……」

伯母におしつけられ、美沙子が首をふったので、伯母の手から、おむすびが土の上へおちた。

「もったいない」

伯母は云うと、泥にまみれたおむすびをひろいあげたが。

「ひとの好意を無にするんだね、いゝよ、わかったよ」

きつく云うと、家の方へ戻って行った。

美沙子がホッと溜息する間もなく、今度は正樹とつれ立って出て来た。

「美沙子」

正樹はいうと、伯母から受取った泥のおむすびを、

「お食べ」

と、命令した。

「口を割ってでも食べさせてやるよ。痛いめをみないうちに素直に食べるね」

美沙子はうなずいた。もう抵抗しても、しかたないと、観念したのだ。

「伯母さんにあやまりなさい」

「はい」

「ちゃんと、額をつけて」

「はい」

美沙子は体を前かゝみに倒すようにして、地面の上へ額をつけた。手は縛られたまゝ木につながれているので、後へ高く引かれ、彼女は頭をさげるのに、顔へ血が集るような気がした。

「すみませんというのだ」

正樹はいう。

「すみません」

美沙子はおうむ返えしに云った。

「そんなら、これを食べなさい」

正樹は犬にでもやるように、地面の上へおむすびをおいた。

美沙子はうつむいた顔を泥だらけにして、おむすびを食べた。手を後に引かれ、体を二つに折って胸を圧迫していて、どうしておむすびがのどに通るだろう。まして、泥まみれのおむすびが……。

けれど美沙子は従順だった。

(この苦しさを通りこせば、必ず夏雄さんに会える。神様はそれ程不公平ではない筈だ。苦しみ苦しみ、苦しみのおとには喜びがある筈だ)

美沙子は心の中で叫んでいた。

これ程ひどいことを夫にされたら、夫を裏切って、夏雄のもとへ走っても、誰かに許してもらえるように思われたのだ。

六

「雪姫幻想」の幕があがろうとしていた。

美沙子は正樹の横で舞台をよそにうなだれていた。二人揃って並んでいればよそ目には仲のよい若夫婦に見えるだろう。

艶子の発表会に正樹が出て来たのは、その招待券と一緒に艶子から

——お時計おあずかりしています。奥様をよく存じ上げている方も今日おみえになる筈なので、御一緒に御光来下されば幸いです——という手紙が来たからだ。

今日こそ妻の秘密をつきとめてやろうと正樹は思ったのだ。

しかし、それにしても、時計を預っているというのはどういうことなのだろう。わざと時計を盗ませて、妻を責めさせたのは、艶子の策略だったのかと、正樹は意外な思いがした。

幕があいた。

桜の花の下に、艶子の雪姫が縄にかゝっている。曲は長唄とも清元ともつかず、琴をいれて、新しい作曲のしかたをされていた。

かきまわすような琴の音につれて、雪姫が苦悶に狂い乱れるような急調子のふりになると、美沙子はじっとしていられなくなった。

艶子と正樹との関係を知らない彼女は、夫が自分を恥かしめにつれて来たような気がしたのだ。

囚人のように雨の日につながれて、泥むすびを食べさせられた記憶を、もう一度あらたにさせる為に、ともなわれたように思う。夫に自分をからかっているの……だ。そう思うと、美沙子は席に腰をおちつけていられない。

そっと立って、廊下へ出て行った。

廊下のソファに腰をおろし、しばらくじっと、目をつむっていた。

「美沙ちゃん」

声をかけられ、顔をあげると、夏雄が立っている。

美沙子は一瞬、夢でも見たように、指で目をはらった。

「美沙子ちゃん、瘦せたなあ」

写真機を片手に、美沙子に微笑みかけている夏雄が、夢の中の人ではないと気がつくのと、とっさに、美沙子はあたりを見廻した。

ドアのすき間から琴の音がする以外には、静かに人影もなかった。

た。

「夏雄さん。一緒に出て、早く」

美沙子は夏雄の手をとると、必死の勢で引張った。

「訳はゆっくり話します。何にもいわず、こゝを逃げて……」

美沙子は云った。

「逃げる？」

夏雄は美沙子は引っぱられて、大股について行きながら聞いた。

「そう、逃げるのよ。私、今、逃げないと、死んでしまう。逃げて

とに角、此処を……」

夏雄は美沙子に手をあずけたまゝ、劇場の入口を出た。

後で一と声

「美沙子！」

と、高く呼ぶ声が聞えた。

「あっ！」

数々の悪条件にも屈せず、奇譚クラブが復

刊し、その後充分とはいえないにしても、確

実な歩みを続けているということは偉とする

に足る。安易で常識的な世人の指弾は、この

日本（或いは世界にも）唯一の特異誌を、ま

るで犯罪の温床であるかのように扱って、心

ある者に悲しい思いをさせた。

はじめから色めがねをかけた先入観念で、

本誌をただパラパラとめくっただけで、ただ

ちに「エロ雑誌」ときめつけられては、読者

と、美沙子はいうと、

「夏雄さん、見つからないうちに、早く、早く……」

せき立てられるように、夏雄の手をはなすと、美沙子はパッと舗道を横切ろうとした。

その時だった。

横から自動車が、夏雄の目の前を魔の様に走ったが

「キーキー」

という、厭な音を立て、止った。

舗道に倒れた美沙子を、夏雄が抱きおこそうとした時、美沙子は安心したよう微笑みを夏雄になげた。そして、夏雄の膝でかたく目をとじて動かなかった。

くしやくしやに潰れた赤いバラが一輪、美沙子の袖に、大切なものゝようにしまわれていた。

(完)

編集者は救われない。

この雑誌に登場する告白も手記も小説も、

みなそれぞれに、まごうことなき人間の性癖

の真実である。下劣な興味本位のエロ三文小

説と混同されてはたまらない。

医者にも、性科学者にも判らない性癖の深

部細部までが、かくも赤裸々に描き出された

報告（それも驚くべき広範な階層、年令層に

わたって）が、奇クを除いて過去にも現在に

も存在したろうか。

親にも医者にも相談することのできない事

実を、訴えることのできるのはただ奇クだけ

であり、奇クだけが理解のある眼で受け入れ

てくれるのである。多くの人々にとって、こ

の心の安らぎは、大きいことと思う。

したがって、奇クに於ては虚偽は登場しな

い。通用しない。ニセモノの投稿は先ず編集

者が見破る。その網の眼をくぐっても次に、

きびしい読者の眼がするどく見わけける。ここ

に於て、奇クの文献性の価値は大きく、貴重

になってくるのである。

(ここからダラクしたら奇クの存在価値はゼロになるであろう)

私は時折、ふと、医者や心理学者や、性科学者たちは、奇クの定期購読者になって研究

の一資料にしたらいのに、と思うことがある。

作家なら、これもまた奇クの読者になって、この方面からも人間探究の勉強をしたらどうか。奇クの価値はただの稀少価値だけでなく、そうした人間性の一面の真実を記録する文献性にあるのだ。

たとえば、ここに奇クが発行不可能になったと仮定する。すると数々の珍奇な事実は、たちどころに闇から闇へ消えてしまう。その時になって一部の研究者や好事家が、いざ蒐集しようと思っても、集まるものではない。奇クの歴史、地盤だけが独得の雰囲気を出して、異常な記録を広範囲に編集する能力をもっているのだ。

復刊後の奇クに「自分の好みの記事が少な



「奇譚クラブに

寄せて」

真木不二夫

かも知れない。

店頭にみられる一般雑誌の中に、自分の傾向のものが、わずか半頁でも発見した時の嬉しさは、本誌の読者ならば誰方でも経験すること、その半頁一頁のために百円、百五十

円を投じて、その雑誌を買い求めたことも各自御経験のことだろう。わずか一七六頁の誌面に殆どあらゆる傾向が詰めこまれている本誌は、みかたによっては豪華な雑誌ではないか。

これから五年十年たつと、今は不満だらけの奇クも、その時は好事家の間でおそろしく高価な価格で取引されるかも知れない。奇クはそんな雑誌である。

世の中は益々生き難く楽しみ難く、苦しみのみが多くなってきた。編集者と読者の間の緊密な理解と誠意、これが今後の奇クを伸ばすか、またはつぶすか、の重要素である。少し賞めすぎたかも知れぬが、以上が一読者の感慨である。

☆文 献 紹 介☆

私のコレクションより

かご ま そう きち
角 間 莊 吉



變態作家列伝 井東 憲

◇好色風俗史講座 第三巻◇

昭和七年五月十五日、風俗資料刊
行会発行 — 従前 —

モオパッサン

「噫、狂者のみが独り幸福である。彼らは現実の感情を喪失して了っているからだ」此言葉は、狂える文豪モオパッサンが、自分自身の心理的異常を予知した時、言った言葉である。が然し、此の悲痛な人生では、この痛ましい彼の言葉も又一つの真理であるのだ。而も、人生の真を得ようとして、獣性を得たモオパッサンの言葉である時、一段と意義が深

いのだ。

批評家センツベリイは、彼の事を、「仏蘭西十九世紀末に於ける最も完美した作家である」と言った。正しく至言だ。彼は所謂「氣質を通して見たる自然」なる、自然主義を主張した。文定史上の革命家エミール・ゾラと共に、自然主義文学派の偉大なる巨頭なのである。

一体、モオパッサンは、厳正なる意味の人生の観照家であった。だから従って、彼の作品は、皆人生のノートの再現であり、其題材は、何らの差引なく「人生の一片断」そのまゝであつたのだ。その有るが儘の現象を如実に観照し、自然のまゝに偽りなく再現して行った所に、彼の強味と特色とがあるのだ。彼に取っては、現実の世界ほど、冷酷で無情でうらさびしいところはなかった。凡ゆる自然力は、恐ろしいほど無意識で、強情で頑固で石のようにどうにもならなかった。小さな可哀そうな人間は、その冷たい自然の力の下で、どんなに苦悶し懊悩して悶絶しようが、現実の無情な力は、そんな小さな人間のなやみや苦しみなぞには一向に御関いなく、ずんずん自分の行きたい方へ、進んで行って仕舞う。そして、要するに此の現実の人生なるものは此の見えざる自然力との、涯しない苦闘なのだ。而も限りなく眼に着くものは、実に不快な醜惡な不満足な、悲痛そのものの人生に過

ぎない。——モオパッサンほど、此の見えざる自然の威力を痛感し、而も見えざる現実の奥に潜む魔力の恐ろしい真相を細心の精確さを以て引抱えた作家も少ない。

彼の描いた多くの現実描写の作品には、此の盲目なる自然力の前に取りひしがれ、蹂躪され、打負され、投捨てられた、淋しい無力な人間の生活が、何よりくつきりと痛い程痛切に描かれているのである。こゝが即ち彼が自然派の文学者として偉大なる所以である。

モオパッサンは、前述したように完成した自然主義者であったが、たゞ単にあるが儘の浅ましい悲哀の人間生活を、注意深く掘り下げて行ったばかりでなく、彼一個としては、又一種のアイデヤリストだったのである。所謂人間の光明性の捷利と榮譽とを、前進的な力強い筆致で描いて行く理想主義者ではなかったまでも、とに角、この惨虐な現実生活に堪え忍んで、闘い乍らも生きて行くというところは、矢張り一種の理想主義者でなければならぬ。

彼の苦痛は、慥かに二重であった。即ち、現実のたより無い恐ろしい姿を凝眸と見究めて行こうとする自然主義者の悲哀——其れと共に余りに暗い恐ろしい現実を廻避して遁れ出ようとする苦痛——そしてそこへ湧立つ人間的な光明——と此の二重人格的な苦悶が、どうして人間の疲れた頭脳を狂いに迄引きま

どわす苦痛ではないと断言出来よう。

彼の狂人なる悲劇は、一面にあっては、生来の素質癖であつたかも知れない。余りに無定見な遊蕩家であつた為かも知れない。

フランス自然主義の大立物、アーリー・ルイ・ギイ・ド・モオパッサンは、自然主義派の元祖フロベールが、一代の傑作「マダム・ボヴリー」に着手した年、即ち一千八百五十八年八月十五日に、仏国セイヌ・アンフリウールのミロメニルの館に生れた。其小さな館はセーヌ河のずっと下流にあつて、何でも借家であつたと云う事である。文豪を生んだモオパッサン家は、十六世紀以来の旧家で、父はギユスターヴと云つて、フランスソワ皇帝の寵愛に依つて、貴族にまで列せられた人であると云われている。母はノルマンディの富豪の娘で、ロール・ボゲットヴァンと云つた。

此の母は非常に文学趣味を持った、所謂我が子に理解を以て愛する母親であつた。モオパッサンの伝記家の説に依ると、一面に於てはこの理解ある母親があつたが故に、モオパッサンはどれ程感化され薫陶されたか知れないと思われる。彼の両親の家庭は、決して円満ではなかつた。彼の母親は、彼の弟のエルヴエが生れる頃から、遂に夫と離婚して、彼を連れてエトルタアに隠棲して仕舞つた。（尤も母親は離婚して仕舞つてからも夫と時々会つたそうだが）で、モオパッサンは十三才に

成るまでこのエトルタアで暮したが、彼の少年時代の生活は、彼のその頃の事を書いた作品を見ても分る通り、可成り愉快な美しいものであつた。彼は快よい夢のように美しく其頃の生活の事を描いている。彼は十三才の時母の勸説に依つて、イヴトオの神学校へ這入つた。が然し、彼は性来宗教的な仕事は大嫌いであつたから直き学校を止めて仕舞つた。彼が、詩と云うものに心を向けはじめたのは抑も其頃からである。

彼はそれから又、ルーアンの中学校に入学した。その中学はどうか卒業したが、学校の事より詩作の事が、ずっと上手になった。それは母の幼馴染でフロオベールなぞとも親友であつたルイ・ブイエと云う詩人に詩作の事を教えられたからであつた。が、その詩人は、彼が十九才の年に亡なつて仕舞つた。モオパッサンが、恋を知り初め、盛んに恋愛詩を書きはじめたのは、其時分からである。やがて一八七〇年は来た。彼は二十才の青年となつた。其年普仏戦争が起つた。その戦争があやしい煙の裡に終局をつけると、彼はなつかしき住み馴れた土地をあとにして、巴里へ出た。彼はパリイでは、海軍省に一腰弁として奉職した。彼の小説中へ能く出て来る種々な官吏は、その頃得た経験の結果なのである。彼は巴里へ出ると直ぐ、母の兄と共に、フロオベールのところへ出掛はじめた。

其時分の彼は、非常の肩幅の広い、実に立派な体格の持主であった。彼は八十年に、はじめて処女詩集を出したが、それは余りに風俗壊乱的なもので、あやうく告発されそうになった。それから彼は、じき、詩作にも嫌なアンニユイを感じ出して、何にもしないで、只ぐずぐず其日を送っていたが、師のフロオベエルにはげまされて、此度は創作の方面へ頭を向け出した。そして、師の創作の手伝なぞをしながら、熱心に練習した。斯くして、彼の処女作「ブウル・ド・スイフ」が発表されたのは、彼が三十一年の歳であった。此の一作に依って、彼は一躍して忽ち文壇の流行児立場となつて仕舞つた。然うして、此の八十年以後十年間の彼の生活は、全く、作家の生活であつた。彼は創作を能く熱心に行ったが、「人生の凡ゆる快樂」も、始終追つて止むところを知らなかった。また單調な馬鹿らしい生活を忘れるために、処々方々へ旅行を企てた。八十年にはコルシカへ、八十一年にはアフリカへ、又アルジェリー旅行、八十二年にはブルターニュへ、八十五年には伊太利へ、それから又『水上』に書いてある通り、愛するヨット『ベルアミ』に乗つて、地中海の旅行もした。

モオパッサンは、少年時代から青年時代の初期へ掛けて、外見上も、内部的にも中々健康者であつた。が、彼の評伝家に依ると、彼

は千八百七十八年頃から師のフロオベエルに身体の工合の悪い事を時々訴えていた。という事である。それに彼は、人並はずれた道楽者で、此の世の歡樂という歡樂は、皆なむさぼりつくさずには措かない。といったような猛烈な遊び手であつた。従つて、彼の生活は随分非衛生不摂生な乱暴なものであつたらうと思われる。其処へ持つて来て、創作上の不調の過勞である。彼が始終頭腦の病氣で苦しんでいたのは、まことに当然としなければならぬ。彼は、創作を職としはじめてから、不調の精神過勞になやんで、常にコカイン、エーテル、モルヒネ、其他の精神沈静薬を机上に絶やした事がなかつた。彼の病狀が、益々悪化して進んだのは、八十四年頃からであつた。そして、それらの悩みは「ル・ホルラ」「ロンドリ姉妹」等の作品が、能く語っている。又彼は、自分の歡樂病と、毒を注ぎ込まれたような不斷の病苦とを忘れようと思つて盛んに旅行した。が、然し、その結果も、大してよいものではなかつた。彼の病氣は、八十七年から八年へ掛けて、すさまじい勢で、悪くなつていった。八十九年には本物の狂人になつて了つた。どの友達でも彼の狂氣を知らない者はない程、恐ろしいものになつていった。それから彼は、医者の忠告に依つて、種々と治療の方法を講じたが、一向に良くはならなかつた。斯くて、九十一年の末頃から

は、自分でも變態を認めなければならぬほど、身体の調子が狂つていった。彼は自分がもうとても救われない病氣に罹つてゐるのだと自覺すると『衰弱しつゝある最後の努力を以て是非とも自殺を』決行しようとした。彼は最初、ピストルを用いようと思つたので、自分の机の抽斗をば開けて見た。彼は、そのピストルを、蒼白い顫える手で取上げて、狂的に座撃してゐる額に押当てて発砲しようとしたがピストルは幸に弾丸を抜かれてあつた。それは、彼の従僕が、万一の場合を慮つて、故意と弾丸を抜いて置いたのであつた。

其後彼は又、あまり切れない紙切を以て、咽喉部を切断しようとした。が、彼は手元が狂つて、頭から顔面に掛けて深手を負つただけで、未だ死に切れはしなかつた。平常から彼を警戒していた従僕は、彼のただならぬ叫声を聞くと、ル・ベラミの船員と共に駆け付けて彼の手から紙切を抜き取つて仕舞つた。其の事を彼は「自殺」の中でくわしく書いてゐる。彼の創傷は、直き癒つたが、激浪のように暴れ狂つた彼の精神狀態は、少しもよくならなかつた。斯くて彼は間もなく「一個の狂人」として、病院の中へ入れられて仕舞つた。病院の中では、彼は、純然たる狂人であつた。彼はとうとう、最後の時まで病院にいて、狂つた儘、「狂える者の幸福」までも感じないで、永久にこの世と別れて仕舞つた。

文豪モオパッサンの熱愛した凡ての物、就中ル・ペラミも、彼が夜毎に耽った甘い肉と血の美しい歡樂の夢も、精彩無比な彼一流の尊い創作的熱情も、凡て、彼とともに永久なる沈黙と冷土との中へ、あえなくも消え入って仕舞った。それは一八九三年の七月六日であった。

ボオドレイル

一、彼の人格についての世評

悪魔主義者ボオドレイルに対しては、種々様々な批評がある。ストルムは「彼の芸術は真珠のような美を持っているが、又非常に病的である」と云っている。ノルドウは、その論文の中で、「彼は自我狂の御大将だ」と云って居る。又、パウル・ブルヂエは、「神秘家、遊蕩家、分析家」と冷やかし、ヒュネカは、「個人主義者、自我妄想者、アナキスト」と云い、マンデスは、「悪い意味のプリエメル閣下」と云った。そして又、「彼は神秘家で、錬金術師で、色氣狂の猫だ」という事で誰も一致しているところである。

二、その生涯

シャルル・ボオドレイルは、一八二一年に（が一八三一年説もある）官吏として可成り有名な十八世紀型の紳士を父とし、父よりも三十六も若い婦人を母として巴里で生れた。父は其時六十二才であった。父は彼が生れる

と、直き死んだ。若い母は、父の死一周忌も来ないのに、アウピクと云う人に嫁した。が、勿論、結婚は彼にいい結果は齎らさなかつた。二人の愛の前では、いやにひねくれた神経質な、しかも「常に極端に礼儀の形式を重んじていた子供」などは、常に忘れ勝ちであつた。ボオドレイルは、蒲柳の少年であつたが、何処となく、厳格なところの有る、学者風の才能のある少年であつた。が、この学生は、いやに早熟で、虚飾家で、妄想家で短気であつた。しかも何かにつけて、母や継父をハムレットの如く不義者視していた。それに最も継父を嫌がらせた事は、彼に文学熱が氣差している事であつた。で家庭には常に風波が絶えなかつた。そんな訳で、彼はリヨンのロイヤルカレッジからパリーのルイグランド校に移つたが、一八三九年に放校されて了つた。（ヒュネカに依る）その結果、彼は五千フランの金を懷中して、（実業見学のためともいう）印度諸島へ航海に出掛けた。それは四一年の五月であつた。彼はモリチオス、ブルボン、セイロン諸島に遊び、聖なるガンヂス川を見物し熱帯地方の色彩、風物、香気なぞを我物として来た（但しヒュネカに依るとブルボン島に十ヶ月滞在しただけで、ホームシックに罹つて帰つたといわれている）彼は東洋旅行から帰郷すると、一万五千弗程の財産を貰つたが、放蕩と淫樂のためにまたゝく

暇に消費して了つた。二年後には無一物となり、負債に苦しみ、無能力者として後見人を附けられる有様であつた。其頃彼は二十一歳であつた。彼は自ら、「詩人にしてハイカラ」と氣取つていたが、服装は黒味がかったシャツに地味な英国風の衣服を身に着けていた。背は中背、鶯色の服は感覚過敏に輝き、鼻は恐怖に顫え、顎は四角であつた。そして奇麗に手入れした顔は、偽僧の如く、鈍いだが敏捷な眼光は、いつも遊蕩児らしく狡猾であつた。彼は、好事家やデカタンの集合所なるホテルピモダンに始終出入りしていたが、四四年にはとうとう寄宿する事にして了一种の文学的寄宿生活である。この頃彼は友人ボアザルと共に、頻りに昂奮剤を用いて耽溺生活を送つた。一生の痼疾であつた変態心理的麻痺に罹り初めたのも此頃からである。彼に取つては、芸術即生活、生活即芸術であつた。靈魂と肉体とは二元的の存在でなく、常に一元的の存在であつた。だから、彼の肉体的昂奮は、又芸術的昂奮でもあつたのである。彼の芸術的真珠は、病める真珠貝の病氣の結晶であつたのである。彼はこの怪しい臭いのするホテルで、不断の執筆と、幻想的な瞑想に耽つた。彼はこの幻想の秘密な部屋でガヴチエやサバチエ夫人と相知るようになった。其後、ピモダンの集会で会つたエミルドロイという画家が、彼に熱心に画家になる事

をすゝめたので、彼はドラクロワの弟子となり四五年、四六年、五五年、五九年来、美術展覧会を開催したりした。又彼はこの頃ポーの散文を翻訳して、アランポーの奇才に感激した。一八四八年の革命騒動には、彼はすっかり昂奮して仕舞って、詩人特有の熱情で、ルソーの信者となり、労働者を兄弟と呼んで過激な職工になり澄まして銃を肩に街を飛び歩いた。そして「諸君は足並揃えて出掛けてアウピク大将を殺して仕舞わなければならぬい。」という演説をして歩いた。アウピク大将とは、自分の継父であった。が、彼が本当の自由とか革命とかいう事に正しい理解をもつて理解も義憤も感じたかどうか疑問である。単なるデカタンらしい酔いどれた誇張の一つに過ぎなかったのかも知れぬ。彼の有名な詩集「悪の華」が出たのは一八五七年である。それより前一八五五年彼の詩が、両世界評論に出た事があるが、彼の詩の多くは読者不知で出たものである。ところがこの「悪の華」は発売禁止を喰い、三百フランの料料に処せられたが、悪い睨まれたところだけを抜いて又出版した。勿論この詩集は、道学家や保守派や形式家などには「悪の聖書」として非難された。

しかし、ガウチエその他の仲間の文学者には、真価を認められ「新らしき戦慄」の創造者として、ユーゴー以来の珍奇な詩人と賞讃

された。其「悪の華」が問題となっている最中彼の継父は死んだ。で、彼は母とも仲よくなる事が出来た。彼は詩人としては勿論第一流であったが、又芸術評論家としても、優れた頭脳を持っていた。その事は、「ワグネルとタンホイゼ」を読んでも分る事である。で、彼の評論の態度は、あのいやに人嫌いな幻想的な、とりとめもない人格とは丸で異つて、恐しく論理的に厳格であったのである。ガウチエの所謂「彼は自ら誇って最も厳格な行儀を正し、その礼儀は度外れに気取っているように見えた。彼は文句を使うに、専ら選択した語を用い、又ある用語を発音するに特別な拳動を以てし、恰も其下に線を引いて之れに神秘的意義を与えようとしたようだ」といった「英国的冷静の態度」であつたのである。

彼は、恐しい迄に、神経質で、肉体的刺激を好み、天然を認めず人工芸術を愛し、頗る「近代的」であつた。

彼は、東洋旅行から連れて帰った「破滅の天使、黒人ギナス」を、怪魔を愛するように愛して、東洋的空想とあやしい香氣に酔つていた。が、彼女の艶色から東洋のにおいが嗅がれなくなると、においのない物は用はないといつて捨てゝ了つた。彼女も又、泥棒で嘘吐きであつた。其次に彼が愛した者は、絶世の美人サバチエ夫人であつたが、夫人には直

き振り捨てられて了つた。

彼は益々「近代的」になつて行つた。無理槍に昂奮薬は飲む、デカタンの貴族生活には浸る。夜遊びはする——彼は日一日と、心的腐爛の中へ陥込んで行つた。自分自身でさえその状態がよく分つて「アンニユイの荒野にある恐怖のオアシス」から脱したいと痛切に願つた。が其辭、「俺は俺のヒステリーを培養するに喜悦と恐怖とを以てしていた。」なぞといつて、変態な精神錯乱を喜んでいた。それは一九六二年から六三年へ掛けての彼の生活振りであつた。

彼は最後の著書を出版すると間もなく、ブリュッセルに転地し、健康につとめたが、腐蝕しかゝつた身体は、よくなるべくもなかつた。

彼は巴里の宿代を支払わず、勿論医者診察料も出せなかつた。でそんな貧窮と肉体的不遇のうちに屢々麻痺症に襲われた。で、ブリュッセルに転地したのであるが、ここに寝込んで仕舞つたので、母が来てフランスのある病院に連れて行つた。院長は、「発狂性麻痺」という診断を下した。彼は、言語不随、感覚倒錯に罹つて仕舞つた。彼は病院の中で一度自殺を企てたが、喉へ傷をつけた切りで血を見ただけで、止めて仕舞つた。

其後の彼は、病床に凝としてゐる切りで、非常に穏和だつた。時々、何か信仰的懺悔を

したりした。彼の病床に種々な婦人や友人が見舞いにやって来て呉れた。ある者はワグネルを奏して呉れ、ある者は美しい花で彼を飾ってくれた。其度に彼はいのちを顫わして喜んだ。かくて彼は一八六七年八月三十一日を期として、永久に眠ったのである。行年四十六だ。彼の四十六年の生活は、デカタンのでいたましくあわれであったが、彼の悪魔主義の創造者としての名譽は「生き乍らの地獄の詩人」として永遠に残るであろう。

ストリンドベルヒ

アウグスト・ストリンドベルヒは、千八百四十九年一月二十二日に瑞典の首府ストックホルムで呱呱の声をあげた。父は只靴と旅行靴しか持たない漂流の汽船事務員であり、母は彼の自叙伝第一巻「奴婢の子」でも明かな通り、バアの給仕上りであった。彼には兄弟が多くて、生れた時から貧乏に攻められていた。彼の母は彼を伴っては、家内労働に従って歩いた。彼は母の御得意先で、悪戯をしては、よく此の利己主義的な迷信家の母に叩かれた。この鞭の音こそ、彼が一生忘れ得なかつた悲痛の響であり、且つ彼が人生の社会的罪惡を鞭打って、皮肉な微笑をもらしたその響である。（「赤い部屋」「債鬼」「痴人の告白」等）

彼は子供の頃から、憂鬱な病的に陰惨な人

間であつた。そして始終腹を立てているような、親しみのない短気な子供であつた。彼の母親は、彼が十三才の時に亡くなった。それから一年たたないうちに、彼は継母の手にゆだねられた。が、勿論、彼の性格として継母などとうまく折合つて暮して行ける筈がなかつた。彼は終始事につけ継母と争っていた。その果には、父とまで争うに至つた。

彼の学校時代には、彼の心の底で悪魔と神とが争っている。而してその争闘の仕事は、実に極端なものであつた。そこに彼の性格悲劇の第一歩があつた。彼は十五才の時、三十になる婦人に恋した。が、それは、むくいられない悲惨な恋であつた。その時から彼の頭の底には、「両性間の不和合」という問題が悲痛な形で深刻に印象された。そのうちに彼の父は汽船の代理店などを出していくらか家計も余裕が出来たので、彼はウプサラ大学に入った。彼が十六才の時である。彼の目的とする学問は科学であつた。が彼は父に学資を貰わなかつたので、人並以上の苦学をしなければならなかつた。一時は学校の教師などをして、学資を得ようとしたが、直き嫌いなやつて止めて了つた。

で彼のその短い大学生活に於て得た事は、多少の医学的知識と、劇術に関する趣味と、沙翁研究の機会であつた。彼に取つては、この沙翁研究の機会を得た事は可成り重大な問

題であつて、彼の戯曲の沙翁劇的特色もこの研究の賜物であるとされている。（中村吉蔵氏の説）この時から彼は、「劇場を民衆の倫理的教化の機関」とする事に、重大なる意義を発見していたが、彼の生活は益々窮乏するばかりであつた。彼は一行、七八銭の議論文も書けば、俳優の下廻りになつてやつとその日のパンを得た事もある。また医者の手助になつて僅かに一時を凌いだ事もある。そのうちに彼は文学的作品を書き初めた。

千六百七十一年即ち彼が二十三才の時、五幕物の「浮浪者」という作が、王立劇場に上演される事となつて、カール十四世王の保護金を受ける事となつた。彼は幾らかの生活の余裕が出来ると、また大学へ歸つて来た。そして劇作を続けながら、キルケガアルドの哲学書や、ハルトマンの哲学書や、バックルの著書などを熱心に研究した。これらの著書は彼の後年の思想上に、少からず好影響を及ぼしたといわれている。然し乍ら、七十二年に国王が亡くなるとまた彼の生活は貧困な苦しいものとなつて来た。彼は余りに惨虐な生活を続けたので、幾日も丸で狂者となるような事があつた。其の貧窮の中ではどうする事も出来ないで、彼は残念乍ら大学卒業の初志を断念して了つてストックホルムに歸つた。そしてある島で、瑞典のある宗教的革命家を題材に採つた「マイスター・オラフ」を書い

た。この作は可成りに彼の特色の發揮された作で、七十二年に公にされた。

がこの史劇は、時人の認める所とならなかつた。彼の生活状態は依然として苦衷の中にあつたどん底の生活であつた。彼は仕方がないので、ある図書館の小吏となつた。ここで彼はパンだけは得る事が出来たから、今度は支那語を勉強した。そして、「十八世紀の支那と瑞典」という論文を書いて学界の問題となつた。彼は此の間に、有夫の女優シリイと恋愛に陥ちて、遂に彼女と二十六才の時正式に結婚した。それは彼が、神聖なる女性の愛を弄ぶ事の罪悪である事を知り、また結婚は両性の光明だと信じたからであるが、暫くにして、彼は結婚生活の下らない束縛に過ぎない事を知つて、その無意義な桎梏に苦惱しはじめた。そして、結婚生活こそ、両性の陷穽であると信ずるようになった。彼は子供に引かされていたが、断然妻と別れた。

彼はこの幻滅の苦汁を嘗めさせられてから頗る懷疑的な呪咀的な、白眼を以て婦人の行動を眺めるようになった。彼はあらゆる婦人の行動に就いて、苛々した懷疑的な皮肉をあげせ掛けた。

当時ストリンドベルヒは「赤い部屋」を書いて、千八百七十九年の文界を騒がした。それは、「彼の求めて止まざる理想のデスイリユージョンと、所謂時代紳士閥に対する社会

主義的反逆」とを描いた痛烈なセンセーションである。

それから彼は勇氣と力を得て、盛んに彼一流の哲学から成る、アンチ・フェミニストの立場の創作を発表した。彼は八十三年、生活の為に、巴里の一旅客とならなければならなかつた。父と同じような一漂浪児となつた。翌年彼は、男女両性間の永久の争闘を描いた「結婚」を公にした。この作は、問題が問題だけに世間の視聽を集め、訴訟沙汰にまでなつた。(が彼は無罪であつた。)

次で、有名な三幕物の悲劇「父」と、喜劇

「カメラデーデン」が發表された。この作は、「男性の中には神靈があるが、女性の魂は獣魂その物である。女性は男性の腕力と神智の為に永久に屈服されなければならない」という彼一流の人間觀を表わした、至極皮肉なものである。彼の名声作「父」は、千八百八十七年に巴里の自由劇場の監督アントヌに依つて上演された。これは即ちアントヌが、彼の新興劇界に於ける重大な地位を認めたからである。聽てストリンドベルヒは巴里の下宿を出て、瑞西の風光美しき地を漂い、独逸に遊びボードン湖畔で歴史小説を完成した。そして故国の土を踏んだのは、八十八年であつた。

ストリンドベルヒは、一面に於ては、知識的な、真理の徒であるが、又一面には理想の

女性を求めて止まない感情の人であつた。彼は前の結婚で、あれほど結婚を呪咀して、反結婚小説を描いた程であるが、(「痴人の告白」参照)又、維納の女フリダ・ウールと第二の結婚をした。が琴瑟相和したのも極く僅かの間で暫時の後離別して了つた。この頃の彼は、ニイチエの影響を受けて、極端な個人主義者となつていた。かの有名な天界、地界インヘルノ等あらゆる天地の秘密を觀破した一個の悲劇的超人が、ついに大海を憧憬するに至る小説、「大海の岸」を描いたのもその頃である。

で思想的に言えば、次はマーテルリンクの神秘、思想、スエーデンボルグの哲学の影響を強く受けた時代で、一種のカンシズム的色彩を帯びた宗教的時代である。それに、神を見出さんとして悪魔を見出した。自叙伝第二卷の「地獄」を見ればよく分るのである。

この頃ストリンドベルヒは、狂人とつれづれに歩いていた時で、軽度の發狂的狀態にあつた。彼はまた千九百一年に、女優ハリニツ・ポッセと結婚したが、数年の後、二人の娘を残して、お互の個性の發展のために、別れて了つた。この女優をモデルとして描いた史劇が、「クリスチナ女皇」である。彼の全盛期は、千八百八十年前後から九十四、五年頃までであるから、この頃は彼の下り坂であつた。また彼の神秘思想も動揺しようとして

いた。彼の晩年の生活は、物質的にも頗る恵まれなかったが、精神的にも淋しいものであった。「十一の一幕物」が出た頃の面影はいずれにも認められなかった。彼は、彼の大嫌いな大学と睨み合せて、ドロットニング・ガーデンの高等下宿に、三室借りて、孤独に暮らしていた。

ストックホルムのインチーム・セアターの管理者として、自作劇の上演監督をしていたが、肉体的にも、精神的にも相かわらず不幸のなかにいたのである。彼は、ノーベル賞金の好適なる授賞候補者として、北欧の識者間に挙げられたのであるが、それは到頭、マーテルリンクの手に落ちて了った。

がその反動として彼に同情が集り、千九百十二年の彼の六十二年の誕生日には二万クロネの義捐金が集り、頗る盛んなる祝祭がストックホルムで行われたのである。

且又、今までストリンドベルヒの作を上演しなかったウイナ市の市立劇場、独逸のレッシング座その他でも、彼の「弄火」「債鬼」「シユライテル・ハウエン」等を上演したのである。

この祝祭こそ、まことに、不遇の天才ストリンドベルヒの晩年に送られた、光栄の花輪であった。かくて、偉大なる天才ストリンドベルヒは、同年の五月十四日に、この呪われた地上を永久に去ったのである。

×——× ×——×

ストリンドベルヒの観た人生は、悲哀と苦痛の醜惡の苦境であり、靈の牢獄であり、永遠の刑罰場であった。彼はこの世の中に、美しく華やかなるものに対する、そして正義と愛とに対する、限りなき憧憬を以て生れて来た。而して常に、果敢ない空想の華にあこがれて止まなかった。が然し、彼が熱心に人生を研究し解剖して得たものは華かな生活の陰にかくされた人間の魔性と獣性であった。美しき女性のベールの下には、怖る可き魔性がかくされ、所謂世の紳士の面目の陰には、不正義と罪惡と偽善が潜んでいた。彼が美しいと恍惚したもの、皆人生の醜惡の化身であった。彼はこの人生に、涯しないデスイリユージョンを感じた。彼はこの不正義な、矛盾した、神靈のない人生の淋しい曠野に立つた時、堪え切れない程悲痛で孤独であった。そして、あらゆるものが、厭忌の種となり悪罵の表象となった。

彼はこの不断の憧憬と、デスイリユージョンの懊悩との葛藤の裡に「狂氣」となったのである。彼は常に異性なる不安の心を懷いて人生の与える悲惨なる刺戟に反逆しようとしたとしてその反逆が白熱し、破壊化す過程に於て彼は狂氣したのである。彼の狂氣こそは実に、悪虐なる人生に対する反抗の声であり、生の勝利、生の充實を求めて得られない者の

遺瀕ない苦肉の嘲声でなければならぬ。彼の六十二年の生涯は、暗中に微光を摸索する哲士の一生であり、且又靈肉の深刻なる撞著の悲愴なる暗闘史である。ビオルンソンは彼の性行を評して、「ストリンドベルヒは、若くて又同時に老人である。自由な意見を持つて一方に、非常な偏見も持っている。然し乍ら、彼はいかなる処でもその若さを失わないであろう」といつている。

ストリンドベルヒは、巴里の下宿の一室で盛んに天文学や科学を研究していた頃、自分こそ天下の真理を発見したものであると、ひとりで信じて、鼻を高くしていた。彼の肉体上の一番の危機は、彼が「地獄」を書いていた前後であるとせられている。この「地獄」は、彼の狂氣中の告白といわれている作で、ストリンドベルヒの天才的心靈が、悶え喘ぎつつ叫んだ、深刻な絶望の妖文字である。彼の心靈と肉体との昏迷と撞着と滅裂とは、実に幽玄とさえ感じられるほど真実に描かれている。性的異常者ストリンドベルヒの痛ましい程如実の自己解剖である。晦澁と混沌のケイオスの中に悶え乍ら、微かな光明を望んで喘いでいる彼の姿は、正に凄愴でいたましい限りである。

「地獄」一篇の中に、異常性格者ストリンドベルヒの、狂的生活の全面を窺うことが出来るのである。彼の悲劇「罪」のアドルフはい

續『少年禪記』

山口 幸一

う。

「考えて見給え、他人の幸福に依って世の中
の人がどれほど痛みを感じるか、あゝ、生存
ということは、実に悽愴なものだ。」

そうだ、彼の生存と境遇は、實際悲惨なも
のであった。が然し、彼ほど自分と自分のい
たましい境遇を生かした者はない。そして又

彼は極端な「人間嫌い」であつた。が彼の人間
嫌いは、彼が痛烈な皮肉眼を以て「人間の
獸性や社会の不合理、欠陥」等を観て行つた
からでもあるが、又一面に於ては彼の性来の
異常な性格の致させたところでもある。而し
て三度の失敗した結婚も彼の惨酷な貧乏も科
学的懷疑觀も、勿論彼の異状性格に影響を及

ぼしているのである。

で又ストリンドベルヒの異常性格の齎らす
苦悩も、より多く「創造者」の苦悶でなけれ
ばならない。「あゝ狂者こそ神秘であり、真
理の語手である——」。

(未完)

ある時、私の町に曲馬団がかゝつた。

川原に張つた天幕の前に、馬や象がつなが
れてあつた。私も見に行つたが、曲馬団の中
に丁度同年位の少年が三人居た。

薄い肉シャツの上に緑色のキヤルマタをは
いた少年が横向きに馬の上に坐つていた。キ
ヤルマタのお尻の所を良く注意して見ると確

に丁字型に盛り上つている部分がある。下に

六尺禪を締めているらしかった。他の二人の
少年のお尻も注意してみると同じ様に後の方
が盛り上つている。私は前に廻つてキヤルマ
タの生地を透して、下に禪をしているかどう
か確かめ様としたが、緑色の地を通してはは
きりとそれとは判らなかつた。

何とかしてその少年の裸の姿を見たいと思
つた。翌日、まだ曲馬が初まる前に川原へ出
かけて行つた。まだ見物は少ししかないが、
大天幕の傍に小天幕があつて、其処が仕度
をする所らしい。中から少年達の声が聞える。
私はもう夢中で突進する様に天幕に近づく
と、せまい入口から中をのぞき込んだ。

数人の大人に混つて三人の少年は一樣に黒
い六尺禪をきりきりと締めて裸の姿でゴザの
上に足を出して坐つていた。

中でも一番可愛い顔をした子は丁度後向に
なつて入口の一番近くに居たが、その子の禪
は特に新しい黒モスリンで中が太く、そして
きつくお尻の割目に喰い入つて締込まれて居
り、端の方はねじる様にして腰に巻き付けて
あつた。

私はこれ程少年達を羨しく思つた事はなか
つた。私も少年時代に人さらいにさらわれて
曲馬団に売られたとしても不服ではないと思

った。いやむしろその方が幸福だったかも知れない。

毎日ねじめる様にきつく禪を締め込まれて大勢のお客さんの前で宙返りをやったりブランコに乗ったりするのは何と愉快な事だろうと思った。

もし失敗した時は夜になってから親方の折かんが待構えているだろう。肉シヤツとキヤルマタをはぎとられ禪一本にされた私は、鞭で叩かれ平手で顔を打たれ、又禪を引っ掴まれて投げられる。

そしてもし親方や又他の大人の人が、私に對して慾望を持ったと仮定したならばそれ等の人の為に肉体のあらゆる部分も、もし要求を受けた場合には従順に提供しなければならぬだろう。それが命にでもかゝわらない限り拒む事は不可能である。夢の様にうつらうつらとこんな事を考えていた。その中曲馬団はやがて又、天幕をたゝむと何処かへ旅立つて行ってしまった。

夏になって水泳講習の時期になった。

中学生の水泳服装は赤い六尺禪ときまっていた。授業は午前中で午後は皆海水浴場に行かなければならない。

私は禪するのがはすかしかつたので、身体が悪いと先生に申出て一人砂浜で見学をしていた。

一齊に裸になった少年達はパンツ一枚とな

り、手に手に赤禪を持って整列する。

先生は水泳禪のしめ方から教えるのである。先ず禪の一端を首に一廻りまいて軽く結ぶのである。他の一端は首からずっと足の下迄だらりと下げる。それからパンツを下してぬいでしまう。前部をしっかりと包むと尻にはさんで後に廻しぐつと締め上げて結ぶ。

最後に首に巻いた一端を解いて再び股から尻に回し締め上げて後で結ぶのである。

初めて禪を締める子もいるのでやはりこうして仕方を教える必要があった。こうして水泳中でも解ける事がない様にきつく締めて置けと先生が云った。

大勢の少年はワイワイ云って締めていたがやがて皆揃って禪一本の姿になって整列した私は胸をどきどきさせて一人砂浜に坐りながらまぶしように友人達の裸像を眺めていた。

一週間の講習の間、私はとうとう一度も裸体にならずに見学で過してしまった。

そのくせ家に帰ると便所の中で先生のやった様に禪を首に巻いた締め方を練習するのであった。

水泳の講習に出なかった事について、母は別に何とも云わず『来年は水泳をやりなさいね』と云っただけだったが、父は不機嫌だった。そして上級生のSという四年生の水泳選手に頼んで、私に水泳を教えて貰おうと母に話していた。

私はビクビクしながらも、そのくせ早くSがさそいに来てくれゝばいいと思っていた。

もしSが来さえすれば、もう身体の具合が悪いなど云う理由は立たないから否応なしに海水浴場に連れて行かれただろう。水泳に行く時に母は新しい赤禪を私に渡すだろう。

水泳から帰ると母は其れを洗濯して庭に乾す。家には男の子は私一人だから之は私の禪だと云う事は妹達にもすぐ分る。

私の赤禪は家中で公認になってもうはずかしがらなくても誰の前でも禪姿を見せられる夏などは暑いから時には赤禪一本だ寝てもいいだろう。草花に水をやる時も禪一本の方が却って良い。ところがどうしたのかSは来なかった。

父が忘れたのか、何かSに都合があったのか、Sはとうとう現れないでそのまゝその夏は過ぎてしまった。

秋になった。放課後、グラウンドを走る白いランニングシヤツとパンツ姿の少年が多くなる。芝生のあるフィールドでは走高跳を練習している者もいる。私は小学校の時走るのは早い方だった。しかし中学では陸上競技部には入らなかった。それはやはり理由がある事だった。

中学に入ると陸上競技部の部員は一年生でも皆パンツの下に白いゴム製のサポーターを着けなければならない。

あのピッタリ肌に喰い込む様なゴムサッポーターは如何にも気持ちよさそうだった。

少年達はサッポーターをランニングシャツの上にしめるので、パンツの上からその白いゴム禪が半分現われている者も居た。

そんな姿をみると私の心臓はどきどきと早鐘を打ってくるのであった。

サッポーターをきりつとめて、純白のランニングに純白のパンツ、そう云う姿で若々しい手足を充分伸ばしてグラウンドを走ってみたかった。

だが人に見られるとはずかしい。母にサッポーターなどは絶対に見せられない。

私は自分の望む競技の服装は一通り持っていたが、部には入らなかった。パンツやシャツは母にも見せたが、サッポーターだけは嚴重に隠していた。私がグラウンドを走るのは夕方になってからである。薄暗くなった、フィールドの砂場の脇ではサッポーターをはくパンツを付ける。

小さいスパイクシューズをはいてトラックに出て行く。其処には小学生の子供が五六人遊んでいるだけである。

私はそこで、中学生らしく白いサッポーターをパンツから引き出してランニングシャツの後ろの方に高く上げて外からハッキリ見える様にする。小学生がぼんやり感心した様な顔付で眺めている前で、私は落付いてトラック

を走り初める。

走り終ると小学生達の前で悠々とパンツをぬぎサッポーター一本になって身体の汗をい

く。
私はサッポーターの腰と前に感ずる緊縛感

は好きであったが、股間と腰の後に對する感じは物足りなかった。
お尻の方が二つに割れていて、ゴム紐は股には直接に当たらない場合が多い。それで二本の紐の間隔を狭くして、禪の様にお尻の割目に喰い入らせてはいたが、全体がゴムのバンドで出来ている為腹を膨らませた時はゴムバンドも伸びるので禪の様な強い緊縮感が出て来なかった。

遂に呼吸をぬいて腹をひつませた時は、それに伴ってサッポーターも縮んで下腹部と腰をきゅーっと締めつけるのでその感じは悪くなかった。

しかしどうしても禪の堅に一本お尻の真中に喰い込む緊縛感は出て来なかった。

それにサッポーターを常用すると直ぐ汗ばんで来るので競技の時以外は私はサッポーターは使わなかった。

やはり常用にはモスリンや晒の六尺禪が一番気持ち良く、色は晒の場合は白、モスリンの場合は黒と赤を使用した。

その頃私は地方巡業に来た東京相撲を見物に行つて初めて正式に締められた相撲禪を見

て、その重量感に圧倒され、其後寝てもさめても相撲禪にあこがれを抱く様になった。

あの厚い重そうな固い締込を自分の細っそりとしたお尻にきつく締め込まれ、満場の観衆の見ている前で土俵に上つて両手を下し、四つ這になつて仕切る時の事を考えると胸がどきどきする程興奮してくるのであった。

しかし私の町では、その頃は少年達の相撲はまだあまり盛ではなく、お祭の時などに行われる位のもので、小学校でも中学校でも年に二回位大会はあるが、服装もまちまちであった。

小学生はズボンをはいたまゝか、又はパンツの上に帯で禪をする程度であり、中学でも四年五年生でないと、正式の相撲禪はつけない。下級生は晒や黒の水泳禪で土俵に上ると云う程度であった。

私が知っていた相撲の締込と云うと厚いズック製の中の太い十八尺位のもので大人用であり、一寸私等の様な少年では使用出来ないものであった。

私は自分の身体に合う相撲禪を夢みながら冬を過したのである。

中学二年の春、私の父は県庁所在地の大きな町に転任する事になった。

私も父に伴われて町の中学校に転校した。私は早速この町の小学校のグラウンドに行つてみた。

其処には驚いた事には、どの学校にも校庭の一隅に屋根の付いた立派な土俵があった。私は小学生をつかまえて相撲は何日やるのかと聞いてみた。

少年は、四年以上は体操の時間に時々やる



土曜日は昼から四年以上の選手ばかり三十人位練習すると云った。

土曜日の午後、私は学校の校庭に行ってみた。遠くのグラウンドの端の土俵の周囲で三十人位の少年が並んで白い相撲禪一本の姿で体

操をしているのを望見すると、私の顔は紅潮し、興奮と感激に全身が波打ってきた。走る様にグラウンドを横切ると少年達に出来るだけ接近して見物した。

驚いた事にはどの少年もパンツ無しで直かに白いズック製の相撲禪を四重か五重に腰に廻し、後の締め上げも大相撲の力士の様にきちんとかっこう良く正式に締めていた。

それは少年用に特別に作成された相撲禪である。こんな禪が市販されていると云う事も私は初めて知ったのである。

白い締めをきりつと廻した若やかな少年達の群像は私を夢幻境にさそい込むばかりの喜びを与えた。

私は元氣の良い幸福そうな少年達の禪姿を限り無い羨望の念をもって練習を終る迄見守っていた。

練習が済むと少年達は解いた禪を折りたゝむと、各自風呂敷に包んで脇に抱えて帰って行った。

私はたまらなくなつて一人の少年に追いつき、

『僕も相撲をやりたいのだけれど、その廻しどこに売っているの』と尋ねた。少年は、『新学期に本と一緒に本屋で買うんだが、今でもまだあるよ』と答えた。

私は翌日小遣錢を用意して本屋に行った。本屋の小僧は白いズックの相撲禪を二三本

出して私に見せた。

それは巾四寸位にきちんと折りたたんであった。厚いザラザラした布地は、しつとりと冷く、それをなでてみるだけでも私の耳たぶは紅くなってきた。

『中学二年なら、この方がいいですよ。』

と小僧さんは魂消る程重量感のある厚地の締込を私の前にすゝめた。

『でも少し長くないですか、それに固いですね』

私はふるえ声でこれだけ云うのがやっとだった。

『いや腰の廻りに五重に廻しますから、之位の長さがいります。それに使っている内直ぐ馴れて軟くなってきましたから。中学生は皆之を使っているらしいですよ。』

私はもう其れ以上、小僧と問答するには余りに興奮してきたので急いで金を渡すと風呂敷につゝみ、それを抱えて表へ出た。

禪は風呂敷に包んだまま家の物置小屋の片隅の薪の間に隠した。

その次は少年相撲は従来お祭などに行われた余興的な行事とは全く離れて、所謂少年体位練成、日本精神昂揚と云う様な物々しい題目が唱えられ、今迄相撲など好まなかった様な虚弱な内気な少年を強制的に訓練すると云う様な方向に移りつゝあった。

ある小学校では既に正課として取上げられ

四年生位からの少年は全員体操の時間に訓練されている所もあった。

私は新聞広告を見て『学童相撲競技法』と云う本を買ってみた。

二百頁はあるその本には、少年達の相撲禪を締めた裸姿の写真が数多く掲載されてあった。

その本で相撲禪の正式な締め方を読んで知っていたが早く実際にしてみたかった。

夜、私は学校の校庭に行った。薄闇の中に土俵の屋形が浮き上って見えると私の胸はときめいてきた。雨天体操場の屋根の下で素早く服をぬぐと、風呂敷包を解いて真新しい締込を取り出した。

パンツもぬぎ素裸になった私は、四つ折にしてある締込の一端を開いて前に当てると、股下にかけてお尻に廻しそのまゝ二重に腰の廻りに巻いた。次に前垂を下し、その上に又一巻き巻いた。最後に前垂を折りたたんで左腰に当てると其の上に更に二巻き巻くと、最後の禪端を二つ折にして立禪の下を通しぎゅーと背中の上に締め上げ一端をもう一度一重禪の下を通して結んで締め終った。

すべて本で見た通り初めてやって見たのだったが、きちんと気持良く締った。

厚いズックはザラザラとしてお尻の割目深く喰い込み、腰の廻りも息がつかない位きつく締め付けられて前に屈むにも板の様な禪が

胃に当って痛い位であった。

あまりの緊縛感に宇頂天になった私は土俵に上ると両足を広げて倒立すると仰向に思い切って強く転った。

足で固く踏み固められた粘土は夜露にしつとりと冷く私のお尻や背中の中肌からその冷気が心持良く体内へ伝って行った。

土俵には昼間練習していた少年達の体臭がしみ込んでいた様にも思われ、私は夢中になって幾度もその肉体を土の上に打ちつけた。

或いは上手投にされた様に、或いは叩き込みに、或いは突倒された様に様々の体位をとって転った。

終に土俵際で外掛をされる場合を考えて徳俵の所迄下ると片足を上げて思い切り仰向に引っくり返った。今度は本当に投げられた様に土俵から一段下のグラウンドの上迄一回転して転った。

背中と腕が痛いので触ってみるとすりむけて少し血がにじんでいた。それに固い禪ですれた為、もゝのつけ根もヒリヒリとすれて痛んだ。痛みさえ却って心持良く感ずる程陶醉境にひたっていたのであった。

其後も私の夜の土俵での秘密の遊びはしばらくの間続いた。

それは他人の見ていない前では出来ない遊びであるが、誰も見ていないと物足りないのである。

KK誌編集方針に就いて一言

佐藤

鼎

女学校の校庭の土俵で大勢の女学生が取り巻いて見物している中で堂々と禪姿で只一人土俵上に上り、少年の若やかな肉体美を皆に思う存分見て貰いたい。

誰もいない夜の校庭に母親も含めた大勢の見物人を夢で意識しながら只一人乱舞するの

であった。

少年雑誌の写真にあった、全国少年相撲大会に国技館の土俵に上って激闘する幸福な少年達を夢みつゝ、私は中学二年を終ろうとしている。美少年に心をひかれつゝも未だソドミーの何たるかを知らない私の禪に対するひ

たむきな欲求は、その肉体の生長と共に夜光虫の様な熱を持たない陰光として少年期を過ぎ様とする若い体内に限り無く燃え上って行くのであった。

(おわり)

KK誌の最近の内容に就いて一言申し上げたいと思ひました。御誌が店頭販売を中止して読者に対する直接販売に変わってか何カ月も経ち、或程度固定した読者を掌握された事と思いますが、最近の貴誌の内容の低下ぶり（誠に失礼と存じますが齒に衣を着せず卒直に申し上げます）はどうした事でしようか。毎月送付されて来る貴誌を期待して開く私の心は何時も無惨にも打ち壊されてしまふのです。

最初は貴誌全体が以前に比較し貧弱になった故かとも思ひましたが違います。又私自身アブノーマルなものに馴れすぎた為、最近のものが面白くなくなって来たのかとも思ひ旧号を本棚より取り出して読み直して見まし

た処これも理由にはなりませんでした。

当局の取締りが以前よりも相当強化されている事は、私にもよく分ります。が、少くともアブノーマルなものを以って異色を放っている貴誌が、その限界を遙かに下廻っている程度にてお茶を濁しているのでは、余りにも情ない様な気がしてなりません。取締りの対象になる迄持つて行けという訳ではありませんが、せめてその限度一杯位迄のものを記載して我々読者の期待に堪えて下さっても宜ろしいのではないでしようか。

現在公刊されている唯一の貴誌の事です故少々内容が低下し記事が面白くなくとも、我々はもう貴誌より離れる事は出来ないでしよう。然しそれだからといって、我々読者の期

待を裏切っても宜いという答は出ないと思ひます。店頭販売が不能の今日、貴誌を毎月維持して出版を続ける事だけでも、並大抵の事ではないという事はよく判りますが、内容を向上させ質をもっと良くすれば、直接販売を受ける読者も、もっと増える事と思ひます。

試みに私と同様、旧号を全部目を通して頂けませんか、如何に旧号が読みごたえのある素晴らしい雑誌だったか、又最近号がどの様に見えるか、比較対照して見れば一目りよう然です。

右、勝手な事許り書き、又大変失礼な事を申し上げ申訳ないと思ひますが、これも貴誌を愛すればこそにて何卒不悪御了承下度お願い申し上げます。

〇〇市〇区〇〇町〇〇〇ノ〇

佐藤 鼎

奇譚クラブ編集者殿

幻想小説

「潰滅の前夜」

(私は悪いことをしません)

土 路 草 一

肢体の追憶

汗と脂を吸いこんで、滑らかな艶を帯びている黒いなめし皮が、貪婪に新しい獲物を求めて蠕る。おのゝき、わなゝき、汗の玉を浮べている白い皮膚に、蛭のように吸いついて炸裂する。皮膚は、びくっと痙攣して、脂汗をじと／＼と滲ませる。黒皮は益々光沢を増し、風を切って、まっわりつく。

その音は、陰虐なる指揮者に依って奏でられる悪魔のジャズ狂想曲のドラムだ。間奏のピアノは轡の臭から、絞り出される言葉ならぬ服従の訴えであり、進める呻きと鎖の触れる響は、哀愁のトランペットか？

伶子は立ち尽していた。主人の命令通り、置物のように身動きもせず、忠実に立ち尽していた。瞳孔は一点に留まって瞬たきもしない。網膜は其処に展開されている痛ましい光景を、映し撮っているに違いないのに。

社長令嬢で雑誌の口絵を飾った、F三八五号は、生意気な助手に依って、鶏にさせられていた。バラ撒かれたパチンコ玉を一個、一個、啄んでは所定の計算板へ運んで居る。坐って、上体を倒し、尻を持ち上げ、唇で玉を喰むと膝で歩いて、椅子の上の計算板に嵌めこむ。百五十個を計算する板だから百五十回往復しなければならぬのだ。まだ半分位しか埋っていない。捌きも軽く、スカートの裾

を蹴っていたであろう膝頭は、痛々しく充血し、寸尺を蹙って床を湿らせる。時として、よろめき、のめり伏す。助手は片手で煙草をくゆらせながら、コンビの靴で、その顎を肩を蹴上げる。呻きが床に吐き出されて、よろ／＼と立直り、膝を擦り運ぶ。

「遅い」

その上に、更に怒声が降り、極限の労働を強いる。靴と鞭が、脇腹を荒くこづき、尻に振り落ちる。意志と思考とを麻痺された令嬢家畜は、只恐怖に怯え、這いずり廻る。バラ撒かれたパチンコ玉は、方々に散らばり、行方がわからなくなる。家畜は眼を皿のようにして、探し廻らねばならない。

スチユワデスだったF三八六号はアクロバットをさせられていた。見事に成熟した上半身を床に密着させ、足を差上げ頭の先につける。弾みをつけて、腰を上方に押しやり、爪先から廻転して起き上がる。くるくると球のように反復する。荒いコンクリートの突起が汗に濡れたスチユワデスの背を突刺し、点々と芥をつける。少しでも速度が緩むと、調教師の鞭が風を切る。家畜は恰も絶え／＼に藻掻き廻り、床にべったり汗の痕跡を印している。弓のように反る背、ぎし／＼と骨が鳴っているようだ。

伶子に自覚が戻って来た。歎声を挙げて瞪った。首筋は歪み、肩は盛り上り、背骨は引攣れ、臀部は怒張している。機能を禁じられている手や足。機能の極限迄動作させられている腿や背。置かるべき首や手足の位置が、意外な場所まで封じこめられると、正に人間の肉体ではなく、新しく造り出された、家畜の肉体として写ってくる。伶子は形容の出来ない感情に襲われた。F三八五の姿も、F三八六の恰好も確に家畜と呼ぶにふさわしい、哀れな惨めなスタイルだった。恐怖におど／＼と主人の顔色を伺い、懸命に服従を動作に表わしている女達は、完全に家畜だった。

伶子も改めて、御法川伶子でなく、F三八七号である事を意識する。見るともなく、自

分の身体を見る。

白のパンブスも、ナイロンのフルフアッシヨンもない素足は、コンクリートのざら／＼した床の上に、グリスのついた黒い鉄輪を嵌めこんで、立っている。桃色の爪にも、甲の上にも、埃が載って薄汚い。ふくらはぎには坐らされた時の芥が附着している。調教師に踏みつけられた足の跡が、男の脂と塵を吸いあって、べたりと印されている。

思わず、嘆息が洩れる。乙女の潔癖感、反射的に直ぐ、洗い清めたいと願うのだが、自分の血液が通い、自分の神経が届いている其等が、他人には勝手に弄ぶことが出来るのに、自分自身では拭いとることも出来ないのだ。肩には生れて始めて知った革鞭の味が、赤黒く虹を描いて、名残っている。真珠のネックレスの代りに、きら／＼鋸打した犬の首輪がかぼそい咽喉を飾っている。——F三八七号は声を嚙んで、頬を濡らした。

十四、五時間前迄は、秀れた感覚をカッティングした衣裳で包み、颯爽と靡かせて、靴音も軽くアスファルトを蹴っていたのに。アクセサリーは冷たい鉄鎖に代り、剥き出しにされた足は掩いかくすことも許されない。令嬢ともて囃され、理知的と評判されたのに。今は、白い一疋の畜生として蔑まれ、覬覦されている。犬の真似も出来ない云って、鞭打たれているのだ。朝晩念を入れて磨いた歯に

は嚙を噛まされ、鏡に向って丹念に梳かした髪は、スリッパで踏みつけられる。クリームで滑らかな手には、嚴重な手錠が嵌められ、化粧水を擦りこんでいた腕や肩には鞭痕が生々しい。

「多穂ちゃん！ 多穂ちゃん、どうしている？ 姉さんは今、とても苦しい目に逢っているのよ。想像も出来ないような激しい責苦に耐えているのよ。多穂ちゃん、姉さんを助けて、助けて頂戴……」

伶子は眼をつむって心の中で祈る。ほろ／＼と涙が頬を伝って、コンクリートの上にした／＼と落ちる。

追想の報い

壁の掛け時計が八時五十分を示している。伶子は永かった一夜を思う。生を亨けて以来最大の苦悩と屈辱を与えられた夜だったと思う。だが、そう思うだけだ。一夜という時間で塗り変えられた人生観、否畜生観は、彼女の心に根を下すだけの余裕がない。眼は実体を映しているのだが、心は未だ昨日の自分を追っているのだ。彼女の頭脳は今にも秘書の生活に戻れると思っている。しかし、映画に出てくる騎士や義侠的な男の中の男は、現れっこないのだ。隙があったら、油断を見済ましたら、脱走しようと思ったって、それは厳を素手で打碎くに等しいはかない望なのだ。

Y国と云う大国が、念には念を入れて作り上げた設備であり、組織なのだ。何か凄い事件でも突発しない限り、到底そんな甘い望みの成就是難しいだろう。日を経るに従って、女達それだけの希望的な観測は、悲鳴と共に一鞭／＼粉碎されていった。点々と悲つく皮膚の下、奔流していた人間の血潮は、やがて従順なる潺ぎに変わり、家畜としての思考を大脳に送る。伶子の均齊のとれた脚も、苺の唇も、馬の脚同様、荷車を引き人を乗せ支え、犬猫のように餌を貪り食う日も近いのだ。

伶子の頭脳は描く。——会社はもう人々が出勤したろうかと——。

タイプライターの覆いが脱され、飯田妙子の白い指先が、キーを叩きだしたかしら、電話のベルが鳴り響き、大野六太のにきび顔が専務室を覗いたかしらと。鞭のドラムは、呻きのピアノは、鎖のトランペットは脳髓の中で事務室の喧噪な交響樂と混濁する。伶子の肉体は一夜の被虐に疲れ果てゝいた脳底はめぐるまじい変転に正常な思考が相剋しきつていた。気分が雲のように浮いて、睡魔が侵入して来た臉を閉じ、首を垂れる。睡魔とはよく云った、魅入られた肉体は、幾何もなくして、返礼を受けた。

びしっ！ 灼けつく痛みが肩から胸を走る「うろうう」

家畜は夢魔を追い払われて、人魔に巢喰わ

れる。

「こらっ、だらけていやがる」

田川が鞭をさげて、ぎら／＼怒りを放つ眼を向けている。

「あ、う、う……」

慌てゝ済みませんと云うつもりだった家畜は、声帯を震わせる。

「曲った根性を直してやる」

奴鳴る口元にニキビが膿んでいる。三角の眼と突き出た口が醜く唾を吐き飛ばす。年令を超えた強圧が美貌の顔を蒼白に変え、膝頭をかく／＼わな／＼かせた。

田川から見れば、教養も、地位も、年令も上の女なのだ。それを犬猫のように扱う。ぞく／＼する程面白いのだ。

壁から鎖が外される。F三八七号の白い背を、又黒い皮が打碎く。歩けと云うのだ。

「こいつ！」

尻が蹴飛ばされる。家畜はよろめいて、首輪が咽喉に食いこむ。肌が続いてドラムを奏でる。喘ぎが洩れ出す。背を燃り、肩をくねらせて束の間の安らぎを求めようと

する。……だが、

助手の慣れた手は狙いを外さない、びしり！ 正確に小気味よく鳴り響

く。家畜はあ／＼息付きながら、首輪に力を籠めて、引鎖を張った。

妹の不安

九時。——

スチールボックスの上の時計をスイッチにして、ビジネスのモーターが動き出す。

日天産業の事務室の人々は、無表情に、決まりきった行動を起し始める。机の前に坐っている顔も、計算機の響も、大野六太のガラ／＼声も、昨日と変りない。帳簿立も電話機も、屑籠も、一昨日と同じ場処にある。カレンダーの数字と伶子を除く他は——。

大野六太は専務室のドアを開ける。秘書の机は主の居ないことを示して、取片づけられた儘である。

「おやつ、御法川さんは休みですか？」

傍の事務員に訊く。

「うん、まだ来ないね」

「珍しいな」

六太は扉を締めながら、にきびだらけの顔



をにやつと綻ばせる。楽しみが出来たような笑いである。だが、どたくと靴音が床に鳴った時は、いつものぼんやりした表情に返っていた。

電話のベルが鳴る。六太が駆けて、取上げる。

「はあ、そうです。え？ 御法川さんは未だ出勤されて居りませんが、どちら様でしょうか？ あゝ、妹さん、妹の多穂子さんですねはあ、参られましたら電話をお掛けするように伝えます」

「ほう、美女は病気かな？」

入って来た向田課長が云う。

「恋患いでしよう」

傍で誰か云った。

今日も又、鋭い日光が窓を射る。めらくと窓枠が燃え出しそうだ。

十二時。――

御法川多穂子は裁台に頬杖をつく。緑川洋裁店と金文字が輝いているウィンドガラスを透して、陽盛りの舗道を虚心の眼で眺める。アスファルトが融けて、タイヤの跡が凹んでいる。店内は色彩の氾濫だ。白、赤、黄、黒等の原色に混って、中間色のワンピースやブラウスやスカートが、各種のデザインを誇示している。それ等は、男の欲情を煽動させる道具だ。女達は美しく見せる手段として、競って纏いつける。

「多穂子さん、どうしたの？」

店主の緑川百合子が肩を叩く。

「あら、済みませんぼんやりして」

「そうよ、多穂子さんらしくないわどうしたのよ？」

「姉が昨晚帰って来なかったんです」

「なあんだ、恋人があるんじゃない？」

百合子はそんなことかと冷かした「ありませんわ。今迄だって一度も外泊したことありませんし、もしそうなら、私には何とか云って置く筈ですわ」

「わかんないわよ恋の道だけは別だから」

多穂子は急に百



合子が汚く思えた。姉はそんな女じゃない。結婚前に男と一緒に泊るなんてこと、する筈がない、と思う。

「会社の方、二度も電話したんですが、出ていないのです」

「そう、それじゃ、ちょっと心配ね。でも今晚は照れ臭そうに帰って来るわよ」

百合子は気のなさそうに云って、外へ出て行った。

諜報員登場

多穂子は喫茶ラムールのテーブルに、相木研一を見付けて、力なく坐る。

「なあんだ、元気がないな」

「だって——」

「電話じゃよくわからなかったけど、姉さんは会社も休んでいるんだって……」

「ええ、私、何だか心細くって」

「一日位帰って来なくなったら、そんな心配することないよ」

「あなたは人のことだから、そんな風に云うけど、私の気持ちにもなってよ。たった二人で暮して来た姉妹なのよ。隠しごとなんてないのよ。私のことは姉が、姉のことは私が、全部知ってるわ。それが黙って家を空けて、会社を休むんだもの。何かあったのよ、そんな予感がするわ」

「君に心当りはないのかい？」

「全然ないわ。好きな人だってまだいないしそれに今日はあなたに引合せると約束した日じゃないの、私の一生の問題じゃないの、すっぴんかすなんてことする姉じゃないもの」

多穂子は姉に似て澄んでいる眼差をあげて抗議した。

「ふうん、調べてみる必要があるかな」

「落着いてるわね」

「慌てゝも仕方がないよ。じゃ先ず君の家へ行こう。姉さんが帰ってるか、確かめるんだ」

「ええ」

此処で相木研一の説明をして置こう。

彼の表面は、アルプス貿易の社員である。

毎日外人の商社廻りをしている。だが、裏面を返せば、各所に撒き散らされている△機関の諜報員の一人である。多穂子と知合ったのも、緑川百合子の身辺に、不審があったからなのだ。緑川洋裁店の客は外人と日本の上層階級に依って占められている。それは百合子の技術にも依るが、どうも不審しいのだ。雑誌の依頼があっても、アイデアを発表する訳じやなし、弟子も二、三人しか置かず、それも厳選し、フリーの客は故意に断っている。評判になるだけの技術を持っているなら、雑誌は宣伝のよい方法だし、フリーの客は、拡張の為には欠くことが出来ない筈なのに。そんな派手に経営する能力がないのよ。一人で考えて仕上げて行く方が楽しいのよ、と技

術屋の孤高を唱えているが、それにしては社交性があり過ぎる。おまけに前身がはつきりしないのだ。相木は調査の手を伸した。その手段として、多穂子に接近したのだ。だが多穂子の天真爛漫な性格に、徐々に動かされ、最近では真実の愛情が芽生えた。結婚の話も上司の諒解を得た上のことだった。

アパートの灯は消えていた。

「帰ってないわ」

多穂子は窓を見上げて云う。

部屋の中は、今朝出た儘だった。

「戻った様子がないね」

相木は鋭い視線を隅々へ配る。艶めかしく小じんまりと整頓されている。

「心配だわ」

ハンドバッグを抱えた儘、プリーツスカートを花のように拡げて、畳の上に、ぺたりと坐りこむ。

「姉さんの何か書いたものないかい？」

「日記？」

多穂子は立上って、机の下から部厚なノートを取出す。相木は受取って、黙って眼を通す。ページをめくる音だけが暫く続く。

「僕は、あまり信用がないね」

「そんなこと書いてある？」

「君と僕のこと心配しているよ、その他は、これと云った事実は見つからないね」

「私にも見せて」

「うん。姉さんって聰明な人だね。写真あるかい？」

アルバムを持って来る。

「これ一番、最近なの」

「綺麗じゃないか、君はおちるね」

「じゃ、姉さんにお乗り替えなさい」

「はゝゝ、そうするか」

「知らない！」

「持ち出しているものはないかい？」

「ないわ、服だって、お金だって、その儘だわ」

「ふうん、わからないな。とにかく、明日会社へ行ってみよう。専務と、この日記に書いてある可愛がっていた給仕に逢って見よう」

多穂子は寂しげに頷く。

ベビー箆の上の汐汲人形は、変りない愛らしい微笑を投じている。スタンドも柔かく机上を照らす。覆いのかゝった鏡の上には、髪ブラシがぼつねんと主を待っている。

多穂子は、風穴の明いたような淋しさに胸を締めつけられるようだった。

「元気を出せよ」

「えゝ、御飯の仕度するから待ってゝね」

ラジオのスイッチを入れて台所へ立つ。スピーカーから「都会の哀愁」の悲しいメロデーが流れて来た。

主人になった給仕

メロデーはルンバ調の「インドの踊り子」に変わる。歌手の跳ね廻る声が、賑やかにリズムを醸成する。

「お前はこの歌を知っているか？」

田川は靴先で調子をとりながら足下のF三八七号に云う。家畜は靴ブラシを啜えた顔を上げて横に振る。

「後で教えてやろう」

助手は、テールブルのウイスキーグラスを呷る。酔が頬を染めて兇暴な唇が歪む。家畜は又うずくまって、口でやることを命ぜられた主人の靴磨を続ける。きっちり揃えた両腿を靴台にして、肩を乗り出し、頭を振る。髪が頬に垂れ、主人のズボンの裾で揺れる。テンポに乗って、膝上の靴が踊る。只でさえ背筋が攣れて苦しいのに、家畜は頬を突かれ額を殴られて、泥靴を捕え、磨きを継続した。口はブラシを離し、モケット布を啜え直す。今度は艶出した。唇と歯に力を籠めて、コンビの皮を擦る。腿に土が積り、頬に靴墨がなすりつく。……でも、一生懸命だ。

「やあ、やっているな」

扉が開られて誰か入って来る。家畜の眼には、靴しか写らない。田川の隣へ腰を下す。

「今日は何だい？」

「課長に呼ばれたんだ。お前の仕事の方がよさそうだな」

「そうでもないさ。毎日、地下室暮しじゃ、

身体がなまってしまふよ。ちったあ、外の空気も吸ってみたいな」

「よせゝ、結構、いゝ玩具で遊んで居るくせに」

家畜はその声に耳を敬だてる。聞き覚えがあるのだ。そっと眼を上げる。あッ！ 瞠って思わず驚声を挙げた。

「驚いたのか、伶子」

呼び捨てにして大野六太は、やつと笑う。何故此処へ？ 伶子は半信半疑の色を浮べる。

「そっちが済んだらこつちを磨いて貰おう」

どた靴が円いクッションで弾む。眼差が怨じて、六太に注がれる。

「よく磨いてやれ」

田川はそう命じて、代りの玩具を引立てゝ来る。伶子は諦観して、ブラシを啜える。

「どうだい、こいつ、ものになりそうか？」

六太は空いている足を、昨日迄、眼をかけてくれた女秘書の背に載せる。

「筋はいゝ方かも知れねえな」

「割といゝ面してるだろう」

どた靴が楕円の顎をしやくり上げる。

「お前が出て来ないんで、専務が淋しがっていたぜ。この姿を見せたら、さぞ喜ぶだろうな」

六太がどうして此処に居るのか、伶子はまだ納得がいかない。心の片隅に、六太に依って救われるのじやないかという希望が湧いて

くる。乱暴に扱っているのも、田川の手前を繕う為なのだ。あれ程、可愛がってやったんだもの、助けてくれない筈はないわと幼稚な考えを、給仕の靴の上で発展させる。

「どうだい？この暮しは？ 後手で坐っているスタイルは仲々シックだぜ」

六太は、首輪を踏みつけて、振子の頭を眺める。

「スカートを捲ってやりたいと思っていたんだが、いゝ尻だ」

伶子は毎日顔をつき合せていた男に、それも皆にのろまに蔑まれていた少年に、こんな姿を見られている羞恥が、急に襲って来た。白桃の肌を色づけ、顔を靴から背け、振子をとめて身を竦める。

「伶子、磨けないのか」

奴声が脇腹を蹴上げ、伶子は仰向けに悶絶して頭を床に打ちつけた。

「お前は俺を給仕だと思っていやがるんだろ。ふざけるな！ 昨日迄は専務秘書で、俺を顎で使えたかも知れねえが、今じやお前は犬猫と同じ家畜なんだ。人間以下なんだぞ。その種別の違う身をぶち上げようと、焼き焦そうと勝手に出来るんだ、来い！ 教えてやる」

六太はいきりたって、首鎖を取って引立てる。伶子は前のめりに突伏す。項が抜けるように、首輪が食いこんで、痛さに思わず起し

た頭髪を、手に握めて引ずり上げられる。

「何をぐずぐずしてやがるんだ。轡を噛まされ、手錠を嵌められても、わかんないとは頓馬な家畜だ。お前は未だ、ブラウスが欲しいのかよ。靴が履きたいのかよ。畜生には、首輪や手錠や足鎖は、立派なアクセサリーじゃねえか、わからせてやる」

伶子は、冷い絶望に打拉される。唯一の希望は、泡沫のように消え散って、新しい戦慄が肌を貫く。が反面、あれだけ可愛いがって皆から庇ってやったのにと六太の冷酷さに、憤りと口惜しさが胸の中で渦になった。

責められる舌

六太は自分の膝を台にして、伶子を仰向けさせる。左右に悶える額を圧えつけ、口を開けさせて、塞げないように上歯と下歯に支え棒を入れる。ポケットから、水枕の口金のような、木で出来た挟み具を取り出す。思いきり開けられている、水蜜を想わせる口唇から舌袋を外し、代りに挟み具を嵌めこんで、舌を引張り出す。そして上から垂れている紐にそれを結んだ。

「伶子、お前のこの舌は、英語もよく喋ったな、俺の悪口も告口もしたことだろう。それに、これはお前の大切な暮しの道具だったけな。でも、もう要らないや。家畜には無用の長物を、少しいじめてやろうじゃないか」

伶子は酷薄なにきび顔に、じっと怨みの眼差を向ける。

「おい、田川。俺の新発見の方法さ」

六太は、二匹の家畜を尻合せに結びつけてリズムに合わせて踊らせている田川に声をかける。二匹の家畜は縄目の痛さに悲鳴をたて、床に絡み縛れる。お互いがお互いを責めているのだ。

六太は徐々に紐を引く。伶子はその意図を知ると血の気が失せた。

「やめて、やめて下さい」

発声が咽喉に絡んで「あら、あらう」と唇の外の舌をびくつかせる。

上体が伸びる。腰が伸びる。足が伸びる。舌の附根が、きり／＼と張って、抜けそうな痛みが、口中を引攣らせる。

紐は仰向いて、爪先立ちになった処で止った。

「伶子、いゝ気持だろう？ふゝゝゝ」

伸びきった肉体は、足先でや／＼と重心をとっていた。ふらついて、左右に傾けば、直ちに重みが舌に懸るのである。

「はあっ！はあっ！」と荒い息が舌の上でする。

六太の手が伸び切った脇腹に触れる。伶子はぎくつと身を竦める。すると、ぎゅつと筋張って、舌は紐に攣れる。

「あゝッ！ うゝッ」



「いゝ体じゃねえか、
伶子」

撫でた指先が、いつも鼻糞をほじくっていた、爪垢の溜ってる指だ。

「ううっ！」

六太の手は顎の下から腋の下へと這いずり廻り、擦り廻る。にんまり笑いながら誰もが憧れていた癖に、触れたことのない女秘書の髪や手足を今は引張り抓り、弄ぶことが出来る。高嶺の花を手に入れた嬉しさは隠せない胸中が、かつとほてつて、時々うふつと喜びの声を洩らす。

「あうッ、うっ！」

伶子は悶え続ける。擦られる苦しさ。それを除けようとすれば舌のちぎれる痛み。

「あうゝゝ」

額はじっとり脂汗が滲み、皮膚は真紅に充

血している。懸命に踏み代えている足指、擦り合い、僅かな屈伸を反復する脚、唇の外へ突き出されて血を失っている舌、ゆさゆさと揺れてる髪、伶子は溢れ出る唾に咽喉がせわしく鳴り、呼吸が噎び詰った。犬のような息使いが続けられ、身を燃えろうとする。だが燃れば燃る程、痛みが駆け廻るのだ。悶え、喘いだ。大野六太は伶子にとって、もう給仕ではなかった。自由に出来る主人だった。伶子の脳髄は反撓を吹き飛ばし、偉大なる、年下の、人種の違う主人の手が止むのを待った。「かんにんして下さい。許して下さい……」

洶れた声を振り絞って、哀願した。通じない咽喉の言葉で。

六太は蕩然とした眼を、揺れ喘ぐ哀れな家畜の上に釘づけにした儘だ。

伶子の足が、がくつと纏れて、ゆらいだ。六太は手を止めて顔を覗く。美しい眉根は寄せられ、苦渋の額には前髪が汗に塗れて、へばりつき、眼頭は露を湛えて哀訴している。これが、ミスと呼ばれ、クインと評判された女の顔だ。自分を給仕として扱った女だ。それが今、泣いて憐れみを乞うている。醜く舌を突き出して、勝手に弄り者にされている儚さを顔一杯に訴えている。

「わかったか？」

眼が頷く。

「俺の命令は絶対だぞ」

紐が緩められる。家畜は灰色のコンクリートの床に朽木のように斃れて動かなかった。

屈伏した女秘書

「野郎！これで済んだと思うのか？」

鞭が容謝なく、疲れきっている肉体を打ち叩く。

挟み具を外されて、テーブルの下に坐らされた。項が生氣を無くして弱々しく垂れる。

「舌が疲れたらうから、暫くそのまゝで自由にしてやる。その代り俺の質問に答えろ」

主人は、家畜の膝を足台にしながら、ウィスキーを口に運ぶ。

伶子には且つて見なかった六太の一面である。これが、あの、うすぼんやりして、奴鳴られてばかりいた給仕の姿だろうか、瞳孔は残忍な光を宿し、酷薄な唇が舌舐めずりしている。その口に、ぐいぐいとアルコールが流しこまれる。それは、強烈な圧迫となって伶子を襲う。おどろと今度は何をされるのかと、肩をわななかせる今の伶子にとって六太は、一言の口答えも出来ない、一言の反抗も出来ない。絶対の権力者だった。その見慣れた下品な姿が、大きな威圧を持って迫ってきた。

「お前は俺を、どう思っていた？」

「素朴な、真面目な人と」

「今は？」

伶子は云い渡す。

「どうなんだ？」

「いゝ人だと……思います」

傍で田川が赤く濁った眼をあげて、

「なんだ、その口の利き方は！家畜の口の利き方を教えてやろうか？」

酔を含んだ声で半身を起して奴鳴った。

「あッ、済みません、気をつけますから……」

伶子はびくっと胸を竦め、恐怖に怯えて、畏った。

「いゝ人じゃ、わからない。もっと具体的に云ってみろ」

六太は椅子を進めて、後髪を引張った。伶子は寸前に、にきび顔と無精髻を見て躊躇した。どう返事してよいかわからないのだ。お世辞を云えばどやされそうで、又正直に貶せば、それこそ息の根がとまる程、責められるだろう。

「はい。御主人様を批評出来ません」

「構わない、云って見ろ」

六太は意地悪く追究する。

「はい。怖い御主人だと思って居ります。でも、家畜を調教なさる為には仕方がないと思つて居ります」

女秘書の口は始めて屈伏の言葉を吐く。家畜を肯定する第一声と云うべきか、血はまだ屈辱を滾らせてはいるが。

「うまい答えだな」

六太の手は、ぺた／＼とミス日天と云われた美貌の頬を叩いている。

「この身体を誰に提供するつもりだった？」

靴が臀部を小突く。その意味を汲みとると伶子は思わず、羞恥に上気した。

「考えて居りませんでした」

「云えないのかッ」

いきなり唇を摘まんで捻りあげる。片方の手は、紫煙のゆらいでいる煙草を顎の下に着ける。

「あッ、痛い！ あっつい！」

「云えばいゝんだ。云わなきゃ、これで済まないんだぞ」

六太は大分酔っていた。声が乱れ、舌が縛れる。血が兇暴の火を迸らしたらしい。伶子はその氣配に背筋を粟立てる。経験した責苦がぎり／＼と胸を締めつけた。

「はい。云います、云いますから、手を離して下さい」

唇の痛みは去る。だが代って、心の痛みがせり上って来る。伶子は息を呑んだ。

「早く云え！」

声に殴られて、おず／＼と、途切れつゝ、言葉が口が出る。

「御法川伶子は、伶子は、家畜、家畜F三八七号としての凡てを、大野六太様に提供、よろこんで提供致します」

云直させられ、訂正させられた語尾は涙だ

った。屈辱は嗚咽と共に吐き出されて、わあっと声を挙げる。拭いもあえぬ涙は、六太のズボンに滴りおちる。六太は、伏せようとすゝる伶子の顔を手で押えて、満足そうに觀賞する。

「よし、そうなると俺も責任がある。先ず、家畜の実体を認識させてやる」

六太は口から、噛み切れない、くちやくの肉片を、ぼいと床に吐き捨てる。

「喰え。主人の唾液を浸みこませたものだ」

伶子は汚辱に肌を染める。新しい口惜し涙が溢れてくる。だが、それをやらなければ、激しい罰が加えられるに決まっている。六太は家畜の俊巡を待っていない。

「喰えないのかッ」

鞭は空気を鳴らして、十字に交叉された腕の上で爆発する。びしっ！ 伶子は追いたてられて、口を運ぶ。

「なんだ、不味そうな食い方をしやがって」

待ってましたとばかり靴は胸を蹴り上げ、鞭が鳴る。伶子は奥歯を、ぎり／＼食い縛りながら、顔を近付ける。

「舌を出して猫のようにゆっくり味うんだ」

声は屈辱を強める。新しい行為を要求する。伶子は実行に移すより仕方がない。そろ／＼舌を出す、そつとあてる。

六太は足を組んで、テーブルに凭りながらペロ／＼と舌を出し入れして舐めている女秘

書を、残忍な眼で見下す。……そして、次にどんな折檻を与えようかと考えていた。

攪乱工作会議

昼の暑熱のためか月迄紅い。雲一つない中空に円く輝いて、街は死んだように静かだ。此処数日は風すら吹かない。人々は夜になっても、地の底から蒸しあがる暑さに、転々と寝返える。何か怖しいことが起るのではないかと、暑気に狂った頭が怯える。成層圏を攪きまわし、地表を溶かす、大水爆実験、何百年と滞留し、或いは気流に乗って生物を滅す放射能。創造の神を怒らせる昨今の状勢だからだ。

街には深夜の眠りで、呼吸が停ったように動かない。だが、青山の丸い建物の三階だけは動いている。宵に点った灯りは、未だ瞬いている。若し、窓が開いていたならば、あの冷酷無慙な顔振れが、おそろしく緊張して、会議している姿が見られたことだろう。

中は、冷房が完備して、ひやりとする空気が流れているのに、この顔振れの色は興奮で赧い。

「今度の戦いは、諸君も知っているように、Radioactive, war、つまり放射能戦争だ。原爆や原子力発電のためのプルトニウムを製造するとき副産物として核分裂生成物が残る。これは中性子線こそ出さないが、人体に有害

なビーター線、ガンマー線を、或期間に亘って放射することが出来る。英国のブラケット博士も云っている。一匁のプルトニウムが製造される毎に、やはり約一匁の放射性物質が核分裂に依って生じ、それらの半減期は、数分から数年にまたがっている。我国はこれを抽出配合に成功して、半減期を調節した兵器を完成した。今この建物内に少量だが、秘匿してある。撒布混入用、炸薬の代りに詰めた砲弾及銃弾、直接放射性物質を発射する放射銃等だ」

議長は化学的説明を終ると声を改めた。議場は食い入る瞳の乱射だ。

「日本の戦略的な占領価値と云うものを見ると、米ソ両国にとって、殆んど無いといっていい。シベリヤ爆撃は、グラム、サイパン、沖縄、朝鮮から出来るし、ソ連側の潜水艦基地は海南島、中国、北部インドシナを使えばいい。併し、一応、航空基地や港湾施設の爆撃は行わねばならないが、併し我国にとって日本の工業生産施設と八千万の人的資源は脅威である。我々は原水爆攻撃に依って施設を潰滅させ、速かに重点占領をして、八千万人を我国の戦力、労働力として活用しなければならぬ。御存じのように、今期のニュースは、ユーゴスラビア軍のルーマニア進攻を報じた。それに伴い、今夕、本国より重大指令があった。これから云うことは軍機密に属す

るから心して聴いて貰いたい」議長は言葉を切つて一息つくつと、鋭い眼に配る。注視を意識した口は、低いがよく通る声で語り継いだ。

「東京の水爆攻撃は、今日から半月以内に行われる。決定時は十二時間前に知らされることになっている。各人は明日より、最終攪乱工作に入つて貰いたい。第一班は短期放射性物質の貯水池投入。第二班は同様に各防衛隊納入の食料品混入。第三班は米国宿舎並びに航空基地に対する撒布である」

会議は続く。興奮と緊張に、うわづった返事が、質問が続いて行く。

Y国は遂に、日本攻撃を決行する。第三次大戦に突入するのだ。だが、日本人は、誰も知らない。再び修羅の巷となり、阿鼻叫喚が充滿する等とは、転々と寝苦しい夏の夜の夢にも見えないだろう。且つての東京よりも悲惨な姿を月余ならずして曝すことだろう。否、もっと、もっとと凄惨な、陰虐な光景が展開されることだろう。相手が相手であるだけに。だが、東京の街は今、静かに眠っている。

誘拐者追跡

銀座は今日も人通りが多い。フライパンで焼くような暑熱の中を、飽きもせず人々は虚飾の町を通る。相木は車の中で、先刻から二十分位、緑川洋服店を見張っていた。

多穂子と日天産業へ調査に行ったのだが、何にもわからなかった。これじゃ、出入を監視するより仕方がないかなと萎れる多穂子を送り届けて、前の公衆電話から、アルプス買

易に連絡していた時、店の前を徘徊する不審な二人の男を発見したのだ。二度、三度往復して、中を覗き、着替えを終わった多穂子の姿が店に現われると内部へ消えた。諜報員の第六感と云うのだろう、相木は見張る気になった。それが、未だ出て来ない。

相木は又、電話ボックスに飛びこんで、洋服店へダイヤルを廻す。

「もしもし、あ、多穂ちゃん、相木だ。いいかい、これから僕の云うことに、イエスカ、

ノウだけの返事をするんだ、客に應對するような言葉使いでね、お店に二人、男が入ってるね、多分、多穂ちゃんを呼出しに来たんじやないかい。うん、やっぱり、姉さんの知らせを持って来たのかい？ そう、それじゃ誘いに乗り給え。僕が尾行してやるから安心してね、この電話相手に気取られてないね、緑川さんね、え？、マダムは留守そうか、じゃ、男達の名前と話したことを、紙片に書いて、お店を出たら渡し給え、僕が後で拾うから。いいね注意してね」

約十分後——。多穂子連れ、男達が出て来た。街角に駐っていたビュイックに乗込む。相



木も車を走らせながら、多穂子の捨てた紙を開く。

「情報局防諜課の方です。手帳には逢坂辰一と書いてありました。姉のネックレスを持って来られて、姉さんの持物か？」と訊かれました。姉の物ですけどどうかしたのでしょうか？」と訊き返しましたら、国際事件に巻きこまれて留置しているから貴女に会って貰ってほしい事情を伺いたいと云われますので同行します」

相木は無線電話で本部を呼び出す。

「こちらは五九号車、相木研一乗務。只今、御法川多穂子連れ出した車を追って、新橋から

虎の門に向って疾走中です。情報局防諜課に逢坂辰一なる情報警察員がいるか調べて下さい。尚、防諜課に於いて御法川伶子を留置しているか、調べて下さい。至急頼みます」

車が溜池から六本木の坂を上っている時、本部から返事があった。

「五九号車、五九号車、こちらは本部。情報局防諜課には逢坂辰一なる者は見当たらない、又御法川伶子留置の事実なし」

「有難う、只今六本木を青山に向って走向中



です。相手は黒のビュイック、五五年型、ナンバーは三八九×五。手配頼みます」

予感が適中した相木は、満足な気分になって、ラジオのスイッチを入れる。婦人の時間らしい、料理の話をしている。舌打してダイヤルを廻そうとしたが、おやっ！と前方の車を凝視めた。

窓ガラスが黒く遮蔽されたのだ。そして車は急に脇道に入る。相木も慌てて、ハンドルをきる。タイヤを躍らせながら、細い道をく

んだ。

扉を排して無念そうに、前車を見送っていると、キュキュツと車輪を軋ませてクライスラーが横に停まる。本部指令で追って来た同僚の都田の車だ。「しめたッ！」思わず快哉を叫んで、跳び移った。

その時。乗り捨てられた車のラジオが、突然、ヒステリックな声を上げて、臨時ニュースが、重大事件突発を伝え始めた。

ねくねと曲る。相木は、いけない！と思った、他に車の通らない、こんな道では、相手に気付かされて了う。そして、その懸念は適中した。前車は、わざと同一道をぐるぐる廻って、離れていない後車を確めた。——と見る間に、急にスピードを出すと電車通りに躍り出し、横切って外苑の中に突込む。相木はアクセルをふかした。緑の並木が後へ矢のように飛び、丸い建物が視界に入ってきた。

突然、ブスツと音がして、車が傾いた。タイヤに何か射ちこまれたらしい。がたがたと不規則な反動が身体を揺すった。相木は唇を噛んで、ブレーキを踏

家畜の使用目的

高木と緑川百合子は既の扉を開ける。

むっとする女の体臭だ。それと、汗と脂と尿がカクテルした一種独特の酔えた匂い。

「まあ、臭いわ」

百合子はハンカチを鼻に当てた。それは最近迄自分と同じく香水をふりかけ、華やかな衣裳を纏っていた同性達の匂いだったのに。

一畳位の広さに仕切った檻が、五、六列並んで居る。寝藁の上に、白い家畜達が、泥のように眠りこけている。伸びた首鎖は相変らず壁に打ちこんであるが、手錠は緩めて、寝易く腋の下あたり迄、動かせるようになってゐる。艶々した髪にも美貌の頬にも盛上っている胸にも、藁屑を搦めつけて、死んだように動かない。

「餌は此処へ入れてやるの？」

百合子は、家畜達の頭の先に設けてある。馬の水呑場みたいなコンクリートの凹みを指して云った。

「そうですね。肉野菜混入雑炊をコンクリートの皿で食べさせる訳です」

「ふうん。食べる時、手を使わせないの？」

「勿論ですよ。口だけで馬のようにね。面白いですよ、慣れない奴なんかは、顔中飯粒だらけにしちまってね」

足下の家畜は鞭痕が痛むのか、呻いて寝返

った。鎖ががちやつと鳴る。

「大分、集めたわね。何匹位いるの？」

「それですよ。今日、部長にさんざん怒られちゃってね」

「どうして？」

「君はそんな数で用が足りると思っっているのか？ 多額の費用を使って、日本の警視庁の眼を潜って、こんな危険を冒している目的を忘れたのか、って云われちゃってね」

「目的って、水爆を落したら、女は焼け焦げて了うからでしょう」

「そう。水爆を投下すれば、東京や其の他の女は焼け爛れて死んで了うでしょう。さもないければ、コロイド現象で顔が膿んで、女なんでもものじやなくなりますよ。祖国の兵士が、直ぐ進駐して来る。それに当てがう女が居なくなりますね。その為ですよ、この女達は。

家畜として調教して置けば、兵隊達にも従順だし、いい愛玩物になりますからね」

眼を覚ましてゐる家畜があつたら、己が運命をはっきり知ったことであろう。自分の肉親や恋人を殺し、家を焼き、国土を潰滅させて了うY国人の愛玩品となる身の上を……

「これね。多穂子の姉ってのは」

「そうですね。いい身体してるでしょう？」

「そうですね。多穂子より少しいいかな」

百合子は、ハイヒールの踵で、耳朵を踏む。伶子は夢の安らぎが覚めて、見知らぬ女を見

る。

「立て。お客様が、お前の身体を見たいと仰しやるのだ」

弾かれて、ふらふら立上る。項を垂れ、腕を後へ廻して、無抵抗と屈伏の姿体を曝す。

客は周囲をめぐりながら、頭から爪先迄、じろじろと点検する。首輪の擦過傷が膚を赤く剥いている。

「うん。上等品ね。問題は仕込み如何だわ」

「そりや、大丈夫。優秀な調教師がつけてあるからね。只、他の奴より厳しくやるから、弱気を出しやがると困ると思つてね、今度のこと、お願いしたんだが」

「うん。多穂子のこと」

伶子は、ぎくつとして女客を見る。

「お前の妹も、間もなく、此処へ来る。お前が素直でなかったら、一緒に妹も罰する。お前の態度如何では、妹の方を先に責め殺すかも知れないぞ」

それは親代りの姉にとって、何物にも勝る衝撃だった。伶子は眼前が真暗になって、脳髓の思考が消えた。くらくら、膝がよろめいて、首鎖を張りながら、百合子の靴先に顛倒した。

未完の結末

広い舗装道路を、多穂子に乗せたビュイックが、ひた走りに走る。追う△機関の車から

相木が乗り出して、消音拳銃を構える。

日天産業の事務室では、相変らず喧噪な、タイプと電話が鳴り、大野六太は、間拔けた動作をして、社員達に囁かれていた。

伶子は、罪もない身に、厳しい鞭を受けて高木と緑川百合子に乗せた馬車を、汗みづくになって引張っている。

緊縛映画速報欄

千葉栄市

東映映画「おしどり囃子」では、恋人橋蔵のあとを慕って旅に出た美空ひばりは街道で雲助におそわれ、助けを求める口には用意の手拭で猿轡をはめられ、なぐられられ、果てはミズオチを一撃され路傍に崩れ折れる。手を縛られず、猿轡だけは珍らしい。但し物足りぬ感じだった。

次は日活映画「殺人計画完了」で、ボス清水将夫に誘拐された新入社員第一回出演の多摩桂子は、二階の一室で後手に麻縄で縛られ、白布で猿轡をはめられ、ソファに坐らされ、ボスに「お前の体には大金がかかっているのだから俺の自由にする」といわれ、何かいいたくとも猿轡で声を出せず、首を左右に振るばかり。その哀れな姿に欲情したボスが、や

そして、都民は、遂に現われた放射能の恐怖に、なす処なく、ラジオに囁きついてニュースに聞き耳を立てている。

やがて、東京の空に、大閃光が輝き、あの巨大なキノコ雲が広がるだろう。人も、ビルも、溶岩となって流れ失せるだろう。

街は今日も暑い。火焰のような陽炎が、草

にわに飛びかかり、あわやと思う時階下でピストルの音、驚いたボスは、縛ったままの女を横抱きにして階段を下りる途中で、女の良人三橋達也に救われるのであるが、新人女優は実に縛られる場合が多い。

次の四つは全部がデヴュー作品である。

東宝映画「お嬢さんと探偵」で恵三千子が洞穴で、白いドレスのまま椅子に縛りつけられていた。猿轡もハンカチでされているのであるが、気絶しているのうつつ向いているのが残念だった。

東宝映画「のり平の三等亭主」で中田康子がパジャマ姿で後手に縛られ転げ廻る。この女優は乳房が大きいとか非常に緊縛感が出ている。

新東宝映画「悲恋真室川音頭」で美雪節子が二人の土方に襲われ、一人が後から手を捻じ上げ、一人は前から松葉散しの手拭で猿轡

木を焼き、人家を焼いている。

× × ×

読者諸兄姉。私は未完の儘、この小説の筆を置く。これは、一篇のフィクションに過ぎない。併し、それは、明日にでも、貴方達の身辺を襲うかも知れない。

(完)

をはめる。それから二人がかりで手足を縛り上げるシーンがあった。

大映映画「お富さん」で小町ルリ子が、後手猿轡で長い事縛られていた。この猿轡の手拭の柄は顔にマッチして実によかった。

「真室川」と「お富さん」は昨年の作品であるが、貴誌旧号にも発表してありませんでしたので附記しました。

六月号に書いてあった緊縛映画速報の内、「べらんめえ侍」関千恵子は「べらんめえ活人剣」星美智子の間違いであるから、失礼ですが御注意申し上げます。

(以上)

「お断り」本号並に既刊号に掲載しました映画速報欄には、重複した分もありますが、敢てそのままにしておきましたから御諒承願います。

【女優緊縛映画速報版】

最近の映画から

(自三十年四月↓至三十一年五月)

白石稔

本誌休刊中、上映されたもののうち、気のついたものを書いておきます。

一、松竹映画

好法院勤八(小園蓉子)

後手に縛られた身を必死に後すぎりしながら色魔の手から逃れようとする。(B級)

風雲日月草紙(七浦弘子)

荒縄で縛り上げられ物置に転がされ担ぎ上げられ小舟に乗せられて運ばれる。あわやという所を救われる。その間失心した顔を覆う猿轡、後手縛り、等A級の価値あり。

青銅の基督(香川京子、山田五十鈴)

ラストシーンで十字架に縛りつけられ火あぶりの極刑に処せられる。神に殉ずる者の悲壮美は哀れ。(B級)

若き日の千葉周作(高木悠子)

一軒屋に縛り上げられていた荒縄のかゝった後手のクローズ・アップ(一カット)あり猿轡姿。(B級)

顔のない男(浅茅しのぶ)

地下室へ閉じ込められて、不自由な後手に縛られた手首で動かして同じく後手に縛られているルパン(岡田英次)の縛めを解くという珍しいシーン。(B級)

晴姿稚児の剣法(紙京子、宮城千賀子、小山明子)

紙は納屋の軒下の柱に縛りつけられ折柄の雨に濡れる。(B級) 宮城、小山の二人は庭先に引き据えられ、高手小手を後から一カットだけ見せる。(C級)

花嫁小判(伊吹友木子)

縛り上げられ猿轡をはめられるのを描写、次いで駕籠の中(一カット)すぐ救われ縄をとかれ猿轡を解かれる。(A級)

弁天夜叉(高峰三枝子、千秋みつる) 六月号で嵯峨さんの投稿にある通りで省略します。(A級)

二、東映映画

火牛坂の悪鬼(千原しのぶ、忍美智子)

千原はラスト近く、火あぶりになるが感じは出ていない(C級) 忍は強盗に襲われた商家の娘として他の女中たちと三、四人猿轡をかまされ柱に立縛り。(B級)

マグナの瞳(北見礼子)

拷問に打ちひしがれた、老女を演ずる。(C級)

闇太郎変化(田代百合子ほか)

田代は、悪姿に誘い出され、後手に縛り上げ白布の猿轡をされ駕籠で運ばれる。純情可憐な娘を演じて美しい(A級) また、喜多川千鶴春日とも子と三人監禁の身を後手猿轡で連れ去られる(B級) その外、氏名不詳の一女優が磔柱に縛られていた。(C級)

虚無僧屋敷(長谷川裕見子)

後手猿轡のまゝ駕籠で運ばれる所を救われる。(C級)

中野原治の冒険(中原ひとみ)

現代劇であるが中原ひとみはギャングの本

落へ連れて行かれる。途中、船の中の後手、上陸して歩かされ、一室へ縛りのまま閉じ込められるまで終始、セーターの胸へ二巻き、高手小手の姿で胸の隆起もあらわに、長時間に亘って楽しませてくれる。過去の数多くの現代劇の中でもそれに及ぶ描写は少なかったと言つてよい。(A級)

力斗空手打ち (園ゆき子)

同じく現代劇であり、ラスト近く物置に連れ込まれて、後手縛り、猿轡をかまされ囷となる、必死にもがく姿、クローズアップ、そのまゝの姿で物置の中をあらちちらと必死に逃げ回る姿、これもA級の資格十分。

幽霊城のセムシ男 (千原しのぶ、園ゆき子)

天守閣の柱に縛りつけられていた(C級)

龍巻三四郎 (園ゆき子)

船室に居る所をギヤングに襲われ、南京袋に押し込まれ上から縄をかけられ、自動車のトランクに入れられて運ばれる。(C級)

謎の決闘状 (三笠博子、美空ひばり)

白布の猿轡、後手縛りの姿で背中を突かれながら連れて来られる。(三笠) (B級) 一方美空は床柱に縛られる。(C級)

戦慄の七仮面 (千石規子)

両手を縛られ吊り責めを受けるが迫力に乏しい。(C級)

続薩摩飛脚 (花柳小菊)

後手猿轡姿で駕籠に押し込まれる(C級)

怪力類人猿 (千原しのぶ)

ぐるぐると巻で樽に押し込まれるが画面には殆んど縄目は見えない。(C級)

べらんめえ活人剣 (星美智子)

若様侍の恋人に份し、さらわれて後手猿轡の囷。(C級)

予告篇

マリア観音 (松竹) 中川 弘子

夏川 静江

花の兄弟 (大映) 三田登喜子

木暮実千代

逆襲獄門砦 (東映) 高千穂ひずる

殺人計画完了 (日活) 多摩 柱子

日高 澄子

女難屋敷 (松竹) 鮎川十糸子

烙印なき男 (米) M、マーフィ

モデルと画家 (米) S・マクレーン

紐育秘密結社 (米) M、マクスウエル

その他

十代の反抗 (大映) 川上 康子

検事とその妹 (新東宝) 筑紫あけみ

以上二本は手錠をはめられるもの。

三、東宝映画

旗本やくざ (鳳八千代、大和七海路)

一室に男達と一緒に押し込まれる。猿轡姿。(C級)

夕立の武士 (北川町子)

草むらに組伏せられ後手、猿轡。ほんの1カット。(C級)

海の小扇太 (不明)

奴隷市場のシーン。日本映画としては珍しい両手を頭上に縛られたカットあり。(C級)

怪奇黒猫組 (逢初夢子、高倉典江)

女賊に扮した逢初が細紐でぐるぐると巻にされ押入れに押し込まれている。(C級) 一少女(高倉)が、白布で猿轡をはめられ運ばれる(C級)

鬼面屋敷 (不明)

白洲へ引据えられる女数名、後手縛りも見せる。また土蔵の中で縛られ転がされている女を、足から胸、顔へと撮して、抱きすくめられて気絶する所まで。(B級)

乱菊物語 (八千草薫)

清楚な美しさを誇る彼女が、太綱で縛られる。(B級)

四、新東宝映画

男一匹 (宇治みさ子)

料亭の奥座敷の一室に後手、猿轡姿で閉じ込められている。(C級)

のんき裁判 (不明)

ラスト近く、土民に火あぶりにされるシーンあり。(C級)

美女決闘 (筑紫あけみ)

樹の枝から後手のまま吊される。(B級)

赤城の血祭 (島崎雪子、池内淳子)

忠治の情婦として護送されるシーン。後手姿で突き飛ばされ乍ら歩いてゆく。(B級)
女郎屋で客をとらせる為窓際に縛りつけられる。(C級)

名月佐太郎笠 (池内淳子)

長繻絆姿で後手猿轡。(C級)

馳け出し社員とチャツチャ娘 (日比野恵子)

密輸団の秘密を知った為、後手縛りのまま船に乗せられようとする。手首だけではあるが、後から前からともがき乍ら、連れ去られる所を撮しているが、夜のシーンである為残念。(C級)

五、大映映画

踊り子行状記 (山本富士子)

悪旗本の為、扱帯で床柱に縛りつけられている。(C級)

つばくろ笠 (山根寿子)

後手縛りに猿轡をかまされ、辻堂の中へ放り込まれる。(C級)

鬼斬り若様 (神楽坂はん子)

座敷に伊達巻でぐるぐると巻にされ、閉じ込められる。(B級) その他、後手縛りのまま

毎日うつとらしい天気が続きますが、貴女様にはますます御健在の御事と存じます。突然こんなお手紙をお出しし、また同好者

駕籠で山道を運ばれる。(C級)

藤十郎の恋

不義者の磔シーンあり (C級)

花の二十八人衆 (矢島ひろ子、入江たか子)
乱入したやくざの為扱帯で縛り上げられるが緊縛感に乏しい。(C級)

虚無僧変化 (小町瑠美子)

駕籠の中で後手、猿轡のワンカット。大きな眼が印象的。(C級)

いろは囃子 (峰幸子)

猿轡をはめられ凌われようとする。船に乗せられるまで手は縛らないので物足りない。(C級)

六、日活映画

三つの顔 (不明)

三国連太郎がピストル強盗として、白昼劇場事務所へ侵入。男女事務員を縛り猿轡をかませて一隅へ追いやっていく。(C級)

人肌蝙蝠 (小田切みき、上田正世)

後手猿轡姿のワンカット (C級) 珍らしい連縛。

緑はるかに (藤代鮎子)

両手を頭上に革紐で吊られ、鞭で拷問される。(B級)

ブロースをかいで見たい様になり、いても立ってもいられない様になりました。殊に未婚の女の人のパンティが好きで、貴女が

江戸快盗伝 (桂典子、利根はるえ)

桂は長繻絆姿で両手吊り。(C級) 利根は地下室の桂の横木に両手を縛りつけられて、蛇責めを受けようとする。胸の上下を締めつける縄で、美しい縛り姿。(B級)

殺人計画完了 (日高澄子、多摩桂子)

日高は荒縄でドレス姿の後手縛り (C級) 多摩は主人公 (三橋達也) の妻として、ボスの家の二階に後手、猿轡姿で閉じ込められている。室へ入って来たボスに不自由な身体を追い廻され、猿轡だけ除かれて階段を歩かされる。白いセーターの胸の下だけ縄が廻してあるが、後手首の縛りは見せてくれる。(B級)

洋画

風雲のバビロン (R、フレミング)

王を殺した疑いで火刑に処せられようとする。(C級)

四十人の女盗賊 (Mプランチャード)

盗賊に誘拐される青布の猿轡、後手縛りの馬上姿、ワンカット。(C級)

島のならず者 (Gジョンズ)

酋長の娘の手術を失敗したため、地面に打ち込まれた杭に手足を大の字に縛られ、象に踏み殺されようとする。恐怖におののき涙を流す姿は迫真の美か。(B級)

になり、毎日毎日そのことが頭に浮かんできて消えないのです。

そういうことが出来ないのなら、せめて

春日ルミ様

まいる

簗中友三郎

とはいえ、突発的なお手紙をお出して、さぞお怒りの事と思います。が、止むに止まれずお出ししました次第です。ので悪しからずお宥し下さい。クラブの方は毎度続けて頂いており、さすが、自分にはそんな勇氣もなく、あえて一度貴女様にお願ひしてみてもよいお答えでも頂けないかと思ひまして、お出した次第です。

私は小さい時から、おとんぼで育てられ上は皆五人共女の姉妹で姉さんばかりで、男の事など大きくなって高校へ行くようになって、全然なんだが自分が男であるのか、それさえうたがわしい事ばかりで、何にをするにも女の事ばかり目に付いて、そんな事から現在、私一人の時になっても、女の人と関係したこともなく、それも友達も持つのですがたゞ友達としてつき合っただけです。又小さい時からおませでした。姉のお古のブロースをはかせられたり、自分でも何んとも云えない様な氣持になった事が何遍となくありました。それからと云うものは、きれいな女の人を見るとブロースを、あの人のブロースをはいてみたい。

写真でとられている様なサド的ではないのですが、女の人から馬乗りになってパンティの所をかがせられたりするの、もっとも好きです。それもこれも女ばかりの間に挟まれて大きくなったのが一番、現在の様になった始まりと思うのですが、姉たちがメンスの事など大きな声で話しているのを氣にしてみたり、今、私一人になった時ほど女性にあこがれを持った事はありません。

町できれいな人に逢ったりしますと、パンティはどんなのをしているだろうかと思うとたまらなくなります。現在おられるクラブの中の人で、こんな同好者の人はおられないでしょうか。貴女の御写真の相手にマゾモデルを探しておられるようですが、マゾ的な事は私はきらいなのですが、一度貴女の様な美しい人のパンティをかぶせて頂き、馬乗りになって貰いたいと思うよう

貴女様の常時はいておられるパンティをどんな古いのでも結構ですから送って下さいませんか。出来る事なら私の願ひをお聞き下さいませ。一生お忘れ致しません。こんな願ひをお頼みするのは、貴女様よりないと思ひましてお手紙をお出したのです。この手紙を書きますのに何度考えた事でしよう。お察し下さいませ。又、貴女のおられるクラブ会員の方で、前に女の人同好者の書いた男の人のパンティ・サルマタをぬすんで、それを夜かぶってねたと書いてありましたが、其の様な女の同好者がいたら至急お知らせ下さいませ。どうか、又其の様な女の人と文通したく思っておりますので、何卒、私の願ひをお書き下さいませ、こんなぶしつけな事ばかりを書いてお許し下さい。私は現在家におります。年は二十四才、五尺五寸、十六貫、こんな私をきちがいの様に思われ考えられてはすかしいのですが、学校は何時も一、二番の成績で卒業させて頂いたものです。

どうか、この私のなやみをかなえてやって下さい。伏してお願ひいたします。

時候不順の折柄、何卒お体を大切になさって下さいませ、貴女様の御健勝をお祈り致しております。

六月二日

サヨウナラ

女の随筆

「私の蒐集帖…緋草紙より」

緒台あふみ文、画

私の蒐集帖＝緋草紙より

昭和の初めと申せば、もう二昔も前の事です、その頃は物のお値段も安く、大変暮しよい時代でした。十円もあればそれこそ大威張りで四畳半にも参れますし、二号さんはおろか五号、六号さんでも御自由に……などと粋な方はお金に物を云わせて御発展された頃です、これからお喋り申上げる文献物も至極あたり前な事で今更大騒ぎする程の物語りではないかも知れません。

表題に掲げました緋草紙の緋は緋縮緬の布地で表装した手文庫に入る位の小冊子で緋は秘に通ずると云う意味合いで、折に触れ、ひまにまかせて綴ったわたくしの蒐集帖で御座います。

今日はこのうちから手頃なものを曳き出して、相も変わらず拙い模写画を御参考に、しば

らくの間お喋りさせて頂きます。ただ何分にも教養の薄い私が慣れないペンを握って多少なりとも随筆めいたことを御披露することの不首尾がその道の権威でもあり、専門家である皆様の御期待に果たして添うかどうか——一応の心配もさる事ながら御笑い草とでもなれば幸いで御座います。

御紹介申上げる文献の出所は、昭和六年九月、発行の講談雑誌（博文館刊行）、題名は『地獄絵』と銘打たれ、筆者名、中山楠雄。挿画、鈴木朱雀——映画のタイトルのような書出しから緋く事に致しましょう。

この物語りの主流は、巳代子と云う一個の芸妓の心理描写の外に、只今で云うロマンスグレーの層に足を入れた一老人の何がしかに相当する心の燃殻が、所詮は水中の泡沫のよ

うに消え去るものなのでしようが、漸くにして意中の赤い花を射止めたと云う悲話でありまして、見ようによつては東洋的な寂しさを覚えさせるもので御座います。

申し遅れましたが、この巳代子と云う女には勿論容姿端麗な喜代三郎と云う役者がついており、美しい者同志は惚れた、はれたのこうした華やかな商域に在っては御存知の通りの道行を続ける事は今も昔も変り御座います。ただ移り気な男の気持ち、一っかいの芸妓に過ぎない巳代子の魅力に曳かされ、また女の身としても、まるで初恋にでも酔っているように待合『近喜』を唯一の逢引場所としてのお座敷通いには、とどのつまり、女将の苦情となり

『あの人とこへ行くのもいいけれど、この



結

頃のようにや、お前さん、苦しむばかりじゃないか、少しはためにもなるお客をとって、その憂さばらしと云っちゃ変だけど、そんなつもりで喜代三郎さんに逢ったら？ 借金はふえるばかりだし——ここいらが考えどころじゃない？』……と嫌味たっぷり。

こんな処に封建色濃い時代層がまざると

眼にも見えない紐で女一匹を縛っているように御座います。しかしその反面、唯一の男への貞操をひたむきに守ろうとする巳代子が、次第に銭金で女将の気嫌を少しでも損ねようにと気乗らぬまま恋しい喜代三郎から遠ざかって行くことは本当に哀れだと思えます。悲劇は大抵こう云う処から発展するものなの

でしよう。

緒言はさて置き、筋は本文献を取り上げた主眼とも云うべき場面へと移って参りますが下手な談義は別として、まず原文を御覧下さい。

へその次の晩、巳代子は『近喜』によべれた男は、喜代三郎ではなかった。『金のあるらしい年寄りだし、お前さんを見染めたんだってさ——しっかりおやりよ』

女将は切り火を打って、巳代子を送り出した。

男は六十近い小男で、前額部がきれいに禿げあがっていた。身なりも、余り上等ではなく、金持らしい感じはなかった。そう云う——余り上等でないお客が、たった一人で、ぽつねんと脇息にもたれて坐っているのを見ると巳代子は軽い失望と憤懣を感じた。

男は余り酒もいけなかった。と云って歌うでもなく、話し方も頗る下手だったので、通り一っぺんの挨拶がすむと話の接穂が無くなって、二人とも黙ってうう。

するとその話を補うように隅田川の河瀬の音と、櫓のきしる音がきこえて来た。

『あら、冷えてしまいましたわ……』

巳代子は客の猪口の酒を変えようとした。

『いいんだよ、わしはそう飲めないからね』

客はそう云ったまゝ、また黙って了った。

『あんたは優しい人だ』しばらくして客

はつかぬことを云い出した。

『そればかりでなく、あんたの美しい姿が私を曳きつけたのだが、その優しさを見込んでお願いが——あるんだがね』

『何んですの、私に出来ますことなら……』

巳代子は勝手の違うそのお客の顔を眺めた。

このあたりは天然色映画で映し出されれば、日本調豊かな場面の一駒でもあり、波乱のあるなしに限らず思わず入り込まれて観入ってうシーンでも御座いましうが、原文にありますように世の多くの殿方が切り出す白々しい常套語が如何にも見え透いているようで、今の私なら一つペンにお願い事が判るような気が致しますのは、年の功か多少なりともアブじみている勢なのかも知れません。でも今の若い方々はその点、あまりにマスターされていらしやるから、これから先きの場面は存外御興味が薄いかも知れません。

『客はしばらく云い渋っていたが、思い切ったように』

『あんたを、自由にしたい——と、思っ私は来たのだがね』

巳代子は齒を喰いしばった。それは、あまりに客の常套語である。

『あんたの身体を自由にしたい。と、云って操を売って呉れと云うのではない。謂わば、

モデルになって呉れさえすればいい。私はあんたの美しい姿を縛りあげたい。それを、ただ、眺めていさえすればいいんだ。聞いて呉れるだろうか？』

そう云って客は恥かしそうに面を伏せた。

巳代子は何よりも金が必要だった。喜代三郎への操を破ることなしに、金が入れば、これ以上有難い事はないのだ。彼女は考える暇もなく『いゝわ！』と答えて了った。

どなたか存じませんが、奇クの愛読者の男の方が誌友のさる女性の方に胸中の一物を訴えたところ、結婚が終末的であるにせよ、見事、遊戯の天国を楽しく逍遙する事が出来て嬉しい云々のお礼状を拝見した事がありました。

今は昔、昭和の初めのロマンスグレーは余程心臓がお弱かったに違いありません。

『客の人のよさそうな態度と羞かむような身の科が、それ以上相手に恥かしい思いをさせたくない——そう云う同情心をあふったのも事実だった。』

客は嬉しそうに、礼を云った。

これからいよいよ前編とでも云うべきクライマックスに入るのですが、容姿で売る芸妓なら着こなしの美しさから来る視覚は溢れるばかりの色香を漂わす着物——お座敷着から

殿方の魂を九重の宙外に飛ばすことに相場は定まっているようです。聴く方ばかりのラヂオがテレビになったのも無理は御座いません。

『それから、いたわるように、巳代子に長襦袢一枚になって呉れないかと、要求した。』

彼女は、黙ってうなずいた。同時に、男の手が帯にかかって、するすると着物が剥がれた。

彼は、黙って自由にされている巳代子を満足そうに眺めながら

『少し、痛いかも知れないよ』と云いながら巳代子の紅いしごきで、彼女を後手に縛った。

第一図がそのシーンのようです。巳代子のふっくらとした胸から乳房にかけて縛ったものはしごきではなくて荒縄ですから或は数日後（後文参照）の快心事かも知れませんが——、兎も角客と称する老人の胸中のどよめきは顔が無粋なだけにひき立ってこの場面を高潮させている事は事実でありましょう。たゞ如何にも無惨である裡に、一抹の哀れさをとどめ、客の眼が後手の縄の結び目と島田の乱れ髪とに四分六に分れているのは、緑の髪の乱れに征服慾を充分堪能させた事によるようです。このように判断して参りますと、どうやら一折檻した後のようですから急いで、後の原文に移る事に致しましょう。

へそれから毎晩のように、彼女はその男の席によばれた。男は、緋縮緬の長襦袢を着て来いとか、その上にしめるものは、伊達巻でなく、芝居風にしごきの方がいいとか、注文を出すようになった。

そして、幾日目かには少し痛いけれど、今日は用意して来たから、これにするよと云って、荒縄を用意して来たりした。

巳代子は、何んだか、玩具にされたり、愚弄されたりしているように感じたけれど、荷物のように、部屋の中へ投げ出されたり、床柱へ結びつけられたり——（第二回参照）髪の毛をもって部屋中を引きずり廻されたりしているうちに、不可思議な欲求を感じ出して来た。

そして、恋しい喜代三郎の存在さえ忘れて行った。

このたびは挿画そのものゝ拙い批評は申し上げないつもりですから原文の要点を御掬み取りの上、後編を今しばらく御辛抱下さいませようお願い申し上げます。

老人客が手中の花として巳代子を離さず、金に物を言わせての夜の遊戯は当然喜代三郎の心に或る種のいらだきと嫉妬にも似た疑惑を涌き出させ、しばらく振りに待合近喜に足を運ばせます。



緒

「あら、お見かぎりでしたわね、近喜の女中は喜代三郎の帽子を奪うようにして云った。

『お見かぎられさ。巳代公にすっかり振られちゃったんだから、世話はない』

『全く、気が知れませんか、巳代ちゃん。今夜も見えてるんですよ、向うの離れに。喜代三郎さんのような美しい人があるのに、

何だってあんな禿頭の処へばかりくっついてるんでしょね』と云った。

そこへお神も顔を出して

『そりや、巳代ちゃんたら変ですよ。あなたの前でですけど、きれいに結い上げた髪は、毎日台なしにしてうし——それにこの頃は麻縄を何本も女中に買わせたりして——、こ



玉稿落穂集

誌上にのらなかった

原稿のことども

編集部

復刊以来、「玉稿落穂集」の項を設けて、

掲載出来なかった原稿の紹介をしておりますが、毎号、読者の皆さまから大いに期待されている由で、意を強くします。うまくアレンジして発表してゆけば、この先、三十篇や四十篇はらくに選り出してゆけると思っています。中には表現方法は別として、素材としては大変面白いものがありますので、それらはつとめて筋書だけでも載せてゆきたいものです。一年半程前に投ぜられた「獄中懺悔録」といったもので、便箋にこまごまと書き綴った告白文を貰ったことがあります。これは、検事の前でも喋らなかつたという真実の告白で、筆者は強盗強姦の罪で六年の刑に服して出獄してきた人とのことです。

この文章なんかは、全く正直にありのまゝ

犯した罪を書いていまして、筆者には相済みませんが、「犯罪実話」としての興味も多分にあります。只、これは素材としてでも公開はどうかと思われまゝ。然し、筆者が、犯した罪は罪として、自由な立場で自由な意志で書いているので、調書に見られるような無味乾燥なところはありません。

本月は前号に引続いて「女悦六法地獄責」について述べてゆきましよう。

『いゝんだよ、大難が小難でさ、若し留守中火事でも出されたら、それこそ住む処をなくしてしまふじやないか、これからよく気をつけて頂戴よ。だけど間抜けな泥棒だよ、カメラなんか盗らずに金目の帯止めでも盗って行けばいゝのに、』

と、やはり主人の形見を持って行かれたの

は無念らしかった。然し、オケイ婆さんは、なんとしても申訳ないから、お暇を頂かせて呉れと云い張ってきかない。あと口の女中が見つかると、気は利かない田舎娘だが、自分と入れ替りに娘を伺わせるから、是非、婆に暇を呉れと云うので、止むなくオケイ婆さんを青森へ帰す事にした。

オケイ婆さんを帰して四日目の風の強い日だった。学校から帰ると置物のチンコロみたいにキチンと、すわった田舎娘が小母さんと何にやら話をしている。あゝオケイ婆さんの娘だなあと、僕にも直感出来た。娘は大きな風呂敷包をゴソ／＼やっていたが、茶筒の様な箱を僕に差し出し、お袋から坊様にと云ってペコリと頭を下げた。津軽焼とか云う向うの名物だそう。中々風味のあるカワラせんべいだった。

名前は圭子と申します、と中々ハキ／＼している。笑うと片えくぼが出来、皮膚は陽灼けしていたが光った八重歯が愛嬌よく飛び出してオケイ婆さんの娘にしては上々の御面相である。圭子が来て以来、家の中はみちがえる程きれいになった。廊下など、すべる程テカテカ光っている。小母さんも圭子の働きぶりには驚かされた。奥様、体が楽すぎて仕方がないから、何にかもっとさせて呉れる、と云うのである。もっとも、野良の手伝い仕事よりは楽だろう。こうして圭子も小母さんの

大の御氣に入りとなり、大切な家族の一員となった。

圭子は二十才と云うが、小柄なせいにか十七位にしかみえない。よく彷彿御ほうびにと圭子は小母さんから、白粉とクリームを買ったが一向に化粧なぞしないので、不思議に思い小母さんが尋ねると、圭子はグラー／＼笑い出し、だつてさ、田舎では正月と祭りとは嫁様に行く時の外、化粧なぞすると色気狂いだと言われると云うのである。

然し、その中、この可愛らしき嫁様も小母さんのお伴で出掛ける時は、きれいにお化粧する様になった。本当に化粧ばえのする顔立ちだった。そんな時、小母さんにきこえる様に、圭子、嫁様になって何処へ行くんだ。と憎まれ口を叩いてやると、真赤になって僕をブツまねして向うをむいてしまう。

圭子が来て一ヶ月目位のある日のことだった。何んにも知らない圭子は、小母さんの奸計にまんまと引掛ってしまったのである。小母さんは十円紙幣を四つに畳んで梯子段の下とか或は冷蔵庫の横などによく置くのであった。時々圭子が、こんな処にお金がありました、と小母さんに手渡している所を僕はよく見受けた。あゝ、そう、何んのお金かしら、と事もなげに、その都度受け取っていた。

怪我とは我を怪しむと書くが、この純情可憐な圭子に、いかなる魔がさしたのであろう

か、恐らく此の日の出来事は、圭子も我を怪しんだ事であろう。土曜日の楽しい夕餉を終えて圭子は小母さんの使いでブドウ酒を買に行つた。

何にか小母さんは、そわ／＼して落つかない様子であつた。

周ちやん、あんたは小母さんの云う事、何んでもきくわね、今日は小母さんの助手になつて、小母さんの差図通りお手伝いしなくては いけませんよ。何んの意味か僕には判断は つかなくつたが、素直に承知した、圭子は威勢よく使いから戻つてきた。途端に圭子は小母さんに強い語調で呼びつけられた。圭子、あんたの宝箱を持って二階へいらつしやい、云われた瞬間、圭子の顔色はみる／＼土色に蒼ざめ、ガタ／＼とふるえ出した。

サア、何を愚図／＼しているの、早く二階へいらつしやい、小母さんの言葉には明かに怒氣が含まれている。ちぢみ上つて、ふるえている圭子の前に赤い小さいやな宝箱が置かれてある。中から小母さんは、四つに畳んだ十円札をつまみ出し、これは一体どうしたお金なの？と圭子へつきつけた。

圭子はみるなり、ワツと泣き伏して打ちふるえている。圭子、あんたのお母さんは、大変な不始末をしてくれたのよ、あんたも知つてるでしょう、だけど、あんたがよく仿いてくれるから妾はあんたを自分の娘の積りで可

愛がつてきたつもりよ。それなのに、あんたは人様の情けをふみにじり、恩を仇で返す、犬より劣つた人間ね、いくら、あんたが泣いたつて妾のお腹の虫は納まりませんよ、一度許してしまえば後々どんな悪い事をするか判りやしない。さあ、こゝにこんな立派な証拠があるんだから、妾と一緒に警察へおいで、さあ、圭子、お立ち。

ふるえている圭子の頭の上へ厳しい一語をたたきつけた。嗚呼一体、自分はどうなるんだらう、絶対絶命の窮地に追い込まれた。嫁入り前の我身、他人の物を盗んだ泥棒、涙に濡れたまぶたの奥に年老いた母の顔、美しい故郷の山河、そして恐ろしい監獄、圭子はくしゃ／＼にぬれた顔を上げると、小母さんの膝にとびついていった。私が悪うございました。もう決して二度とこんな悪い心を起しませんから、どうぞお許し下さいまし、奥様のお腹立ちは御もつともです。圭子は奥様に殺されても、かまいません。決しておうらみは致しません、どうぞ一生のお願いでございませう。警察へだけは連れて行かないで下さい。この必死な圭子の哀願をみている僕の方が泣けてきそうになる。

やゝ、小母さんは言葉を和らげて、圭子、お前本當に二度と悪い事はしないね、圭子の面上にみる／＼嬉色が新たな涙となつて溢れ出る。だけど、圭子、只では勘忍して上げる

訳にはゆかないよ、二度と、こういう悪い虫の起きない様にきついお仕置をして上げるけど、圭子、承知かい。ええ、奥様、妾は奥様に殺されても、かまわないという覚悟が出来ております。

そう、たゞし、今晚だけでは勘忍出来ないわよ、三日間の間、毎晩、あんたの希望通り死んでしまう程責め続けて上げるけど、覚悟はいふの、それとも警察行きの方がいふの、はつきり返事をしなさい。奥様、お気の済む迄お仕置して下さい、妾が悪かったんですもの、と圭子は首をうなだれている。圭子、それでは、お前は早くお風呂へ入って、きれいに体を洗っていらっしやい。

かくして、この哀れな圭子は淫魔法王の女悦奥伝秘法、六法地獄責で夜毎戦慄すべき私刑に呻きのたうつのである。

女悦六法地獄責

- 一、青葉之蛇責
- 一、弘法之筆供養
- 一、蜜甘水之三段飛
- 一、牡丹皿之蠟燭責
- 一、三井寺之鐘供養
- 一、滝之白糸穴責供養

この女悦六法秘技の責苦に夜毎身悶えしてむせび泣く圭子もいつしか、妖しい官能への誘いへと落ちて行くのである。』

というわけで、圭子に対する小母さんの女

体責めに対する伏線がはられましたので、いよいよこれから、女悦六法地獄責のはじまりということになるのですが、省略しながら書いて参りますと、隔靴搔痒ということでは恥れそうですから、このあたりで深く打ち切りとしまして、次の紹介に移りたいと思います。

サド関係が大分続きましたから、今度はマゾの告白の中から原稿の束を繙いてみましょう。如月十作氏の「愚舎」と題する二十枚ばかりの懸賞告白が出てきました。この作品はマゾヒストの方から見ると、まことに壺にはまった珠玉の価値のあるものと云えます。しかし、只残念なことに、例のことながら余りにも真正直に書かれているため、忌避すべき個所が多いので、最初から選に洩れていたと思います。

「愚舎」 如月十作

『私は生来のマゾヒストであり、妻は私のマゾの性癖の為に、現在私の好むサジストとなつた。私は私の育て上げたサジストの妻と満たされた夫婦生活を送っている。思えば久しい間、私は生来のマゾの性癖の為に悩んだことだらう。現実にも望んでも満たされそうもないマゾヒスト。私は常に空想の世界に没り、妖しい夢を見ていた。此の告白を書いている中にも、私は妖しい胸のときめきを覚えてきて、筆を持つ手が震えるのを禁じえない。あたかも美しい女の人に加虐されているが如く

痺れるような陶醉境、これはマゾヒストとしての抱いている宿命ではないだろうか。

昭和二十八年七月、現在の妻、とみ子と結婚す。(見合結婚)その当時の私と妻との年令や体重、容貌等を比較してみよう。

私——三十一才、身長五尺四寸、体重十五貫四百、中肉の長顔、風采の上らぬ極めて平凡な会社員

妻——二十四才、身長五尺二寸、体重十四貫余、容貌は十人並、但し、眼と胸や腰に魅力あり、

私と妻とは、こうして世の中へスタートした。妻は私に対しては柔順だった。その閨房の生活にも柔順そのものだった。そして満足している様子だった。私は物足りない思いで過した。世のマゾヒストの例の如く、私は妻に対して夜の世界では、美しい暴君を常に望んでいた。私は満たされぬ思いに悩んだ。然し妻に自分の性癖を告白するには、あまりにも恥しかった。それに妻が私の性癖を知ること、私を軽蔑し、果ては私から去ってゆくのではないだろうかと思うと、躊躇せざるを得なかった。後になって思うと、この時の躊躇は、心配する程のことでもなかったのだが、その時は女の抱いている微妙な心理を理解することが出来なかった。

私は味気ない気持で、一ヶ月、二ヶ月と過してきた。そして結婚して四ヶ月位経た或る

日のことだった。町の古本屋で奇譚クラブの本を何気なく手にし、頁をめくると、その中に若い男が後手に縛られパンティ一枚の美しい女の人に鞭で殴られている絵を発見した。私はそれを見ている中に、胸の中がジーンと熱くなるのを覚えた。私はそそくさとその雑誌を買々と、妻にこの絵を見せてみようと思いついた。此の絵を見て、妻がどの様に感ずるだろうか、それが知りたかった。此の絵を見て、絵の女の様にサジストとしての興味を持っていたとしたら、どんなに楽しい事だろう。私は其の夜、多分の好奇と、大きな期待に心をおどらせながら、その絵を見せたのだった。

「なあに、これ？まあ、こんなにされて男の人、痛くないのかしら？」

私は妻の顔に大した変化もないのに、いささか失望した。

「この様にされる事が、この男にとっては楽しいんだよ。」

「そうかしら？ 変ってるわネ」

「この様にされて、喜んでる男のことをマゾヒストと云うんだよ」

「マゾヒスト？」

私は妻に話している中にも、私もこの絵の中の男の様に、マゾヒストだ、と云いたい衝動にかられた。然し私には云えなかった。恥しかったのだ。たゞいたずらに呼吸が乱れて

きて、妻の前で平常を装うのが、やっとだった。私はそれでも、自分の気持を押しかくしながら、

「君だったら、此の女の人の様に男の人をいじめるのが好きかい？ それとも男の人にこの様に責められてみたいかい」

私は自分自身の言葉に、自己嫌悪を感じながらも聴いていた。

「あたし、フフフ、」

ちらりと私を見た妻は含み笑いをしながら「そうネ、あたしなら、縛られるより、縛ってみたいわ」

あゝ、私は、どんなにこの言葉を期待してきたことだろう。今こそ自分のマゾの性癖を告白するチャンスだ、と思いながら、妻の無邪気な視線を顔に感ずると、又しても自己嫌悪と恥しさで躊躇せざるを得なかった。

然し、それから、私は希望を持つようになった。私はその後、男性マゾの小説や、写真、絵を集め始めた。私は妻を私の好むサジストとして育て上げ様と思いついたのだ。」

これからあと、妻をサジストとして育てるためには、妻に満足を与えるのが第一と考えて、前戯とか後戯とかいった、いろいろの夫婦生活の機微に触れた事柄が述べられていきます。が、それらのことは公開の限りではないので省略するとして、一足跳びに、この題名である「愚舎」の由来に言及した個所へうつ

ることにしましょう。

『この様なことが、きっかけで、私の方から縛られることや、殴られることを要求している中に、妻が私をいじめる事や、責めることを次第に好み、知らず知らずの中に、サジストの気持を抱くようになった。妻は昼は天使の如くだったし、夜は妖婦の如く振舞うようになった。私達の寝室は、妻の好みで昔造った庭の防空壕だった。そこは四帖位の広さで少し位のことでは外部に音の洩れない防音装置のある様に静かだった。壕の中には二十ワットの電灯がつくようになっていた。室の隅にドラム缶を二つに切った入浴用のカマがあり、妻が私を加虐する時きまって入浴する。私達はこの室を愚舎と名付けている。』

この次には、愚舎に於けるマゾプレイの概が記されていますが、大体、従来の告白や小説と似かよったものです。妻の入浴に際しての奉仕、犬としての足舐め、打擲、緊縛、足蹴、ネクタール、其の他、となつていきます。この間、原稿用紙にして約十枚で、相当力を入れて筆者も書いていたのでしよう。そして或る程度マゾプレイとしての新発見もありますし、又、この主人公のマゾの性癖の起っている時期についての告白も、少くとも、一顧に値するものと思います。惜しむらくは余りにも直截的に書いていて、若しこの筆者にして、いさゝかの心得があった

なら、部分的の省略でも御紹介出来たろうと思います。

『考えてみると、夫婦とは、夫の性質如何によつて、いろいろと変化するものである。尤も私の妻は少くともサジストの気持があったようだ。しかし、それを導くのは、やはり夫である。現在私は、自分の育て上げた妻のサジストに幸福な生活を送っている。奇譚クラブ二十八年九月号の「幸福なる隷属の告白」の男主人公のように、私も女のサジスチック

な動作に満足し、明日への希望を抱き日常の仕事に精を出している。

此の頃、妻は映画の猫騒動の動作に興味を持ってきたようだ。猫が愛妾に化けて、腰元の女や男達を自由に、あやつり人形のように動かすのに興味を感じてきた様だ。氣を失つた化猫の愛妾の手の動作に、色々な姿態をする。さんざんにあやつられて氣を失った女中がハッとして氣が付き逃げようとするが、化猫のエレキの様な眼に見えぬ糸に引かれて、

ずるずると引き込まれ、恐怖に歪んだ表情の女中の首筋にがぶりと噛みつかれる。ヒエーッと悲鳴と共に、ぼたりと倒れる。血のしたたる化猫愛妾の口のクローズアップ、妻はこの映画が氣にいったらしく、其の後、猫騒動の映画は、かゝらず見ている。妻は新しい責めを考えているのだ。私は妻の新しい工夫に胸をときめかして待っている。現在二才の女の子あり、妻も私も壮健である。』と、結んでいます。

新聞紙上に出た切腹実話

藤森 一夫

五月五日午前一時岡山県児島郡灘崎町宗津に於いて、父が息子の嫁をメツタ斬りに殺害の上、自分も切腹自殺すると云う事件が起り静な農村に大きな波紋を投げた

を云つていた。それに京子さんは村の婦人会の役員をもすると云うしっかり者で、一方弁一も当地で変屈者と云われた程の頑固おやじだった。

その日午前一時頃、京子さんの

事のはじめは、いつも不和が続いていた古家野豆氏（国鉄観光係長）（「突」の妻京子さん（「三」）と豆氏実父弁一（「七」）（荒物商）との仲に行われた。丁度その日、豆氏は出張で宅に在らず、又弁一も先日來神経衰弱で床に付いたままだった。時折京子さんは知人の仲人話に夢中になっていたのを弁一が面白く思わず、それに自分が寝ていても水一杯くんでくれぬと不服

寝入花を弁一は店先にあつたナタ鎌を持って店内にある六畳間に寝ていた京子さんのミケンめがけて打込んだ。驚いて立上つた京子さんの後頭部を、更に首を斬りつけ倒れた京子さんの身体中廻狭しとメツタ打ちにして殺害し、弁一は京子さんの死を見届けた上、三間先に寝ていた弁一の妻、茂野さんに「京子が死んだ」と告げ、驚い

た茂野さんが京子さんの部屋へ行つて間、弁一は台所の出刃庖丁を持出し、井戸端へ行き出刃を洗い清め、自分の腹を真一文字にかき切り、その上数ヶ所突刺し縁側までにじりより、茂野さんに「茂、サヨウナラ」という声を最後に動かなくなり、三十分後に息をひき取った。「一新聞より」

私が聞いた近所の話

自殺した弁一は、平素から「わしも年だから、いつ死ぬかわからん、わしが死んだら息子の嫁が茂野に辛くあたるだろう、そして孫（養女として養われている十七才の娘）が可哀想だ、もしわしが死ぬのだったら京子も殺して……」と云っていたそうです。

さて、殺害事件のあつた現場は店の間六畳は一面血の海で、検視の医者も長グツで入るといふ惨状に殺された京子さんは、頭の先から下腹部にかけてズタズタに切りさいたまれ、内臓が露出し、グツと伸ばした足が障子を蹴破り、まさに幽霊屋敷そのものだったそうです。そして切腹自殺した弁一も台所で息を引取った後は、京子さん以上の出血で、検視によると「状に切つた傷痕は、余程勇氣のある切り方だといつていた由です。出刃庖丁もよく切れたものです。近所の人も口を揃えて、「男でないと出来ぬ事だ。昔の武士が顔負けだ」と云っているとのことだ。

（以上）

探偵小説新考

— 私の書き抜き手帳より —



東 一 郎

まえがき

非常に地味ではありますが、良心的で、

そして多くの文献を、歴史的な厳密な考証によって忠実に批判し乍ら進歩し続ける「奇譚クラブ」の存在は、実にありがたい

ものであります。復刊第四号より愛読者になりました私は嘗っては探偵小説ファンでもありましたので、改めて別の角度から「探偵小説」を再検討致し度く、「探偵小説新考」の題の元に僅か乍らの資料から書き抜いて見ました。

皆様方に何等かの御参考になれば幸いです。

先ず昭和四年に改造社から刊行された日本探偵小説全集第八篇「保篠龍緒集」の中に、「紅手袋」と云う作品がありますが、此れは探偵小説としても相当に面白く興味深いものです。保篠氏は多分にサディズムの感が強く描写も当時にしては鋭い方でしょう。とにかくその内的一篇を書き抜いて見ましょう。

犠牲の小羊

…前略…

「では、最後の犠牲と、そして私達の仕事の最初のお祭りを致します」

女の声がはっきりと命令した。

「ヒーッ」

断末魔のやうな女の悲鳴が起った。

「泣いても駄目だよ。静かにし給へ」

男の声だ。

「猿轡をはめる」の他の男。

お銀は又穴から這ひ出した。そして扉の隙間から中の様子を覗き込んだ瞬間、流石のお銀も全身にブルツと身慄ひが流れた。

室は八帖位。蛇のやうに流れた電線の先きに五燭の電燈が光って、その周囲に五人の男と一人の女とが、こちらを背にして立ってゐる。やがて、

「よしッ」と声がして地上にかがんでゐたらしい男の黒い影がヌツと立ち上った。

彼等の足の間から、彼等に取りまかれてゐる地上に横たはつてゐる黒い影を認める事が出来た。

女だ……縛られてゐる若い女性だ。

電燈の光を動かした時、それがサツと彼女の顔へ流れた。

闇の中にくっきり白く——それは恐らく真青になつてゐたであらうが——浮き出した美しい少女の顔。年は十八九、凄じ程の美しさと気品を持った少女である。流行の洋髪も今は無残にくづれて額に覆ひかぶさるやうになり、派出な流行の着物も皺苦茶になり、悲しみと怖れとにやつれて、痛ましい限りである。

両手を後ろに縛られた儘彼女は顔を仰向けて横に倒れてゐた。

「立たして御覽」と女士官が再び命令した。男が弱々しい彼女を抱き上げた。涙は青ざめた頬をぬらして真赤に泣きはらした眼

からは玉のやうな涙が止めどもなく流れてゐる。

「泣いても斯うなつては致し方がないのよ」と彼女が又いった。

「では……此の室で、洗礼をします。用意して下さい」

女はつと身を二三歩退いた。電燈を持った男が彼女とならんだ。

二人の男が奥手の方へ行つた。

「帯をといひ、衣服を脱がせます」

少女の手の縛を解いた。そして、二人の男が両方から、彼女の手をとって押えてゐる。他の一人が少女の背後から帯をとき初めた。

お銀はまるで拷問に等しいこの場の有様に息をころして窺つてゐた。

帯を解き終ると衣服を脱がせようとした。少女は苦痛に顔をゆがめて力一杯身をもたえたが、何しろ荒くれ三人に押へられては如何ともする事が出来ない。

一枚はがされた。二枚はがされた長襦袢もとられた。

張り切った肉につつまれた肩の丸み、盛り上った乳房。純真そのもののやうな少女の全裸が石像のやうに闇の中へ浮び上った。

男二人に両手をとられて、唯せはしい呼吸が苦しみと恥しめにふくよかな胸へ波を打たせた。涙も枯れた少女は絶え入りさう

な顔をふせて、今にも氣絶しさうであつたが、暫くしてキツと顔を上げると、決死の色にぶるぶるとふるへ乍ら恨みにもえる血走った眼で、傍に立つてゐる女士官を睨め据えたが、猿轡の苦しさ、少女の喉は激しくふるへても声一つ立てる事は出来なかつた。

「用意はまだ？」

悪魔のやうな女士官は冷やかに少女を見据えていった。

「ハア」

奥の方で声がした。そして二人の男が西洋風呂を持出して来て真中に据えた。そして長いゴム管を引ずつて来た。

「用意は出来ました」

「さう？ では……」残忍な女はきつと少女を見て、「腰巻もとつてしまひなさい」冷然といひ放った。

水地獄

流石に蛇の道も女である。お銀は思はず目をそらして太い息をついた。少女に対する同情と、余りの残忍さに対する戦慄と、彼等に対する義憤とが全身に渦を巻いた。彼女はブルブルツと身をふるはして歯を喰ひしめた。

「鬼ッ！ 畜生！ 人でなしッ！ 悪魔ッ！」お銀はピストルを握りしめて、中へ飛び

込んで片ぱしから殺してしまはうと決必した。

「一生に一度だ。血を流してやれ！」

持って生れた俠氣が身体中へ湧々と盛り上って来た。

右手にピストル。左手に扉をかけて、今一度中の様子を覗いて、「アッ」と叫ぼうとした。

見よ。全裸の少女は、丸味を帯びた純白の肩から背へ、漆黒の髪を乱して、風呂桶の中に、両手を男に取られて立たせられたまま、冷い水道の水を頭から浴せられてゐるではないか。

肌寒い春、冷え切った水を頭から浴せられて、いかで堪えられよう。まして花はづかしい少女である。身に一糸をつけぬ全裸である……。

「ウーム」

紅水仙の姐御は眼尻をつり上げ唸った。

実際読んでいて、息づまる個所です。迫力もあり、何かしら、ひしひしと胸を打つものがあります。此れだけすくれた文章は、当時於てさえも珍らしいと感じられます。読んでゐる時はさほど感じないまでも、いざ此の書き抜いた文章の通り一般の人々が書けるかと云えば、どうして中々にむずかしいものです。ですから探偵小説と云うものはとても容易なことでは書けるも

のではありません。

× × ×

次に昭和七年に春陽堂から刊行された日本小説文庫(一七一)水谷準作「殺人狂想曲外二編」の中から、「瀕死の白鳥」を選んで見ました。此れは些か江戸川乱歩氏と類似している作品かも知れませんが、当時の形式が流行したのかも分りませんが、探偵小説では一応考えられる犯罪物として興味ありましたので書き抜いて見ました。

——何の気なしに跳込んで行って、ほっと一息つき、さておもむろに後ろを振り向いた時先程、暗闇の中にグレート・デンを見出したより以上の驚きに、昇吉はその場に棒立ちとなった。他でもない——一人の裸体の女が、長々と椅子の上に寝そべってゐて、昇吉の方をずっと見据えてゐるではないか。電燈の光が暗いから、女がどんな表情をしてゐるのかまでは分らなかつたけれども、一糸もまとはぬ姿を、不意の闖入者の眼で汚されて、黙つてゐる女はない筈だ。

「これは、失礼」

昇吉は内心その女の素晴らしい肉体に驚きながら、おどおどと吃つて、その部屋を出て行かうとした。が可怪しいことに、さうしながら、また女を見やると、向ふは微動だもせずに、ぬっと首を上げて彼を見守つてゐるばかりで、声一つ立てようとしな

のだ。声ばかりではない。考へて見ると、昇吉が這入つて来た時から、全く同じ姿勢であるので、事によるとずっと前からさうした姿勢だったかも知れぬと思はれる節がある。昇吉はふと不審を抱いた。

人形ではないのか？ さうだとすれば随分笑止千万な話だ。彼は胆を据えて、扉の前から再び足を進め、女の前へ歩み寄つた。それでも女は動かない。いいお人形だな。昇吉は自分の感違ひに苦笑を感じながら、もういささかの恥らひもなしに真面に女を見据えた。案の定——と思はうとして彼はまたギョツと息を呑んだ。人形ではないのだ。それは正に曾つて生きてゐた人間なのだ。眼は義眼かも知れぬ頭髪も後から植えたのかも知れぬ。だが、眼の周りの紫色の隈と云ひ、唇の色と云ひ、爪の青さと云ひ、それは死んだもののみが持つ色なのだ。この死人は、どうしてこんな生きてゐるやうな姿勢で、而も着色とは云ひながら、生き生きとした頬をして、こんな場所に押し込められてゐるのだらう？

芬々たる消毒剤の匂ひを嗅ぎつつ、昇吉は眼を睜つたまゝ、心中の驚きを制しかねてゐた。木乃伊、さうだ、強ひて云へば木乃伊だが、それよりも人間人形と云つた方が、より適切かも知れない。死人に生前のポーズをとらせて、腐らぬやうに保存しよ

うとする酔狂もの！　だがそれにしては、いかにも不手際な人間人形だった。一眼だけでは、それが生きてゐるかと思ひ紛うけれど、かうやって仔細に眺めて見ると、単に死人に化粧したといふだけにとどまつてゐる。

昇吉は手を伸して、女の膚に指先を当てゝ見た。ぬるりとした感触、それは死体の分泌物ではなくて、恐らく塗りつけた油のせりだつたらう。

探偵小説では一応此の人間人形が考えられる。殊に江戸川乱歩氏には実に多く使用されるが、少々あくどく、且つ又グロテスク過ぎるので、私自身としては乱歩の諸作品はどうも好きになれない。此の水谷準氏の『瀕死の白鳥』は私が中学生の頃読んだ作品の一つで印象に残つたものでした。此んなことを云つては失礼に当るとは思いますが、探偵小説としては、江戸川氏よりも水谷準氏の方が、文章内容共にすぐれている様に感じられます。

ただ残念に思うことは、此の日本小説文庫の挿絵は実に悪く、今少し好い画家が描かれれば——と思つた次第です。

とにかく此の人間人形が書かれている箇所は、その犯罪性を強調し乍ら、それほどあくどくなく、読んでいても、当りは柔かい様に感ぜられるのです。

同年十二月に刊行されたやはり日本小説文庫（二二八）『夢野久作 押絵の奇蹟』からは次の「支那米の袋」と「死後の恋」を選んで見ました。「支那米の袋」は責められた女の立場からの文体です。此れも又きめ細かく、且つ実にそれが適切にうったえられておりますので実感がこもつて、体験談の形式ですが、読む人をひきつけます。

——「エヘン……袋の中の別嬪さんたち。よく耳の垢をほじくつて聞いておくんなハイよ。いいかね。……お前さん達はみんな情人と一緒になり度さに、こんな姿に化けて此処へ担ぎ込まれて来たんだらう。又……お前さん達の情人も、おんなじ料簡でお前さん達を此処まで連れて来たんで、決して悪気や無かつたんだらうが、残念な事には、それが出来なくなつちやつたんだ。いいかい……だからね。……エヘン……だから怨むならばだ……いいかい……怨むならば、お前さん達の情人にこんなステキな智慧を授けた、ヤングと云ふ豪い人を怨まなくちやいけないんだよ。……それからもう一人……この艦に乗つてゐる俺たちの司令官を怨みたけれあ怨むがいいってんだ。……イヤ……事によると、その司令官だけ怨むのが本筋かも知れないがね……どっちにしてもお前さん達のいい人や、そんな連

中に頼まれた俺達を怨んぢやいけないよ。いいかい……と云ふ訳はかうなんだ。先刻ヤングさんが司令官に、お前さん達を亜米利加まで連れてつていいかって伺ひを立ててみたら、亜米利加の軍艦の中には食料品より以外に肉類を一切おいちやイケナイつてえ規則になつてゐるんだッさあ……だからね……折角此処まで来てゐるのをホントにお気の毒でしようが無いけど、ちやうど風も追い手のやうだから、お前さん達はその袋のまんま、海を泳いで浦塩の方へ……」

ここまで其の男が饒舌つて来たらあとは聞えなくなつちやつたの、だつて妾のまはりには転がつてゐるいくつかの袋の中から干切れるやうな金切声が一どきに飛び出して、ドタンパタンとノタ打ちまはる音がし始めたんですもの。中には聞いたやうな声がいづくもあつたやうだけど、そんな時に誰が誰だかわかりやしないわ。ただ耳が潰れるほどキー／＼ピーピー云ふだけです。の。　だけど私は黙つてゐたの。声を出すより先にどうかして袋を破いてやらうと思つて一生懸命に藻掻いてゐたの。だけど袋が小さい上にトテモ丈夫に出来てゐるので噛み付かうに噛み付けないし、力一パイ足を踏ん張ると首の骨が折れそうになるし、その苦しきさつたら無かつたわ。だけど、そ

れでも生命がけの思ひで力のありつたけ出して藻掻いてゐるうちに、妾のまばりの叫び声が一ツ一ツに担ぎ上げられて、四ツか五ツ宛行列を立てながら階段を昇りはじめたの。その時にはチヨットの間みんなの叫び声は止んだやうだけど、その階段の音が聞えなくと又、前よりも非道い泣き声や金切声がゴチャ／＼に聞え始めたの。めい／＼に男の名を呼んでヒイヒイ泣いてゐたやうよ。

だけど妾はそれでも泣かなかつたの。さうして死に物狂ひになつて、両手で頭をしつかりと抱へながら、足の処の結び目を何度何度も蹴ったり踏んだりしていたら、身体中が汗みどろになつて、髪の毛が顔中に粘り付いて、眼も口も開けられなくなつたの。その中に袋の中は湯気で一パイ詰まつたやうに息苦しくなつて来るし、髪の毛は顔から二の腕まで絡まつて、動くたんびにチク／＼抜けて行くし、おまけに着物と毛布が胸の上の処でゴチャ／＼になつて袋の中一パイにコダワリながら、お乳を上へ上へと押し上げるので、その苦しさをたら……もう死ぬか／＼と思つた位よ。さうして其のうちに……御覧なさい。此の臂の処が両方ともこんなに肉が出てピカ／＼光つてゐるでせう。この臂はヤングが「猫の臂」^{キャットエルパウ}つて名をつけて紐育婦人の臂くらべに出す

つて云つて居たくらゐる柔らかくてスナリしてゐたのが、知らないうちに擦り破れてしまつて動いたんびにヒリ／＼と痛み出して来たんですもの。……それに気が付くと妾はもう、スッカリ力が抜けてしまつて、意地にも張りにも動けなくなつたやうよ……両方の臂を抱へてグッタリとなつたまゝ、呼吸ばかりセイ／＼切らしてゐたやうよ。

……(中略)……

さうしてヤッサモッサやつてゐるうちに、どうした拍子か袋の口が解けて、両足が腰の処までスッポリと外へ脱け出した事がわかつたの……

それに気が付いた時に妾がどんなに勢よく暴れ出したか……アラマ……笑つちや嫌つて云ふのに……それ処ちや無かつたわよソソ時の妾は……何でもいいから……足が折れても構はないから此の黒ん坊を蹴殺して、その間に袋から脱け出して遣らうと思つて、頭でも顔でも胸でも何でも蹴つて蹴つて蹴飛ばして遣つたわ。……え……黒ん坊も一生懸命だったやうよ。袋の上からシッカリと組み付いて来て、片っ方の手で妾の両足を押へようとするのだけれども、妾の両足を一緒に掴まへる事はなかなか出来なかつた。片っ方だけ捉まへても妾が死に物狂いで蹴飛ばしてやつたもんだから、しま

ひにはセイセイ息を弾ませて、妾の足と掴み合ひ掴み合ひしながら彼方へ転がり、此方へ蹴飛ばされしてゐたやうよ。……けど、そのうちに妾の着物と毛布が両手と一緒ににだん／＼上の方へ来て、息が出来ない位に切なくなつて来ると、黒ん坊はたうたう妾の両足を捉まへて、足首の処を両手でギューと握り締めちやつたの。

そんな時に妾は初めて、大きな声を振り絞つたわ。両手を顔に当てて力一パイ反りかへりながら、

「助けて／＼／＼。ヤング／＼／＼」
つてね。え……それあ大きな声だったわよ。咽喉が破れる位嘔鳴つて遣つたんですもの。さうして両足を押へられたまま、起き上つては反りかへり／＼して固い床板の上へ頭をブツ付け始めたの。死んだ方がいいと思つてね。

さうしたら黒ん坊も其の勢いに驚いて諦める氣になつたんでせう。

「……ウ、ウ、……そんなに死に度えのかナア……」

つて喘ぎ／＼云ひながら、私の両足を掴んで床の上をズル／＼と片隅に引っぱって行くと思つたら其処においてあつたらしい細い針金で足首の処から先にグル／＼／＼と巻き立てて、胸の処まで袋ごしに締め付けてしまつたの……

その時の苦しきさたら、それあ、とてもお話ししたって解かりやしないわよ。だってチヨットでも太い息をするか動くかすると、すぐに長い細い針金が刃物みたいに喰ひ込んで、そこいら中の肉が切れて落ちさうになるんですもの……それでゐて、いくら喘へいでも喘へぎ切れない位息が切れてゐるんですもの……妾はそのまま直ぐに気が遠くなっちゃった位なの。だけど又すぐに苦しまぎれに息を吹きかへすと又もや火の付いたやうに針金が喰ひ込むでせう。地獄の責め苦ってほんたうにあの事よ。さうして息も絶えぬにヒイヒイ云つてゐるうちに今度は本当に氣絶してしまつたらしいの。――

此の描写は中々に実感がこもっている。責められる女からの体験談の形式は中々にむずかしいものだと思います。それにしても支那米の袋とは考えたものです。「アリスの人生学校」でもズツクの袋の中にアリスが入られ、折檻されますが流石にアリスからの立場は相当にくどくなると見えて書かれてはおりません。「支那米の袋」も挿画は余り上手ではありませんが、それだけに妙に印象深く残ったものでありました。

此の作品から感じられることは、女と云

うものは案外人から虐待されたい――と云う氣持がより以上に強いのではなからうかと云うことです。「奇譚クラブ」でも、女の読者からの訴え等にもしばしば現れてはおりますが、此の夢野久作氏の作品を見ますと、実によく女の心理を擲んでいと思ひます。

次の「死後の恋」は些かグロテスク泌みではおりますが、此れ又切腹とは異なりますが猶銃で女の下腹部を寶石で撃ち込むと云う一寸変つた物語でもあり、男装した女が殺される所に興味が湧かれることと思ひます。

――私の居る凹地を取り捲いた巨大な樹の幹に、一ツ宛丸裸体の人間の死骸が括りつけてあるのです。しかも、よく見ると、それは皆、最前まで生きてゐた私の戦友ばかりで、めいめいのシヤツか何かを引つ裂いて作つたらしい綱で、手足を別々に括つて、木の幹の向うへ、うしろ手に高く引っぱりつけてあるのですが、そのどれもこれもが銃弾で傷ついている上に、さうした姿勢で縛られたまゝ、あらゆる残酷な苦痛と侮辱とをあたへられたものらしく、眼を抉り取られたり、齒を砕かれたり、耳をブラリと引き千切られたり、股の間をメチャメチャに切りさいなまれたりしてゐます。そ

んな傷口の一つ一つから、毛糸の束のやうな太い、また細長い血の紐を引き散らして、木の幹から根元までドロドロと流しかけたまま、グツタリとうなだれてゐるのです。口を引き裂かれて馬鹿みたやうな表情にかはつてゐるもの……鼻を切り開かれて笑つてゐるやうなもの……それ等がメラメラと燃え上る枯れ葉の光りの中で、同時にゆらゆらと上下に揺らめいて、今にも私の上に落ちかゝつて来さうな姿勢に見えます。

そんな光景の見まはしてゐる間が何分間だったか、何十分だったか、私は全く記憶しません。さうして胸を抉られた下士官の死骸を見つめてゐる時には、自分の胸の処を、鉤が千切れる程強く引つ擲んでゐたやうです。咽喉を切り開かれてゐる将校を見た時には血の出るのも氣付かずに、自分の咽喉仏の上を掻きむしつてゐたやうです。下脛を引き放されて笑つてゐるやうな血みどろな顔を見あげた時には、思はずハッハツと、喘ぐやうに笑ひかけたやうに思ひます。

……現在の私が、若し人々の云ふ通りに精神病患者であるとすれば、其時から異常を呈したものに違ひありません。

すると、そのうちに、かうして藻掻いてゐる私のすぐ背後で、誰だかわかりませんが微かに、溜め息をしたやうな氣はいいが感

ぜられました。それが果して生きた人間の
ため息だったかどうかわかりませんが、私
は、何がなしにハッとして飛び上るやうに
背後をふり向きますと、その一際大きな
樹の幹にリヤトコフの屍体が引っかゝつ
て、赤茶気た枯れ葉の焰にユラユラと照ら
されてゐるのです。

それはほかの屍体と違って、全身のどこ
にも銃弾のあとがなく、又虐殺された痕跡
も見当りませんでした。唯その首の処をル
パシカの白い紐で縛って、高い処に打ち込
んだ銃剣に引っかけてあるだけでしたが、
そのままにリヤトコフは左右の手足を正し
くブラ下げて、両眼を大きく見開きながら
まともに私の顔を見下してゐるのです。

……その姿を見た時に私は、何だかわか
らない奇妙な叫び声をあげたやうに思ひま
す。

……イヤイヤ。それは、その眼付が、怖
ろしかったからではありません。

……リヤトコフは女性だったのです。し
かもその乳房は処女の乳房だったのです。

……ああ……これが叫ばずには居られま
せうか。昏迷せずに居られませうか。……
ロマノフ・ホルスタイン・ゴットルプ家の
真個の末路……。

彼女……私は仮りにさう叫ばせて頂きま
す……彼女は、少し後れて森に這入った為

めに生け捕りにされたものと見えます。さ
うして、その肉体は明らかに「強制的の結
婚」によって蹂躪されてゐることが、その
唇を隈取つてゐる猿轡の癍痕でも察しられ
るのでした。のみならず、その両親の慈愛
の賜である結婚費用……三十幾粒の宝石は
赤軍がよく持つてゐる口径の大きい猟銃を
使つたらしく、空砲に籠めて、その下腹部
に撃ち込んであるのです。私が草原を匍
つてゐるうちに耳にした二発の銃声はその
音だったのでせう……その処の皮と肉
が破れ開いて、内部から掌ほどの青白い臓
腑がダラリと垂れ下つてゐるその表面に、
血まみれたダイヤ、紅玉、青玉、黄玉の数
々がキラ／＼と光りながら粘り付いて居り
ました。

此の個所の挿絵は不気味過ぎて好くあり
ません。下手な絵だけに尚更です。たしか
に挿絵は大事な役割を成しているものだと思
います。

然し宝石を弾丸の代りに女の下腹部に撃
ち込むなんて、少々奇抜過ぎますが、それ
だけに、切腹とは異つた深い印象を与えま
す。が、息をもつかずに読ませる所はやは
り夢野氏の筆がたつ故でもありましよう
か。私自身としては有名な「押絵の奇蹟」
よりも、此の二篇の小説の方が好きです。

あとがき

此処に代表探偵小説家の作品から、僅か
四篇のみを挙げたに過ぎませんが、中々に
集めることはむずかしいものです。戦前作
家の作品は、文章も上手いし、楽に読ませ
ます。やはり此等（こゝ）は戦後派の探偵小説家
とは異つた深い味のある小説となつてい
ます。

その犯罪性が強くても、反つて読ませる
のですから流石です。

「奇譚クラブ」六月号で、文献的価値ある
ものを紹介して欲しいとありましたので、
一応書き抜いて見ましたが、いざ書いて見
ると中々に大変なものでした。全く読む時
はさほど感じない迄にも、自分がその立場
になつて見れば、その労力がいかに多大で
あるかが分つた次第です。

藤見郁氏の「現代大衆文学に現れた責め
の描写」、角間莊吉氏の「私のコレクショ
ンより」等々も、実に変な労力を要した
ことと思ひます。あれだけの資料を集める
のは容易ではありませんまい。

何れ稿を改めて、次回は海野十三氏の作
品から興味ある小説を書き抜いて見たいと
思ひます。

毎号、灸党の人達の貴重な体験や文献に、私は眼を皿のようにして読み漁っているのだが、ひとつ、私達夫婦の体験を聞いて頂こうと思う。

私は性来が病弱なので、幼い頃から身柱（チリゲと俗に云う）に灸を据えたし、四華の灸と云って、支那から伝来した名灸も据え、いっしか大の灸党になったのだが、妻は—その反対に大の灸嫌いで、何んと云っても西洋医学一遍倒で、仮りに弘法様の灸で命が助かる



灸 痕 を 吸 う

脇 坂 豊 助

と解っていても、そんな非科学的な療法は、死んでもいたしません、と豪い見幕で、私の灸礼讃の心理を、低級だと嗤っていた。

ところで、妻は今年四十になるのだが、今年の二月はじめに風をこじらせてから、急に妙なせき方をはじめたと思うと、それが喘息だと分った。早速妻の意志通り西洋医学の厄介になって、某大病院で治療を受けたのだが、いっこう、医者自慢する新薬も効がな、エフエドリンも駄目、喘息発作は益々増

悪する一方で、今にも息が切れるのじやないかと危ぶまれるような気が気でなく、
「どうだ、こうなったら、ひとつ欺されたと思つて灸治を試みたら……」
とすすめたのだが、

「厭ですわ、あんな原始的なもの……」

妻の科学主義はなかなか頑強で、私の勧めを受けつけようとしなかった。そのうち、病勢は募る一方で、遂にたまりかねた私が、
「お前さんの躰は、お前さん一人のものじやない筈だ、夫である私とは同心一体だろう。自分だけの意志で、お前自身が苦しむのは良いとしても、万一のことがあると私はどうなる——喘息で死ぬことはよもあるまいけれど苦しむお前をみている私は、お前さん以上に苦しんでいるのだ。頑固もいい加減にして灸を据えなさい」

と、いつになく命令的に厳しく云い聞かせた。すると妻は、私の切ない心に動かされたのか、

「すみません、灸治を受けます……」

と、さすがに打ち萎れて、私の勤めに聴従したのだが、病気の苦しみも、さぞこたえたのだらうと、ふと私は暗然とした心地に閉ざされたが、善は急げとばかり、行きつけの、灸点師のところへ妻を同伴した。

灸点師は、

「喘息はやはり打抜灸がよろしいな、沢山の灸点に小粒灸を据えるより、奏効確実です」と云って、大灸を据えるようにすすめた。これには実のところ私の方が少し不安になった。と云うのは、今まで私はずっと小粒灸ばかりで、打抜灸の経験がさらになかったからだ。

ちよつと余談だが、打抜灸というのは、灸党の人には余計な話かも知れないが、昔の一銭銅貨大の艾を据えて、灸痕を化膿させる方法である。温泉なんかでも、薬湯で火傷させて効かせるのがあるし、そのために皮膚に膿包疹ができると余計に効くとも云われるくらいで、いちがいに、野蛮だとは云えないのだが、見るからに無斬なものではある。

灸点師は、私の不安を察したらしく、

「はつきりと奏効理由は分りませんが、私の臨床経験では十中の八まで、びったりと発作が熄みます、熱さも、そう辛抱のできん程のことはありません、御主人のいつもの小粒灸の方が灼いぐらいますよ……」

いかにも自信たっぷりです、それに奏効確実と聞かされては心も動くので、そつと妻に、

「どうだい、やってみるかね」

と尋ねると、妻は案外平気な顔で、

「え、やるなら思い切って、その大きな灸を据えてもらいましょう。まさか、灼き殺され

るほど熱くはないんでしようから……」

妻がそう決心して呉れるなら、私には異存がないので早速くやつてもらうことにした。

灸点師は、妻の上半身を脱がせて肩外と云う経穴（つぼ）のあたり、それは第二胸椎の両傍の辺りだが、少し外側にずれて墨で印をつけた、それが喘息の名灸家伝だそうだが、こうして眺めてみると、妻の白い肌が、いかにも美しく、脂肪の膨らみが、すべすべと女の爛熟を匂わせている。肌を大切にしてきた妻の心が胸を搏つようで、その肌に一銭銅貨大の、醜い癰痕をつけるのは、実に忍びない心でしたが、私は無理に眼をつむった。

親指よりまだ大きい艾が煙を吹いて、火が加速度的に皮膚に迫ると——妻は、きつと、軀を硬くしたようだが、かすかな呻き声で、焼灼の痛みに堪えていた。

それでも、脇息においた手が必死に握りしめられ、悶えるように腰までが動いていた。さぞかし、灸する間の時間の長さを味ったことだろうが、事実は、短時間で終っていたのだ。

「どうだった？」

私は、ほつとして妻をいたわった。

「熱かったわ、生れて初めて、灼く痛さを知ったんですもの。随分、力の要るものね」

と云って妻は、そつとハンカチで、額に滲んだ汗や、脇の下を拭いた。

灸点師は、

「もつと声が出るかと思つたら、奥さんはなかなか辛抱強いですね」

と笑った。妻がにっつと私をみて微笑した。

私は、灸治を勧めた手前もあり、日毎の、発作の苦しみを見る眼の辛さもあって、神さまに祈るような心地で、じつと病状の推移を観察した。

その時、灸点師の呉れた軟膏を、和紙に伸してべったりと妻の灸あとに張るのが私の仕事になったのだが、二日目には、灸痕が壊けて一面に膿汁が出、四、五日目には、粘つとりとした膿があふれていた。

「灸のあとが痒いわ、どうしたのでしょうか」と妻が云い出した時には、嘘のように、あれほど生き死にの苦しみをした発作が、すっかり収まって、妻の顔が明るく冴えていた。

「どうだ、私の云つた通りだろう、灸治の効めは大したもんだらう」

私が、自分の手柄のように鼻高々と威張つてみせると、妻は揶揄たいような笑い顔で、

「残念ながら……認めましょう、でもね、わたしには、まだ疑問がちょっぴりあるの」

「なんだい、その疑問っていうのは」

「灸が効いたんでしようか、あなたの心が通じたのでしようか、あなた、どちらとお思ひになって？」

「ふふふ、まあ、両方だろうね……」

二人は声を合わして笑ったほど、素晴らし
い効きめで、病苦から解放された妻は、何ん
だか五つ六つ若返ったのじやないかと思われ
るほどの元気になった。

一週間ほど経ってからのことである。妻の
灸痕は化膿のまま、その周囲までが赤くただ
れ気味で、痒くて寝つかれなくなった。

なんでも打抜灸は、この化膿しているとき
が、もっとも治療作用が旺んだと灸点師から
聞かされていたので、

「痒くても辛抱するんだね」

無理にも、私はそう妻に云っていたのだが
その晩は、とうとう床の上に起き出して、

「あなた、とても痒くてやり切れないの、す
みませんけど、膏薬をはがして、ぐるりを搔
いて頂戴ね」

と、私にせがんだ。

私は、起き出して、妻の背後にまわり、肩
の膏薬の紙をはがしてやった。どろりとした
膿が、ただれた灸痕にもり上っていた。

「これやひどい——」

そう云って私は、ガーゼを持ち出して、そ
っと膿を拭いた。膿の下には、赤い肉が、ぶ
つぶつと沸き出すように肉芽をみせていた。

恰度、噴火口のような、その灸痕のぐるり
を、用心深く指先で摩擦してやると、妻は、

身をよじらせて快よかったが、

「たまらないわ、灸痕も掻いて頂戴——もう
痒くて辛抱できないの、ね、お願いだから……」

「だって、そりや駄目だよ、きっと別の悪い
細菌が入るから」

「だって——どうせ化膿してるんですもの、
ね、ガーゼで掻いて頂戴よ」

「そんなことをしたら、治りがおそいよ」

「知らん、こんなに頼んでるのに、じてくれ
ないなら、わたし自分で引っ掻くわ」

妻は、幾分かヒステリックに、手を肩の上
にあげた。私は慌てて、その手を押えて、

「冗談じやない、そんなことをしたら大変だ
……じや、ガーゼで、そっと掻いてあげよ
う」

私は、ガーゼの先で、擦るように創口にな
った灸痕を拭いたが、却って、それは痒さを
誘ったらしく、

「もっときつくよ、そんなんじや、さっきよ
り余計痒くなっちゃったわ」

と妻は、軀を烈しくゆすった。困り果てた
私は、その時、ふと灸痕を吸ってやったら、
と思いついて、

「吸ってあげようか」

と云いつつ、妻の横顔をのぞいた。

「だって膿できたないんでしよう……」

そう云う妻の言葉の終らぬうちに、私は、
軀の芯を貫き透る熱い感情の稲妻に撃れて、
吸いつくように灸痕に唇を冠せた。

私は夢中だった。きたないという考えは、
意識に上らなかつた。創口をまさぐる舌の先
が、暴々しく——そして微妙に動いた。

肉芽の味覚——膿汁の臭い、それが私にと
って、生れてはじめての、珍重な刺戟であつ
たことは云うまでもない。

妻は、私の舌の探りに、どんなにか喜んだ
ことか、痒いところを掻き破る無残な快楽は
体験でのみ知ることのできるものだ。

私たちは、十五年間の夫婦生活で、はじめ
てこんな深い欲びを発見したのだった。それ
にしても、唾液にどんな作用があるのかは知
らないが、私達が、まるで、秘密の遊戯のよ
うに、灸痕を吸う愉しみに耽っている間に、
ずんずんと創口は治療して、今では、ひきつ
つたような瘢痕が焼鰻でも押しつけたように
固くなっている。

だが、来春は、喘息の出ぬ先に、お灸をし
ようと妻と二人で楽しみにしているのではあ
る。

(おわり)



蜂 洞 完 成

蜷 間 洋 子

向うのお部屋から野球放送が聞えてくるのどかな日曜日。私は久しぶりにペンをとりなつかしい奇クの方々にお便りを致そうと存じます。ふとした事で妙な癖を覚えてまして、それが私の人生の唯一の快楽になってしまいました。しかし、この様な習慣は他の方々にもあるのではないでしようか。私達女性には自分の身体の一部への愛着という様なものは誰でも持っているものだと思えます。そし

て全ての女性が鏡の前でこっそりその秘密を楽しんでるのではないでしようか。私などもいつか書きました様にコルセットマニアです。それから、ただ、ウエストを細くすることにのみ日夜生きがいを見出している者でございませう。道を歩いていまして同性のウエストは気になりまして、ぐっとくびれているのを見ますと、うらやましい気がしますが、そういった方は比較的少く、どちらかといえば、ず

んどのようにだらしなくだらんとしている方が多いでございませう。

昼はウエストニッパを締めたきりでいませうが、夜は人が寝しずまったころプレイにとりかゝるのです。それは止血ほうたいからヒントを得たのです。ウエストに三まわりぐらい丈夫な紐をまき背中のところ三十センチぐらいの棒をさしこみしぼり上げるのです。みるみる腹はくびれて息苦しくさえなりました。そしてなおすこしづきりぎり棒をまわしてゆきますと苦痛も最初の堪え難いものから次第に苦痛がやわらいで参ります。それでいて息づかいも妖しくなり体も伸ばしていられず前かがみになり足もちめていなければならなくなります。そしてもうどんなに力を入れても棒はまわらなくなります。と、どうでしょう、ウエストから下半身は次第に感覚がなくなり皮膚も紫色に変わってくるのです。下腹の皮膚が紫色になり上半身の白さと対照的になります。その時の全身の手ざわりは忘れられません。体はカッカツとして、冬でもそのまゝでいられます。遂にはウエストから下はしびれて丁度品物がこるがっている様になってしまふのです。洋子の肉体は腹を境にして全く二分されたようでございます。ふと、私はこのまゝで空気浣腸をしたらと思いましたが適当な方法が無く断念致しました。

このポーズで腹を空気でふくらましたらどんなでしょう。異様にふくれ上った腹部と、極端にくびれた胴、きつと素敵なスタイルだろうと思います。

洋子はこの頃特にきつくウエストニッパをするので腹部に紫色のすじが何条もついたりでございます。時には擦りむけたようになって、ひりひりと痛むことがあります。皆

様、洋子の様子を御想像下さい。ウエストを細く締める競争はいかがでしょう。女性、男性を問わず強く締めたウエストのサイズをお知らせ下さい。

週刊雑誌「週刊読売」六月三日号に、次のような眼を惹く記事が載っていた。

その第一は「すくりーん・ごしっぶ」欄である。

「東宝の青春スター久保明には、一日百通というファン・レターがくる人気。今春から立教ボーイとなっただけにノートの整理も忙しく、ファン・レターを見るのだけでも大変。それでも熱心に読んでいるが、その彼が『これだけは困る』と悩んでいる一群のファンがいる。

〔新聞・雑誌〕通信

青山三枝吉

それはW過剰の男性

たち。いわゆる中性の人々ともいった連中が、久保のファンには案外いるらしく、そのファン・レターはまさに直接的用語のラ列。おまけに家にまで乗込んでくるしまた「何でも結構ですが、あなたの汗や体臭のしみこんだ下着をぜひ下さい」といったスサマジキものも現れるさわぎ。好漢久保明も、この手のファンには文字通りガッ

クリ。困る、困ると顔あからめて弱りきっている」

ファン・レターが直接用語のラ列というのも面白いし、久保明のファンだけに案外多いということも面白い。久保明が何故彼らにモテるのか、奇ク読者の中でその方面にくわしい方は研究されたらどうか。直接用語のラ列ファン・レターも公表したら、

この紳士は有名私大卒で四十三才、さる会社の課長で酒ものまずタバコもすわず、謹厳実直、二人の子供まであるよきパパさんなのだが、たった一つ、便所のぞきだけが道楽という困った御仁。

内ポケットの手帳には都内のあらゆる公衆便所の特長がていねいにメモされてあったが、その一、二を紹介すると、一番のぞきよいのは新宿駅南口公衆便所と、都電大塚停留所わき、絶対にわからないというから、ご利用の方ご用心を！」

出歯ガメ事件だけならさして珍らしくはないが、都内のあらゆる公衆便所がていねいにメモしてあったというのはケツサクではないか。読売の記者もこんな所にニューズ価値を認めたのだらう。そのモンダイの手帳をのぞいてみたいなどという奴は、出歯ガメの出歯ガメである。

さりながら出歯ガメ心理などというものは誰にでもあるもので、大学卒だとか課長だとかいう身分地位にはあまり関係はなからう。

ずい分興味のあることだらう。

その第二は、新聞にのらなかったニュースという欄。「出歯ガメ日記帳」という小見出しがついている。

「五月十三日の母の日、東京駅乗車口の公衆便所で、りゆうとした背広服の紳士が丸の内署員につかまった。いわずと知れた出歯ガメ、婦人便所をのぞいていたのである

倒錯の英雄、織田信長を完膚なきまでに掖抉した新研究

倒錯の英雄、織田信長

(完結篇)

笠置俊郎作

第七章

加虐と被虐

信長の加虐性は、これまで数章に亘って書いてきたが、信長が独裁的権力を恣にする地位を築いた後になっても、加虐性の故に、これに淫して身を破る愚蒙に陥らなかったのは、たしかに感歎に価することであろう。

稀大の変質的加虐性を、その血の中に漂えていた信長が、自己の人生上の至上の理想をいささかも傷つけずに、着々と成就完全させて行った。あの非凡な精神は、いったいどういうものなのであろうか。

私は、それを信長の知性人としての特質だと見るのだが、どうであらう。

信長は、感傷的な心情を謳う、悲壮の英雄でなくて、リアリストとして、極めて近代人に似通った信条に生きた英雄であったから、知性人らしい考え方と身の処し方を知っていたに違いない。

溺れるとか、淫するとかは、つまり、旧い型の人間のもつ悲壮性感傷性であるとも云えるので、我々が、ある意図の障碍や、危機に見舞われたとき、極めてはつきりと、自分の血の中に疼いている倒錯性を発見することがある。そんな時に、そのことを契機として心の中に倒錯の感情が、陰性な植物の蔓のように伸びてくることがあるが、そこで、自分の全生活の規範をこれのために破壊するが、全生活の規範を生かしつつ、倒錯の耿美をある限界において味うか、それは、自己の知性が判断し処置すると思う。

近代人——近代的知性人は、この点では、感情の津浪にさらわれて身を破るような愚蒙に堕ちることはない。信長は謂うならばこの現代的知性を帯びた英雄であったと私は信じている。

その点で、好個の対照は、武州公ではなからうか。武州公は信長の加虐性に比して、被虐性であったが、その事蹟の一斑は、谷崎潤一郎氏の「武州公秘話」に明らかな通りである。

武州公も、被虐の願望に、悶え苦しみ、のたうちつつも、決して武將としての理想を傷つけることのない人であった。

信長と較べて英雄としての格差はあるが、同じ時代に、この二人が、加虐と被虐の秘密の楽園を翹うて、戦国史に鮮かに浮び上っているのは、奇とすべく、また至宝の史実とせねばなるまい。

武州公は幼名を法師丸と云ったが、信長とは二つ違いで、武州公の方が下である。武蔵守竜国の嫡男で、幼時は、筑摩一閑齋の牡鹿山の城に人質として遣られていたが、天文十八年——法師丸十三才の秋に、牡鹿城が薬師寺弾正の軍に包囲された籠城戦の時に、城中の女中達が天守の屋根裏で、敵の討首を洗う作業を見ていて、そのうちの、ひととき目立つ美女が、白魚のような、しなやかな指先で鼻のない首を洗うのに魂を奪われ、自分もあのような鼻のない生首になって、かの美しき女中の手に弄ばされたいと、奇異な願望を起したのが倒錯のはじまりとなり、ついに城を脱けて寄手の本陣に忍び込み、敵の大將の薬師寺弾正の寝所をうかがい、折しも熟睡中の弾正を刺し殺し、その首を奪って鼻を殺ごうとして果さず、侍臣達に気づかれて鼻だけを斬り取って逃げたのだが、このために薬師寺の兵は城の囲みを解いたという。

後に青年となって、一閑齋の子則重に仕えながら、則重の側、桔梗の方と恋に陥り、今度は則重の鼻を斬ってしまう。

武州公の、被虐性の妖しい通路は、こうして公の生涯に纏綿するのであるが、信長が、討首で酒をくむのとは、すこし趣が違っている、つまり、加虐と被虐の違いである。

それに、武州公は魁偉な風貌を伝えている、一見、沈毅英邁、豪勇無双の面影であるが、信長は、貴公子然たる美男子である。

妙なことに、魁偉な武州公がマゾヒストで、美男の信長がサチストなのは、性格の判定上、面白い資料ではなからうかと思う。

光秀と道阿弥

前章で光秀の謀反を書いた。しかし、実際史料をくまなく漁ってみたが、残念ながら、光秀叛逆の真相は知る由もないのである。

云えることは、信長が光秀謀反を、全然予期していなかったというだけである。そのことは、信長が、特に光秀に侮辱を与えたり、苦しめたりした覚えがなかったということにもなる。

事実、永祿年間に光秀が信長に仕えて以来、天正二年には従五位下日向守に任ぜられ、翌年には信長から惟任の姓を授けられていて織田家宿將の列に加わり信長の恩寵を蒙っていたのであるから、恩義はあっても、怨みのあるう筈はないのである。

もし——私の想像が正しいとすれば、光秀は信長の私生活の実際を見て、信長の人物を見誤ったのではないかと思うのである。

と云うのは、信長のヒステリックな、家臣達への折檻や成敗は、大なり小なり、光秀ならずとも、誰しもが受難したことだろうし、絶えず一種の不安が付きまとったことも事実であろう。

それは、光秀自身が、折檻を受けなくとも同僚がその目に会った時に、我身のこのように感じたのであろうと思われる。

例えば、佐久間信盛、林信勝、荒木村重などが信長の成敗に会ったことは、心理的に光秀の細い神経を刺戟したことは間違いない。

信長は、光秀に対してどう感じていたか。たじかな史料はないが信長が家康の上洛を歓待するのに、その接待役を光秀に命じたのを見ても、秘書官としての光秀を重用視していたことが分る。

したがって、信長は、或はあけすけに、生活の秘密まで光秀には見せもし、語りもしていたのではなからうか。

信長の、性生活についての、格別な相談役が光秀であったとする

と、恐らく、光秀は信長に十分の満足を与えるような働きは、とてもできなかったであろう。

光秀は、武將中、珍らしく学者であつたし、インテリとしての気の弱さや、道德觀の所有者であつただけに、異常な信長の同性愛的傾向や、加虐趣味には、むしろ嫌厭を覚えたのであろう。

そして光秀は、その悖德的な信長で、信長の全部を量つたから、「こんな男に天下統一の聖業をさせたら何んとなる」

と云う反感をもつたかも知れぬ。いや、その反感に、周囲の者が巧みに油をかけたのである。

しかし、信長は、光秀のそんな心理については、いっさいお構いなしであつた。

それに加えて、信長の蘭丸を愛しむことと、秀吉を重用したことが、光秀の深い妬みを買つていたのである。

光秀は、むろん蘭丸のような寵を得ることも出来ず、武將としては秀吉に及ばない。時に中国出陣である。

中国征伐が終ると……ここに全国平定の信長の宿願が成るだろうそうすれば、光秀は生涯、猿面冠者の下風に甘んずる外ないことになる。

今！信長を襲つて仆せば、中国で高松城攻略に、毛利輝元の大軍と対峙する秀吉も、援軍がなくては敗北するしかあるまい。

蘭丸を仆し、秀吉を亡す、この一挙兩得の道は、ただ一つ右府信長を打倒することにある。光秀はふと、逆心の魔のような手につかまれたのである。

物事には必ず原因がある。完全な偶然というものは一つもない。本能寺の変にも、起り得るだけの原因があつた筈である。

信長は、ついに、英雄でない面の、倒錯者としての信長の良き相談相手、秘書格の侍臣をもたなかったことが、やがて、この変に会わねばならぬ遠因ともなつたのである。

その点では、武州公には、茶坊主の道阿弥がいた。この坊主は、ただの坊主ではなかった。

ある時——道阿弥は床下に埋められ、首だけを床の上に出して、武州公から死んだ真似をせよと命ぜられ、一晚中、またたき一つ出来ぬまゝに上手に仮死を装い、自分の首を奥女中たちに弄られても微動だにせず、武州公が、剃刀を手にもつて鼻を殺ぐぞ、と本気で云つた時も、この道阿弥の首は、死んだふりをして瞳一つ動かさなかつたのである。

道阿弥が、こうして自分の首を散々いじり廻されても、それに堪えることのできたのは、著者の谷崎氏の言葉通り、武州公と同じ心理傾向があつたとも思えるのだが、何にしても、その忍耐は常人には出来ない芸当である。

武州公の側室である地鯉鮒家の息女お悦の方は、当時、十五か六の少女で、恐らく、まだ女にはなり切つていなかったであろうに、武州公にすすめられて、道阿弥の生きた首の両耳のタボに小刀で穿孔して名札をつけて、奇態な生首遊戯にきやつきやつと笑い興じたと云う。

いやそればかりではない。夜ともなれば、道阿弥を埋めて首だけ曝してある椽の近くに褥を持ち出して、首見物と洒落ながら、道阿弥の首が見ている眼前で、若き武州公と花も羞じろうお悦の方が、痴語噂々と閨房の秘話を描いたと云う次第で……武州公の、性生活の慾望が、いかに妖しげなものであつたかが分る、この奇態なる一場面は、谷崎氏得意の麗筆で読者の心をなぶるがように搏つてくるが、思うに、信長には、こうした協力者がなかつたので、——いや実は、それを信長は光秀に望んでいたのかも知れないのである。

だが、光秀は、不幸にして道阿弥の如き茶坊主でなかつたから、信長の加虐的性慾を満足させるような協同の働きはできなかったのである。

奇襲！本能寺

本門法華宗の大本山。坊舎四十七字に達する壮大な本能寺に、信長は、わずか数十騎の供廻りで宿泊した。

勿論、本能寺には、何らの武装的防壁もなく、警固も極端に手薄であった。時に天正十年五月二十八日である。

一方、光秀は、六月一日に龜山城出發！翌二日の曉闇、桂川を渡り、豊後橋へかかった時に、先陣の大將、明智左馬介が

「敵は本能寺にあるぞ」

と下知した。これは事実で、名古屋徳川家の家臣で、近松彦之進という人が、當時光秀の手に属していたので、後に昔咄という筆録を残している中にこの通りのことを書いている。

それによると、

「これは足下に、てきが出来たという心もなく、また敵は誰とも弁へず、その下知につきて我先にと進み、ひたひたと攻かゝりし、特に謀反にて信長を討奉る企と、心付しは一人もなかりし……云々」とあるから、光秀の方では、敵が誰であるとも明らかにせず、味方を欺いていたことが分る。

だから、この変の時に、光秀の手の將兵が信長の首級を狙って功名を争ったという話は嘘っ八で、誰も相手が信長とは露知らなかったのである。

信長は、その前日に、京都所司代の村井長春軒などと盃を交わしただたかに酔って熟睡していた。

ごとと地鳴りがして、信長は夢を破られ、眼を醒したときには、蘭丸が早や、異様の物音に闇をすかして偵察していた。

「何事であるか」

白綾の単衣のままの姿で、信長が廊下に出てくると、勾欄の上に背伸びしていた蘭丸が

「上様！ 寄せ手の旗は桔梗の紋どころ、明智殿の謀反でございませう」

と声をふるわせたきり、信長と蘭丸が、眸をがちりと合わした。

「是非もない」

ややあって、信長は、常の如く云うと

「女、子供、それに寺僧、町人を逃がしてやれ」

と左右の士に命じた。

「上様……無念です」

蘭丸が、眼を怒らせて血を吐くように呻くのを、信長は、そっと抱き寄せて

「これ迄じゃ」

とやさしく諭して、ゆっくり居間にとって返して袴をうがち、髪を撫で上げ、弓を取ってまたもとの廊下に出た時には、矢叫び、白刃の打合う音が激しく闇の中に起った。

すでに明智勢は乱入したが、闇の中で、勾欄のところに立つ長身の人が、信長とは、寄手の者は誰一人感ずいた者はない。

この時、本能寺を囲んだ光秀の手の者は三千余騎であったから、いくら何でも数十騎の警固では防ぎ切れるものではない。

信長は、まるで弓の稽古でもするように、ひゅーひゅーと矢をつがえて、寄手の頭上を脅した。

見る見る——寄手の兵が足下にひしめいて、ふと見上げると誰ともなく

「あつ上様だ、上様だ」

と喚いて、たじと踏った。

瞬間に、兵士たちは、今、自分らが何をしているかが分って戦慄した。

反逆、反逆、反逆、
謀反、謀反、謀反、

誰しもが、天地が一度に覆って、主殺しの大罪に、ふっと夢からさめたような思いで、進まれぬ混乱に陥ちた。

だが、後続する兵たちは何も知らずに、えいえいと攻めかかる、前の兵は恐れて足踏みをした。

信長は、その有様を眺めて、

「この場は逆臣に首級はやれぬ、誰かある、火を放て、皆々火中に死ぬものぞ」

と下知して、自らは、弓を捨てて槍をとると、身軽に駆け下りて、

「下郎、推参……」

大音声に呼ばわって、寄せ手の兵の群にさっと突き入れると、ばたばたと数人の雑兵をその場に仆した。

寄手の者も、今は信長公と知って呆然となり、誰一人立向う者もなく、信長を遠くとりまいたが、信長は、にたりと笑って、悠々と欄干に駆け登り、手にした槍を、寄手の頭上へ、さっと投げるように抛ると、くると踵を返して居間に入った。

信長に続いて、槍をつける賊兵もなく、声を吞んで惘然と見送るばかりであった。

この時に、馬鹿な奴は必ずどこにもあるもので、明智左馬介の家士で、安田作兵衛という男が、功名手柄はこの時と……いらんことに信長のあとを追って居間に迫った。

その時――早や、火は放たれて紅蓮の焰が物凄い風を呼んで猛り立っていた。信長は、居間に入ると、静かに諸肌を脱ぎ、小刀を抜き放つと、じーと火焰の匍う状を見た。

巨大な蛇が交尾するように、怪しげな恰好で焰と焰がもつれ合っては絡むと、ぱっと一気に天井を舐めた。

「頃合いもよい」

火の粉を浴びながら信長は領いて、小刀を取り直した時

「安田作兵衛！」

と一ト声叫んで、障子越しに、槍が繰り出されて、ぐさりと、信長の腰背部をしたたかに突いた。

信長は、灼熱の痛み黙って耐えた。

「信長公に槍をつけ奉る」

そう叫んで作兵衛は槍は引いたが、信長は、微動もせず、立ったまま、自ら脇腹を突嗟に切り開いた。

剛氣：信長の影は崩れない。

「たしかに突いたが……」

不審と恐怖で作兵衛が、血の色のような火焰の明りに映し出された信長の立ったままの姿の影絵に、二の槍を躊躇しているとところを横合いから、駆けつけた蘭丸が

「下郎、退れ」

と叫んで、太刀を一振りして足蹴にしたので、勾欄から作兵衛はぶざまにどしんと転落した。

蘭丸の一太刀を深く太腿に受けたので、作兵衛はそれっきり動けなかった。

蘭丸が急いで居間に入ると、信長は、見事に小刀を持ちかえて、頸動脈を抉っていた。

「上様……上様……」

蘭丸は、信長を呼びつづけながら、自分も急いで腹を押しひろげ小刀を抜き放つと、きりきりと腹を一文字に切った。

信長の牀が崩れる、その上へ、蘭丸がかぶさった。

玉のような汗が、ふっふつと額に浮んで、蒼白に変る蘭丸の美しさは、火焰地獄の底で、凄絶そのものに見えた。

「おくれるな……」

十数人の、生き残った小姓達が、血を浴びたまま、この居間に駆け込んできた。

「上様の御首級を逆賊に渡すまいぞ」

「皆々、上様の御遺骸に重って死のうぞ」

異口同音、呼び交わしながら、心は一つ、主に殉ずるは、これこそ、信長の日頃に訓えた新武士道であった。

壮絶！艶麗なる美童ばかりの小姓組の十数人が、いちように肌を脱ぎ、咆え猛る火焰の中で、主君の遺骸を守って、押し包むように切腹しては蔽いかぶさった。

流れる主従の血潮が、永劫の恨みを呑んで猛火の中で煮え立ったドードドドド、焼け落ちる本堂、るいてる屍は一炬に骨灰と化した。

永遠の英雄像

信長はかくて本能寺に死んだ。

悲壮と云えば悲壮であるが、信長の、その日の行動には、一沫の未練もなかった。

美しいばかりに、鮮な自刃であつたし、信長に殉じた蘭丸と、小姓組の殉死も、心を搏つものがある。

美童に囲れて死んだ信長は、もう云い残す何事もなかったであろう。

果して、信長の首級は、遂に明智方の手に入らず、骨灰となった焼屍体の中から、信長をとり出すことも不可能なことであつた。

一説には、明智左馬介が、信長の首級をとって、光秀に供覧せずに、ひそかに葬ったとも云うが、おそらく嘘であろう。

惜、ここで信長の倒錯性を今一度眺め直して私の信長論の結末としよう。

信長は、その幼少時から、因習打破の破壊的性質をもっていた。

それは広義の、悖德的性格とも云えるだろう。

そして、その性格は、革命家になくはならぬものであつた。乱

世の雄としての、不可欠の要素を完全に備えて生れた信長である。

ひと頃、信長が（幼少時から青年期にかけて）男根崇拜のようなマニア的傾向を帯びたことがある。

その原因は、詳かにすることはできないが、信長の同性愛的素質の初期的な段階だと見てよいだろう。

以来、信長の同性愛は綿々として続き、遂に森蘭丸に至っているのだが、その一面の女色はきつと淡泊なものに違いなかつたと思われる。

直接の性生活としては、信長は同性愛にのみ満足を求めたようである。それだけに、信長の同性愛は、人生的に深いものがあつたようだし、決して大名の、好事的なものでなかつたことが分る。

最後の、小姓組の殉死は、そこに、信長を中心とした美童の群の物狂わしいまでの同性愛の情炎図を見る気がするのである。

恐らく、戦国の世の、大小の英雄の、誰の最後をみても、信長のような華々しさはない、信長の同性愛については、私も、さらに研究をすすめたいと思つてゐる。

信長の他の面での倒錯性は、そのサチズムにあるのだが、殺戮者としての異常の神経は、暴君的ではなく、当時の戦乱渦中に「天下布武」を唱え、全国統一を理想とした信長の経営と戦いに、随伴した必然の心理状態であつたと云える。

——つまり、生脈を断つことが絶対の要件であつて、徹底討伐近代にあつても、共産主義的暴動が起きると、必ず、その敵に対して追捕状が出されて、死刑或は入獄の手段が容赦なく執られるのである。

微温的な社会改良と云う甘い感じ方で、暴力革命を是認すると、いかにそれが兇暴なもので、敵の生命力を奪うかに驚愕せねばならぬだろう。

冷酷無慙なサディズムは、乱世を救済するのには、好まずとも、認めるの外はない。信長は決して、いたずらに、自己の権力をもって無辜の民を殺戮することを好まなかったが、自分の敵に対しては秋霜烈日であった。

家臣と雖も、信長の意に反する者は、敵と同然、むしろ、獅子身中の虫の譬えで、信長はこれを憎んで成敗した。

こうした信長の加虐性は、幾多の事例で明らかにしたつもりだがその他に、もっと、信長の日常面での倒錯性を見ないと、信長の真実の人間像には到達できないと思う。

信長が、人間の価値を重視したのは、秀吉を抜擢したことに見ても領けるが、人間と人間の関係から、歴史が生れてくる。そこに、社会が、そして社会現象が生じるのだと信長が思っていたらしい。だから、何よりも人間を見る、ということが信長の信条の一つであった。

そこで、人間を練成する意味から、こらしめたり、せっかんしたり、ためしたり、するような信長流のあり方が生れたとも云える。むろん、目的は人物の練成にあるのだが、それが、いつしか、持ち前のサディズムと結びついて、交錯すると、苛責の興味が主になるとも間々あったことだろう。

信長は、その意味でよく人を試すことがあった。それも突然に、思いつきでやるものだから、人をハッとさせること屢々で、光秀に酒を飲め、と云って、無理強いして光秀が断ると、いきなり大刀を抜いて、白刃を突きつけ、刀を呑むか、酒を啖うか、と詰め寄ったなどという話にも、ちよつと禅問答式の趣がある。

もし、この話が真実なら、人間を試すという、いつもの癖が、少し度を過ぎて、いささか、人を苦しめて喜ぶ異常心理に酔っていたとも云えよう。

それについては、他にもいろいろな話が伝っているが、有名なの

では、小姓を何の用事もないのに呼び入れて、チリ屑に気がつくかどうかを試したという話があるが、これらの話も真偽はおいて、信長が人間をためすことを習いにしていたことを証するには足りると思う。

信長は、だから、家臣から云えば随分厄介千万な、お天気な主人公であつただろう。

殊に、機敏ということは、信長の用兵作戦上必須のことであつたから、愚図はしんから嫌いであり、日常起臥、きびきびとした動作を欲していた。

それが、短気一徹ともとられ、癪癖がきついともとられたのであるが、しかし、一面、病的な短気が顔を出すこともあつたらしい。それにしても、家臣が機智で信長の短気を受け止めたら、破顔一笑して、事なくすむのが常であつた。

こうした信長の性格上の種々の尋常でない変態的なものも、常に信長の至上の人生目的に統一されていたのである。

そこで、括目すべき、今一つの信長の性格―それは、経済的な、ちやっかり心理であろう。

武人と銭とは、あまり親しくない関係のようだが、信長はその点非凡な蓄財家であつたようだ。

極端に、銭を愛するということは、すでに完全なマニアである。物質に対する偏向は、近代的性格の一つだが、信長がそれであつたのは、信長に科学的開眼があつたことを証すると思う。

蓄財と倒錯心理の関連も面白い研究テーマだが、信長の人物像にはしなくもそれを見出して心を牽かれるのである。

信長の、そうした経営者の素質を学んだのは、秀吉でなく、家康であつた。

信長という人は、秀吉と家康をつきまぜたよりも、まだ深く、優れていたとも云えるので、とりわけ、信長の近代性は、人物型の革

命的出現であつたと云えよう。

以上——私は、信長を結論的に、近代的な旧時代の英雄と呼ぶことに躊躇しない。

そして最後に、私の一個の見解を述べるならば、現代は、まさに乱離混沌とした戦国の世を髣髴させるようである。

鶴見さんの「英雄待望論」でないが、一世を率いる英雄の出現を希うや切なものがあるようだ。

だが、偶然に、天の配剤で、英雄は天下るものでもなさそうである。

英雄を生むような社会情勢が、そこには条件として澎湃としてあらねばならない。

二俣志津子さんが、時代の傾向性を論求されねばならぬと云われたが、たしかに、現代の混沌の中に、徐々に、ある種の英雄像が彫刻されつつあることを私は感じるのだ。

むろん、ここで云う英雄が、専制君主的なものでないことはお断りするまでもあるまいが、新旧二つの信条の葛藤を経て——燦然と明星の如くに現われる、新時代の英雄は、それこそ、私たちの、現在、夢想するイメージを打破した。破壊者として、また、意表を衝く倒錯的魅力を匂わせて登場するものと思うのだ。

実に国乱れて忠臣あり……で、一見、ハイタイと混乱にあるかの如き、この時代相の裏面では、不思議な国の歴史が、神の手で編まれていることを知る者は幸いなる哉だ。

戦国の世に信長が忽然と出現したようで、事實は、大小無数の信長が、すでにあつたのである。

見よ、乱破の群盗、俠盗、野伏、などの中に、多くの倒錯的小英雄がひしめき

「惜しいかな、子や時に会わず」
で、世に埋もれたことであろう。

今や、或は、無理解な世の道義論者によって指弾されている、私達の仲間——多くの、この時代の傾向を身につけた倒錯者の群の中に、教主の悲願を成就する者無しとは云えまい。

ありていに云えば、この私の信長論を一貫するものも、実は、そのことを語ろうとしたのである。

信長に託して、私は、倒錯者の劣等自意識を払拭しようと試みたと云つてよい。

そして、現代世相のきびしさの中で、我々が希望し、我々が心をときめかして、待望すべき人生の指標を追求するための一助にと、稿を起したのだが、読者によって、その一端でも汲み取って頂けたら、私の望外の喜びではある。

願わくば、希望に燃え、手を携え、暗夜行路に、一道の光明を見ようではないか。

この故に、私にとって、乱世に「天下の布武」の理想を掲げて、太平の歴史の幕を開いた、英雄信長の、倒錯的人間像こそ、永遠の憧憬である。

(お詫び)

信長論の最初と後章に文体の相違のあつたのは、私が初めに論考の中に、敘述を挿入したので、或はフィクションのようなものになりかけたため、その点、読者を戸迷いさせたいと思いますが、深くお詫びしておきます。

(完)

(編集部より)

本誌四月号にて本稿が一応完結した恰好になっていましたが、編集部の手違いでありましたので、ここに完結篇を掲載しました。

“Rebellious Wasps” -by- Eza.

Complets Story-4 chapters-Price \$5.

We present a new Arlist-Author, EXPERT in the field of corsetry, restraint & rubber apparel. His knowledge of tight-lacing, bondage, severe chastisements and the ecstacies of rubber garments are well illustrated and described in this enchanting story. (Each chapter contains approx. 300 words)

Chapter # 1.

Mrs. Wand. a beautiful yong widow has decided, with the aid of her lovely yong stepdaughters.

Mona, who is 21, Nina-19, and Betty-17, to win a Wasp-Waist competition which has a grand prize of a large sum of money.

Mrs. Wand foolishly offers the girls \$ 50.00 each to train her for the contest. We find the three of them in the secluded attic of their house where the girls are hard at their tasks.

Mona, “No, not like that-you see, Nina, the loops should cross at the back;

Yes pull the left loop, and I will pull the right” Nina “OK” Mona. “Now go ahead and pull hord.” Betty, entering the attic, “My goodness! what is going on here?,, Mona, ‘Don’t ask any questions. just help us, and with her ankles secured-she won’t kick about it!” “While we pull the laces at the waist, You, Betty, even the tension

外国文献紹介

最近到着
サディズム、マゾヒズム関係

最新版女体緊縛フォト

光沢印画紙焼付
本誌写真部特写

本誌、復刊後、キヤビネ版と
評して、初め、女体の特長を
オトモ、若々しい、数々のマル
が、縦横、無作、活、し、絶、い、る
ら、ぬ、垂、涎、の、傑、作、と、い、う、お、早、い、お、求、め、下、さ、る
よう、お、待、ち、い、た、し、ま、す。

○高瀬忍嬢

悦虐ポーズ代表選
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○美少女緊縛

(中富綾子嬢)
キヤビネ版 二枚一組 二百円

○藤田節子嬢

「落花狼藉」
第一集 三枚一組 三百円
第二集 三枚一組 三百円

○古川裕子好み縛り

(萩千恵子嬢)
第一集 三枚一組 三百円
第二集 三枚一組 三百円

○加賀利江子嬢

第一回縛り集
第二回縛り集
キヤビネ版 三枚一組 各三百円

○加賀利江子嬢

悦虐ポーズ集
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○厚狭春江嬢

股間しばり三態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○デニムのズボン縛り

(加賀利江子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○須川令子嬢

股間しばり三態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

新版腰巻しばり
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○灸点地獄

(施術者 春日ルミ嬢)
被術者 伊吹真佐子嬢
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○悦虐モデル

緊縛六人集
キヤビネ版 六枚一組 五百円

○ジャジャ馬馴し

(中富綾子、村田那美子)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○逆さ吊り

(伊吹真佐子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

新版股間しばり
キヤビネ版 三枚一組 三百円

of the criss-cross, starting at the bottom and going up to the waist, Finel! See how the rubber Corset is closing up?

Now start from the top. and tighten the upper part. going downward" Nina "Good work, Betty, don't be afraid to pull hard. the laces are very strong!"

Mona, "Look! Her knees are shaking! if she was not gagged. I bet she would scream for mercy!"

Betty. "Don't speak so loud! Nina, "Why? she can't hear us, I plugged her ears with rubber plugs"

Mona, "Don't pity her after the thrashing she gave you for losing a Ten dollar bill last year." Betty, with a meaningful cruel glint in her eye "I will never forget it."

"Three Painful Years"

-by Claire Willowes.

Complets Story- 8 chapters. Price \$ 8

"Fascinating tyrants"

-by- Van Rod.

Complets story- 8 chapters. price \$ 8

"Invition to the Dance"

-by- Maccllyde.

Complete Story- 16 chapters. Price \$ 14

- | | | | | | | | | | |
|--|---|--------------------------------|--|-------------------------------------|--|--|---------------------------------------|--|-------------------------------------|
| ○女学生凌辱連続写真
キヤビネ版 六枚一組 五百円 | ○ローソク責め
(春日、伊吹、二嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円 | ○女体品定め
キヤビネ版 三枚一組 三百円 | ○肉体美緊縛三態
(伊吹真佐子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円 | ○猥らな縛り
(須川令子嬢)
キヤビネ版 四枚一組 四百円 | ○女体いじめ四態
春日、伊吹、二嬢
キヤビネ版 四枚一組 四百円 | ○須川令子嬢
立木縛り野外晒し
キヤビネ版 三枚一組 三百円 | ○強烈縛り五人選集
キヤビネ版 五枚一組 五百円 | ○萩千恵子嬢曲芸縛り
手札 型 三枚一組 二百円 | ○坂口利子嬢
悦虐全裸緊縛集
キヤビネ版 三枚一組 三百円 |
| ○落したズロース
(佐賀美智子嬢)
キヤビネ版 五枚一組 五百円 | ○旦那の二号責め
キヤビネ版 十枚一組 八百円 | ○凌辱魔侵入(シリーズ)
キヤビネ版 十二枚一組 千円 | ○佐賀美智子嬢
女事務員の縛り
キヤビネ版 三枚一組 三百円 | ○晒責め三態 (伊吹嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円 | ○お寝み前の五分間
キヤビネ版 三枚一組 三百円 | ○修学旅行の出来事
(須川令子嬢)
キヤビネ版 二枚一組 二百円 | ○衆人環視の緊縛
(萩千恵子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円 | ○川辺砂登子嬢
メンズズバンド着用
キヤビネ版 二枚一組 三百円 | ○須川令子嬢
高手小手五態
キヤビネ版 五枚一組 四百円 |

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案

北原純子・画

【解説】

甲、時代物

(一) 女武者の最期 『片手で鎧の草摺をたたみ上げ、片膝支え片膝立て、着衣の上より鎧通しで腹を一文字に掻切るさま。血が着衣に滴り滲むところよく、唇かみしめ髪髪やゝ乱れはつれて、絶望又は憤怨の凄愴なる表情を可とす。二十二、三才位』戦陣の間、山の高み、落城の火焰が遙かに望めるところ、二十才ばかりの身分ある女武者、鎧を脱ぎ腹を切るさま、木下につないだ愛馬が嘶く、折れた矢など、両の乳房のふくらみ、下ぶくれの顔は『案』よりはいささか若い。

(二) 腰元の自害 『白装束にて髪は江戸期腰元風、高島田も可、上半身脱ぎ白布に端坐、切先を残して紙縵で握りを巻き締めた九寸五分で、臍の直ぐ上を一文字に切るさま、流血斑々と散り陶酔的な表情を可とす。式場らしく三宝は必ず配する。十七八才』自害の理由はわからぬが、膝前の三宝には遺書が置かれてある。上半身下腹部まで裸、短刀を左脇から臍下まで切りさばき左手、膝から膝下まで血汐が流れている。

(三) 遊女の自決 『慶長風俗にて帯は細巾(前結びも可)上半身を露わし(前だけ開くも可)懐剣にて臍上を一文字に切るさ

ま、表情は凄艶を可とす。端坐又は横坐りに崩れかけるもよし。三宝はなく黒塗り蒔絵の鞘を前に、文机を横におく。十六才位』いささか妖艶な感じ、背後の衣桁には派手な衣裳をかけてある。懐剣の切先は、臍下をしたゝかに真一文字に切り開き、血痕淋漓、上半身から下腹部、膝まであらわれる。

(四) 武家の娘 『畳に端坐、紫矢絁の着衣に一本鎧鉈の帯を解き捨て、淡紅色又は藤色の下ノで寛げた着衣を腰の辺りに締め、脇差で臍の直ぐ下を横一文字に切り終え更に鳩尾より縦に押し下げるさま。三宝は省き鞘を膝の横か前におく。表情は哀怨の趣きを可とす。二十才位』これは武家の娘姉妹二人を配したため、絵と『案』はいさゝか異なる。姉らしき娘、着物の襟を押しひろげて下腹を真一文字にしたたかに切る。腸が溢れ出て左手にて掴み出さんとする。畳の上に懷紙を敷き切腹に用いた血塗れの短刀を置く。苦悶の表情上体は胸もあらわに右に倒れかからんとしている。妹娘らしき乙女、姉に寄り添いながら支える。妹娘も腹を切る態にて胸をひろげ双つの乳房も豊かに見える。

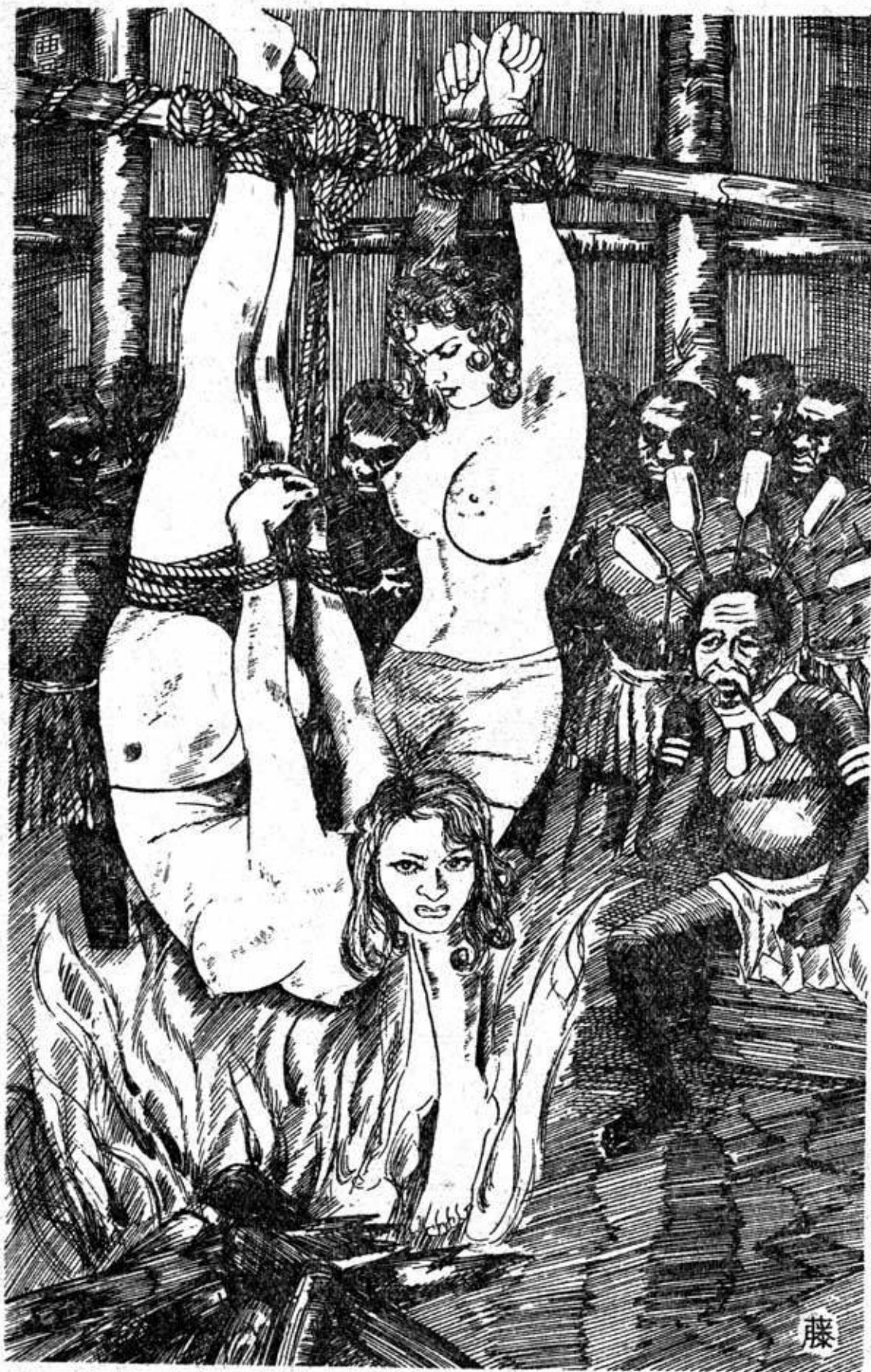
乙、現代物

(五) 女剣劇 『男装小姓風男髪にて、大振袖の胸を寛げ乳房を必ず見せること、立

ちながら大刀逆手に一文字腹を切るさま、眼は成可く大きく見開き苦痛感を表出すること、二十六七才にても可』男装小姓風の男髪、上半身肌ぬぎにて、大刀を下腹に突き立てたところ、血が飛び散っている。流しな模様の袴を着しているが、乳房が女ということを、はっきりと表している。

(六) 女剣士 『髪は束髪又は軽いパーマ。白地馬糸刺子短袖の上衣に、義経袴又は普通の稽古用無地袴。道場板の間に端坐、又は蹲踞の姿勢にて足踵を寄せた上に尻を据え、やや開き目の両膝頭を支えていること。遺書らしき奉書包みを三宝に乗せる。道場正面の神棚を承する場所の心持を要す。胸を開き乳房と臍は充分覗かせ、成可く両手で白布を緊と巻いた九寸五分の柄を握りしめ十文字に腹を切るところ。哀怨の趣きをよしとす。二十才前後のこと。』刺子の稽古着姿、胸下腹部を充分にあらわし、短刀を突き立て切り廻すところ、左腕、稽古着の襟などに血汐がとび散っている。

(七) 現代風(美貌のオフイスガールの心持) 髪はパーマ、紺スカート、白ブラウス白シユミーズ等きちんと夫々たたんで横におくか衣桁にかける。ブラジャーとパンテイスのみの姿で端坐又は横坐り気味。たゞみの上かベッド又は蒲団の上でも可、遺書らしき一封筒を前におく。下腹部を可成り露わし、短刀にて下腹部中央臍下一寸の位置を刺し貫くさま、又は左より引廻し中心に至るところをよしとす。表情は哀婉且つ陶酔感あるべし。一文字に切り了え、左手で大腸を掴み出せるも可。『洋風アパートの一室、カーテンの蔭にベッドが見える。』



とりこの白人娘

藤木仙治

白人開拓者を目の仇にしている未開のインデアンに捕われた開拓者の娘二人、今やあわれにも兇暴な酋長の命令一下、縛られたまま吊り下げられて、火あぶりにされようとしている。火はブスブスと煙をあげて燃え上りはじめた。もうあと十分もしたら、二人の娘の白い肌は生きながら焼け爛れてゆくことだろう。遅まき白人青年が彼女たちを助けに来るだろうか、否や。

近代的な顔つきのオフィスガールの態、パソティを膝頭まで下げブラジャー一つの全裸に近い姿にて坐す。短刀にて左下腹から臍下まで切り、血は膝から床まで流れて溜る。左手は胸を押さえ、苦痛をこらえて上に向いた顔は悲愴。

(八) 農家の娘 『紺紺のモンペの紐を解き、胸腹を露わし、臍下一寸最も膨満せる辺りを横に、鎌の柄を右手に刃の背を左手で押し一文字に切るさま。凄愴感よし。二十才前後。姿勢は女武者の姿勢に準ず』木立の茂った中、十七八のお下げに結った可

憐な娘、モンペの紐を解き鎌を選手にとつて今正に下腹部に刺し立てようとするところ。

〔分譲〕 (女体切腹構成案図譜)
キヤビネ判印画紙密着焼付

八枚一組千円

(送共)

天星社代理部特選写真集 (実費分譲)

□高級光沢印画紙使用 大きさ (タテ 九 横 十三)

緊縛女体の
フオト

二枚一組 一五〇円 五枚一組 三〇〇円
三枚一組 二〇〇円 六枚一組 三五〇円
四枚一組 二五〇円 十二枚一組 六〇〇円

- AS1 タンス責め 伊吹真佐子嬢 三枚一組
AS2 浴室の緊縛プレイ 須川令子嬢 二枚一組
AS3 柔肌の弄戯 村田那美子嬢 二枚一組
AS4 アクロ緊縛 萩千恵子嬢 六枚一組
AS5 トイレ五態 須川令子嬢 五枚一組
AS6 強烈股間緊縛 中塚文子嬢 六枚一組
AS7 セーラー服哀歓 須川令子嬢 三枚一組
AS8 奇抜な縛り 伊吹真佐子嬢 二枚一組
AS9 蒲団責め 須川令子嬢 五枚一組

- AS11 女体嗜虐譜 春日伊吹二嬢 五枚一組
AS12 裸に縛るまで 菅登紀子嬢 四枚一組
AS13 胴絞めしぼり 伊吹真佐子嬢 二枚一組
AS14 後手縛三態 佐賀美智子嬢 三枚一組
AS15 股間しぼり五態 須川令子嬢 五枚一組
AS16 馬乗り姫シリーズ 春日伊吹二嬢 六枚一組
AS17 禪美女体 須川令子嬢 二枚一組
AS18 股間緊縛四態 萩千恵子嬢 四枚一組
AS20 見ちゃ嫌 伊吹真佐子嬢 三枚一組

- CS1 美しき惨虐物語 ヤンチャ嬢・春日ルミ嬢 内気な娘・伊吹真佐子嬢 (シリーズ) 十二枚一組
CS2 裸身の嬌羞 須川令子嬢 三枚一組
CS3 セーラー服の見世物 雲井久子嬢 六枚一組
CS5 素足の色気満点 佐賀美智子嬢 三枚一組
CS6 排泄の強要 中塚文子嬢 四枚一組 (この分は特に三百円)
CS7 悪鬼の仕打ち 杉 美美嬢 二枚一組 (この分は特に二百円)
CS8 ガンジガラメ吊り 萩千恵子嬢 二枚一組
CS9 芋虫コロコロ 厚狭春江嬢 二枚一組
CS11 女悪魔の暴力 女悪魔・春日ルミ嬢 いけにえ・伊吹真佐子嬢 シリーズ 五枚一組
CS12 女の禪美 伊吹真佐子嬢 二枚一組

- CS13 雨の夜のプレイ 萩千恵子嬢 三枚一組
CS14 ショー出演 萩千恵子嬢 三枚一組
CS15 女体の荷造り 春日、伊吹二嬢 二枚一組
CS16 四モデル特選集 萩嬢、高瀬嬢 四枚一組
DS1 観念横臥の図 花坂道子嬢 三枚一組
DS2 乙女の開陳 花坂道子嬢 五枚一組
DS3 失ったバタフライ 須川令子嬢 三枚一組
DS4 寝乱れ姿 須川令子嬢 五枚一組
DS5 素足まるだし 佐賀美智子嬢 五枚一組
DS6 首縄万華 佐賀美智子嬢 三枚一組
DS7 浴室股間縛 中塚文子嬢 三枚一組
DS8 素足素顔三態 須川令子嬢 三枚一組

アブフォト集

◎得難い稀少な

二十五集◎

各組 一枚八〇〇円
 十組 一枚七五〇円
 二十五組 一枚一八〇〇円
 (以上全部送料共)

B S 1	覗れた下着 (加賀嬢)
B S 2	股間しばり (坂口嬢)
B S 3	クリツプ責め (川辺嬢)
B S 4	擦り責め (中富嬢)
B S 5	組上の魚 (須川嬢)
B S 6	大の字縛り (浅野嬢)
B S 7	みずばれ (杉嬢)
B S 8	くさり責め (高瀬嬢)
B S 9	折檻 (雲井嬢)
B S 10	梯子責め (伊吹嬢)
B S 11	ハリツケ (萩嬢)
B S 12	月経帯縛り (村田嬢)
B S 13	手錠くさり (伊吹嬢)
B S 14	人身御供 (高瀬嬢)
B S 15	落した下着 (萩嬢)
B S 16	下半身裸出 (村田嬢)
B S 17	鼻責め縛り (川辺嬢)
B S 18	高手小手 (加賀嬢)

新マゾ風景十態

一組 一枚 一〇〇円
 十組 十枚 九〇〇円

B S 19	乳房責め (川辺嬢)
B S 20	首縄 (川端嬢)
B S 21	後手しばり (藤田嬢)
B S 22	竹棒責め (伊吹嬢)
B S 23	蛙潰し責め (雲井嬢)
B S 24	改つた表情 (佐賀嬢)
B S 25	森の中の凌辱 (村田嬢)
M 1	ワン公水をやるうか
M 2	なぶりもの
M 3	ベッドの上で可愛がる
M 4	押え込み
M 5	足舐め大写真
M 6	お化粧台
M 7	ハイヒールの下にて
M 8	足の裏に屈服する
M 9	頭を殴る
M 10	お小言頂戴
M 11	男性緊縛フォト
M 12	晒し者三態 三枚 三〇〇円 男性股間しばり 一枚 一〇〇円

女体切腹写真

女性浣腸写真

かか〇女学生の浣腸
 キヤビネ版 四枚一組 五百円

K1 エネマシリンジ
 四枚一組 三百円
 マゾフォト

とし〇奴隷使役
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

し〇女王様の尻の下
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

なむ〇長靴着用の女性か
 ら鞭で仕込まれる
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

とき〇奴隷教育
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

し〇乗馬靴乗馬服の男
 から責められる男
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

おこ〇男性縛り禪美縛体
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

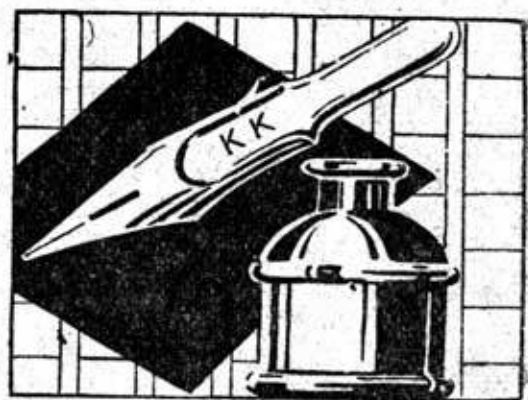
おき〇男性緊縛二態
 キヤビネ版 二枚一組 三百円

なお〇縛られる男
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

へん〇鞭撻
 キヤビネ版 二枚一組 三百円

◎御注文の栞◎

◎御注文は符号だけで品物を御指定下さって結構です。
 ◎総べて通信にてお申込み下さるようお願いいたします。直接の御訪問はお断りいたします。
 ◎御送金は振替用紙を御利用下されば無料です。普通郵便に到着します。但し普通郵便に領証を注文書と封の上から送り下されば、早速品物をお送り致します。



【読者通信】

週刊新潮六月十二日号のタウン
演劇欄に「新劇大衆化のむくい」
と題して、少々興味の有る記事が
有りますので御知らせ致します。
「新劇の大衆化」の一つの現れと
して、いささかピロウな話で恐れ
入るが、劇団民芸の細川ちか子の
ところに真夜中になるときまつて
熱心なファンから電話がかかって
くるという。その一人がふるって
いる、泣くが如く、むせぶが如く、
「私苦しくて苦しくて、お願いで
すから細川さん、かんちようをし
ていただけませんか」倒錯性欲者
らしいがこれにはさしもの細川も
驚いたらしい。まともに取り合う
のもバカらしく電話を切ろうとす
ると「実はいいこないだ小夜さん
(小夜福子)にかんちようをして

いただいたのであなたにもぜひお
願い」という。細川がさつそく翌
日ケイコ場で小夜をつかまえてた
だすと小夜のおこるまいことか。
その後もこのかんちよう氏しばし
ば電話をかけてくるそう、細川
もすっかりノイローゼ気味とか。
「新劇の大衆化」もとんだ罪つ
りだ。

初夏の候、貴社一同様御励みの
事と拝察致し居ります。小生病魔
に負け、長日床中に居りました故
貴社様のお便りにも御返事を致さ
ず申しわけありません。復刊第三
号を戴き「奇ク」未だ我を見捨て
ざりしかと感激致しました。小生
の「緊縛女優列伝」が再び頁を汚
して居りました事も有難く存じま
した。第四号も、と思つていた折
病を得て「奇ク」の姿にも面接で
きず悶々の日夜お察し下さい。購
入したくとも頼む人もなく五月号
六月号と次々に同好の友はむさぼ
り読んでいる事と思うといらだた
しくてたまりませんでした。一
の望みは掲載の賞として万一にも
「奇ク」が送られてくる事もなき
にしも非ざらんかとの一事でした
が、御多忙の故にか今日迄満たさ
れぬ大慾望も今日達せられんとし

て居ります。何卒、病故の貧苦御
察し下されて長期金額の申込みの
出来ざる事をお許し下され度く願
い上げます。食無けれども心の食
となる「奇ク」の為には何物を捨
てても永久の大ファンとして双手
を挙げて迎える私であります。残
念なる哉、私の務める工場の低給
では素晴らしい分譲品すら今は求む
るに術ない無念さ。しかし本誌の
みは石にかじりついても求めて秘
蔵致すつもりです。「奇ク」が大
判から小判になり真価が発揮せら
れてからこゝに五ヶ年の愛読者た
る事は貴社様にても限らず一微細
の力としてお受け下さる事を自負
致すものです。類似誌が次々に消
失した今日尙光彩を放つ「奇ク」
の努力は、熱烈なファンの要望も
さりながら雨にも負けず風にも負
けぬ、苦難の編集には只々頭の下
るばかりです。病に薬のある如く
心の薬を調製して下さる有難さは
我もし億万長者なりせば政界の汚
職に類じて百万金を費やして「奇
ク」発展の軍用金となさん、と思
うものを、大笑捨て、何卒戦後の
一兵になる迄御奮戦下さらん事を
世の諸ファンと共に神かけて祈り
続けます。

(升岡金吉)

しと、しとと降り続く、梅雨の
ような雨も今日は珍らしく晴れ上
っている、じつとりと汗ばむ程に
むし暑い終日でしたが、それでも
夜になると未だはだ寒く疲労し切
った体を、風呂を浴びて一息入れ
る心持は何んとも云い様のない程
です。毎月続いて来たフォトが六
月は新版が出なくてさびしい一
月でありましたが七月号を見せて頂
いて早速に注文と共に送金しまし
たからよろしくお願いします。先
月から今月にかけて、限定版特集
号予告に待望の胸をふくらませて
入手の日を待つて居ます。「玉稿
落穂集」を読んで、箕田さん、う
らやましいの一言に尽きません。
——齒に衣をきせず、思うがまま
に自由奔放に書きまくった原稿、
これは編集者にとつては削るにも
書き足そうにも箸にも棒にもかゝ
らない厄介なものです、倉庫の
薄暗い片隅に高く積んで、それ
らを繕っている、一日や半日は
瞬く間に過ぎてしまふ、湿っぽい
埃くさい売れ残りの雑誌の上に腰
を下して今日も又、春の一日を、
それはきわどいがために没となつ
たかず／＼の原稿の中、こゝらあ
たり迄読んでいるとこゝらあ
てうらやましくて、心の奥底深く

にうごめく欲望にもういら／＼するのみです。本当に編集部の皆様がうらやましくて、だが編集後記でも申されていられる如く、無理して経営困難の折柄又々廃刊になり、現在の不満を一生かけての不満にならぬように辛抱して将来に大きく希望をつなぐものである。次には「奇ク」会員のバイ・バイ運動法を申し上げたいと思つてゐる。

(W・D)

○ 切腹画と写真お送りします。特集号にだけ御使用下さいませ、娘の時と違い、今は商家の主婦で二人の子供の母でございます。余り立派でない裸身を見せるのはお恥かしいのですけれど、切腹フアンの皆様にも少しも喜んで戴ければ同じ愛好者の心になつて恥を忍んで御送り致します。画は大きくて困りますので二枚だけにしました。悪しからず御許し下さいませ

(映代)

○ 「修学旅行の出来事」みました。一寸失望しました。着衣のまゝだったらもっとポーズに技巧がほしいと思います。つまり例えば、しばられて次の事態を予想した少女の恐怖感と恥辱感が交錯した表情

と肢態——です。もつといえはいる／＼ありますが、もちろんこれでも楽しむことはできます。しばられてゐる櫓のようなものはとてもよいと思います。太い横木が少女のヒップの上あたりになつてゐるのが、このフォトを僅かにすくつています。いや、これがこの「POTO」の全すべてだと思います。これなしには、全くとりえがないでしょう。——やがて、この少女はその唇をひらいてしまい、しどけない肢体をみせるでしょう。そうさせるのに恰好な、櫓の木の組み方がとりすまじた、黒いセーラー服が、その下に純白の、透きとおるほどの——Partyを、却つてはつきり思わせます。はじめて貴誌をみて、ひそかによろこびました。私が孤立してないことを知つたので、それで本当に送つてくれるのかどうかわかりませんでしたけれど、「修学旅行——」を注文してみました。私は、下劣なもの、あくどいもの、などは嫌いです。女「を美しいもの、可愛いもの、純いものとしてみたいのです。だからこそ、私はそれをひそかに穢すことに喜びをもちます。私自身の書いた作品、御笑覧の上、紙屑籠にお捨て下さい。貴誌のご発展を祈ります。

(S・A)

○ 七月号入手致しました。復刊以来、内容もだん／＼豊富になり読み応えが出来て来ましたネ、しかし海外文献の珍らしいものや、残酷なる女性達「が載つて居らなかつたのは淋しく思います。又アクロバチックダンスに関するものが六七月号共無かつたのは残念でたまりません。有名な無踊家石井莫氏もその随筆「おどるばか」の中で帝劇の指揮者V・Cローシー氏から毎日股が紫色にはれ上る迄叩かれながらバレエの練習をしたと書かれて居ります。バレエですらその位ですから、アクロバットはもつと厳しい訓練が施されるものと思ひます。旧刊では、アクロバットに関する計画があると読者通信にも発表があつたのですから、是非アクロバットに関するものを載せて下さい。又、コルセットに関するものも是非お願い致します。この点七月号の「拘束服の装着」は全く素晴らしいものでした。この頃一柳真砂子様の手記の載らないのも淋しいものゝ一つです。復刊号で「新しいコルセット」を書かれた後如何されて居るのでしうか、これは私の考えですが、真

砂子様も今春学校を卒業されて居られる頃ですから、卒業後お家で毎日新しいコルセット訓練をされが無いられる為、筆をとられる時間が無いられると思います。若しそうでしたら、お母様のトシ様にでもその後のコルセット訓練の様子をお知らせ下さる様、お願いして頂きたいと思ひます。誠に勝手なところのみお願い致しますが、何卒私の願いをお聞き入れ下さる様、末筆乍ら公刊誌になられる日の一日も早からんことをお祈り致します

(国島生)

○ 皆様、北の国に一人日夜苦惱に明け暮れる哀れな男に、お便りを戴ければと勇気を出してペンをとりました。僕はどうしても女性の肉体に魅力を感じる事が出来ないのです。しかも幼少の頃、友達とチャンバラ遊びをやり、縛られたり拷問のまねなどやつてゐる内にいつしか同性を縛つたり、縛られたりする事にたまらない癖を味あう様になつていました。よく一人で間借りなぞしてゐた頃は、夜更けて自己縛りなぞして居りました。が、今では家族の眼もあり、それすらも出来ず夜毎苦痛を求めても悩んで居ります。K誌がせめても

の慰めで、こっそりとかくれて頁をめぐってむさぼり読んだり、K誌からわけて戴いた男性緊縛写真などで慰めて居ります。読者の方で僕と同じ様な傾向を好む方で文通をして下さる方が御座居ましたら、是非御願ひ致します。

(新潟 T・U生)

○ 一柳直砂子様、復刊第一号の十月号の「新しいコルセット」拝読致しました。文中「そして何よりも嫌なゴムイボが……」又「もう小用迄チャックを取ることを許されません」この「許されません」こそ我々マゾを恍惚境にひたらせてくれる強い言葉です。私は表現が下手で上手に書けないのが残念です。かくいう私は療養四年、現在好転して自宅静養中の二十五才の男性です。KKは二十七年十二月号以来の一愛読者です。昨年KKが店頭より姿を消した時は、死んだ方がましだと思いましたが、同じ様な物と店を漁りましたがKKのおそばへはよりつけない物ばかりで、もう駄目かと思つていましたが、過日新聞にて復刊を知りよるこびいさんで申込みました。私はマゾですが、男としてではなく女になり、女に責めて頂きたい

のです。ゴムイボのコルセットをさせられ、小用もさせられないようにされて責められてみたいのです。真砂子様がうらやましくて女になれたらなつてかわりたいものです。私ならそのコルセットでミシンをふまされたり自転車に乗せられたりしたいのです。女になるため下着だけでもはいて見たいのです。あつかましきお願いですがお送り願う事が出来ませんでしうか。

(H・K生)

○ 拜啓、本日は奇ク七月号お送り下され厚く御礼申し上げます。早速ページをめくり拝読する小生、恥しながら女性お灸マニアの一人です。東京の岩瀬祥一氏と同感の心で理です。美しい若い女性の白肌にお灸の古痕を眺めて、喜悅する岩瀬祥一氏の七月号の告白。お灸を据えた女の魅力に満足しました。文も絵も共に小生の心を歓喜に導いて呉れました。小生の書棚は奇ク旧号が二十冊程つめてあります。時々取り出してお灸責画と小説を慰安としています。貴社代理部のお灸責めの写真、杉美美さんの灸責めは見事で実に小生も満足しました。春日、伊吹さんの名コンビの灸点地獄は少し気に入りました。

ん。お灸にはお線香の火にかぎると思います。旧号の口絵に南川和子さんの女性灸責めがあります。実に良好だと思ひます。(お灸マニアの一読者より)

○ 原美智子様、四月号に発表されました記事、大変嬉しく読ませて頂きました。私の日頃夢に描いていた人が私の近くに住んで居られるのを知り、二重の喜びです。一度私を貴女のお傍にお呼び下さいませんか。必ず貴女のお氣に召す様努力致します。(S・Y生)

○ 七月号は、復刊以来一番読みごたえがありました。川野京輔氏の「スーダン」土路草一氏の「潰滅の前夜」等は実に面白かった。此れで挿画があれば完璧なのですが……。欲は申しすまい。然し六月号で藤見氏が述べられた様に、挿画がないだけに本文をより以上に読む故か「奇ク」が存在しているという事は実にありがたく、その価値を再認識した次第です。氏の「大衆文学に現れた責めの描写」も実に興味深いものがありました。私は捕物小説が好きです。此の方面に今月号は特に詳しく書かれましたので大変ありがた

く思つております。北原純子さんの挿画は非常に好きです。今迄の挿画よりも実に魅力的です。六月号で悲風磨上原の挿画が私にとつては一番好きでありました。口絵は今一息という所です。挿画と写真と適当に組まれるのはむずかしいことと思ひます。群馬のY・S生の説も同感、読者通信の拡張を望みます。せめて十頁位に……。(東一郎)

○ 奇ク七月号を読み終つて、本誌も復刊後漸く軌道に乗つて来たことを感じさせられます。口絵や挿画、それから内容についても後一歩の突込みが足らず不満の点はありますが、現状に於ける発行ではこの程度で満足せねばならぬと思ひます。殊に一般読者が最も多く希望している傾向が漸く達せられ女スリ、潰滅の前夜、スーダン等の新作に、連載の赤い花、いで湯等、嬉しい読物が非常に多く取り入れられています。この傾向を持続して、毎月少しずつでも挿画や表現の不足を補つていったら、以前にも増して読者が集つて来るかと間違ひないと思ひます。切腹画帖の例にもある様に、少数の非常に熱心な読者の希望に迷わされぬ

様お願いいたします。先月あたりから新作写真に大胆なポーズと思われ、ものが少く残念です。毎月広告を見て、幾らかでも好きなのを求めようと思いましたが、気の向くのがありません。柳一郎氏の臀部撮影は欲しいものです。特集号(サディズム)の発行を待望しています。

(T・M生)

○ 神奈川のB子さん。あなたの禪の着用法を拝見して、わたしも早速実験してみました。圧迫感という点では満点ですけど、取りはずしに時間がかかる点が、どうにかならないかしらと思いました。曲尺で三寸位の幅と、いつて居られますが、私の水泳禪も丁度、幅はそれ位です。私は今までいろんな種類の禪を着用して見ました。六尺禪、越中禪、もっこ禪、水泳禪みんな一通りつくって見ました。しかし、その中で一番好きなのはやっぱり水泳禪です。そのわけは何どいっても露出面積を最大限に拡大できるからです。ごぞんじの通りお尻は全部出るでしよ。またお尻や股によく喰い込むことも一等だと思えます。次に好きなのは、もっこ禪です。もっこ禪にしる越中禪にしる、よく男の

方がなさっているように、後から見た場合、だらりと布がたれ下った様な着用の仕方は、まったくつまらないと思います。やはりこんな禪もお尻に十分に喰いこんで、後から見た場合は、ピンツとした三角形になるような着用の仕方が本当だと思えます。最後に私の水泳着を紹介しましょう。私の水泳着は黒の学生用のものですが、下のパンツがとりはずしてあつて、下はパンツの代りに黒のもっこ禪を用いて居ります。上半身をつむむ水泳着は、もっこ禪にホックでとめる様になつて居ります。後から見た場合、お尻が三分の一位出ます。これを私は昨年から用いて居ります。海水浴なども勿論これで通しますが、人は全く気が付きません。パンツにくらべて圧迫感があつて非常に快適です。女性のみな様ひとつためしてごらんになりませんか。(福岡・池田ふみ子)

○ 初めての御便り致します。一昨年九月号より貴誌を愛読致して居ります。昨春店頭から姿を消してから親友を失つたような淋しきでしたが、本日はからずとも六月号を手に入れ喜びに堪えません。勝手に乍ら注文を一つ、六月号には伊藤氏の脱腸に対する私見、一昨年十二月号には森太一氏の脱腸帯の回想がありました。今後脱腸に関する記事をお願い致します。私も森氏や伊藤氏と同じ様に幼少より脱腸で同じ体験を持つて居りますが、全治してからも脱腸帯が忘れられず秘かに今も使用して居ります。現在ゴム製の品を二ヶ持つて居ります。私の様なのは特異な物かも知れませんが、同好の人が有れば奇クを通じて色々語り合いたいと思ひます。最後に奇クの発展を心より御祈り致します。

(野原美喜夫)

○ 奇クの復刊有難う御座います。私も秘かに奇クを愛読する一フテチシストです。フェチシズムは当誌で知った言葉です。人に云えない苦惱を奇クに依つて慰めて居ります。オムツと女性の下着、パンティ、ズロース、メンスバンド、ブラジャー、スリッパ、コルセット、ストッキング等、特に異常な執着を持つのです。店頭飾られた、白、ピンク、水色、黄、黒、色鮮やかな女性の肌着を見ては、オムツに結びつけるのです。一昨年ふと手にした奇クに、飛田良二氏の「縛り絵アイデア」にヨダレ掛とオムツカバー姿の女性の絵が載っているのを見て以来、同じ様な性癖のある人の居るのを知り、その後オムツに関した作品を見て来ましたが、やはり同好者の方々同様、フोटや挿面の少ないのが不満です。「オムツ責め」「襦袢への幻想」「おしめ放浪記」等の挿画中にパンツ式のオムツカバーの絵があり、我々ファンには貴重なものですが、どう見ても前ボタムツカバーには頂けないと思ひます。現在洋品店の店頭には赤ちゃん用の色とりどりの派手なオムツカバーが並んでいるのですから、あれなど参考に如何がでしょう。尙特集号発行との事ですが、フェチに関する発行企画詳細が分りましたらお知らせ下さい。アイデアとして次の様なフोटなり絵画は如何でしょう。本誌に倒錯遊戯というのがありました。夫婦なり恋人同志で「赤ちゃんごっこ」など如何がですか、倒錯遊戯として面白く思ひます。女性が赤ちゃんになり、食事からオムツの世話まで男性の手を借りるのです。(一)食事オムツをして大きなヨダレ掛を当て、哺乳瓶を口に入れて居る処(二)お尻が濡れたのね、汚れたオムツ

の取替、傍らに浣腸器とオマルを配したら(三)オムツの洗濯、物干竿一面派手な浴衣のオムツの満艦飾更にゴム引オムツカバーやヨダレ掛、更にベビードレスが風に翻り脇にブロースやブラジャー、ストッキングが干してある。(四)おねんね、オムツカバーを防ぐ為に赤いやんをお風呂に入れて置いて、その間はお床の用意、寝巻を脱ぎその上にオムツカバーを置きオムツを重ねて組合せる。シツカロールの用意を忘れぬ様に、以上の企画で佐賀美智子嬢にモデルをお願いしたいものです。(東京S・W)

○ 拜啓、御再刊以来益々御隆昌慶賀申上ます。扱て此度特集号御発刊の由、私も女性切腹マニヤの一人として喜びに耐えません。女性切腹号の構図として左の様なのは如何でしょうか。画題は「大名女腹切り」とします。第一景、大名奥方切腹の場。背景其の他調度道具等、全て奥方の居間として豪華なものとする。中央正面白布の上に奥方着座、白無垢の着付にて諸肌脱ぎとなり、左脇腹から右脇腹まで臍下一寸位の処を真一文字に充分に搔切り、血に塗れた両手で切腹に用いた守刀の柄を握りし

め刃を右に向け咽喉に二、三寸突立てた処。中老豊田、奥方の向つて左後方に位置して纏掛け両股立ち左手で奥方の左肩を抱き、右手を奥方の両手の上に握り添えて介錯している。奥方の向つて右前にお局外山少し斜右を向き着座、上着を諸肌脱ぎ下着は下腹部まで充分に開き、左手を左脇腹に当て右手に白布を巻いた守刀の中程を握り左下腹に突立て、一二寸右へ引切る処。丁度原桐咲代さんの長襦袢姿の切腹写真の方な姿。奥方の向つて左にお局沢の井着座、少し斜左に奥方の方に向き外山と同じ様な姿で左手を左膝前につき、右手は左脇腹から臍下まで搔切った守刀の中程を握り顔は少し仰向いて奥方の最後の方を見守っている。奥方は四十五、六才位。外山は二十一、二、沢の井は三十五、六才位とする。外山、沢の井は突然の追腹故白無垢は着ていない。第二景、奥方墓前、中老豊田切腹の場中央正面に白布を敷き白無垢の着付にて中老豊田着座、奥方の墓石に向う心持、諸肌脱ぎとなり充分に下腹部をあらわし、臍下二寸位の処を左脇腹から右脇腹まで搔切り、更に上腹部から下腹まで縦に切り下げ、立派な正十字腹を

切っている。両手で引抜いた短刀の柄を握り左乳房の下に二三寸、突立て一えぐりして正に倒れんとする寸前の姿。顔は振り仰いで奥方の墓表を見つめる心持。切口から腸が少し出ている。後方に若き侍女着座、守刀で咽喉を突き自害している。左手を前方につき、右手は守刀の柄を握り、刃は三寸程咽喉に突立てている。咽喉の突傷から胸へ血が流れている。唇のはしからも一筋流れている。豊田は二十五六才位、侍女は十七八位思つたまゝに書きましたが、右の様な切腹図は如何でしょうか。切腹特集号が出来ましたら是非私にも一部御譲り下さい。(女原喜里)

○ 四月誌上で東京都K生氏が提唱されましたドレイ市場開設の件は大変面白いと思いましたが、その後はどうなつたでしょうか。私見としては、最初から大規模なことはむづかしいので、御苦労ですが提唱者が中心になって、二三人宛でもよいから同好の士を集めて、始められては如何と思います。何分こんなことは、外聞をはぐかる関係で最初の踏切りがつきにくいと思われまうので、書面だけで希望者を募り、日時と場所を指定し

たらどんなものでしょう。小生は中年のマゾ男性で、女王様のドレイ志願の者で喜んで仲間に入れて頂きます。かねてから森山、乗杉春日、戸破、荒井、森その他の女王様方にドレイ奉仕をさせて頂きたく念願致しておりましたが、之が叶いませぬ場合はせめて手紙の通信でもさせて頂ければ、無上の光栄と存じます。それからマゾ特集号の実現を鶴首致して居ります。(T・M生)

○ 全国の女斗美ファン諸君、小生も諸君に劣らず女斗美が大好きだ「禪一つの女性の格闘」こんな表現も昔は、何かうしろ暗い様なはずかしい感じがしたが、今や多勢の同志のいることを知り、堂々と自分の喜びを発表できる。これも全く「奇ク」のおかげだ。しかしまだまだ「奇ク」には女斗美の記事が少い。達美の士よ出でよ。小生、文章が下手糞でその方は駄目だが、女斗美の写真ならいろんなのを持っていく。希望者と資料交換でお譲りしたい。一つ、みんな協力して「奇ク」に女斗美の広場を建設しようではないか。(I・M生)

奇譚クラブ七月号、お贈りいただきまして、本当にありがとうございます。先日勝手なお願いをいたしました。奈子の自己愛につけていただきました挿画は本当にすばらしく、ころからよとでもよく出されていて、びっくりしてしまいました。それから表紙も、もしかしたら奈子のイメージで描いていただいたのではないかしらなどと、厚かましい想像をしたくなるほど、まるでまぼろしの世界にあそぶ奈子自身を見せられたような気がいたしました。奈子は今迄、自己愛について直接誌上でお教えいただける機会もございませんでしたので、一体どのようなスタイルで、皆様方にお話してよろしいのかすこしもわかりません。流腸、切腹、その他数多い今迄ありました記事について、少し誌上で御不満の声も多い中に、自己愛などという突飛な文章に、多くの誌面を割いていただいておりますことが、皆様方に対してとても申しわけない様な気持でおります。御好意に甘えずざる様ですが、どうぞよろしくお伝え下さいます。そして多くの方々からお導きいただきたく存じております。

す。皆様方の前に奈子の肉体を誇示し、ミスKKとして毎日すごすことが出来たらどんなに楽しいことでしょうか。森山美歌様のように男性にかしずかれて、女王様のよううな生活を送っていらつしやる方がうらやましい様な気持です。出来ましたらお友達になりたいと思っております。奈子のいろ／＼な生活について下書きもたまっておりますので、又お送りしたいと存じます。とり急ぎ乱筆にて御礼のみ。
(門田奈子)

○ 拝啓、第二集入手いたしました中々見事な出来栄で喜んでおります。就中、5、蒲団の下着の清潔さ。乱れる髪、喰い入る太縄。又、15、後手の無残さ。17、椅子の責めらるる姿。21、犬ぼえのポーズ。23、吊上げの苦悶感。25、足吊りの可憐な髪、顔、程よい猿ぐつわ。割に少女らしい姿態。26網渡りの少女らしい姿を無残に投げだされた姿。27、双丘の見事な姿態、表情。30、悦虐のころがされつつかれる女の苦悶感、目の美しさ。猿ぐつわ(この位の猿ぐつわが一番よく)ひしひしと締めあげた太縄、又向う向きの猿ぐつわの女の少女らしい姿など第一の傑作です。

31、美声、がんじがらめの太縄、けとばす足など。特によいと思えました。長く珍藏いたします。又七月号をみて花坂嬢の正座してうなだれたポーズの良さ。二人のモデルに白の半袖のセーラーか運動服をきせて、このポーズだつたらと思います。凝視は、もつと襟をはだけ一方の乳房をあらわして、ひもでなく縄でもつときびしく縛り上げるのがよい。「責めの描写」毎月こういうのをつづけて下さい。「赤い花」は挿画の美しさと共に期待されるものの一つ。「女スリ」「被縛症」も楽しみ。「いで湯」の折檻のすさまじさ。など、いずれも今までにない充実さで喜ばしてくれそうです。更に又サジズム特集の企画ありとか、一日千秋の思いで待つておりますこの特集はできるだけこれまでのマニアの色々な希望も入れて、もし一冊に載らなければ第二、第三集と時々出版して下さい。内容も相当に豊富なようですが、印刷さえよければ何もアートばかりでなくともよいのですから、アートでなくてもよい絵のようなものの一冊は普通の紙で、その分だけ内容を多くして下さい。特に可憐な少女の縛り(例えばセーラー服、ポ

ロシャツ、運動シャツ、ジューズ、ブラジャー等をつけた女学生髪はなるべく素直な髪で)を多くいれて下さい。写真がむつかしければ絵で。又映画の緊縛場面や、種々の雑誌などの挿画、又少年少女の冒険小説などの挿画にも中々よいものがあります。サジストの夢は、縛られる女がすべて年若く可憐な美女で、これを悪虐な荒くれ男が、情容赦なくぎり／＼と縛り上げ、おののき哀願する美女を責め苛む。そして最後にはとにかく救われるというものが、大方の人の意見とあります。あまりに無残な最期をとげるのは、後味がわるくて気の毒でなりません。今度の特集にはいつもの裸体の縛りの外に軽快なしかも体にびったりと曲線をあらわす着衣姿の縛りや、少女らしい可憐な姿態の縛り、又髪も戦国時代の女の髪、下げ髪で額から両頬へ垂れる髪形の美女緊縛図も多くのせて下さい。このような挿画は毎月の数々の雑誌にずい分多くのついているようですから、これらの中からよいものを責め場の文章と共にのせて下さい。分譲フォトの縮小写真も、嘗てのようになくともよいからのせて欲しい。
(T・Y生)

次号(九月号)は七月廿日発売です

次号は更に皆さまの御期待にそうべく鋭意努力中です。予約御申込の方へは完成次第お送り申し上げます。一般書店へは出廻りませんから直接発行所へお申込み下さい。

○

天候不順の折、何かにつけくさくさする今日此頃、毎日奇ク充実の為御努力下さる事、毎月号の内容及び編集後記を読み感謝致して居ります。七月号発売頃、サディズム特集号完成広告があるかと待って居りましたが、八月号発売頃との事、何にせよ有難い事で御座居ります。が、一千円という値段、私にとりましては馬鹿に出来ず、これは肉身にも言えない事です。先月、今月と二、三度医者をするが、千円少々貯え取ってあります(皆々様には、此の気持がわかって頂けると思いますが)喜んでばかり居られない気持に成って参りました。五百部限定として先着順との事、果して私迄来て呉れるかと言う事です。奇ク七月号でさえ廿二日消印で廿五日の午後に東京の片隅に有る私の許に着いて居ります。発売の発表受取次第私が送金致しましても、御社近郊の方々

に比較すると丸二日以上上のハンデイキヤップがつくのではないかと思われますし、此の機会を取逃し度く有りませんし、それこそ「残念だったな」で済まされたい気持です。五百人以内に入れるかどうか、今から非常に不安に成って来ます。予約では無いから送金して呉れるかと先月も今月号にも書いてありましたが、送金した方々の気持が良くわかります。私も許されるなら、只今すぐ送金したい位な気持です。でも一人よがりには許されませんのでしようし、貴社の事故、受付けて下さらない事を確信致します。種々の理由の上に立って、五百部限定と成された事と存じますが、熱愛者に一通り行渡る様にならないものでしょうか。我儘を言う様ですが、愛読者を失望させない様御願い出来ませんでしようか。どの位注文がありますかわかりませんが、五百部という僅少な部数が不安になり、此の様

な手紙を書きましたが、取越苦労の失礼な処は是非御容赦下さい。是非入手致し度きものと思ひます。私の此の不安を解消出来ませう、嬉しい返事が戴けないものでしょうか。御発展を御願い申し上げます。

(K・K生)

○

奇ク愛読者の皆様お元気ですか。奇クも月ごとに内容が充実して参りましたことは誠によろこばしいことです。更に皆様に喜んで戴けるようなビックニュースをお知らせしたいと思ひます。読者の中には様々なマニアが居られると思ひます。私達もそのようなマニアで仲間を作り、男女仲良く楽しい日々を送っています。が、もっとたくさん読者に御紹介したいと思ひます。御希望条件を添えて御申込下さい。あらゆる種類の人々に満足して頂けると思ひます。

(一マニアより)

○

神奈川の白井様、貴方が四月号に寄せられた御意見、私のそれと一句も違わぬ程一致して居られるので、心中思わず快哉を叫ばずには居られませんでした。私も、小畑やすしの子役臭や嫌味の少しもない可愛らしさには無条件でひか

れ、又、ブラチナブロード髪の丸顔の少年、クロード・シャーマン、シニニアの美しさに魅せられて、「子鹿物語」「山荘物語」などは何度観に行った事でしよう。申しおくれましたが斯くいう小生、十一月号「通信」の末席を汚した無名生です。四月号で、貴兄が「愚見」を引用されて居られる事は大変嬉しく拝見致しました。又幻想の対象として「責めと酷使に泣く奴隷少年」や「子供屋に於ける特殊な訓練や折檻」など、同じ様な考えの人が居るものだ、と感嘆しました。私の幻想も変わった処では、成年式を受ける未開人の少年(割礼、文身、肉体彫刻等の苦行苦痛に堪えねばならない)、映画「首狩族」は之に關して一見の価値あり。又は戦時少年徴兵法に違反した少年が、非国民の文身又は烙印を施され、禪さえも許されぬ姿のまま、日夜、基地建設や地下資源採掘等の重労働をさせられる。或はナチの強制収容所で、ユダヤ人の少年が、ある種の機能に關する実験生体として使用され、種々の実験や手術を強制的に施される等々……些か残酷ですが、空想の世界は自由無限、之も少年美を愛するが故のファンタジー逆説

的で舌足らずの表現ですが、貴兄には御理解願える事と存じます。私も世にいう「下手の横好き」で之等の少年達を幻想し、絵に描き少年ヌードなどを苦心してコレクトし、没にも懲りず駄文を奇クに投稿したりして居ります。お互に幻想や自作の画など交換出来たら……と切望して居ります。

(H・W生)

○ 昨年二月号、通信欄の吉本喬氏三月号のF・T氏……この人には以前、通信の中継を編集部依頼したことがあります……柏山多津夫氏、四月号のK・Y氏、五月号のO・T氏、山路氏、Y・H氏の諸氏は健在でしょうか。本文の山口幸一氏、青葉楨一氏、古田吉郎氏の諸氏の文章を愛読すると共に、通信欄のこれらの人々に親近感をもちます。ということとは、ぼく自身が「禪」というものに興味をもっているからなのですが——ソドミヤといえるかどうかは別として禪愛好の諸氏との通信を中継していただきたいと希望をもっています。殊に埼玉F・T氏に——

(群馬 Y・S生)

○ 拝啓、貴社益々御繁栄慶賀に存

じます。早速ですが貴社の分譲写真、又は御計画中の特集の御参考に左記の様に小生のアイデアを申し上げ度いと思ひます。モデルは、各種アクセサリーから下着迄完全な洋装とし、街を歩いているお嬢さん其のまゝの姿。成るべく帽子及びハイヒールを着用のこと。ストッキングはガーターベルトで吊ります。スカートはフレアー。右に依り各種の縛りを行い「覗かれた下着」シリーズを作成する。ポイズの一例、高手小手にして座らせ片方の足首と、片方の膝の上を縛り合せ片膝立の姿勢にする。アグラの様に膝を左右に開かせ、足首を合せて縛る。柱へ縛り付けられその縄を後から棒で捻じ上げ乍ら締められる。足首を縛り逆さ吊りにする。手足をそろえて縛り猪吊りにする。海老責めにする。着衣のものとして右の他に左記の様な服装も面白いと思ひます。下着等はそれ／＼分に相応したものを着用(不自然なものは不可)何れも自然に下着を見せてしまった場合女学生、看護婦、スチュアーデス又はバスガイド、ダンサー、婦人警官等。同好者少数のためか、今迄殆んど発売されておりませんので残念に思ひます。機会あ

れば是非一度作成お願いします。

(京都 F・K生)

○ 此処二三ヶ月間、私が代理部へ注文した写真について、意見をのべて見たい。女学生物ばかり集めたのであるが、中々すばらしい写真アルバムとなつた。先ずAS7セーラ服哀歓は、須川令子嬢のポーズは好いのであるが何かしら物足りない。一枚位坐つたものか転がされたものがあつて欲しかった。腰掛けて居るのがあつたが余りよくなかった。次にCS3、セーラー服の見世物、此れは一番悪かった。モデルの雲井嬢には悪いけれども、どうにもいただきかねる。女学生特有の清涼さが無い。たゞセーラー服を着せただけではその感じが出ない。下半身露出もどうかと思はれる。何かしら汚いという感じが強かつた。スカートはつけた方がよかつた様に思ひます「女学生の切腹姿態」此れは傑作であつた。一番好かつた様に思はれる。本当に女学生が切腹する感じが強く表現されていて、切腹マニアならずとも、此のポーズは好きになつてしまふ。短刀をつき立てる感じも悪くない。「女学生の流腸」此れはどうも、ズロース

をはいたまゝ流腸するのでは、何ともおかしいではありませんか。ポーズは夫々悪くないが、まあまあ無難の出来という所ですか。「女学生凌辱連続写真」「修学旅行の出来事」何れも須川令子様の如何にも女学生らしい写真ばかりで秀作である。然し欲をいえば前者の場合、今少しスカートがめくられてスリッパと共に太腿が現れて欲しかった。以上六種類、やつと女学生シリーズ物として私のアルバムに収めたが、総体的にはやはりキヤビネ版の方が見た感じが印象に強く残る。とにかく絶対に鮮明な写真ばかりなので保存欲をそよめるのも無理もないと思つた次第です。

(東一郎)

○ 七月号拝見、裏表紙の絵は旧号(何月号か失念)の表紙にあつたもの、なつかしく思ひました。久方ぶりで小竹紀夫氏(「しの」と読む姓が珍らしいので覚えています)の再登場、若衆歌舞伎復興のイメージには大いに共鳴する処があります。最近、何かで(夢声の「問答有用」?)現代一流の某俳優(名前失念)が、少年時代に六代目菊五郎から、禪だけの姿で毎日厳しい稽古を授けられた記事

読みましたが、斯様な実例もある事ですから、此のイメージも、類現の可能性も大いにありといえるでしょう。「少年禪記」の山口氏その作品に流れるおだやかな「トーン」は読後、常に一種の清々しさを与えて呉れます。「禪を締めた美少年とそれを見る母親」の挿画も良かったが、バックが塗りつぶされていたのは惜しかったと思います。さて最後に、熊谷氏の「少年姿体美増進法」は、少年の禪美愛好者にとつて、一寸魅力のある思いつきでしたが、如何にも素人臭い。又そこが面白いので戴せられたのかも知れません。一寸した御愛嬌でした。え？ 批評も良いが礼儀をわきまえる？ 大丈夫本人が「自作を語る」のですから間違ひはありません。末尾乍ら愚見「ソドミ―特集号のプラン」に寄せられた好意ある御回答に感謝し、再び、その実現に御尽力下さる様、切にお願い申し上げます。

(東京 S・K生)

○ 富山の戸破貞子様、小生永年貴方の様な性格の方が好きです。普通の事では何だか物足りませんのです。貴方の様な人の出現をお

待ち致して居りました。小生は五尺三寸二分、十七貫、三十三才です。私の好みは、貴方の様な人から尻の下に組敷かれたり、足で顔を踏まれたり、足の指で食物をはさんだ物を食う。其んな事に人知れずに何とも言えぬ憧れを持って居ります。今迄に御飯を食べる時は毎日乍ら御膳の上へ椅子を上げて其の上にとつかと足を高く組んでゐる。其の前で私は組出された足をなめ乍ら食事をします。或る日人が来て見られた事もあります。奇ク十月号で貴方の通信拝読致しすっかり感激致しました。貴方の様な人を奇クのお陰で知った喜びは、此の上無き物と思つて居ります。貴女の忠実な隷属として仕えたいのです。此の後、文通御交際お願い致します。極めて薄いパンティ姿の貴女が、小生の顔を組敷く夢の世界の様です。忠実に貴女にそうして戴けるでしょうか。何卒私の顔を貴方のお尻で呼吸が困る程組敷かれて、其の上私の熱い呼吸が、薄いパンティを通して貴女に感ぜられた時、私は喜びの絶頂にあるのです。何卒今後文通御交際下されんことを、小生の希望をきゝ入れて下さい。 村上 万吉

○ 私は廿二才の男子にて、KK誌永年の愛読者です。女体緊縛の愛好者ですが、ムチ打ち等余り強烈なものや暗いジメ／＼したものは好まず、明るい健康的な縛りに対して最も興味を持って居ります。然し未だその機会に恵まれた事はありません。同好の志は是非御連絡下さる様お願いします。(加藤 要)

○ いうもののやはりあの当時が懐しいですね、最近では川端多奈子さん村田那美子さん伊吹真佐子さん高瀬忍さんなどに代つて佐賀さん加賀さん須川さんなどの新人モデルが出て来られました。皆着衣そのれも体の大部分をかくされたものだけに、私どもには何か物足りなく感ぜられます。私は、以前から「全裸、緊縛、凌辱」を現在の女の責めのモットーであると考えて女の縛り方の基本は、一糸まとわぬ全裸にした上高小手に縛り上げ、股間縛りにする事だと考えています。凡ての拷問はこうして縛り上げられた上で行われるのが、最も理想的だと思つています。いろ／＼な都合でこんな希望を実現させて頂くわけには参りますまいが、せめてモデル嬢にはパンティ一つ又はバタフライ一つになつて頂きたいと存じます。又口絵にしまして、以前の都築峯子、滝れい子さん時代から代つて新しい人が出て来られました。之等の方にも是非ヌード緊縛の口絵を御願ひ致します。又写真口絵をもう少し増加して頂きたいと思ひます。発刊当時の写真などに較べますと相当量も増えては居りますが、せめて旧特大号時代を再現して頂き

たいと存じます。私共は奇巧は本
当に隅から隅まで読み見て居りま
す。それだけに今六月号のように
カットに縛り絵を入れて頂けるの
は、大変有難い事です。今後共こ
の様にさせて頂きたいものです。そ
れから先月号でもどなたかから希
望がありました。が代理部発行の写
真の小型見本を発行して頂けませ
んか。二十八年でしたか「緊縛美
オンパレード」という小型写真が
本誌に掲載された事がありました
が、今でもそれを切抜き保存して
います。が、写真を全部買う事の出
来ない私共にとりまして、大へん
有難い企画だと思ひます。是非今
度ものせてほしいと思ひつていま
す。近く限定版の特集号が出る様
ですが大変楽しみにしています。

◎お願い◎

雑誌の購入や分譲品の御申込
みのため、或はその他の用件で
直接発行所を御訪問下さる方が
ありますが、理由の如何を問わ
ず右は固くお断り申し上げます。
必ず郵便にて御申込下さるよ
うお願い致します。

いろ／＼失礼な事を書きました。が
悪しからず。貴社の御発展をお祈
りします。
(舞鶴生)

○ 次のような写真集(絵画でなし
実写)をなるべく早く分譲できる
よう御願ひします。日本刑罰図譜
(集、史)等の一連のものを是非
作って頂きたいと思ひます。特に
アルバムにしないで、第一集(十
枚、十二枚)一組千円、第二集同
上……。モデルは必ず女性とし髪
衣服、風俗は当時のものをまねる
必要なく、髪はパーマでも何でも
よいが必ず上半身裸体とし、パン
ティとかシミーズのみとし、責め
道具と責め手(女性)を使った次
の様なふんいきをあらわしたも
の。以下前面と後面と必ず二枚ず
つとすること。(但し1、2は一
枚でよい)1、たたき—半裸後手
高手小手に縛しめて、つま先で地
面についている位に、梁から吊し
下げた女子の肩とか尻を棒でた
いてゐる図。2、石抱き—半裸、
後手、高手小手で三角木の上へ坐
らせ、膝の上へ石を三枚位積み重
ねている図(三角木は真中へ小さ
なふとんを敷き痛くないようにし
上へ積み重ねる重石はボール紙で
こしらえた、はりこの石を使うこ

と)3、えび責め—半裸、後手、
高手小手の縄を首の両側から思い
きり前へ引っぱり、足をあぐらを
かゝせてひきしぼって頭が足につ
く位に縛った図。4、吊し責め—
半裸、後手、高手小手に縛り縄で
梁より吊し下げたもの。体が廻転
して困るようなら足を縛って、余
り斜めや水平にならないように吊
ること。5、変形吊し責め—後手
高手小手で足を膝から後へ折り曲
げて太ももの所で縛り、小手と足
首を両方、体が水平にならぬ様垂
直に吊す。6、三角木馬責め—半
裸、後手高手に縛って三角木馬へ
のせ、小手を上から吊し下げ、で
きれば髪のもも上から引っぱり、
両足へは重しの石を吊す。7、大
番屋の止置—半裸、後手へは鉄く
さりで二まき三まきし、高手腕を
二まき胸へ縄で縛り、手くさりを
引きしぼり小手のくさりと首かせ
を二本のくさりで天井梁から吊し
下げた前向き、後向き、横向き三
人の姿勢(内一人は足かせをはめ
る)8、火灸り—十字架形でなく
半裸、後手、高手のまゝ火罪木へ
縛りつけ、足元に薪をつみ、二重
写しで炎とか煙を写せば非常によ
い。9、ローソク責め—半裸、後
手、高手小手で梁から吊し、(体

が廻るようならばつまさきだけ床
へつかれる程度に)両肩(できれ
ば頭へも)へ大きな火をつけたロ
ーソクを立てて、ローソクの流れる
図。10、水責め—半裸、後手、高
手で坐ったかっこうで柱へ縛りつ
け、足も、股、足首から幾重にも
縛って太股の上まで水に浸り、な
お水道の口から水がザア／＼流れ
ている図。11、鼠責め—半裸、後
手、高手で足首、太股を縛り、足
首を上から吊し下げ、肩、胸、腹
等に、玩具の鼠をとまらせたもの
12、琉球責め—同じようなかっ
うで琉球畳で体をこすって責める
もの。以上いづれも女性モデル、
裸身で必ず前面、背面の二枚ずつ
とすること。

○ 謹啓、梅雨しとどけなる候とな
りました。貴誌五号、六号有難く
拝見致しました。号を追うに従つ
て、写真と口絵、挿画が多少見ら
れる様になった事を喜んで居りま
す。私の「緊縛女優」にマニヤ諸
姉が意義を同じとし、新しい緊縛
映画を発表してくる事は嬉しい
事です。この点は映画社から感謝
されて然るべきだと思います。緊
縛場面のある映画を見ている人々
の心理状態を注意していると、吐

息している人あり思わず出る歓声に自身で身をもむ人「あら縛られちゃった可愛想」という女性。「あゝ縛られちゃった」と人事の様につぶやく男性。種々様々な感情に酔っている事が知れます。きつと、その縛られた女優のプロマイドを売ったら驚く様なファンが集まる事でしょう。口絵写真のモデル嬢、中々の美人でいらつしやるから今少し苦悶の顔を見せてほしいものです。四馬氏の麗筆には只々感心致します。特に六月号の「美貌の屈辱」はいいですね。鼻マニヤである私には、この面だけでも価千金の思いでした。藤木氏の外国人をモデルとした画もいゝですね。限定、特集号は今からわれ／＼待たれる大企画です。大いに待ち望んで居ります。御励みを祈ります。

(升岡金吉)

別府の荒井様に申上ます。貴女の読者通信を拜見致して、私は一晩考えました。貴女を女王様と拝して足下にて毎日／＼生活する事が出来ましたら此の世に生れた生甲斐を感じるでしょう。貴女の御命令は絶対守ります。何んでも致します。何卒御住所、小生に御通知下さいませ様伏して御願ひ申上

ます。一生貴女の忠実な犬になります。貴女の友人沢山の所で犬としての奉仕は考えても胸がおどります。命も差上ります。何卒お返事待ち申上ます。住所は本当です。十月号、「悪癖」の榎本利子様、貴女の生活に私は元氣が出てきました。小生もそんなにしてみたくてたまりません。小生も貴女の夫の様に致して御覧下さいませんかあの文章を読んでいゝ中、貴女の様な方が此の広い世の中にいないのが悲しくなつて参りました。小生にも一人御世話して下さい。一つお伺い致します事は、友人知人が来られた時、如何致されますか、平氣で夫の頭へ足を上げて御飯を食べられますか、それとも普通の人の様にされますか。御返事御願ひ致します。住所は本当の所です。

(和歌山市宇治三筋目三番地、
宮谷道雄方 井上萬吉)

〔代理部告知板〕

○限定版各種特集号は、編集を完了し、印刷直前に於て重大な支障に逢著しましたので、一応無期延期といたします。改めて企画編集をやり直しの上、本誌読者数の伸長とにらみ合せ、適当な時機に発表することいたします。

◇ 編集後記 ◇

○本誌の編集のあり方について、寄稿家はじめ御熱心なる読者の方々から色々とお教示を頂いて大変有難く思つております。本号には、その中の一部を発表いたしました。それらに対する編集者側の回答も同時に発表するつもりでしたが、憚かる事項もありますので、今後の誌上に具現させることにして、今回は一応見合

の方々に御紹介する考えです。従つて本誌の口絵について御不満に思召す方は、その方を一度ごらん下さるよう、出来る限り多彩なものに致します。

○現在書店の店頭を眺めてみても判ります通り、婦人団体等の運動が百％奏功したことを如実に示しております。これは時代の流れとして、もつともなことではあります。山道の片隅に咲いた桔梗のよう、さゝやかな存在に對してまで、その存在を許さないような事態にならないよう、読者の方々と共に奮闘する次第です。

○確実なる定期的な読者数の少いのは、全く淋しい限りですが、いつ何とき休廃刊するかもしれないという氣持から一月毎申込みれる方の多いのも、これ又やむを得ないこと、思います。同人雑誌的な同好者の雑誌としては、この体裁でこの値段は決して高価に過ぎると思ひますが、殆どの方々、以前の増大の頃と比較されますので、現在は格段みすばらしく見えるのでしよう。

○鬼山絢策氏は不公平な取扱ひについて言及されておりましたが、権力の威力や多数の威力、そういうものから全く見放されたか弱き縁なき衆生であつてみますれば、泣く兒と地頭には勝てぬという諺の通り、何でも御無理ごもつともと小さくなつてゐるより仕方ありません。

○小心翼々として、注意の上にも注意を重ねて編集をしておりますが、雑誌の傾向が、少数民族を目標としているという理由で存在価値を剝奪されるとしたら、戦争物へでも転向して、流行車に便乗するより仕方ないでしよう。

○今後は当分頁数の増加が望めないと思はれ、せいぜい内容の方で変化をつけ、読みごたえのある面白いものにしたと念願します。口絵、挿絵、文章に限らず常に洗練されたものにしたものです。雑誌の体裁上、本誌に発表出来ないものは、つとめて代理部の分譲品として同好

○本号は従来の号より更に一段と充実させたりしておりますが、次号についても、どうぞ御期待下さい。新しい努力を集中していますから。

(K・M生)